

第二百七十九條 檢察官其他訴訟關係人ハ第二百三十七條ニ定メタル原由アル時ハ違警罪裁判所輕罪裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判所ノ裁判官及ヒ書記ニ對シ忌避ノ申立ヲ爲スコトヲ得  
豫審ヲ爲シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲ爲シタル裁判官其終審裁判ニ干預シタル時亦同シ

第二百八十條 忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ルマテ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得  
忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百八十一條 忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲ爲スニハ第二百三十八條ヨリ第二百四十五條マテニ定メタル規則ニ從フ

第二百八十二條 忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ニ取掛ル可シ但五日間辯論ヲ停止シタル時ハ新ニ辯論ヲ爲スコシ  
變災厄難ノ爲メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ

第二百八十三條 公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ於テ用フ可キ證據ニ同シ

第二百八十四條 裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ豫審中管轄官吏ノ作リタル調書及ヒ檢證書類ヲ朗讀セシムルコトヲ得  
是等ノ書類ハ原被證人ノ陳述ト同一ノ效ヲ有ス

第二百八十五條 調書ヲ作リタル司法警察官ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ證人トシテ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ呼出スコトヲ得

豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ其裁判所ノ允許ヲ得テ調書説明ノ爲メ之ヲ呼出スコトヲ得

第二百八十六條 豫審ニ於テ訊問シタル證人ハ更ニ之ヲ呼出スコトヲ得

豫審ニ於テ錄取シタル證人ノ陳述書ハ更ニ其證人ヲ呼出サハル時證人呼出ヲ受ケ出廷セサル時又ハ豫審及ヒ公判ニ於テノ陳述ヲ比較スコキ時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權

十五年三月前法官連四年十歳ヲ以テ調書ヲ作リタル司法警察官ヲ證人トシテ出廷セシムル時豫審ニ及ハス書記ノ次席ニ著テ陳述セシムルコトヲ定ム

ナリテ之ヲ朗讀セシムルコトヲ得

第二百八十七條 第二百七十八條以下ノ規則ハ公判ノ證人ニモ亦之ヲ適用ス

第二百八十八條 證人ハ互ニ言語ヲ接スコカラス又陳述前辯論ニ立會フ可カラス

第二百八十九條 證人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問スコシ

- 一 檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル證人
- 二 民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人
- 三 被告人及ヒ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

第二百九十條 證人數名アル時ハ氏名目錄ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊問スコシ但裁判長ハ證人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序ヲ變更スルコトヲ得

第二百九十一條 證人及ヒ被告人ハ裁判長ニ非サレハ之ヲ訊問スルコトヲ得ス  
陪席判事及ヒ檢察官ハ裁判長ニ告ケ證人及ヒ被告人ヲ訊問スルコトヲ得

訴訟關係人ハ辯論ニ必要ナリトスル條件ヲ分明ナラシムル爲メ證人ヲ訊問スコキコトヲ裁判長ニ求ムルヲ得

第二百九十二條 證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引狀ヲ以テ豫審判事ニ送致スコキノ言渡ヲ爲スコシ

其證人ノ陳述ハ書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致スコシ  
本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期ヲ言渡スコトヲ得

第二百九十三條 證人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金ヲ言渡スコシ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

一 違警罪事件ニ付テハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料

二輕罪以上ノ事件ニ付テハ二圓以上十圓以下ノ罰金

被告人闕席シタル時ハ其呼出シタル證人出廷セスト雖モ科料罰金ヲ言渡ス可カラス

第二百九十四條 前條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達ス可シ

其言渡ヲ受ケタル者三日内ニ出廷スルヲ能ハサリシ正當ノ事由ヲ證明シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ科料又ハ罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ但重罪裁判所閉廳ノ後ハ其閉廳シタル裁判所ニ其申立ヲ爲ス可シ

第二百九十五條 證人呼出ニ應セサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公判ヲ延期スルノ言渡ヲ爲スヲ得

檢察官自ラ其請求ヲ爲サ、ル時ハ公判ノ延期ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

第二百九十六條 證人再度ノ呼出ヲ受ケ、ル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル科料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用ヲ言渡ス可シ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再ヒ公判ヲ延期スルヲ得但延期シタル時ハ其證人ニ對シ勾引狀ヲ發ス可シ

第二百九十七條 第二百九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命シタル鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應セサル時ハ第二百九十三條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ説明ノ爲メ更ニ之ヲ呼出ス時ハ證人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

第二百九十八條 被告人聾者啞者又ハ國語ニ通セサル者ナル時ハ第五百五十六條第五百五十七條ノ規則ニ從フ

第二百九十九條 被告人數名アル時ハ裁判長其意見ヲ述ヘ且檢察官其他訴訟關係人ノ意見ヲ聽キ訊問ノ順序ヲ定ム可シ

裁判長ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヲ得

第二百條 證據調濟ノ後檢察官民事原告人被告人其辯護人及ヒ民事擔當人ハ順次發言ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルヲ得ス  
檢察官其他訴訟關係人ハ迭ヒ辯論ヲ爲スヲ得但辯論ノ最終ニハ被告人又ハ辯護人ナシテ發言セシム可シ

第二百一條 檢察官公訴ヲ拋棄スト雖モ裁判所ニ於テハ本案ニ付キ相當ノ裁判ヲ爲ス可シ

第二百二條 辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ直ニ之ヲ判決ス可シ但其判決ニ對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス

第二百三條 民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス何時ニテモ其訴訟ニ關係スルヲ得

又民事原告人ハ民事擔當人ナシテ其訴訟ニ關係セシムルヲ得  
若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ其判決ニ對シテハ本案ノ裁判言渡ヲ待タズ直ニ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百四條 裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且一切ノ證據ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦同シ

第二百五條 無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其理由トシテ被告人ニ對シ犯罪ノ證據ナキヲ明示ス可シ

第二百六條 裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同時ニ私訴ノ裁判言渡ヲ爲ス可シ  
私訴ニ付キ取調未タ充分ナラサル時ハ公訴ノ裁判アリタル後其裁判言渡ヲ爲スヲ得

第二百七條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ幾分ヲ擔當ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官ニテ之ヲ擔當ス可シ  
私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之ヲ擔當ス可シ

第二百八條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トナ問ハス沒收ニ係ラサル差押物品ハ所有主ノ請求ナシ

十七年七月司法省達第四  
二十六號ヲ參照ス可シ裁  
判費用ノ部ニ載ス  
十五年六月司法省達丙第  
二十四號ヲ以テ差押物件

ハ裁判官渡アルマテ其所  
有主ハ假ニ下流シ區クテ  
許ス

ト雖モ之ヲ還付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百九條 本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限内又上訴アリタル時ハ其判決アルマテ裁判執行ヲ停止ス

第三百十條 禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡シタル時ハ現ニ捕ニ就クニ非サレハ上訴ヲ爲スヲ得ス

第三百十一條 拘留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ又ハ保釋ヲ求ムル時ハ其申立書ヲ監獄長ニ差出シ監獄長ヨリ之ヲ其裁判所ノ書記ニ差出ス可シ

第三百十二條 訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變災厄難ニ因リ上訴期限ヲ經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ證明シタル時ハ期限ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルヲ得但變災厄難ヲ免カレタルヨリ通常ノ期限内ニ其證據ヲ申立書ニ添へ上訴ヲ爲ス可シ

第三百十三條 書記ハ速ニ前條ノ申立書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スヲ得

上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議局ニテ檢察官ノ意見ヲ聽キ先ツ其上訴ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

上訴ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヲシテ其旨ヲ訴訟關係人ニ通知セシメ通常ノ規則ニ從ヒ本案ノ裁判ヲ爲ス可シ

上訴ヲ受理ス可カラサル者ト判決シタル時ハ他ノ原由アルニ非サレハ即時ニ裁判執行ヲ爲サシム可シ

第三百十四條 裁判言渡ハ辯論ヲ終リタル後公廷ニ於テ即時ニ之ヲ爲シ又ハ次日ニ之ヲ爲ス可シ

裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作り書記ト共ニ署名捺印ス可シ

第三百十五條 訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁判言渡書ノ謄本又ハ其拔書ヲ求ムルヲ得但上訴ノ爲メ

十四年十二月司法省達甲  
第七號ヲ以テ裁判官渡ノ

謄本ヲ求ムル者ヲシテ用  
紙一枚金三錢ヲ上納セシ  
ム其後無効力者ニ限リ無  
代價ニテ下流スナ許ス

其求ヲ爲シタル時ハ書記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下付ス可シ

第三百十六條 對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其言渡ニ對シ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ告知シ又闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ言渡書ニ記載ス可シ

若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ從ヒ其告知アルマテ上訴期限ノ經過ヲ停止ス

第三百十七條 書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公判始末書ヲ作り左ノ條件其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ

一 裁判ヲ公行シタルヲ又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡アリタルヲ及ヒ其事由

二 被告人ノ訊問及ヒ其陳述

三 證人鑑定人ノ陳述及ヒ宣誓ヲ爲シタルヲ若シ宣誓ヲ爲サハル時ハ其事由

四 原被ノ證據物件

五 辯論中異議ノ中立アリタルヲ後日ヲ期シテ中立立ツ可キ事件ヲ申立タルヲ是等ノ事件ニ付キ檢察官

其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ判決

六 辯論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ發言セシメタルヲ

第三百十八條 公判始末書ニハ前條ニ記載シタル條件ノ外言渡ヲ爲シタル裁判所年月日裁判長陪席判

事檢察官及ヒ書記ノ氏名ヲ記載ス可シ

辯論數日ニ涉ル時ハ其旨及ヒ同一ノ裁判官出席シタルヲ記載ス可シ

辯論中豫備判事ヲシテ代ラシメタル時ハ其旨ヲ記載ス可シ檢察官及ヒ書記ニ付テモ亦同シ

第三百十九條 公判始末書ハ裁判言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整頓シ裁判長及ヒ書記署名捺印ス可シ

裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見アル時ハ其紙尾ニ記載ス可シ

第三百二十條 裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ正本ハ其裁判所ノ書記局ニ保存ス可シ

上訴アリタル時ハ裁判長及ヒ書記裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ謄本ニ認印シ之ヲ上訴書類ニ添フ可

第二章 違警罪公判

第二百一十一條 違警罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀  
二 豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第二百二十二條 呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名職業住所出廷ノ日時被告事件及ヒ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得可キ旨ヲ記載ス可シ若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未タ其證人ヲ呼出サ、ル時ハ公廷ニテ其事件ノ告知ヲ受ケタル後其呼出及ヒ辯護ノ爲メニ日ノ猶豫ヲ求ムルヲ得

第二百二十三條 呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

第二百二十四條 違警罪裁判官ハ被告事件急速ヲ要スル時ハ公判ニ取掛ル前檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ對手人ノ立會ヲ要セスシテ檢證處分ヲ爲スヲ得

第二百二十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ又呼出ヲ受ケスシテ出廷シタル者ト雖モ訊問前其名刺ヲ書記ニ差出シタル時ハ裁判所ニ於テ證人トシテ其陳述ヲ聽クヲ得

第二百二十六條 書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ若シ其呼立ニ應セサル時ハ他ノ事件ノ裁判ヲ終リタル後其事件ヲ裁判ス可シ

第二百二十七條 違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ官吏ノ作リタル調書又ハ申立書アル時ハ書記之ヲ朗讀ス可シ

檢察官ハ被告事件ヲ陳述ス可シ

第二百二十八條 違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認スルヤ否ヲ訊問ス可シ若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル書面ヲ差出ス可シ

第二百二十九條 被告人ノ白狀アリタル時ハ他ノ證憑ヲ差出スニ及ハス但裁判所ニ於テハ檢察官民事

原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ差出サシムルヲ得

若シ白狀ナキ時ハ原被告ノ證人ヲ訊問シ其他證憑アル時ハ之ヲ差出ス可シ

第二百三十條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ證明シ及ヒ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第二百三十一條 呼出ヲ受ケタル被告人民事擔當人又ハ其代人出廷セサル時ハ檢察官及ヒ民事原告人ノ請求スル所ヲ聽キ關席裁判ヲ爲ス可シ

民事原告人出廷セサル時亦同シ

第二百三十二條 關席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ關席シタル者又ハ其住所ニ之ヲ送達ス可シ

關席裁判ヲ受ケタル者故障ヲ爲サントスル時ハ言渡書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ其申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ

第二百三十三條 裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ申立ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ若シ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヨリ故障アリタルヲ及ヒ其事件ヲ公判ニ付ス可キ日時ヲ故障ノ對手人ニ通知スル爲メ呼出狀ヲ送達ス可シ但其送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

又公判ニ付ス可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申立人ニ報知ス可シ

第二百三十四條 故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ第二百二十六條ヨリ第二百三十條マテノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

其裁判ニ關席シタル者ハ故障ヲ爲スヲ得ス

第二百三十五條 犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百三十六條 被告事件違警罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百二十七條 被告事件重罪又ハ輕罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其事件ヲ輕罪裁判所檢事ニ送致ス可シ但被告人ニ對シ勾留狀ヲ發スルヲ得

第三百二十八條 違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ニ控訴スルヲ得

一 被告人ハ拘留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時

二 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上治安裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

三 檢察官其他訴訟關係人ハ上ニ記載シタル原由アラサル時ト雖モ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百二十九條 控訴ヲ爲サントスル者ハ原裁判所ノ書記局ニ其申立書ヲ差出ス可シ但其申立ノ期限ハ對審裁判ニ付テハ言渡ヨリ三日内又關席裁判ニ付キ故障アラサル時ハ本人又ハ其住所ニ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス

控訴ヲ爲スノ申立アリタル時ハ書記ヨリ其官ヲ對手人ニ通知ス可シ

第三百四十條 訴訟ニ關スル一切ノ書類ハ檢察官ヨリ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ書記局ニ之ヲ送致ス可シ

若シ檢察官控訴ノ申立人又ハ對手人ナル時ハ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ檢察官ニ其意見書ヲ差出ス可シ

第三百四十一條 控訴ヲ受ク可キ裁判所ニ於テハ書記局ヨリ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル後其裁判ニ取掛ル可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百四十二條 控訴ノ對手人ハ其裁判言渡アルマテ何時ニテモ附帶ノ控訴ヲ爲スヲ得但附帶ノ控訴ハ公廷ニ於テ直チニ之ヲ申立ルヲ得

第三百四十三條 控訴ニ係ル事件ハ輕罪ノ裁判ヲ爲スニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ハ裁判長ノ允許ヲ得ルニ非サレハ新ナル證人又ハ始審ニ於テ陳述シタル證人ヲ呼出スヲ得ス

第三百四十四條 控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ原裁判言渡ヲ認可スルノ言渡ヲ爲シ又ハ之ヲ取消シ更ニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

被告人ノミ控訴ヲ爲シタル時ハ原裁判言渡ヨリ重キ刑ヲ言渡スヲ得ス

私訴ニ付テノ控訴ノ裁判ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第三百四十五條 第三百三十一條以下ノ規則ハ控訴ノ關席裁判ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第三百四十六條 檢察官其他訴訟關係人ハ違警罪事件ノ終審ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得

第三章 輕罪公判

第三百四十七條 輕罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二 豫審判事輕罪裁判所會議局又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百四十八條 呼出狀ニ付テハ第三百二十二條第三百二十三條ノ規則ニ從フ

第三百四十九條 被告事件罰金ノ刑ニ該ル可キ時ハ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得可キ旨ヲ呼出狀ニ記載ス可シ

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得

第二百五十條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第二百五十一條 第三百二十四條ノ規則ハ豫審ヲ經サル輕罪事件ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十二條 檢察官ハ裁判長ヨリ被告人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地ヲ問ヒタル後被告事件ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ證明ス可シ

調書又ハ申立書アル時ハ書記ヲシテ之ヲ朗讀セシメ次ニ原被證人ノ陳述ヲ聽キ且證據物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲スコシ

第三百五十三條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ其意見ヲ陳述スコシ

民事原告人ハ要償ニ付キ其意見ヲ陳述スコシ

被告人及ヒ民事擔當人ハ更ニ答辯ヲ爲スコシ得

第三百五十四條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十九條ノ規則ニ從ヒ闕席裁判ヲ爲スコシ得可キ被告人其呼出ノ日時ニ出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲スコシ

第三百五十五條 闕席裁判ニ關スル第三百三十一條ヨリ第三百三十四條マテノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十六條 闕席裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ左ノ場合ヲ除クノ外刑ノ期滿免

除ニ至ルマテ故障ヲ爲スコシ得

一被告人本案ノ裁判前豫メ裁判ス可キ事件ヲ申立タル時

二裁判言渡書ヲ本人ニ送達シタル時

三被告人裁判執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルヲ知リタルノ證アル時

第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ第二第三ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヲ知リタルヨリ三日内ニ故障ヲ爲スコシ得

第三百五十七條 裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ新ナル證人ヲ呼出シ鑑定人ヲ命シ若クハ臨檢ヲ爲スコシ得但是等ノ處分ヲ爲スコシ付テハ第三編第三章ニ定メタル規則ニ從フ

又豫審ヲ經サル事件ニ付テハ豫審判事ヲシテ其指示スル所ノ條件ニ付キ取調ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシムルヲ得

第三百五十八條 犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲スコシ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲スコシ

本條ノ場合ニ於テ被告人拘留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲スコシ

第三百五十九條 被告事件違警罪ナル時ハ終審ノ裁判言渡ヲ爲シ且被告人拘留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲スコシ

第三百六十條 被告事件重罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ若シ豫審ヲ經サル時ハ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲スコシ但被告人拘留ヲ受ケタル時ハ拘引狀ヲ發スコシ

訴訟書類及ヒ證據物件ハ檢察官ヨリ之ヲ豫審判事ニ送致スコシ

第三百六十一條 被告事件豫審ヲ經タル時ハ之ヲ其裁判所ノ會議局ニ送付スルノ言渡ヲ爲スコシ

會議局ニ於テハ第二百五十三條第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ爲シ被告人ヲ管轄裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ爲スコシ

第三百六十二條 會議局ノ言渡ニ因リ事件ヲ受理シタル場合ニ於テ新ナル證據ヲ發見スルヲナクシテ其事件ヲ重罪ナリトスル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲スコシ

檢事ハ大審院ニ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲スコシ

第三百六十三條 前二條ノ場合ニ於テハ會議局又ハ大審院ノ判決アルマテ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ被告人ヲ其裁判所ノ監倉ニ留置スルノ言渡ヲ爲スコシ得

又第二百十條以下ノ規則ニ從ヒ保釋ニ付キ判決ヲ爲スコシ得

第三百六十四條 被告事件輕罪ニシテ且證據充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲スコシ

被告人禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ當然保釋責付ヲ取消シタル者トス但上訴中更ニ保釋ヲ求ムルヲ得

第三百六十五條 檢察官其他訴訟關係人ハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シ控訴裁判所ニ控訴スルヲ得

一 檢察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタル時但違警罪事件トシテ言渡アリタル場合ニ於テハ其事件ヲ輕罪ナリトスル時

二 被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ヲ除クノ外刑ノ言渡ヲ受ケタル時

三 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上始審裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

四 檢察官其他訴訟關係人ハ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無效ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百六十六條 控訴ハ裁判言渡アリタルヨリ五日內ニ之ヲ爲スヲ得

闕席裁判ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲サシテ直チニ控訴ヲ爲スヲ得但第三百五十六條ノ場合ニ於テハ五日內ニ之ヲ爲ス可シ

第三百六十七條 公訴ノ裁判言渡ニ對シテ控訴アリタル場合ニ於テ被告人拘留ヲ受ケタル時ハ檢察官ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監倉ニ移ス可シ

第三百六十八條 第三百二十九條ヨリ第三百四十二條マテ及ヒ第三百四十四條ノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百六十九條 輕罪裁判所檢事ノ控訴又ハ檢事長ノ附帶ノ控訴アリタル場合ニ於テ被告事件ヲ重罪ナリトスル時ハ第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百七十條 控訴ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從フ

第三百七十一條 檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審ノ對審裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シテ上告ヲ爲スヲ得

第四章 重罪公判

第三百七十二條 重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一 豫審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

二 控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百七十三條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ左ノ區別ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ

控訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作ル可シ

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作り又ハ重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可キ檢事ヲシテ之ヲ作ラシム可シ

第三百七十四條 公訴狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一 被告事件ノ始末及ヒ加重減輕ノ模様

二 被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地

三 豫審ニ於テ集取シタル原被ノ證據

四 罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ概略

第三百七十五條 公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ記載シタルヨリ以外ノ事件又ハ被告人ヲ記載ス可カラス

第三百七十六條 重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被告人ニ對シテ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ作りタル上ニテ各別ニ辯論ヲ爲スヲ裁判所長ニ請求スルヲ得

第三百七十七條 重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被告人ニ對シテ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ其職權ヲ以テ各別ニ辯論ヲ爲サシムルヲ得又數箇ノ公訴狀ニ記載シタル事件ニ付キ同時ニ辯論ヲ爲サシムルヲ得

第三百七十八條 書記ハ被告人出廷ヨリ少クトモ五日日前ニ公訴狀ノ謄本ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人數名アル時ハ各別ニ其謄本ヲ送達ス可シ

第三百七十九條 重罪裁判所長又ハ其委任ヲ受ケタル陪席判事ハ公訴狀ノ送達アリタルヨリ二十四時ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊問シ且辯護人ヲ選任シタリヤ否ヲ問フ可シ

若シ辯護人ヲ選任セサル時ハ裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所所屬ノ代人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

被告人及ヒ代言人ヨリ異議ノ申立ナキ時ハ代言人一名ヲシテ被告人數名ノ辯護ヲ爲サシムルヲ得  
辯護人ヲ選任シタルヨリ三日ノ後ニ非サレハ辯論ニ取掛ルヲ得ス

第三百七十九條 辯護人差支アル時若クハ被告人ヨリ之ヲ改選ス可キ正當ノ事由ヲ申立タル時被告人  
自ラ辯護人ヲ選任スルニ非サレハ前條ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之ヲ選任ス可シ但辯護人ヲ改選シ  
タル時ハ三日間辯論ヲ停止ス可シ

第三百八十條 書記ハ第三百七十八條ノ場合ニ於テ訊問ノ調書ヲ作り辯護人ヲ選任スルニ付キ其式ヲ  
履行シタルヲ記載ス可シ

辯論中辯護人ヲ改選シ及ヒ辯論ヲ停止シタル時ハ公判始末書ニ其旨ヲ記載ス可シ

第三百八十一條 辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ效ナカル可シ

第三百七十七條ヨリ第三百七十九條マテノ規則ニ背キタルヲアリト雖モ辯論ニ取掛ル前ニ非サレハ  
被告人ヨリ異議ノ申立ヲ爲スヲ得ス

第三百八十二條 辯護人ハ第三百七十八條ノ處分アリタル後被告人ト接見スルヲ得  
又書記局ニ於テ一切ノ訴訟書類ヲ閱讀シ且之ヲ抄寫スルヲ得  
辯護人ヲ除クノ外何人ト雖モ重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨリ裁判言渡アルマテ被告人ト接見  
スルヲ得ス但被告人現ニ拘留ヲ受クル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

第三百八十三條 檢察官及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ開廷ヨリ一日前之  
ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ同上ノ期限内ニ書記ヨリ之ヲ檢察官ニ送致シ民事  
ニ付キ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ之ヲ民事原告人ニ送達ス可シ

第三百八十四條 前條ノ規則ニ從ヒ豫メ氏名ヲ通知セサル證人ノ陳述ハ事實參考ノ爲メニ非サレハ之  
ヲ聽クヲ得ス但對手人ヨリ異議ナキヲ申立タル時ハ證人トシテ其陳述ヲ聽クヲ得

第三百八十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

十五年一月第一號布告ヲ  
以テ當分ノ内務廳ハテ用  
ヒサルモ其期ノ言渡ハ有  
効ナリトス

第三百八十六條 裁判長ハ開廳ノ日ニ當リ公廷ニ於テ陪席判事檢察官ノ面前ニテ開廳ス可キヲ陳述  
ス可シ但被告人ヲ呼出ス可カラス

第三百八十七條 裁判長辯論二日以上ニ渉ル可シト思料シタル時ハ重罪裁判所々在ノ地ノ裁判所判事  
一名ヲ以テ豫備陪席判事ト爲スヲ得

第三百八十八條 裁判官檢察官及ヒ書記各其席ニ就キタル後即時ニ訊問及ヒ辯論ニ取掛ル可シ  
裁判長ハ先ツ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

若シ其答辭ト豫審中ノ陳述ト齟齬アリト雖モ公訴狀ニ記載シタル被告人ニ相違ナキ時ハ引續キ辯論  
ヲ爲ス可シ

第三百八十九條 書記ハ呼出シタル證人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ  
其呼立ニ應シタル證人ハ扣席ニ退カシメ陳述ヲ爲スニ當リ順次ニ之ヲ呼入ル可シ

第三百九十條 裁判長ハ書記ヲシテ公訴狀ヲ朗讀セシムルニ付キ注意シテ聽ク可キヲ被告人ニ告  
知ス可シ

第三百九十一條 裁判長ハ書記前條ノ朗讀ヲ終リタル後被告人ヲ訊問ス可シ  
被告人豫審中ニ白狀シタル事件ヲ確認セス又ハ之ヲ取消サントスル時ハ其事由ヲ辯明セシム可シ

被告人ノ白狀アリト雖モ仍ホ其取調ヲ爲サル可カラス

第三百九十二條 裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後證憑ヲ差出スニ從ヒ其證憑ニ付キ辯解ヲ爲シ且自  
己ノ利益ト爲ル可キ反證ヲ差出スヲ得可キヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十三條 裁判長ハ原告證人陳述ヲ終リタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヲ問フ可シ

第三百九十四條 證人ハ陳述ヲ爲シタル後其扣席ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退廷ノ允許ヲ得タル時ハ此  
限ニ在ラス  
陪席判事檢察官被告人及ヒ民事原告人ハ更ニ證人ヲ訊問スルヲ又證人ヲシテ他ノ證人ト對質セシム  
ルヲ請求スルヲ得



裁判長ハ職權ヲ以テ前項ノ處分ヲ爲スヲ得

第三百九十五條 裁判長ハ證人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ面前ニ於テ充分ナル陳述ヲ爲スヲ得サル可シト思料シタル時ハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其證人ノ陳述中被告人ヲ退席セシムルヲ得

裁判長ハ證人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告人ヲ公庭ニ呼入レ其陳述シタル條件ヲ告知シ且被告人ニ意見アル時ハ之ヲ申立シム可シ

第三百九十六條 裁判長ハ第三百條ニ定メタル手續ノ終リタル後公訴ニ付キ辯論ノ終結シタルヲ言渡ス可シ

第三百九十七條 檢察官及ヒ被告人ハ辯論中ニ發見シタル條件ニ付キ豫審ヲ求ムルヲ得裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シタル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシム可シ

第三百五十七條第一項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百九十八條 辯論終結ノ言渡アリタル時ハ檢察官法律適用ノ爲メ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ辯護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルヲ辯論スルヲ得

第三百九十九條 前條ノ辯論ヲ終リタル後民事原告人ハ私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ被告人辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲スヲ得

檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

裁判所ニ於テハ私訴ノ辯論ヲ延期スルヲ得但閉廳前之ヲ判決ス可シ

第四百條 被告事件重罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

第四百一條 犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ無罪ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

又原被ノ要償ニ付キ第三百九十九條ノ規則ニ從ヒ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百二條 辯論中公訴狀ニ記載シタル事件ニ附帶セサル他ノ重罪輕罪ヲ發見シタル場合ニ於テ檢察官ノ請求アル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲サシメ本會又ハ次會ニ於テ本案ノ事件ト共ニ之ヲ裁判ス可シ

第四百三條 檢察官其他訴訟關係人ハ重罪裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シテ上告ヲ爲スヲ得

第四百四條 關席裁判ヲ爲スニハ裁判長書記ヲシテ公訴狀及ヒ必要ナリトスル豫審書類ヲ朗讀セシメ又原被證人ノ陳述ヲ聽ク可シ

檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述シ民事原告人ハ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ  
民事擔當人ハ答辯スルヲ得

第四百五條 關席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ本人又ハ其住所ニ送達ス可シ

第四百六條 關席裁判ニ係ル刑ノ言渡ニ對シテハ檢察官ニ非サレハ上告ヲ爲スヲ得

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ノ裁判言渡ニ對シテ上告ヲ爲スヲ得

第四百七條 關席裁判ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スヲ得但捕ニ就キタル時ハ十日内ニ故障ヲ爲ス可シ

第四百八條 故障ノ申立ハ關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之ヲ爲ス可シ

重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ  
第四百九條 關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲ス可シ

控訴裁判所ニ於テ其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ重罪裁判所ノ裁判ヲ受ク可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第五編 大審院ノ職務  
第一章 上告

第四百十條 檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ左ノ場合ニ於テ上告ヲ爲スヲ得

一 法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セサル時

二 裁判所ノ構成規則ニ背キタル時

三 法律ニ背キ管轄違又ハ管轄ナリトノ言渡若クハ管轄ニ非サル裁判所ニ事件ヲ移スノ言渡アリタル時

四 法律ニ於テ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時又ハ無効ノ記載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於テ之ヲ認可セサル時

五 法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル時

六 法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時

七 裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ以テ判決スルヲ得可キ場合ヲ除クノ外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲シタル時

八 裁判言渡ヲ公行セス又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡ナクシテ訊問及ヒ辯論ヲ公行セサル時

九 事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬アル時

十 擬律ノ錯誤アル時

十一 越權ノ處分アル時

第四百十一條 免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ利益ノ爲メ定メタル規則ニ背キタルヲ又ハ犯罪ノ場所ニ因リ管轄違アリト雖モ上告ヲ爲スヲ得

第四百十二條 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ニ關スル豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ第四百十條ニ定メタル理由ニ付キ上告ヲ爲スヲ得

第四百十三條 上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ上告ヲ爲スヲ得

第四百十四條 上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ付テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ起算シ公判ニ付

テハ言渡アリタルヨリ起算ス

第四百十五條 豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上告アリタル時ハ勾留保釋責付釋放及ヒ放免ノ言渡ヲ除クノ外其執行ヲ停止ス

第四百十六條 上告ヲ爲サントスル者ハ其申立書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

上告ノ申立書ハ其申立アリタルヨリ二十四時内ニ書記局ニ送達ス可シ

第四百十七條 上告申立人ハ其申立ヲ爲シタルヨリ五日内ニ趣意書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ上告趣意書ヲ受取りタルヨリ二十四時内ニ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十八條 對手人ハ上告趣意書ヲ受取りタルヨリ五日内ニ答辯書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ其答辯書ヲ受取りタルヨリ二十四時内ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス可シ

第四百十九條 檢察官ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ハ一通ヲ作リ一通ヲ大審院ニ差出シ一通ヲ對手人ニ送達ス可シ

私訴ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ニ付テモ亦同シ

第四百二十條 書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シタル後速ニ訴訟書類及ヒ上告書類ヲ其裁判所ノ檢察官ニ差出ス可シ

檢察官ハ其書類ヲ五日内ニ大審院檢察長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ添フ可シ

第四百二十一條 上告申立人及ヒ對手人ハ代言人ヲ差出スヲ得

重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢察官ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キ者トシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ代言人ヲ選任セサル時ハ院長ノ職權ヲ以テ其院所屬ノ代理人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

第四百二十二條 院長ハ刑事局判事ニテ專任判事一名ヲ命ス可シ

專任判事ハ一切ノ書類ヲ檢閲シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意見ヲ付ス可カラズ

第四百二十三條 上告申立人及ヒ對手人ハ專任判事ノ報告書ヲ差出スマテハ大審院書記局ヲ經由シテ其趣意ヲ擴張ス可キ辯明書ヲ差出スヲ得

專任判事報告書ヲ差出シタル後辯明書ヲ差出シタル時ハ之ヲ其報告書ニ添フ可シ

第四百二十四條 書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷ノ日時ヲ上告申立人及ヒ對手人ノ代言人ニ報知ス可シ

第四百二十五條 開廷ノ日ニハ公廷ニ於テ專任判事其報告書ヲ朗讀ス可シ

檢事長及ヒ代言人ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ

私訴ノ上告ニ付テハ檢事長最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第四百二十六條 上告申立人又ハ對手人ヨリ代言人ヲ差出サ、ル時ハ其儘ニテ判決ヲ爲ス可シ

第四百二十七條 大審院ニ於テ上告ノ理由ヲシトスル時ハ之ヲ棄却スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第四百二十八條 大審院ニ於テ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對スル上告ニ付キ破毀ノ原由アリトスル時ハ其言渡ノ全部ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ但後ノ數條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラス

第四百二十九條 疑律ノ錯誤若クハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサルヲ因リ原裁判言渡ヲ破毀シタル時ハ其事件ヲ移スヲナクテ大審院ニ於テ直テニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十條 豫審又ハ公判ノ手續規則ニ背キタルヲアリト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ボサ、ル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スヲナク止タ其手續ヲ破毀ス可シ

第四百三十一條 豫審又ハ公判ノ言渡ノ幾分ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アラサル時ハ大審院ニ於テ其上告ニ係ル部分ヲ破毀シ法律ニ從ヒ直テニ相當ノ裁判言渡ヲ爲シ又ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百三十二條 大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ直テニ裁判言渡ヲ爲シタル時ハ原裁判所又ハ他ノ裁判所ヲシテ其執行ヲ爲サシム可シ

第四百三十三條 大審院ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可キ時ハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ定示ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ民事裁判所ニ移ス可シ

第四百三十四條 法律ニ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ者トス

大審院ヨリ送付ヲ受ケタル裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ上告ヲ爲スヲ得

第四百三十五條 法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ定期内ニ上訴スル者ナクシテ其裁判言渡確定シタル時ハ大審院檢事長ヨリ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ非常上告ヲ爲スヲ得

非常上告アリタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ大審院ニ於テ直テニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十六條 左ノ場合ニ於テハ大審院ノ裁判言渡ニ對シ檢事長其他訴訟關係人ヨリ其院ニ哀訴スルヲ得

一大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ履行セサル時

二訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ判決ヲ爲サ、ル時

三同一ノ裁判言渡ニ付キ二箇ノ條件齟齬シタル時

第四百三十七條 哀訴ヲ爲サントスル者ハ裁判言渡アリタルヨリ三日内ニ書記局ニ其申立ヲ爲ス可シ

書記ハ申立書ヲ受取りタルヨリ三日内ニ之ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ同一ノ期限内ニ其答辯書ヲ差出ス可シ

第四百三十八條 大審院ノ裁判言渡ハ其言渡アリタルヨリ三日間又哀訴アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス

第二章 再審ノ訴

第四百三十九條 再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲ス

一 得但裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲ス可キ得ス  
 一人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタル後其言渡ノ日ニ當リ殺サレタリト認メラレシ者現ニ生存  
 シ又ハ犯罪前既ニ死去シタルノ確證アリタル時  
 二 同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時  
 三 犯罪アル以前ニ作リタル公正ノ證書ヲ以テ當時其場所ニ在ラサルコトヲ證明シタル時  
 四 被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時  
 五 公正ノ證書ヲ以テ訴訟書類ニ偽造又ハ錯誤アルコトヲ證明シタル時  
 第四百四十條 再審ノ訴ヲ爲スコトヲ得可キ者左ノ如シ  
 一 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官  
 二 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢察官  
 三 大審院檢察長但司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲スコシ  
 四 刑ノ言渡ヲ受ケタル者  
 五 刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬  
 第四百四十一條 再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラズ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得  
 第四百四十二條 再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原裁判言渡書ノ謄本及ヒ證書書類ヲ添ヘ之  
 ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出スコシ  
 原裁判所ノ檢察官ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ大審院檢察長ニ差出スコシ  
 原裁判所ノ檢察官及ヒ控訴裁判所檢察長自ラ再審ノ訴ヲ爲サントスル時ハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類  
 ヲ差出スコシ  
 第四百四十三條 大審院ニ於テハ檢察長ノ請求ニ因リ速ニ專任判事一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告書ヲ  
 差出サシム可シ  
 第四百四十四條 大審院ニ於テハ他ノ事件ヲ閣キ刑事局判事全員會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及

一 檢察長ノ意見書ニ依リ判決ヲ爲スコシ  
 第四百四十五條 大審院ニ於テ再審ノ原由アルコトヲ認メタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ公訴及ヒ私訴ニ  
 付キ再審ヲ爲スコキコトヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移スコシ  
 其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規則ニ從ヒ裁判ヲ爲スコシ  
 第四百四十六條 死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ於テ大審院ニテ再審ノ原由アルコトヲ認メ  
 タル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトヲ原裁判言渡ヲ破毀スコシ  
 第四百四十七條 再審ノ裁判ニ因リ無罪ノ言渡アリタル時又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル  
 時ハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其言渡書ヲ揭示公告スコシ  
 第二章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴  
 第四百四十八條 通常裁判所ト特別裁判所トト問ハヌ管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲シ其言渡確定シタル時  
 又忌避ノ原由若クハ非常ノ事變ニ因リ訴訟事件ヲ管理スルコト能ハサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ヨ  
 リ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲スコトヲ得  
 大審院檢察長ハ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲スコトヲ得  
 第四百四十九條 裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ訴訟書類ヲ添ヘ之ヲ大審院ノ  
 書記局ニ差出スコシ  
 第四百五十條 大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢察長ノ意  
 見書ニ依リ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ判決シ其事件ヲ管理スコキ裁判所ヲ定示スコシ  
 第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スコトノ訴  
 第四百五十一條 犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其他重大ナル事情ニ因リ裁判ニ對シ紛擾又  
 ハ危險ヲ生スルノ恐アル時ハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得  
 第四百五十二條 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スコトノ訴ハ司法卿ノ命ニ因リ大審院檢察長ヨリ其院ニ之ヲ爲  
 ス可シ

十四年十二月司法省達下  
第二十五號ヲ參照ス可シ

第四百五十三條 大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クヲナク速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十四條 被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルヲ能ハサルノ恐アル時ハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得

第四百五十五條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スコトハ管轄裁判所ノ檢察官其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲スヲ得

民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シタル時ハ前項ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス

第四百五十六條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スコトハ其趣意書ニ一通ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ一通ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達アリタルヨリ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

第四百五十七條 大審院ニ於テハ第四百五十條ノ規則ニ從ヒ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十八條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スコトハ訴アリタル時ハ裁判所ニ於テ其訴訟手續ヲ停止ス

第六編 裁判執行復權及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第四百五十九條 重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行ス可カラズ

第四百六十條 死刑ノ言渡確定シタル時ハ檢察官ヨリ速ニ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出ス可シ

司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ三日内ニ其執行ヲ爲スコトヲ得

第四百六十一條 死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタル時ハ直ニ之ヲ執行ス可シ

第四百六十二條 刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ因リ之ヲ爲スコトヲ得

罰金科料裁判費用及ヒ沒收物品ハ檢察官ノ命令書ニ依リ之ヲ徵收ス可シ

裁判費用ノ部ニ載ス

十四年十二月司法省達下  
第七號ヲ以テ刑罰則ヲ定  
ム刑罰則ニ載ス參照  
ス可シ

同年同月同省達下第三十  
四號ヲ以テ刑罰則ヲ定  
ム審表様式ノ部ニ載ス

破壞又ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢察官之ヲ處分ス可シ

第四百六十三條 死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書ヲ作り刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ

其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四百六十四條 裁判言渡確定シ又ハ闕席裁判アリタル時ハ其刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記既決犯罪表ヲ作り左ノ條件ヲ記載ス可シ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其執行ヲ爲シタル裁判所ノ書記之ヲ作ル可シ

一 犯人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地

二 罪名刑名

三 再犯

四 裁判言渡ヲ爲シタル年月日

五 對審裁判又ハ闕席裁判

第四百六十五條 既決犯罪表ハ一通ヲ作り一通ヲ司法省ニ送致シ一通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

違警罪ノ既決犯罪表ハ一通ヲ作り其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

第四百六十六條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條件ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第四百六十七條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就キタル場合ニ於テ人違ノ申立アリタル時ハ之ヲ認定スル爲メ前ニ其罪ヲ認メタル裁判所ニ送致ス可シ

裁判所ニ於テ本犯ナルヲ認定スルヲ能ハサル時ハ事實參考ノ爲メ曾テ其事件ニ干預シタル裁判官檢察官書記又ハ原被ノ證人ヲ呼出スコトヲ得

第四百六十八條 前二條ノ場合ニ於テハ公庭ニテ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ申立及ヒ檢察官ノ意見ヲ聽

キ裁判言渡ヲ爲ス可シ但其言渡ニ對シテハ上訴ヲ許サス  
第四百六十九條 賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還ス可キ裁判費用ニ付キ其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第二章 復權

第四百七十條 復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法卿ニ之ヲ爲ス可シ

復權ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始審裁判所檢察事ニ之ヲ差出ス可シ

第四百七十一條 復權ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

一 裁判言渡書ノ謄本

二 主刑ノ滿期特赦又ハ期滿免除ト爲リタルコトヲ證明スル書類

三 假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタルノ證書

四 賠償及ヒ裁判費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カレタルノ證書

五 過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

第四百七十二條 檢察ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ控訴裁判所檢察事長ニ差出ス可シ

第四百七十三條 檢察長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復權ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法卿ニ差出ス可シ

第四百七十四條 司法卿ハ復權ノ願ニ關スル書類ヲ檢閲シ其願ヲ允許ス可キ者ト認メタル時ハ速ニ上奏ス可シ

第四百七十五條 勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ因リ復權ノ願ヲ棄却シタル時ハ司法卿ヨリ其旨ヲ控訴裁判所檢察事長ニ通知シ檢察事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢察事ニ通知ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ半ヲ經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲スコトヲ得ス

更ニ復權ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規則ニ從フ

第四百七十六條 復權ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ其裁可狀ヲ控訴裁判所檢察事長ニ送致シ檢察事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢察事ニ送致ス可シ

檢察ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ

又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ其裁判所ニ於テハ之ヲ裁判言渡書ニ記入ス可シ

第三章 特赦

第四百七十七條 特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ檢察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法卿ニ申立ルコトヲ得

監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ス時ハ檢察官ヲ經由ス可シ但檢察官ハ意見書ヲ添フ可シ

特赦ノ申立アリタル時ハ司法卿ヨリ其書類ニ意見書ヲ添ヘ上奏ス可シ

第四百七十八條 司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ申立ヲ爲スコトヲ得

死刑ヲ除クノ外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セス

第四百七十九條 特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第四百八十條 特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テハ第四百七十六條ノ規則ニ從フ

司法省上申十二年九月二十五日

竊ニ當省ニ於テ委員ヲ置キ治罪法案ヲ編纂セシメ數回討論ノ末別冊ノ通脫稿致候ニ付上奏候條刑法

草案ニ引續キ審查ヲ命セラレ度候尤モ願實適用候ニハ削除ス可キ條件モ有之候ヘド草案ノ儀ニ付詳備

ヲ旨ト致シ候ヘハ此儀ハ豫メ御承知置キ有之度且又本稿ハ佛國法ニ淵源候儀ニテ我文字ノミニテハ意

義ヲ不盡ノミナラス往々誤謬ヲ生シ候儀不少候依テ法律字書編輯ニ著手致シ居候ヘド未タ脫稿不致尤

モ本稿ニ副ヘタル字書ハ別ニ可差出心得ニ候ヘハ先以テ御照合ヲ爲メ佛語本相添此段上申仕候也  
 尙以テ本稿ニ付テハ拙官尙又勘考ノ儀モ有之候ニ付審査御著手ノ節ハ條件ニ付一應陳述仕度此儀ハ  
 豫メ申添置候也  
 内閣書記官職案十二年九月三十日  
 司法卿上陳治罪法案草案脱稿ニ付審査被命度儀  
 右ハ刑法草案ノ例モ有之司法卿上陳ノ旨モ有之候ヘハ特ニ委員ヲ被置審査被仰付可然哉就テハ刑法草  
 案ノ儀當時審査卒業ノ際ニ候ヘハ右委員ノ中ニテ引續治罪法案審査可被仰付哉仰高裁候也  
 附刑法草案審査卒業ノ際ニ付治罪法案引續審査被仰付候ハ、司法省ニ於テ治罪法案取調委員ノ者  
 箋兩三名審査委員并ニ掛リ被仰付度候(大木)  
 刑法草案審査現員

刑法草案審査總裁	柳原前光
全 議員	細川潤次郎
同 議員	津田出
同 司法大書記官	鶴田保
同 少書記官	村田直胤
同 議員	山中島直行
同 參議	山田順義
全 御用掛	名村泰藏
司法少書記官	昌谷千里
判事	柳原前光
元老院幹事	柳原前光
職官	津田出
同	細川潤次郎
同	河瀬真孝
同	鶴田保
同	名村泰藏
司法大書記官	名村泰藏
司法少書記官	名村泰藏

辭令十二年十二月二十四日  
 治罪法案審査總裁被仰付候事

治罪法案審査委員被仰付候事  
 治罪法案審査局上申十二年二月二十七日  
 職官 昌谷千里  
 判事 清浦奎吾

治罪法案審査委員被仰付候事  
 治罪法案審査局上申十二年二月二十七日  
 職官 昌谷千里  
 判事 清浦奎吾  
 元老院議定ニ被附候治罪法案審査修正案別冊ノ通り修正ヲ加ヘ上奏相成候右ハ不都合ノ儀無之ニ付修正  
 ノ通り御布告相成可然哉仍テ御布告案ヲ添仰高裁候也  
 外務省上申十三年五月十一日  
 今般制定相成候治罪法案并刑法ノ儀ハ速ニ御布告相成候様仕度且右兩書ノ儀ハ派出公使ヘ携帶爲致度候  
 條各七部至急御下付相成度此段上申候也  
 外務省ヨリ内閣書記官ヘ照會十三年五月二十日  
 今般制定相成候治罪法案并刑法ノ儀ハ速ニ御布告相成且右兩書ノ儀ハ派出公使ヘ携帶爲致度候旨本月十  
 一日甲第九十九號ヲ以外務卿ヨリ上申致置候處右治罪法案并刑法各七部明二十一日中ニ御下付相成候様  
 御取計相成度此段及御依頼候也  
 内閣書記官ヨリ外務省ヘ回答十三年五月二十一日  
 今般制定治罪法案并刑法速ニ布告云々本月十一日御上申ノ末尙該書各七部下付可取計旨昨二十日御依頼  
 ニ付未タ公發不相成モノニ候ヘ共派出公使携帶ノ都合モ可有之ト存先以御請求ニ應シ右ノ部數及御回  
 付候條此旨御承知可有之候也  
 (參照)  
 外務省上申十五年十一月五日  
 和蘭法律博士フハン、ハメル著日本新刑法論之内別紙摘要和文在英森公使ヨリ送越候條致進達候也  
 治罪法案ハ專ラ佛ニ基キ歐洲ノ法律ニ符合セリ通論ヲ總論スルハ現施ノ佛法ヨリ劣等トハ評スヘカラス  
 却テ其區分ニ至テハ良カニ優劣アルヲ覺ヘ第三編ノ如キハ簡單明瞭ニシテ遺漏ナシ唯陪審官ノ制ヲ缺  
 クノミ  
 抑治罪法案ハ歐洲諸國ニ於テ近年大ニ改革シ頗ル進歩ス佛ノ如キモ亦現存法ノ舊慣ヲ脱セサルアルヲ知  
 リ既ニ改正稿案ヲ草セリ然ルニ日本立法家ハ仍ホ昔時議定ノ佛法ニ倣ヒ佛國カ今日迄ノ實驗ニ依テ古  
 法ヲ非トスルヲ知ラス近代法律ノ意思ヲ採用セザリシハ余之ヲ一讀シテ大ニ驚キタリ殊ニ豫審判事ノ  
 權限過大ナリ

以上ハメル氏ノ言ナリ氏ハ最後ニ於テ領事裁判ニ論及シ昨年英國法律家サー、ツラバ、ストウイス、カ、コロ  
ン、公會ニ於テ提出シタル地方廷ノ策ヲ非ナリトシ曰此地方廷ナル者ハ内外ノ法官ヲ以テ組織ス  
レハ埃及ノ立合裁判所ニ彷彿タリ立合裁判所ノ不利タルハ世人皆之ヲ知ル余ノ喋々チ俟タス云々ト  
蓋シ氏ハ未タトウイス氏ノ所謂該地方廷ニ付發言ノ要ハ即埃及立合裁判所ノ如キニ非スシテ日本政  
府カ自ラ所定ノ法律ヲシテ日本政府カ自ラ撰ム所ノ法官ニ之ヲ施行セシムルノ意ヲ明知セサルニ歸ス  
可シ

明治十五年九月 倫敦 河上房申記

元老院上申十六年二月五日

別紙刑法治罪法改正スヘキノ儀本院意見書勅裁ヲ仰キ候爲メ御上奏有之度候也

別紙刑法治罪法改正ノ意見書一昨三日本院ノ會議ニ於テ可ト決セリ仍テ謹テ上奏ス

別紙刑法治罪法改正ノ意見書

謹テ案スルニ刑法治罪法ハ治國具中最モ緊要ナル一大政器ナリ抑建國各其原ヲ異ニスレハ政體法律モ  
亦隨テ異ナラサルヲ得ス是レ萬國法ヲ一ニスル能ハサル所以ナリ然レトモ立法ノ原理ニ至テハ則チ國  
家ノ安寧ヲ保全シ人民ノ福祉ヲ増進シ善ヲ勸メ惡ヲ懲スノ旨ニ外ナラサルナリ然リ而シテ我現行ノ刑  
法治罪法中此ノ主旨ニ悖ルモノ少カラズ請フ其一ニテ舉ケン  
夫レ治罪法第十一條ニ公訴期滿免除ノ法アリ其君父ニ對スル犯罪者モ十年間發覺セザレハ其罪惡自ラ  
消滅ニ歸スルモノトス則天道ヲ無シ人倫ヲ紊ルノ最モ甚キモノナリ是豈勸善懲惡ノ道ナランヤ况  
ンヤ我皇國ノ如キ皇統一系特ニ君臣ノ大義ヲ重ニスルノ國體ニ於テヲヤ  
又刑法第七十九條ヨリ第八十一條ニ至ルノ條款ニ年齡ヲ以テ罪ノ輕重ヲ酌量スルノ法アリ其皇室ニ對  
スル犯罪者ニシテ或ハ年ノ長少ヲ以テ論シ其刑ヲ減等スルカ如キハ所謂人倫ヲ紊リ天道ヲ無ミスルノ  
甚シキモノナリ然リト雖トモ法律已ニ之レヲ輕減スルノ明文アリ其罪ヲ輕減セサルヲ得ス是レ豈國體  
ニ適スルノ法ナランヤ故ニ君父ニ對シタル犯罪者ハ嚴ニ之ヲ懲戒シ假借スル所ナカルヘシ其他兩法ニ  
就テ改正ヲ要スヘキモノ極メテ多シ因テ更ニ法律審査員ヲ置キ以テ刑法治罪法改正ノ舉アランニテ冀  
望ス謹テ裁可ヲ乞フ

布告 第十四年七月八日太政大臣三條實美署

刑法治罪法來明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

法制部同十四年六月二十五日 刑法治罪法實際施行ノ儀ニ付左案ノ通御布告相成可然哉司法部合議ノ上仰高裁候也

治罪法施行前整理ニ著  
手セシ刑事ハ從前ノ規  
則ニ從テ處分セシム

布告 第十四年十二月二十八日太政大臣三條實美署司法部大木喬任副署

大審院各裁判所ニ於テ明治十四年十二月三十一日以前審理ニ著手セシ刑事ハ十五年一月一日以後ト雖  
モ治罪法ニ拘ハラズ仍ホ從前ノ規則ニ從ヒ處分スヘシ

右奉 勅旨布告候事

司法省申奏十四年十二月二十三日

本年十二月十四日付ヲ以テ治罪法實施以前ニ起訴シタル刑事處分ノ儀ニ付及申奏置候處尙ホ熟考候ニ  
右申奏ノ通ニテハ上告及ヒ大審院上等裁判所ヘ批可ヲ請ヒシ事件ハ總テ從前ノ規則ニ從ヒ其他重罪輕  
罪ニ至ツテハ或ハ舊法ニ從ヒ或ハ新法ニ據リ處分シテハ其手續錯雜ニ涉リ實際ニ於テ障礙ノ虞掛カラ  
ズ因テ本年十二月申刑事起訴ノ件大審院各裁判所ニ於テ審理シ又ハ糾問中ノ者ハ重罪輕罪ノ別ナク新  
法實施後ト雖トモ總テ從前ノ規則ニ從ヒ處分スルコトニ相成候ヘハ官ニ於テモ事務ヲ速辨スルノ便アリ  
人民ニ於テモ裁判費用ヲ納完スルニ及ハサル等却テ便宜モ可有之ニ付右ノ旨ヲ以テ御布告相成度別紙  
御布告案相添此段及申奏候也  
參事院議案十四年十二月二十七日  
別紙司法省再申奏治罪法實施以前ニ起訴シタル刑事處分方公布ノ件審査スル處左ノ如シ  
此布告案タル治罪法第二十七條第二項ノ主義ヲ敷衍セシ者ニテ即チ當時ノ法律ニ背カス且審判上ノ  
錯雜ヲ省キ人民ニモ便宜ヲ與フルノ方法ニテ司法省ノ申奏ヲ至當ナリトス  
右ニ由リ附箋ノ通り布告相成可然哉上申候也 元老院 檢視院

布告 第十四年九月二十日太政大臣三條實美署

書類送達ニ付治罪法第二十四條ノ制限有之候ヘトモ當分ノ内ハ不及其儀候事

○ 治罪法第四十條ニ犯罪ノ地ヲ以テ裁判管轄ト規定有之候處當分ノ内犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖モ管  
轄裁判所ヨリ囑託アリタル時ハ其被告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄スヘシ

○ 治罪法第七十三條第二項ニ陪席判事四名ト有之候ヘトモ當分ノ内二名ト相定候事

治罪法中當分實施セサ  
ル事件及特別ノ處分方  
十五年二月司法省連兩  
七號ヲ發付ス可シ



○ 治罪法第百一條ニ准現行犯ノ場合列記有之候處其舉動犯人ト思料スヘキ者アル時ハ當分ノ内現行犯ニ準シ處分スルコトヲ得

○ 治罪法第百二十三條第三項ニ家宅搜索ノ制限有之候ヘトモ芝居人寄席飲食店湯屋遊船宿待合茶屋ノ類ハ日出前日没後ト雖モ其營業ヲ爲ス時間又旅籠屋貸座敷ハ日出前日没後ニ拘ハラヌ搜索致シ苦シカラス

○ 治罪法第百六十八條第百七十二條ニ於テ治安判事ニ囑託スルコトヲ許シタル處分ハ當分ノ内其地ノ司法警察官ニモ囑託スルコトヲ得

○ 治罪法第百五條第一項但書ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スルコトヲ得サル旨記載有之候ヘトモ當分ノ内現行犯ノ場合ニ限り令狀ヲ發シ苦シカラス

右布告候事

司法省何十三年十月二十六日  
今般御預行ノ治罪法第七十三條ニ據レハ重罪裁判所ハ裁判長及陪席判事合五名ニシテ審判致シ候事ニ有之候處右ハ當分裁判所ノ都合ニ依リ判事三名以上ニテ裁判致シ候様相成度右ハ諸裁判所ノ構成取調等ノ都合モ有之ニ付豫メ相伺候尤御許可有之候上ハ新法實施ニ臨ミ夫々御達案取調重テ可相伺候ヘ共差向前條御指揮ヲ仰候也  
指令十三年十一月二十四日

伺ノ趣聞置候事  
司法省何十三年十一月九日  
別紙司法省何重罪裁判官定員ノ儀審案候處該判事ノ五名ヲ要スルハ蓋シ第一陪審ヲ用ヒス第二其判決ハ直ニ終審ニシテ獨上告ノ道アルノミナレハ最モ鄭重ヲ加ヘ審判セサルヘカラサルノ趣意ニ出テタルモノナリ然ルニ今獨リ官ノ都合ヲ以テ假リニモ其定員ヲ缺クモノトスルキハ成法ヲ破ルノミナラス被告ノ利害ニ至大ノ關係ヲ及ホスモノニシテ容易ニ御採擇可相成モノニ無之然リト雖モ創始ノ際經費

十五年十二月司法省訓令  
第六七八〇號ヲ參照ス可

ノ都合モ有之事實不得止儀ニ付左ノ通御指令相成可然哉法制部合議ノ上仰高裁候也

司法省上申十四年三月二日  
今般諸裁判所改稱ノ儀御布告相成退々新法實施ノ順序可相運ニ付テハ豫メ經伺ノ通重罪裁判陪席判事減員ノ儀御布告相成度御布告案相添此段及申奏候也  
指令十四年四月八日

申奏ノ趣聞置候事  
但刑法治罪法實施ニ臨ミ布告スヘキ儀ト可心得事  
御布告案

治罪法第七十三條重罪裁判陪席判事ノ儀當分二名以上ト相定候條此旨布告候事

司法省何十四年三月三十日  
別紙司法省中奏重罪裁判陪席判事減員御布告ノ儀右ハ治罪法第七十三條ニ陪席判事四名ト有之候處實際俄ニ定員ニ充タシ難キ趣ヲ以テ減員ノ儀過日經伺有之件ニ候得ハ成案ノ通布告相成可然併シ發付ノ儀ハ今日ニ爲スヲ要セス刑法治罪法實施ノ日ニ臨ミ之ヲ爲ス方可然存候間左ノ通御指令相成可然哉仰高裁候也

司法省奏請十四年三月三十日  
治罪法第百一條第二項ニ犯人ト思料ス可キ物件ヲ携帶シタル時ト有之ハ其物件ノ性質自ラ犯人ト思料ス可キ者ノミニ限ラス又其人ノ舉動怪ム可キ者ナル時其携帶物ヲ其舉動ニ比照シ犯人ト思料ス可キ場合モ亦包含スル者ナリト雖モ文字上稍不明ト免カレヌ假令明了ナルモ多少物件ヲ携帶セサル者ハ何等怪ム可キ者ニ出逢候共如何トモス可カラサル儀ニ相成候實際不都合ヲ生スルコト尠カラズト存候因テ同條第二項附則左ノ通御定相成度御布告案相添此段及奏請候也  
司法省奏請十四年六月二十四日

治罪法第百三十三條末項ニ曰家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲スコトヲ得スト有之然レ共貸座敷旅店料理店等ノ家屋ヲ一般普通ノ家宅ト同シク日出前日没後之ニ立入ルコトヲ得ストセハ犯人ハ法網ヲ脱スルノ虞ナシトセス因テ左ノ通御布告相成度御布告案相添及奏請候也  
司法省申奏十四年五月二十六日

治罪法第百六十八條豫審判事臨檢家宅搜索ノ事ヲ治安判事ニ囑託スルコトヲ得ルノ規則ハ能ク實際ノ便宜ヲ慮リタル者ニテ實ニ缺ク可カラサルナリ然ルニ今日ノ勢治安裁判所ヲ全國ニ滿布スルコトヲ得ス故ニ一管轄ニシテ其廣袤數十里ニ亘ル者アリ而テ判事ノ人員亦僅少ナルヲ以テ恐シハ充分ニ本條ノ目的ヲ達スルコトヲ得サル可シ然レニ警察署ニ其敷治安裁判所ニ陪審シ司法警察官ノ人員亦治安判事ヨリ夥多ナルヲ以テ右ノ處分ヲ司法警察官ニ囑託スルコトヲ得ルトセハ充分ニ本條ノ目的ヲ達シ實際ノ便宜亦滿大ナル可シ且治安判事ニ許ス所ノ職權ハ之ヲ司法警察官ニ許スモ敢テ濫用ノ目的ヲ達シ實際ノ便益亦滿大ナル可シ且治安判事ノ其條件ヲ指示シテ之ヲ囑託スルニ於テオヤ因テ本條ノ精神ヲ擴充シテ司法警察

察官ニモ囑託スルコトヲ得ヘキ旨御布告相成度御布告案相添此段及申奏候也以上數件元  
老院檢視

司法官吏ヨリ巡查及ヒ  
兵員ヲ要求使用スル手  
續ヲ定ム

達 第十四年九月二十日  
第八十二號 官省院使 府縣

司法官吏ヨリ巡查及ヒ兵員ヲ要求使用スルニハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨相達候事

第一條 裁判官檢察官及ヒ司法警察官治罪法ニ從ヒ檢證及ヒ物件差押其他職務ヲ行フニ當リ必要ナル時ハ警察署又ハ憲兵屯營ニ照會シテ巡查又ハ憲兵卒ヲ使用スルコトヲ得

但事機緊急ナル時ハ直チニ之ヲ使用スルコトヲ得

第二條 前條ノ場合ニ於テ事緊急重要ニ涉ル時ハ直チニ鎮臺又ハ分營ニ照會シテ兵力ヲ要求スルコトヲ得

司法省申奏 十四年六月二十四日

治罪法中控訴裁判所檢察長若クハ豫審判事其他輕罪裁判所檢察事等ニ於テ其職務ヲ行フニ當リ巡查及ヒ兵卒等ヲ要求又ハ使用スヘキノ規則ナキヲ以テ實際上障礙ヲ生スヘキニ付司法官吏巡查及ヒ兵員ヲ要求又ハ使用スル規則ヲ設ケラレ度因テ別紙御布告案相副及申奏候也

司法省達 十四年十二月五日  
丙第十五號 官省院使 府縣

治罪法實施ノ上ハ豫審判事檢證及ヒ物件差押ノ事件ニ付急速ヲ要スル場合直ニ巡查ヲ同行シ又ハ所在ノ巡查ヲ使用スル儀モ可有之候條豫テ可達置此旨相達候事

司法省同 十四年一月二十日

治罪法實施ノ際ニ至テハ該法第五節檢證及物件差押ノ條々中急速ヲ要シ尋常手續ヲ追候テハ機會ニ後シテ付其際差支無之様豫テ其筋ヘ相達置度達案相添此段相伺候也

別紙司法省同豫審判事直ニ巡查ニ命令スル義查理候處實際無餘儀事ト存候尤モ達案聊カ穩カナラサル廉ハ附箋ノ通修正御裁可相成可然哉內務部協議ノ上仰高裁候也

司法省同 十四年二月十五日

別紙司法省同豫審判事直ニ巡查ニ命令スル義查理候處實際無餘儀事ト存候尤モ達案聊カ穩カナラサル廉ハ附箋ノ通修正御裁可相成可然哉內務部協議ノ上仰高裁候也

被告審問中公庭取締ノ  
爲メ巡查或ハ押丁ヲシ  
テ看護セシム

達 第十四年十月四日  
第八十六號 官省院使 府縣

治罪法實施ニ付テハ大審院其他各裁判所公庭取締ノ使用ニ供スルタメ其院長所長ノ照會ニ應シ一名又ハ數名ノ巡查爲相詰又拘留被告人審問中ハ其護送ノ巡查或ハ押丁ヲシテ守卒トシテ公庭ニ入り看護セシムヘシ此旨相達候事

司法省申奏 十四年三月二十二日

治罪法第二百六十五條并第二百七十二條ニ據リ新法實施ノ節ハ守卒トシテ拘留ノ被告人ヲ看護ノ爲メ其護送ノ巡查取締ヲシテ公庭ニ入り審問中看護セシム又公庭一般ノ取締ノ使用ニ供スル爲メ大審院其他各裁判所ニ於テハ所屬裁判院長所長ノ照會ニ應シ一名又ハ數名ノ巡查爲相詰度依テハ右兩條豫メ夫夫へ御達相成候様致度御達案相添此段及申奏候也

司法部議案 十四年九月二十日

別紙司法省申奏巡查公庭ヲ看護スルノ儀ハ御聽許成案付箋ノ通御達相成可然哉內務部合議仰高裁候也

開拓使 達 十四年十二月六日

治罪法實施ニ付テハ其使函館支廳管内所在ノ各裁判所公庭取締ノ使用ニ供スルタメ其所長ノ照會ニ應シ一名又ハ兩名ノ巡查爲相詰又拘留被告人審問中ハ其護送ノ巡查或ハ押丁ヲシテ守卒トシテ公庭ニ入り看護セシムヘシ此旨相達候事

司法省申奏 十四年十一月十一日

大審院并各裁判所公庭取締ノ使用ニ供スル巡查及ヒ拘留被告人審問中公庭看護ノ儀本年十月第八十六號ヲ以テ警視廳并ニ府縣へ御達相成候處函館地方各裁判所ハ開拓使所屬ノ巡查押丁ヲ使用スル儀ニ付同使へ左案ノ通御達相成度御達案相添此段及申奏候也

參事院議案 十四年十一月二十五日

別紙司法省上申本年第八十六號公達ノ儀ニ付開拓使へモ御達ノ件審査スル處左ノ如シ  
該件ハ開拓使管内ト雖モ各地方同様ニ不相成候テハ實際差支ヲ生シ候ニ付稟請ノ趣尤ノ次第ニ相考候

右ニ依リ達案左ノ通ニテ可然哉上申候也

警視廳達 十五年三月十六日  
外監監製

明治十四年第八十六號公達ノ儀ニ付別紙司法卿指令ノ通心得ヘシ此旨相達候事

警視廳ヨリ司法省へ伺 十五年二月十六日  
 明治十三年第八十六號公達後半ニ又拘留被告人審問中ハ其護送ノ巡查或ハ押丁ヲ守卒トシ公庭ニ入り看護セシムヘント有之右拘留被告人トハ即チ監倉へ拘留被告人ニ可有之果シテ然ラハ十四年第十五號公達以來監獄署ニハ巡查無之看守ヲ以テ護送致來候儀ニ付疑義相生シ候條此段相伺候也  
 司法省指令 十五年三月四日  
 伺之趣從來ノ通ニテ不苦儀ト心得ヘシ

布告 第十四号十月六日 太政大臣三條實美啓

治罪法第七十三條末文陪席判事第七十九條第二項補充判事ノ儀當分其裁判所長又ハ院長ノ臨時指定スル所ニ任シ候條此旨布告候事

司法省申奏十四年四月十六日

治罪法第七十三條末文所長及先任判事ヲ以テ之ニ充ツ同第七十九條ニ民事局判事授任ノ順序ニ從ヒ其職務ヲ行フト有之然ルニ方今裁判官ノ序次ハ位階ノ高下ニ從ヒ授任ノ先後ヲ以テセス故ニ授任ノ先後ニ從フキハ奏任判事裁判所長トナリ勅任判事陪席ヲラサルコトヲ得サル場合有之又第七十三條ノ如ク重罪裁判ノ陪席判事ハ必ス所長及先任判事ト相伺候テハ一輕罪裁判所中重罪裁判開設ノ際ハ其應ノ本務ハ悉皆之ヲ判事補ニ委任セサルヲ得サル法術モ有之旁以テ支障不少候ニ付當分第七十三條末項ノ場合ハ大審院長ノ便宜處分ニ任シ候條致度依テ御布告案相添此段及申奏候也  
 司法部議案十四年八月十三日

別紙司法省申奏治罪法中判事序次ノ儀審案候處事實不得止儀ニ付申奏ノ通御聽許附箋ノ如ク御布告相成可然哉法制部合議仰高裁候也  
 元老 院 檢

布告 第十四号十月八日 太政大臣三條實美啓

治罪法中豫審判事勾引狀ヲ發シ勾引セシメタル被告人ハ時宜ニ依リ其訊問期限四十八時間ニ在ル夜間ニ限リ裁判所又ハ最寄警察署留置場ニ入置クヘシ此旨布告候事

司法省申奏十四年四月十九日

豫審判事勾引狀ヲ以テ勾引セシメ被告人到着時間ト豫審判事事務ト都合ヲ以テ即時訊問スルヲ得サル

補充判事ハ當分其裁判所長又ハ院長ノ臨時指定ニ任ス

被告人訊問期限中夜間ニ限リ裁判所又ハ警察署留置場ニ入置クヲ許ス

場合可有之ニ付治罪法第二百二十二條第二項ニ於テ四十八時間ノ猶豫有之然ルニ右時間中勾引セラレシ被告人夜間ノ居所治罪法中ニ記載無之ニ付若シ自由ニ行動セシメ候テハ再ヒ勾引ノ煩ヲ來シ不都合ノ次第ニ可立至候依テ右ノ場合ニ於テハ夜分ニ限リ檻倉若クハ最寄警察署留置所ニ入置クコトヲ得候條致度御布告案相添此段及申奏候也  
 司法部議案十四年九月二十八日  
 別紙司法省申奏勾引シタル被告人檻倉ニ入ル、儀勘査候處申奏ノ通布告相成可然哉法制部合議仰高裁候也  
 元老 院 檢

司法省達 丙十四年十二月五日 大審院長 裁判所、警視廳、府縣、支庁、官署  
 治罪法中犯人證人等押印ノ條々實印無之者ニ限リ從來ノ慣例ニ依リ拇印爲致候儀ト心得ヘシ此旨相達候事

商船内犯罪取扱規則ヲ定ム

犯人證人等實印ナキ者從來ノ慣例ニ依リ捺印セシム

布告 第十四号十二月十五日 太政大臣三條實美啓 農商務省 商船内犯罪取扱規則 司法卿 大木 啓任 副啓

右奉 勅旨布告候事

商船内犯罪取扱規則

第一條 何人タリトモ商船内ニ於テ重罪輕罪アルコトヲ認知シ又ハ重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ船長ニ告訴發シ爲スコトヲ得  
 第二條 船長告訴發シ受ケタル時又ハ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ其事件ニ付假ニ訊問檢證ノ處分ヲ爲シ且證據及事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ集取シ調書ヲ作ルヘシ但調書ヲ作ルコト能ハサル時ハ第三條ニ記載シタル官吏ニ其申立ヲ爲スヘシ  
 前項ノ場合ニ於テハ立會人二名以上アルヲ要ス  
 第三條 船長ハ證據及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ取纏メ被告人ト共ニ該船碇泊又ハ著港ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ引渡スヘシ若シ外國ノ港埠ニ著シタル時ハ其地駐劄ノ領事ニ之ヲ引渡スヘシ

司法省申奏十四年七月六日  
 明治十三年第三十七號布告制定治罪法第四十六條ノ旨ニ依レハ商船内ノ犯罪ニ付テノ管轄及ヒ訴訟手續ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定メサルヘカラス因テ商船内犯罪取扱規則凡テ三條ヲ起案シ御布告案相添及申奏候也  
 法制部議案十四年九月十二日  
 別紙司法省申奏商船内犯罪取扱規則ノ儀ハ附箋ノ通修正公布相成可然哉仰高裁候也

布告 第十四年十二月二十八日太政大臣三條實美署司法卿大木喬任副署

治罪法ニ於テ無能力者法律ニ定メタル代人及ヒ民事擔當人ト稱スル者ハ左ノ通無能力者

- 一 未丁年者
  - 二 妻タル者
  - 三 白痴瘋癲人
  - 四 治産ノ禁ヲ受ケタル者
- 法律ニ定メタル代人
- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ親屬後見人
  - 二 夫タル者
  - 三 白痴瘋癲人ノ保管者
  - 四 治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ財産管理人
- 民事擔當人
- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ同居ノ親屬ニシテ監督ヲ爲ス者
  - 二 夫タル者
  - 三 白痴瘋癲人ノ保管者
  - 四 雇主

治罪法ニ於テ無能力者法律ニ定メタル代人及ヒ民事擔當人ト稱ス

但雇人其雇主ノ命シタル事件ヲ行フ時

右奉 勅旨布告候事

司法省申奏十四年七月十五日  
 治罪法御實施可相成候ニ付テハ該法ニ於テ無能力者民事擔當人法律ニ定メタル代人ト稱スル者別紙御布告案ノ通調成候ニ付此段申奏候也  
 法制部議案十四年十月十五日  
 別紙司法省申奏無能力者民事擔當人及ヒ法律ニ定メタル代人ノ件審案スルニ右ハ民法ニ於テ制定セラレヘキモノニ候ヘ共未タ其制定モ無之治罪法實施ニ付テハ牽連ノ廉不少儀ニ付附箋ノ通御布告相成可然哉仰高裁候也

布告 第十五一年一月九日太政大臣三條實美署司法卿大木喬任副署

治罪法第二百八十一條第一項ニ若シ辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ效ナカルヘシト有之候得共其裁判所所屬ノ代人無之場所ニ於テハ當分ノ内辯護人ヲ用ヒサルモ其刑ノ言渡ハ無効ノ限リニ在ラス

右奉 勅旨布告候事

司法省上申十四年十月二十日  
 治罪法第二百七十八條第二項若シ辯護人ヲ選任セサル時ハ裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所所屬ノ代人中ヨリ之ヲ選任ス可シ又第三百八十一條第一項辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ效ナカル可シト有之候就テハ重罪公判ニ於テ被告人辯護人ヲ選任セサル時ハ必裁判所長其裁判所所屬ノ代人中ヨリ之ヲ選任セサル可ラス然ルニ現今代官免許ヲ得タル者鹿兒島縣下ノ如キハ縱ニ一名ニシテ山口青森函館ノ如キモ三名ニ過キス其他重罪裁判所開設可有之地方ニシテ其員數僅々ニ止ルモノ掛カラサレハ他ノ辯護若シクハ疾病其他正當ノ事故ニ由リ該裁判所所屬ノ代人中ヨリ辯護人ヲ選任セントスルモ得可ラサルノ場合之レナキヲ保チ難シ因テ此等ノ場合ニ在テハ辯護人ヲ用ヒサルモ其刑ノ言渡ハ無効ノ限ニアラサル旨左案ノ通御布告相成度此段上申候也  
 參事院議案十四年十一月十八日

別紙司法省上申治罪法第二百八十一條辯護人ノ件審査スル處左ノ如シ  
 重罪被告人ニ辯護人ヲ附スルハ重罪ノ裁判ヲ慎重スルノ趣旨ニ出ルニ唯モ司法省上申ノ通現今重罪裁判所ヲ開設スル地方ニシテ免許代官人員僅々ニ止ルモノ掛カラス故ニ必ス代官人ヲ選任スヘシト

當分辯護人ナクシテ刑ノ言渡ヲ爲スモ其言渡ハ無効ノ限ニ非ラス  
 十四年十二月司法省上申  
 第八號ヲ以テ裁判所所屬代人規則ヲ定メ前ノ條款ノ部ニ載ス

スルモ實際行ハレサル場合ナキヲ保チ難シ依テ是等ノ場合ニ於テハ辯護人ナクシテ辯論ヲナシタルモ刑ノ言渡ヲ無効トセサルヨリ外ナシ  
右ニ由リ右告案左ノ通ニテ可然哉上申候也

布告 十五年二月一日太政大臣三條實美尋司法卿大木喬任副署

治罪法第十九條第二項海上路程ノ猶豫ハ陸路四里ノ割合ヲ以テ一日ヲ加フルモノト定ム  
右奉 勅旨布告候事

司法省上申十四年十二月二十三日  
治罪法第十九條第二項ニ島地又ハ外國トノ路程ノ猶豫ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ムト有之候就テハ早晚御制定可相成義ト考査候得共新法實施ノ期モ相迫リ差向其御制定無之ヲハ取扱上實ニ不都合不甚然ルニ本邦ノ如キハ四面海ヲ環シ島嶼ノ數幾許ナルヲ知ラス一々其名ヲ舉ケ其内地トノ距離ヲ測リ而シテ其路程ノ猶豫ヲ定ムル等ハ煩ニシテ且遠ニ行ハレ難ク其外國トノ路程ニ付テモ亦同様ニ有之候就テハ今日航海ノ業未タ著ク進歩セサルヲ以テ當分ノ内陸路五里ノ割合ヲ以テ一日ノ猶豫ヲ加ヘ候様御制定相成度因テ御布告案相添此段及申奏候也  
參事院議案十五年一月十八日  
別紙司法省上申治罪法第十九條第二項島地又ハ外國トノ路程猶豫制限布告ノ件審查スル處左ノ如シ  
右ハ治罪法施行ニ就テ大ニ關係アル者ニテ其制限ナカル可シラス但陸路ハ八里コトニ一日ノ猶豫ヲ加フルノ成規タリ故ニ海路ハ陸路ノ半減即チ四里コトニ一日ノ猶豫ヲ與フルヲ相當ト認ム  
右ニ由リ成案修正ノ通リ布告相成リ可然哉上申候也

司法省達 丙十五年二月十六日

被告人逮捕ノ地ノ檢察官犯罪ノ地ノ檢察官ニ照會中勾留ノ儀ニ付東京輕罪裁判所檢察事犬塚盛魏ヨリ別紙甲號ノ通函出候ニ付乙號ノ通函訓ニ及候條爲心得此旨相達候事

甲號

東京輕罪裁判所檢察事ヨリ司法省へ同十五年一月二十五日  
明治十四年太政官第四十六號ヲ以テ前犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖モ管轄裁判所ヨリ囑託アリタル時ハ其被告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄ス可キ旨御布告相成候處右實際取扱方ノ儀ハ被告人逮捕ノ地ノ檢察官ニ於テ事件ノ模様ヲ審案シ其被告人ヲ管轄裁判所ニ送致スルヲ要セスト思料シタル時ハ事案ノ

頗末ヲ犯罪地ノ檢察官ニ通知シ併セテ其囑託アル可哉否ヲ照會シ其囑託ヲ待テ起訴可及手續ニ可有之果シテ然ラハ被告人所在地ノ司法警察官ニ於テ其舉動犯人ト思料ス可キ者アル等現行犯ニ準シ處分シ得ヘキ被告人ヲ逮捕シ拘留狀ヲ發シ一應ノ搜查ヲ爲シタル後檢察官ニ送致シタル時ノ如キ其拘留狀執行ヨリ概ネ已ニ六七日ヲ經過スルヲ以テ囑託ノ儀ニ關シ檢察官ヨリ前記ノ照會中拘留狀十日ノ期限ヲ過クル者往々之アリ然レニ檢察官ハ之ヲ收監狀ニ換ヘ若クハ被告人ヲ賣付スルノ職權ナキニ因リ重罪犯又ハ逃走等ノ恐アリテ解放シ得ヘカラサル者ニ付テハ如何ニ處分ノ施シ様モ無之去リ連日數經過ノ一點ニ拘束セラレテ前番ノ照會ヲモ用ヒスシテ直ニ其被告人ヲ犯罪地ノ檢察官ニ送致スルカ如キハ囑託法ヲ設ケラレタル御旨趣ニ相反リ可申又々前番ノ照會一々電報ヲ借ルニ至テハ其事案ノ頗末ヲ盡ス能ハサル而已ナラス此等ノ事件ハ實際頻々遭遇スル所ニシテ其經費モ亦小額ナラサル儀ト存候就テハ右等ノ場合ニ於テハ如何處分致可然哉此段相伺候條至急何分ノ御指令ヲ仰キ候也  
乙號

指令十五年二月二十四日

被告人逮捕ノ地ノ檢察官犯罪ノ地ノ檢察官ニ照會中拘留ノ儀ニ付伺ノ趣ハ豫テ管轄裁判所ヨリ囑託ヲ爲シタルモノト看做シ一面ハ其裁判所ニ豫審若クハ公判ヲ求メ一面ハ其犯罪ノ地ノ檢察官ニ其旨ヲ通知スヘシ此旨及内訓候也

軍國役限内老疾收贖及存留養親等ニ關スル處分方

司法省達 丙十五年四月十四日  
軍人軍國役限内老疾收贖及存留養親ノ儀別紙ノ通陸軍省ヨリ太政官へ相伺朱書ノ通御裁令相成候條常人ニ付テモ右ニ照準處分スヘキ儀ト心得ヘシ此旨相達候事  
但本文ニ抵觸スル指令内訓ハ取消候儀ト心得ヘシ

陸軍省同十五年二月十日  
陸軍軍人軍國ノ犯罪舊軍律ニ依リ流刑徒刑等ニ處スル者其刑期中ハ總テ普通懲役人同様ノ取扱ニテ即チ役限内老疾收贖及存留養親等願出候者ハ常律ニ照シ差許來候處新刑法ニ於テハ右等廢止セラレ候得共客年十二月以前既ニ願出調査中ニ係ル者ハ勿論其未タ願出サル者及新律實施ノ後陸軍刑法第二條新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從ヒ舊法ニ處シタル者ハ自今以後ト雖モ總テ舊律ニ照シ處分致候方至當ト相考候間何分ノ御指揮有之度此段相伺候也  
指令十五年三月二十九日

被告人ヲ他ノ監倉ニ移スル取計方

司法省達 丙十五年五月二日 大審院裁判所警視廳府縣  
治罪法第二百六十條ノ場合ニ於テ被告人ヲ重罪裁判所開廳ノ地ノ監倉ニ移ス時ハ檢事ハ前令狀ニ檢事長ノ命令書ノ寫ヲ添ヘテ重罪裁判所檢察官ニ送致シ其檢察官ハ是等ノ書類ヲ其地ノ監倉長ニ示シテ被告人ヲ收監セシムルノ處分ヲ爲スコシ其他法律ニ從ヒ被告人ヲ他ノ監倉ニ移ス場合ニ於テモ此例ニ準スル儀ト心得可シ此旨相達候事

被告事件重罪ナルモ法律上ノ減輕ニ因リ輕罪ノ刑ニ處スヘキ者ハ總テ輕罪裁判所ノ管轄ニ屬スル儀ト心得可シ

司法省達 丙十五年六月十日 大審院裁判所警視廳府縣  
被告事件重罪ナル時ト雖モ法律上ノ減輕ニ因リ輕罪以下ノ刑ニ處スヘキ者ハ總テ輕罪裁判所ノ管轄ニ屬スル儀ト心得可シ此旨相達候事

檢取ノ爲メ囚人名連他所出願ノ節ハ其地ノ警察官ニ送致シ其地ノ警察官ハ是等ノ書類ヲ其地ノ監倉長ニ示シテ被告人ヲ收監セシムルノ處分ヲ爲スコシ

司法省達 十五年六月十三日 大審院裁判所  
審理ノ都合ニ依リ檢證ノ爲メ囚人召連他所出張候節ハ其地ノ警察官ハ護送引致方通知可致尤モ護送ニ屬スル費用ハ渾テ警察費ヨリ支辨ノ答ニ候條此旨相達候事

公庭期滿免除ノ期限計算方

司法省內訓 十五年九月十三日 大審院裁判所警視廳府縣  
公庭期滿免除ノ儀ニ付上田始審裁判所長ヨリ別紙甲號ノ通り伺出候ニ付乙號ノ通指令ニ及ヒ候條爲心得此旨及內訓候也

甲號

上田始審裁判所ヨリ司法省ヘ伺十五年五月十一日  
明治十一年五月一日竊盜ノ罪ヲ犯シ明治十五年一月ニ至リテ發覺ス其贓金五十圓以上ノ犯罪ヲ處斷スルニ當リ新律網領賊盜律竊盜條ニ照セハ懲役一年刑法第二百六十六條ニ照セハ重禁錮二月以上四年以下明治十四年第八十一號公布ニ依リ重禁錮二月以上一年以下ニ處ス可シトス而シテ之ヲ改定律例舊惡減免例圖ニ照セハ其期限五年仍ホ期滿免除ヲ得サルモノトス治罪法第十一條ニ照セハ輕罪ハ三年トアリテ已ニ其期限ヲ經過セリ右ハ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從テ處分スルノ限ニ非サルヤ否現今差掛リタル事件有之候ニ付至急何分ノ御指令ヲ仰キ候也

乙號

司法省指令十五年五月二十五日  
期滿免除ノ期限ハ犯罪ノ日ヨリ起算スト雖モ新法實施已前ノ犯罪ニ就テハ明治十四年十二月三十一日迄ハ其期限ヲ中斷シタルト同一ノモノトス但シ前後通算ノ法ハ治罪法第十四條第二項但書ノ通タルヘシ

布告十五年十一月十三日 大政大臣三條實美署司法卿大木喬任副署  
治罪法第二百六條第二百七條中二十四時内ト有之處已ムヲ得ナル場合ニ於テハ當分ノ内五日以内ニ於テスルコトヲ得

右奉 勅旨布告候事

司法省上申十五年五月十八日  
治罪法第二百六條ニ檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ圖書ヲ作り云々トアリ亦第二百七條ニ豫審判事ハ二十四時内ニ被告人ヲ訊問スヘシトアリ然ルニ實際被告事件ノ多ナル場合ニ於テハ人員ノ足ラサルヨリ右期限内ニ盡ク其訊問ヲ行フコトヲ得ス殊ニ檢事ノ如キハ訊問以テ犯罪ノ輕重難易ヲ判別スルノ暇ナク因テ至輕至易ノ事件ト雖モ之ヲ豫審ニ付スルニ至リ實ニ取扱上不便ヲ極メ候儀ニ有之候因テ左按ノ通り御布告相成度此段及申奏候也  
指令十五年九月一日

上申ノ趣難開屆候事

參事院議案十五年六月十二日

別紙司法省上申治罪法中訊問期限便法施行ノ件審査スル處左ノ如シ  
人ノ自由ヲ害スル蓋ニ人ヲ拘捕監禁シ未決拘留ヲ延滞セシムルヨリ甚シキハナシ吾治罪法ニ於テ訊問期限ヲ嚴制シタル所以ノモノ即チ此理ニ原トツク蓋シ未決拘留ノ延滞ハ吾邦古來因襲ノ惡習ニシテ其慘狀實ニ名狀スル所以ニ勝ヘス治罪法ノ設ケラレタル所以ノモノ一ニ此等ノ宿弊ヲ一掃セントスルニアリ而シテ其訊問ノ期限ヲ定メタルカ如キ尤モ主要ノ眼目タリトス然ルニ今司法省上申スル所チ案スルニ全ク此眼目タルノ期限ヲ解キ其訊問ヲ緩漫ニ付シ漸ク杜絶シタルノ弊端ヲ再ヒ開カントスルモノニ外ナラス抑モ亦チ治罪法ノ本旨ヲ誤マルモノト云フヘシ且假令司法省上申スル所ノ如ク必ス期限ヲ解カサルヲ得ナルノ理由アリトスルモ何シテ現行犯ノ最モ見易キモノニシテ之カランヤ非現行犯ノモ亦チ均ク之ヲ解キテ可ナリ蓋シ現行犯ハ犯狀ノ最モ見易キモノニシテ之カ訊問ヲ爲スニ多時ヲ要セスト雖モ非現行犯ノ場合ニ至テハ之ニ反シ證憑ヲ舉クル極メテ難ク其訊問ノ時日ヲ要スル現行犯ノ比ニアラサルナリ然ルニ今其難事ニ屬スル非現行犯ノ訊問ハ依然舊ノ如ク四十八時内トシ其至易ノ現行犯訊問ノミ獨リ其期限ヲ解カントスル實ニ權衡ヲ失スルノ甚シキモノト云フヘキナリ況ヤ亦チ治罪法第二百六條ノ精神タル盡ク罪狀ノ證憑ヲ舉クヘシト云フニアラスシ

治罪法第二百六條第二百七條中二十四時内トアルチ當分五日以内トス

テ唯タ訊問ノ端ヲ開キ其犯人ニ對シ何等ノ爲メニ拘捕セラレタルヤヲ知ラシムルニ止リ且其證憑ヲ  
 察クルノ好期會ヲ失ハサラシムルニアルモノニシテ敢テ巨多ノ時日ヲ要スルモノニアラサルニ於テ  
 オヤ依テ司法省上申ノ趣ハ御開屆相成ラサル方可然ト認定ス  
 右ニ依リ指令案左ノ通ニテ可然裁上申候也  
 司法省上申十五年八月九日  
 本年五月十八日付ヲ以テ治罪法第二百六條第二十七條ノ儀ニ付及申奏候處未タ何分ノ御裁命アラヌ已  
 ニ參事院ノ會議ニ付セラレ廢案ニ決議相成候趣ニ付到底御開屆無之方ト相察候得共右ハ實際大ニ不都  
 合有之他ニ之ヲ救フノ方法ナキヲ以テ不得止及上奏モノナレハ到底此儘ニテ閣ク可キ事件ニ無之然ル  
 ニ先ノ申奏案ハ實際ノ事情未タ貫徹セザル所アリ且二十四時ノ期限ヲ解キ之ニ代ルノ期限ナキヲ以テ  
 法官緩慢ノ弊ヲ釀スノ恐アルニ付參事院ニ於テ否決セシカト考量候因テ前二條共二十四時内トアルモ  
 當分ノ内五日内ニ處分スルコトヲ得可キ様御布告有之度別紙相添此旨更ニ及申奏候間特別ノ御詮議ヲ  
 以テ至急御布告相成度候也  
 意見書

治罪法第二百六條ニ檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ云々豫審判事ニ送致ス可シ  
 又第二百七條ニ豫審判事ハ二十四時内ニ被告人ヲ訊問ス可シトアリテ假令犯罪事件夥多ナル場合ト雖  
 然ルニ各始審裁判所ノ檢事ハ補員ヲ併セテ大抵二人若クハ三人ニ列所ハ此限等ノ始審過キサレハ其審  
 面ノミヲ審問スルモ尙ホ且ツ時限不足アリ況ンヤ犯罪事件一時ニ集スル時ニ於テハ二十四時内ニ  
 其訊問ヲ遂ク且送致ノ手續ヲ盡スコトハ實ニ行ハレサルヲ以テ遂ニ豫審ヲ要セザル事件モ其時間ニ拘  
 束セラレ不得已豫審ニ付スルニ至ルハ勢免ル、ヲ得サルモノナリ果シテ然ル時ハ檢事ニ於テハ其手數  
 ヲ省キ幸ニシテ其時間ヲ超過セズ隨テ受レハ隨テ送致シ假令數百件一時ニ受領スルモ亦一時ニ掃  
 シテ遣スコトナキヲ以テ外面ヨリ觀察スル時ハ事務延滞ノ患ナク隨テ被告人モ便益ヲ得ルカ如シト雖  
 大ニ然ラサル所アリ何トナレハ前陳ノ如ク現行ノ微罪ヲモ一々豫審ニ付スルハ獨リ治罪法第二百九  
 條ノ精神ニ違フ而已ニ非ス各裁判所ノ豫審判事ハ概テ三四名ニ過キサルニ此ノ如ク豫審事件ノ増加シ  
 テハ執掌限リナク且ツ犯罪事件ノ繁雜ナルト否トニ拘ハラヌ儘ニ三四名ノ豫審判事ヲ充テ豫審  
 處分ヲ爲サシメントスルモ實際其任ニ堪ル者ハ多クカサレ可シ是カ爲ニ或ハ充テ取調ヲ盡スコトヲ  
 得スシテ遂ニ重輕ノ罪犯ヲシテ証憑不充分ノ點ニ因リ法網ヲ脱セシムルニ至ルヤ亦知ル可カラヌ  
 畢竟第二百六條ヲ遵守セントスルハ漸ク一方ニ於テ其弊ヲ矯ルモ亦一方ニ其弊ヲ生シ到底免ル、可  
 カラサル者ナルハ辯ヲ埃タサルナリ殊ニ輕易ノ犯罪ヲ豫審ニ付スルニ至ルハ會豫審判事ノ事務ヲ増  
 加シ隨テ延滞ノ弊ヲ生スルニ止ラヌ被告人ニ於テモ許多ノ時日拘留ノ枉屈ヲ受ルニ至ルハ自然ノ情勢  
 ニシテ止ムコトヲ得ザルナリ抑又輕罪ノ現行犯ノ如キハ事情明晰一應訊問スレハ罪ノ有無判然タル者  
 毋ナカラス然ルヲ之ヲ爲スコト能ハサルモノハ他ナシ檢事ノ少數ナルト時間ノ短盛ナルトニ因ル其少

數ノ吏員ニ法律ヲ以テ人ノ爲ス能ハサル所ヲ費ムルハ豈ニ事理適當ノ法律ト云フヲ得ンヤ  
 右ニ縷述スル弊患ヲ防遏セザル時ハ刑法治罪法ノ効力ヲ減縮シ社會ノ安寧ヲ維持スルヲ期ス可カラヌ  
 故ニ之ヲ防救スルハ緊要ニシテ忽諸ニス可カラサルナリ  
 因テ其救防ノ方法ヲ案スルニ二十四時ノ制限ヲ解クガ又ハ判事檢事ノ實務ニ適スルタケノ員數ヲ増加  
 スルノニ過キヌ若シ成法ヲ改ムルハ容易ニス可カラサルモノト謂フテ豫審判事檢事ノ員數ヲ増加シ  
 充分ノ取調ヲ爲サシメントスルハ莫大ノ耗費ヲ要スルヲ以テ到底官ヲ可クシテ行フ可カラサルニ歸  
 ス可シ就ハ不得已成法即チ治罪法第二百六條第二十七條ヲ改正スルヨリ外ニ其弊患ヲ救フノ方法更  
 ニ之レナシ然ルニ成法ヲ改ルニ憚リテ徒ニ經過スルハ右ニ縷陳スル如キノ弊患ヲ生シ遂ニ底止スル  
 所ナクシテ反テ治罪法ノ原意ヲ傷ルニ至ラン  
 立法ノ精神ニ就テ考フルニ第二百六條第二十七條ニ二十四時内等ノ規則ヲ定タルハ經費ニ拘ハラヌ  
 テ豫審判事檢事等ヲ制限ナク設ルノ主意ニ出タル者ナルヘシ然レ今ノ定額ニテハ職員モ亦充分ナラザ  
 ルヲ以テ經費ヲ減省シ若クハ實際ノ簡便ヲ圖ル爲メ等ノ原因ヲ以テ治罪法中數件ニ付便宜ノ法ヲ  
 施サレシ際右ニ條共改正セラレ可キ者ナリシモ當時ニ在テハ未タ其患難ノアル所ヲ認知セザリシニ因  
 テ茲焉今日ニ至リシニ現今ニ及テ右ニ條ノ實地ニ障礙アルコト親シク目撃スル而已ナラス各地ノ檢事  
 判事ヨリ續々具陳スル所アリ

要スルニ右ニ條ヲ改正スヘシト爲スハ止マ實際不都合アルニ原ツクノミナラス當初立法ノ精神ト目今  
 定額職員トノ相違セザルニヨリ當然適當ノ改正ヲナサ、ル可カラス而シテ其改正ハ無期限トナサンコト  
 ヲ疑ニ上申シタルニ裁可セラレザリシハ蓋未決囚ノ苦痛官吏ノ怠慢等ヲ慮ラレタルニ出テタル可シ故  
 ニ二十四時内トアルヲ五日内ト改正セラレハ未タ十分實際ニ適スルト謂フ可カラザレト之ヲ今日現  
 行ニ比スレハ頗ル檢事判事ノ困難ヲ救ニ足ル可シ然而シテ右ニ條ノ改正アリシト檢事判事等ヲシテ  
 事務ヲ速辨セシムルノ一事ハ益之ヲ獎勵スヘキニ付未決囚チ空ク繫留スル如キ弊害ハ決シテ之レアラ  
 ナルナリ議者或ハ謂ハン現行犯ハ其證據ヲ舉クニ難カラス犯狀繁雜ニシテ一朝一夕ノ辨スル所ニ非ス  
 ノ餘裕ヲ要セザルヘキニ反テ五日間ト改メ非現行犯ハ多ク事情錯雜ニシテ一朝一夕ノ辨スル所ニ非ス  
 然ルヲ獨リ現行犯取調時間ヲ長クシ非現行犯ニ係ル治罪法第二百二十二條第二項ハ舊ニ依リ四十八時間ト  
 スルハ何ソヤ現行犯スラ猶且其時限ヲ寬ニスレハ非現行犯ニ準シテ餘間ヲ與ヘサル可カラヌト此說  
 是ニ似テ實ハ非ナリ非現行犯ノ告訴發アレハ司法警察官檢事等ノ受理スレハ其犯罪ニ關スル證據ヲ  
 搜查シ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其證據ヲ審理シタル上其被告人ヲ審問セント思料スルモ召喚狀又  
 ハ拘引狀ヲ發スル者ニテ召喚狀又ハ拘引狀ヲ發スル迄ニハ其犯罪事件ニ付豫審判事ノ目的モ粗定マリ  
 タル後ナレハ拘引シ來リシ被告人ヲ訊問シ爲スニ四十八時ノ猶豫アレハ其事ヲ了スルニ足レリトス若  
 シ事務繁雜シテ豫審著手ノ暇ナシト思料スルモハ召喚拘引ノ時日ヲ見計ヒ實際差支ナキノ手段ヲ爲ス  
 ノ餘地アレハナリ是則チ現行犯罪ノ豫審判事ノ手ニ來リ突然遠示ニシテ時日ヲ擇フ所ナキト同一視  
 スヘキモノニ非ス議者ノ現行非現行ヲ一概ニ論スルハ皮相ノ見ニシテ實地ニ適セステ取ニ足ラサル

ナリ是ニ由テ治罪法第二百六條七條ノミニ對シ便宜法ヲ設ケテ同法第二百二十二條第二項ハ改正ヲ要セサル所以ナリ

參事院議案十五年九月十一日

別紙司法省再上申治罪法中訊問期限便法施行ノ件審査スル處左ノ如シ

治罪法第二百六條第七條ニ定ムル所ノ訊問期限ハ被告ノ人ヲ受取リテ二十四時內ヲ解キテ無期限ニセントスル儀ハ曩日司法省ヨリ稟請有之候然ルニ其期限ノ制定ナキ時ハ法官ノ處理自ラ緩漫ニ流レ從テ未決拘留淹滞ノ弊ヲ養ヒ加之其間ニ罪證湮滅シテ犯情明白ナル者モ遂ニ繁雜ニ陷ルノ恐アリ是等ノ理由ヲ以テ曩日ノ申奏ハ裁可セラレナリキ今再度上申ノ趣ヲ案スルニ實際裁判職員ノ不足ナル等彼是差支アルニヨリ其期限ヲ五日ト制定セラレントト稟請スルニ在リ右ハ少シク期限ヲ緩弛スルマテニシテ實際已ムテ得サルヲ得サル儀モ不少越ニ候ヘハ申奏ノ趣御裁可相成可然ト視認ス

右ニ因リ布告案左ノ通ニテ可然裁上申候也

十四年第四十六號布告  
ノ令狀ハ收監狀ヲモ包含スル儀ト心得セシム

十九年五月司法省訓令第  
二號ニ依リ申可シ

司法省內訓 十五年十二月十四日  
第六七八〇號訓令所覽 府縣警察局長東京憲兵本部

明治十四年第四十六號布告末項ニ據リ司法警察官ニ於テ發スル令狀ハ拘留狀迄ニ止ル旨指令或ハ內訓及ヒ置キタル處右指令內訓ハ取消シ收監狀ヲモ包含候儀ト心得ヘシ

但司法警察官ハ一月毎ニ左ノ雛形ニ依リ收監表ヲ作り所轄檢事ニ差出スヘシ又檢事ハ一月毎ニ同一ノ雛形ニ依リ收監表ヲ作り司法警察官ヨリ差出シタル收監表ト同時ニ司法廳ニ進達スヘシ

此旨及內訓候也

起訴前收監表

年 月 日	收 監 シ タ ル	被 告 人 ノ 氏 名	收 監 シ タ ル

罪 名	急 速 ニ 處 分 ヲ 終 ハ ラ サ ル 事 由

司法省達 十五年十二月二十二日  
第三十五號訓令所覽 府縣警察局長

新法實施日猶淺キヲ以テ當省指令內訓等實際注意ヲ要ス可キ條件ハ總テ爲心得可致通牒候條此旨豫メ相達候事

司法省內訓 十六年二月二日  
始 審 判 所

治罪法第五十七條ニ判事差支アル時ハ其他ノ判事又ハ判事補其職務ヲ行フト記載有之ト雖モ明治十年職制中判事補ハ事ヲ判事ニ受ケ審判スル云々ト有之上ハ治罪法第五十七條ニ掲クル所ノ判事補其職務ヲ行フ場合ニアリテモ一應判事ノ指令ヲ受クヘキ儀ト可相心得但廳內判事現任無之場所ハ此限ニ非ス此旨及內訓候事

布告 十六年三月七日 太政大臣三條實美 司法卿大木喬任 副署

豫審判事裁判所ニ於テ豫審ヲ爲ス時ハ當分ノ內書記ノ立會ナクシテ被告人證人ヲ訊問スルコトヲ得右奉 勅旨布告候事

司法省上請 十六年一月十五日

治罪法ニ於テ豫審判事被告人證人ヲ訊問スル時ハ必ス書記ノ立會ヲ要スル規則ニ有之候處新法實施以來豫審事件頗ル加増シ書記ノ人員少キヨリ大ニ事務ノ延滞ヲ生セリ且其事務ニ熟セサル書記其立會ヲ爲シ調書ヲ作ルカ爲メ却テ事務ノ遅緩ヲ生スルノ弊亦尠カラス旁以テ當分ノ內必ス書記ノ立會ヲ爲サシメス便宜裁判官自ラ調書ヲ作ルモ無効ノ限ニアラサル様致度候因テ左按ノ通御布告相成度御布告案

判事補ハ事ヲ判事ニ受ケ審判セシム

十九年五月勅令第四十號  
ヲ以テ判事補ノ職務ヲ改メ  
ルニ依リ判事補ノ稱消滅ス

新法實施ニ付注意ヲ要ス可キ條件ヲ通牒ス

十四年第四十六號布告  
ノ令狀ハ收監狀ヲモ包含スル儀ト心得セシム

十九年五月司法省訓令第  
二號ニ依リ申可シ



相添此段及申奏候也  
 參事院議案十六年二月二日  
 別紙司法省申奏豫審判事被告人訊問ノ時書記ノ立會ヲ要セサル件審査スル處左ノ如シ  
 右實際ノ支障不得止次第ト雖トモ同省申奏布告案成文上ヨリ解釋ヲ下ス時ハ已ニ尋常訊問ノ場合ニ  
 書記ノ立會ヲ要セサルモノトシ却テ急遽ノ際ニ書記外ノ立會人ヲ要スル手續ヲ存スルモノ、如ク聊  
 カ其穩當ヲ得ス然リ而シテ其精神ニ於テハ裁判所内ニ於テスル訊問ニ限リ書記ノ立會ヲ要セサルモ  
 ノニ付該布告案修正ヲ加ヘ裁可相成可然視認ス  
 右ニ由リ布告案左ノ通ニテ可然裁上申候也

司法省達 十六年十二月四日  
 大審院裁判所警視廳府縣警察廳憲兵本部

重罪ニシテ法律上ノ減輕ニ因リ輕罪以下ノ刑ニ處スヘキモノハ輕罪裁判所ノ管轄ニ屬スヘキ旨客年當  
 省丙第二十一號ヲ以テ相違置候處有惣減輕自首減輕及ヒ未遂犯ノ減輕ニ因リ輕罪以下ノ刑ニ處スヘキ  
 モノハ該達ニ依ラサル儀ト心得ヘシ此旨相違候事

布告 第四十九號  
 十六年十二月二十八日 太政大臣 三條實美 司法卿 山田顯義 副署

治罪法第八十三條ニ記載スル事件ニ付高等法院ヲ開カサル時ハ通常裁判所ニ於テ裁判スルコトヲ得  
 右奉 勅旨布告候事

司法省上請 十六年一月十二日

治罪法第八十三條ニ高等法院ニ於テ管轄ス可キ事件記列有之候處右犯罪ノ中實ニ輕微ナル者アリ又其  
 犯人僅少ナル場合アリ然ルニ是等皆高等法院ヲ開キ裁判スルニ於テハ頗ル鄭重ニ過キ實際差支ヲ生ス  
 ル事不少依テ右等ノ事件ニシテ高等法院ヲ開クニ及ハスト見込候モノハ通常裁判所ニ於テ豫審公判ヲ  
 爲ス可キ様致度候別紙御布告案相添此段及申奏候至急御裁可相成度候也  
 參事院議案十六年二月十四日

別紙司法省申奏高等法院管轄事件ノ儀審査スル處左ノ如シ  
 高等法院ノ管轄ス可キ事件ハ刑法第二編第一章第二章ニ掲ケル所ノ皇室ニ對スル罪及ヒ國事ニ關ス  
 ル重罪ニシテ司法省申奏所謂輕微ノ犯罪ハ高等法院ニ於テ管轄スルノ限ニ在ラサレハ他日實際ノ不  
 便ヲ生セシ時ニ至テ改正スルハ格別ナリト雖モ今日ニ於テハ其改正ノ必要ナルヲ見ス況ヤ當今福島  
 縣下暴動ノ後ニ際シ之ヲ變更スルハ政略上恐ラクハ其宜ヲ得タル者ト謂フ可カラズ旁以司法省申奏  
 ノ趣廢案ニ議決セリ

宿願減輕自首減輕等ニ  
 テ輕罪ノ刑ニ處ス可キ  
 者ハ輕罪裁判所ノ管轄  
 ト爲ス限ニテラス

治罪法第八十三條ニ記  
 載スル事件ニ付高等法  
 院ヲ開カサル時ハ普通  
 裁判所ニ於テ裁判スル  
 コトヲ得

右ニ由リ指令案左ノ通ニテ可然裁上申候也

參事院議案 十六年二月十七日

別紙司法省申奏高等法院管轄事件輕微ノ者ハ通常裁判所ニ於テ管轄スルノ儀參事院ニ於テハ之ヲ否決  
 セリ然レハ其實際ニ於テ差支ヲ生スル不掛ノミナラス頗ル鄭重ニ過キ却テ事ノ滯留ヲ來スノ虞アルヘ  
 シ司法卿申奏ハ事理妥當ニ付參事院ノ議ハ採用セス直ニ元案ノ儘元老院檢視ニ被付可然ト考慮致候儀  
 テ仰園裁候也元老院檢視  
 司法省同十八年三月十七日

愛知縣士族村松愛藏等カ被告事件ニ付テハ雖ニ其共犯中ニ軍人アルヲ以テ裁判管轄ノ儀相伺候處軍人  
 ト雖モ今度ニ限リ普通治罪法ニヨリテ審理セシムヘキ旨御裁可相成候ニ付猶調査候處別紙甲號被告人  
 等カ所持セシ愛國義黨軍令概略乙號被告ノ内川澄徳次ニ對スル長野縣飯田警察署ニ於テ取調タル訊問  
 調書等ニ因レハ右被告事件ハ全ク刑法第二編第二章第一節ニ掲ケアル内亂ニ關スル罪質ノモノニ有之  
 候得共右ハ重大ナル事實アルニモアラザラレハ別ニ高等法院ヲ開カル、ノ必要無之モノト思考候條明治  
 十六年第四十九號布告ニヨリ長野縣罪裁判所ニ於テ該被告事件ヲ裁判セシメ可然裁何分ノ御詮議有之  
 度此旨相伺候也  
 指令十八年三月二十八日

伺ノ通

參事院議案 十八年三月二十四日

別紙司法省伺愛知縣士族村松愛藏等内亂ニ關スル被告事件裁判管轄ノ件審査スル處左ノ如シ  
 伺ノ要旨ハ雖キニ軍人ト雖モ今度限リ普通治罪法ニヨリ審理セシムヘキ旨裁可アリタル愛知縣士族  
 村松愛藏等カ被告事件ニ關シ別紙愛國義黨軍令概略ト題シ被告カ所持シタル書類又被告ノ内川澄徳  
 次ニ對スル長野縣飯田警察署於テ取調タル訊問調書等ニ依レハ刑法第二編第二章第一節ニ掲ケアル  
 内亂ニ關スル罪質ノモノナルモ重大ナル事實アルニモアラザラレハ別ニ高等法院ヲ開カル、ノ必要ナ  
 キモノト思考スルヲ以テ明治十六年第四十九號布告ニヨリ該被告事件ハ長野縣罪裁判所於テ裁判セ  
 シメ可然ト云フニアリ右ハ至當ノ所見ト視認ス  
 右ニ由リ指令案左ノ通ニテ可然裁上申候也

司法省達 十七年五月三十日  
 第一號 大審院裁判所、警視廳、府縣警察廳、憲兵本部

犯罪證據物トシテ戸長役場備置ノ書類ヲ差押フル儀ニ付甲號福井縣上申ニ對シ乙號ノ通及指令候條爾  
 後戸籍帳等ノ差押ニ付テハ右ノ手續ニ依リ取扱フ可キ儀ト心得可シ此旨相違候事

甲號

福井縣ヨリ司法省へ上申十七年一月二十九日

犯罪證據物トシテ戸長  
 役場ノ要書差押ヘタル  
 書類附カ

犯罪證據物トシテ裁判所ニ於テ戸長役場備置ノ戸籍帳又ハ土地建物船舶買賣讓渡契入書入典書割印簿等ヲ差押ヘ數日間還附セサルコトアリ然ルニ戸長役場ニ於テハ部下ノ人民生死送入籍其他ノ異動加除ヲ要シ又ハ陸續公證ヲ請ヒ就中契入書契約ノ如キ義務消盡ニ據リ公證取消ノ儀申出ル者アルモ本簿ニ照較消印スル能ハサルヲ以テ其旨ヲ具ヘ簿冊下戻方裁判所ニ照會スルモ某事件ニ付差押ヘタル物トシテ差押ヲ要スルハ其一部分ニ止ルヘクシテ而シテ該簿冊ニ登載セル其他ノ事件全体ニ關シ行政上取扱ニ支障ヲ來シ不都合不掛就テハ斯場合ニ於テハ其必要ノ廉ハ裁判所ニ於テ騰寫シ本書加除スルヲ得サル様掛紙契印等ヲ爲シ而シテ簿冊ハ直ニ還付スヘク様致度御詮議ノ上何分ノ御指揮相成度此段上申候也

乙號  
司法省指令十七年五月二十八日  
書面上申之趣聞屆候尤裁判所ニ於テ騰寫セシ該書ヘハ戸長之レニ調印スヘシ若シ其騰寫ニ拘ハル内ニ加除等ヲ要スル時ハ其都度裁判所ノ許否ヲ得ヘキ儀ト可心得事

罰金ヲ輕禁錮ニ換ヘタル場合ニ於テ其日數十日以下ナル時ハ拘留ノ例ニ依リ警察署附屬ノ留置場ニ於テ執行スルコトヲ得ル儀ト心得可シ此旨相達候事

司法省達 丙十七年八月十三日  
郵便犯則者ニ對スル未納稅不足稅等徵收方ノ儀ニ付太政官ヨリ左ノ通御達有之候條此旨相達候事  
司法省ヘ達 十七年七月二十三日

驛遞局ヨリ郵便犯則者ヲ告訴スルト併テ未納稅不足稅等ノ徵收ヲ請求スルトキハ其請求ニ應シ之ヲ受理スヘキ儀ト心得此旨相達候事

司法省訓令 第十九年五月一日  
明治十五年十二月當省第六七八〇號內訓但書ニ從ヒ檢事ヨリ當省ヘ差出スヘキ收監表ハ自今所轄控訴裁判所檢事長ニ差出スヘシ又檢事長ハ之ヲ取纏メ三月毎ニ一紙表ヲ製シ當省ヘ差出シ且ツ意見アル時

罰金ヲ輕禁錮ニ換ヘタル場合ノ執行方  
郵便犯則者ノ未納稅不足稅徵收處分方

收監表ハ檢事長ニ出シ檢事長ヨリ司法省ニ出サシム

ハ之ヲ附記スヘシ  
但收監表雜形ハ各檢事長ニ於テ適宜ニ之ヲ定ムヘキモノトス  
右訓令ス

布告 第十四号 九月二十日 太政大臣 三條實美 署  
違警罪ノ審判ニ關スル一切ノ手續ハ治罪法ニ從フヘシト雖モ實際已ムヲ得サル場合ニ於テハ當分ノ内  
便宜取計ヲヒ其裁判言渡ニ付テハ總テ上訴ヲ許サス此旨布告候事

法制部起草  
丙務司法兩省上申十六年六月二十一日  
違警罪ノ儀ハ明治十四年第八十號ヲ以テ當分ノ内府縣警察署及ヒ其分署ニ於テ裁判スヘシト公布相成候ニ付客年一月已來實施ノ處從前違警罪ノ取扱ト異リ其審判ハ都テ治罪法ノ手續ニ依ラサルヲ得サルヲ以テ輕微ノ罪犯ナルモ尙鄭重ノ審判ヲ要スルニヨリ人民ノ苦情官吏ノ繁雜實ニ云フヘカラス尤實際不得已場合ハ便宜取扱フヘキ旨十四年第四十四號公布ノ趣モ候得共平常ノ場合ニ在テハ無論本法ヲ盡ナハルヲ得サル儀ニテ其罪質ト審判ノ手續トハ甚キキ庭選ト云フヘシ又治罪法第三百七條ニ定ムル所ノ裁判費用ヲ官ニテ擔當スヘキ場合於テ之ニ給スヘキ費途無之實際差同候ハ論ヲ待タス故ニ該公布ヲ一層改良セラル、キハ甚便利ナレトモ改正ハ容易ノ業ニアラサル次第ト被存候ニ付一般人民ニ對シテハ依然實際已ムヲ得サル場合ノミトシ官吏ニ向テハ都テ便宜ノ取扱ヲ爲スヘキ様御達相成度然ルキハ執行上大ニ便利ニシテ鄭重ニ失スルノ嫌ナク犯者モ亦其輕便ヲ喜ビ從テ費用ノ點モ治罪法ニ不拘明治九年第六十三號公布ニ依テ支給スルヲ得ヘシ御達案相添此段上申候也

指令 十六年八月二十五日  
上申ノ如キハ即便宜ニ處分スルヲ得ヘキニ付特ニ違ヲ要セス且費用ノ儀モ從前ノ例ニ依リ支拂フヘキ儀ト心得ヘシ  
參事院議案 十六年八月十四日  
別紙內務司法兩省上申違警罪審判ニ關スル公達ノ義審查スルコト左ノ如シ  
兩省上申ノ要旨ハ明治十四年第四十四號布告ニ違警罪ノ審判ニ關スル一切ノ手續ハ治罪法ニ從フヘシト雖モ實際已ムヲ得サル場合ニ於テハ當分ノ内便宜取計フヘシト有之右實際已ムヲ得サルノ數字甚々差支アルヲ以テ如何ナル場合ヲ論セス總テ從前ノ法ニ從ヒ便宜處分ヲ爲シ且官ニテ擔當スヘキ裁判費用即チ證人鑑定人ニ給與スル日當旅費等モ從前ノ例ニ依リ警察費ヲ以テ支拂ハシムル様御達相成

違警罪判例ノ手續ハ當分便宜取計ハシム其裁判言渡ニ就テハ上訴ヲ許サス  
十八年九月第三十一號布告ヲ以テ廢ス

九年第六十三號布告裁判費用ノ部ニ載ス

度ト云フニ在リ第四十四號布告果シテ大ナル差支アラハ公然ノ手續ヲ以テ之ヲ改正セラル、ノ外ナ  
カルヘシト雖モ上申書中ニ人民ノ苦情官吏ノ繁雜實ニ云フヘカラストアルハ即實際已ヲ得サル場合  
ニシテ便宜處分ヲ爲シ得ヘキハ勿論ニ付決シテ差支ヲ生スルノ理由ナキ者トス但裁判費用支拂方ハ  
上申ノ通ニテ可然候ヘトモ別段御達ニハ及ハサル儀ト思考ス  
右ニ由リ指令案左ノ通ニテ可然哉上申候也

布告 第十四号九月二十日太政大臣三條實美署

刑法治罪法中違警罪裁判ノ儀ハ當分三府五港ノ市區ヲ除クノ外府縣警察署又ハ警察分署ニテ裁判可致  
候條此旨布告候事

司法省何十三年十月二十六日

今般改正法律御頒布ニ付テハ治罪法ニ依リ治安裁判所ヲ以テ違警罪裁判所トシテ違警罪犯ヲ裁判スヘ  
キ儀ニ有之候ヘ共該犯ハ孰レモ極微ノ犯罪ナルヲ以テ遠隔ノ地ヘ往復セシメ候テハ不都合ニ付現今警  
察署又ハ分署設置ノ地ニ於テ設立致シ少クモ全國中三百五十箇所ヲ置テハ官民ノ便ヲ缺キ候次第ニ  
有之儀ヲハ先以テ三府五港ノ市區ノ治安裁判所ニテ違警罪ヲ處分致シ其他ハ當分從前ノ違式註違罪  
ノ例ニ依リ府縣ヘ委任致度右ハ諸裁判所所構成取調等ノ都合モ有之ニ付豫メ相伺候尤御許可有之上ハ新  
法實施ニ臨ミ各縣ヘ御達案取調重テ可相伺候ヘトモ差向何分ノ御指揮ヲ仰候也  
指令十三年十二月八日

同ノ趣開置候事

司法省何十三年十一月十五日

別紙司法省何違警罪判決三府五港ヲ除ク外府縣ヘ委任ノ儀審案候處右ハ法衙ノ構成一時充分ニ難行届  
ハ實際不得已次第ニ付伺ノ通御開置相成可然哉法制部內務部合議ノ上仰高裁候也

司法省上申十四年三月二十五日

去月四日附ヲ以テ裁判所名稱區畫改正ノ儀申奏致候ニ付テハ兼テ經伺ノ通違警罪裁判ハ當分三府五港  
ノ市區ヲ除クノ外府縣ヘ委任ノ儀左案ノ通御布告相成度御布告案相添此段及申奏候也

司法省何十四年八月十八日

別紙司法省申奏違警罪裁判府縣ヘ委任ノ儀看詳候處右ハ疊ニ御決裁濟ノ件ニシテ別ニ不都合ノ儀モ無  
之ニ付申請ノ通御聽可相成可然哉法制部內務部合議仰高裁候也

司法省達

十四年九月二十二日

刑部十二號發親總、府縣

各警察署所在名稱及ロ  
管轄區畫ヲ届出テシム

今般第四十八號ヲ以テ違警罪裁判ハ當分三府五港市區ヲ除クノ外府縣警察署又ハ警察分署ニ於テ裁判  
可致旨御布告相成候ニ付テハ各警察署并ニ警察分署所在名稱及ヒ管轄區畫左ノ雜形通取調可届出此旨  
相達候事

何警察署 違警罪

何郡

何區何町何村

何警察署何分署

同前

布告 第十四号十二月二十八日太政大臣三條實美署司法卿大木喬任副署

本年九月第四十八號布告左ノ通改正ス

違警罪ノ儀ハ本年第三十六號布告ニ據リ明治十五年一月一日ヨリ治安裁判所ニ於テ裁判スヘキ處當分  
ノ内府縣警察署及ヒ其分署ニ於テ裁判セシムヘシ

右奉 勅旨布告候事

司法省上申十四年十二月十三日

本年九月太政官第四十八號ヲ以テ違警罪裁判ノ儀ハ當分三府五港ノ市區ヲ除クノ外府縣警察署又ハ警  
察分署ニテ裁判可致旨御布告有之候處抑モ違警罪ニ於テハ即決スルヲ得テ留置スルコト能ハサレハ假  
令夜間ト雖モ直ニ裁判所ニ付スヘキ者ト考置候ヘ共違警罪裁判所ハ警察署ト異ナリ閉處時限アリ休  
暇日子アリテ日夜休息ナク職務ヲ行フ可キニアラサレハ直ニ裁判スルコト能ハス徒ラニ微罪ノ者ヲ  
シテ淹滞セシムルハ實際不都合少ナカラス候ニ付別紙ノ通御改正相成度御布告案相添此旨申奏候也  
參事院議案十四年十二月二十六日

別紙司法省申奏本年第四十八號布告改正ノ件審査スル處左ノ如シ  
違警ノ微罪ヲシテ治罪法ノ手續ヲ履ミ裁判所ニ於テ處分スルトキハ徒ヲニ淹滞ヲ來シ且被告人其刑  
ニ苦シマンヨリハ手續ニ厭ハシムル場合ナキニアラサルヘシ依テ總テ從前ノ如ク府縣警察署ニ於  
テ處分セシメハ事簡ニシテ官民ノ兩便ナラントス  
右ニ由リ布告案左ノ通ニテ可然哉上申候也 檢親

布告 第三十一号九月二十四日太政大臣三條實美署司法卿山田顯義副署

明治十四年九月第四十四號布告及ヒ同年十二月第八十號布告ヲ廢止シ違警罪即決例別紙ノ通制定ス

治罪門 刑事諸則

二百二十三

違警罪ハ府縣警察署及  
其分署ニテ裁判セシム  
A  
三十六號ハ治罪法實施ノ  
布告ナリ前二載ス  
十八年九月第三十一號布  
告ヲ以テ廢ス

違警罪即決例ヲ制定ス  
十八年十二月司法省達丙  
第十號ヲ以テ違警罪裁判  
官渡邊ノ附本ヲ下附スル

右奉 勅旨布告候事

(別紙)

違警罪即決例

- 第一條 警察署長及ヒ分署長又ハ其代理タル官吏ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ即決スヘシ但私訴ハ此限ニ在ラス
- 第二條 即決ハ裁判ノ正式ヲ用ヒス被告人ノ陳述ヲ聽キ證據ヲ取調ヘ直ナニ其言渡ヲ爲スヘシ又被告人ヲ呼出スコトナク若クハ呼出シタリト雖モ出廷セサル時ハ直ナニ其言渡書ヲ本人又ハ其住所ニ送達スルコトヲ得
- 第三條 即決ノ言渡ニ對シテハ違警罪裁判所ニ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得但正式ノ裁判ヲ經スシテ直ナニ上訴ヲ爲スコトヲ得ス
- 第四條 即決ノ言渡書ニハ被告人ノ氏名年齢身分職業住所犯罪ノ場所年月日時罪名刑名及ヒ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得ヘキ期限并ニ其言渡ヲ爲シタル警察署年月日警察官ノ氏名ヲ記載スヘシ
- 第五條 正式ノ裁判ヲ請求スル者ハ即決ノ言渡ヲ爲シタル警察署ニ申立書ヲ差出スヘシ但其期限ハ第二條第一項ノ場合ニ於テ言渡アリタルヨリ三日内第二項ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス
- 第六條 警察署ニ於テ前條ノ申立ヲ受ケタル時ハ二十四時内ニ訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致スヘシ
- 第七條 第五條ニ定メタル期限内ニ正式ノ裁判ヲ請求セサル時ハ即決ノ言渡ヲ以テ確定ノモノトス
- 第八條 科料拘留ノ言渡ヲ爲シタル時必要ト認ムル場合ニ於テハ後ノ數條ニ定メタル處分ヲ爲スコトヲ得
- 第九條 科料ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其金額ヲ假納セシムヘシ若シ納メサル者ハ一圓ヲ一日ニ折算シテ之ヲ留置ス其一圓ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

第十條 拘留ノ言渡ヲ爲シタル時ハ一日ヲ一圓ニ折算シ其刑期ニ相當ノ金額ヲ保證トシテ差出サシムヘシ若シ差出サ、ル者ハ第五條ニ定メタル期限内之ヲ留置ス但刑期五日内ナル時ハ其日數ニ過クルコトヲ得ス

第十一條 保證金ヲ差出シタル者ハ刑ノ言渡確定シタル後直ナニ出廷シテ其執行ヲ受クヘシ若シ出廷セサル時ハ保證金ヲ没入シテ本刑ニ換フ

第十二條 留置シタル者正式ノ裁判ヲ請求シ因テ呼出狀ノ送達アリタル時ハ直ナニ留置ヲ解クヘシ

第十三條 留置ノ日數ハ一日ヲ一圓ニ折シテ科料ノ金額ニ算入シ又ハ拘留ノ刑期ニ算入スヘシ

司法省例十七年十二月十九日

明治十四年第四十四號布告ヲ以テ違警罪ノ審判ニ關スル一切ノ手續ハ治罪法ニ從フ可シト雖モ實際已ムヲ得サル場合ニ於テハ當分ノ内便宜取計ラヒ其裁判言渡ニ付テハ總テ上訴ヲ許サス又同年第八十號布告ヲ以テ違警罪ノ儀ハ云々當分ノ内府縣警察署及ヒ其分署ニ於テ裁判セシム可キ旨定メラレタルハ畢竟違警罪ハ其事件輕微ニシテ其罰モ亦甚タ輕シ然ルニ一々治罪法ニ從ヒ之ヲ處分セントスルハ官民共ニ不便ナカラサルニ原由スル者ナル可シ然ルニ違警罪ト雖モ總テ上訴ヲ許サ、ルカ如キハ事理穩當ナラサルニ付右第四十四號第八十號布告ヲ廢止セラレ違警罪即決例ヲ設ケラル、ニ於テハ格別手續并ニ經費ヲ要セスシテ誤斷ヲ回復スルノ道ヲ開クニ至ル等法理上ニ於テ頗ル適當ナリト考量候因テ御布告案并ニ理由書相添此段上申仕候也

第一條

(理由) 違警罪ハ其事件輕微ニシテ其罪モ亦輕シ然ルニ治罪法ニ從ヒ正式ノ裁判ヲ爲ストキハ裁判所ノ手數煩雜ニ涉ルノミナラス被告人ニ於テモ大ニ不便ナラン歐洲各國ノ如キモ概テ即決法ヲ設ケサルナシ蓋シ些細ノ事件ヲ逐一鄭重ノ法式ヲ用ヒントスルキハ實際不都合ナカラサルヲ以テ便宜法ヲ設ケ其弊ヲ防キタル者ナル可シ因テ本文ノ通各地方警察本分署ヲシテ違警罪ヲ即決セシムルハ甚タ必要ニシテ缺ク可カラサル者ナリ但私訴ハ公訴ノ附從ニ過キサレトモ其裁判ヲ警察署ニ委スルハ甚タ穩當ナラス故ニ私訴ハ金額ノ多寡ニ拘ハラヌ相當ノ裁判所ニアラサレハ之ヲ裁判スルコトヲ得サル者ト定メサル可カラス

第二條

(理由) 即決ハ速ニ裁判ノ局ヲ結フヲ期スル者ナルヲ以テ裁判ノ法式ヲ用ヒス唯被告人并ニ證人ノ陳述ヲ聽キ其他ノ證據ヲ取調直ニ言渡書ヲ作リ之ヲ言渡ス可キ者ト定メサレハ即決ノ趣意ヲ貫徹スル能ハサルニ至ラン又被告人ヲ呼出シテ其言渡ヲ爲ス可キ者ト定ムルトキハ徒ニ時間ヲ費ス而已ニシテ

其益ナキヲ以テ時宜ニ依リテハ之ヲ呼出サヌ又之ヲ呼出シタルモ出廷セサルトキハ直ニ言渡書ヲ作  
リ本人又ハ其住所ニ送達スルコトヲ得可キ者ト定メサル可カラズ

第三條

(理由)即決ノ言渡書ト雖モ被告人ノ氏名年齢身分職業住所等ヲ記セサレハ實際人違ヒ等ノ弊ヲ生スル  
ニ至ラン又犯罪ノ場所日時ヲ記載セサレハ犯罪ノ模様明確ナラス故ニ之ヲ明記セサル可カラズト雖  
モ刑ノ言渡ヲ爲スニハ治罪法ニ依リテ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示セサル可カラズ然ルトキハ  
言渡書ヲ作ルノ時間ヲ要スル等或ハ即決ノ實ヲ失フニ至ラン故ニ其罪名刑名ヲ記載スルニ止マル可  
シ但五日内ニ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得可キ旨ヲ附記セサル可カラズ若シ之ヲ附記セサルトキ  
ハ其言渡確定スルコトナキハ論ヲ待タサルナリ

第四條

(理由)即決ノ言渡ハ簡略ヲ主トシ裁判ノ法式ヲ用ヒタル等變則ノ裁判ニ係ルヲ以テ之ニ對シ正式ノ上  
訴ヲ許サントスルハ甚タ穩當ナラス然レトモ即決ノ言渡ハ總テ確定ノ者ト爲スハ是亦大ニ不都合ナ  
リ抑即決ノ言渡ハ假ノ裁判ニシテ正式ノ裁判ヲ受ルノ妨ケトナルコトナキヲ以テ其言渡ヲ受ケタル  
者ニ於テ正式ノ裁判ヲ請求シタルトキハ即決ノ言渡ハ當然消滅ス可キ者ト爲サ、ル可カラズ

第五條

(理由)本條ハ即決ノ言渡ヲ受ケタル者正式ノ裁判ヲ請求スルノ手續ヲ示シタル者ニシテ其請求ノ申立  
ハ即決ノ言渡ヲ爲サ、ル可カラズ其申立ヲ爲スコトヲ得可キ期限ハ五日ナリトス而シテ其期限ヲ計  
算スルニハ出廷シテ言渡ヲ受ケタルトキハ其翌日ヨリ出廷セサルトキハ言渡書ノ送達アリタル翌日  
ヨリ起算ス可キ者トス

第六條

(理由)警察本分署ニ於テ正式裁判請求ノ申立ヲ受ケタルトキハ速ニ其證憑書類等ヲ管轄裁判所ニ送致  
セサルトキハ裁判ノ延滞ヲ醸シ被告人ノ不利益ヲ來タスコト尠ナカラス故ニ遅クトモ二十四時内ニ  
之ヲ送致ス可キ者トス被告人ニ於テ正式ノ裁判ヲ請求スルハ即決ノ言渡ニ對スル上訴ニアラサルヲ  
以テ其請求ヲ受ケタル違警罪裁判所ニ於テハ治罪法ニ依リ相當ノ手續ヲ以テ其裁判ヲ爲サ、ル可カ  
ラス

第七條

(理由)即決ノ言渡ハ假ノ裁判ニ係ルト雖モ第五條ノ期限内ニ正式ノ裁判ヲ請求セサルトキハ其言渡確  
定ス可キ者トス若シ然ラザルトキハ即決ノ裁判ハ徒ニ手数ヲ煩ハスノミニシテ毫モ其効ナキニ至ラン

第八條

(理由)刑ハ裁判確定ヲ待テ執行ス可キハ普通ノ原則ナルヲ以テ即決ノ言渡モ亦確定ヲ待テ之ヲ執行セ  
サル可カラズト雖モ違警罪ハ假令逃亡等ノ恐レアルモ未決中勾留スルコト能ハサルヲ以テ警察署所  
在地ニ一定ノ住所ナク且氏名等分明ナラスシテ逃走ノ恐レアル者ノ如キハ探メ其執行ヲ遑ル、ノ弊  
ヲ防カサル可カラズ且被告人ニ於テモ旅行中ニ係ルカ或ハ至急ヲ要スル事故アリテ其裁判確定ヲ待  
ラヌ

第九條

(理由)即決裁判ニ於テ科料ノ言渡ヲ受ケタル者警察署所在ノ地ニ一定ノ住所ナク且氏名等分明ナラス  
シテ逃走ノ恐レアル者ノ如キハ直ニ其金額ヲ警察署ニ豫納セシムルモ若シ其言渡ニ服セス正式ノ裁  
判ヲ請求シ其裁判ニ依リ科料ノ刑ヲ免レタルトキハ之ヲ還付ス可キハ當然ナリ

第十條

(理由)科料ノ言渡ヲ受ケタル者其金額ヲ豫納スルコト能ハサルトキハ一圓ヲ一日ニ折算シ之ヲ警察署  
ニ留置シ其一圓ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算シテ留置スルコトヲ得可シト定メサレハ金額ヲ納  
完スルコト能ハサル者或ハ逃走其刑ノ執行ヲ遑ル、ノ弊ヲ生スルニ至ラン蓋シ科料ヲ豫納セシムル  
者ハ一定ノ住所ナク且氏名等分明ナラスシテ逃走ノ恐レアル者ニ限レハナリ

第十一條

(理由)拘留ノ刑ヲ言渡サレタル者ニ保證金ヲ豫納セシムルニハ例ヘハ拘留十日ヲ言渡サレタル者ハ一  
日ヲ金一圓ニ折算シ金十圓ヲ警察署ニ差出ス可キ者トス其言渡確定シタル後拘留ノ執行ヲ受ルトキ  
ハ其金額ヲ還付セサル可カラズ然レハ保證金ヲ差出シタル者若シ刑ノ言渡確定後十日ヲ經過スルモ  
尙ホ其所在分明ナラザルトキハ其保證金ヲ沒收ス可キ者ト定メタルハ被告人ニ於テ至急ヲ要スル事  
故アリテ旅行等ヲ爲シ一時所在分明ナラザル者ナキニアラサルニシテ然ルニ確定後直ニ沒收ス可キ者  
ト爲スハ過酷ニ失スルノ恐レアルヲ以テナリ又保證金ヲ差出シタル者所在不明ナラザルトキハ金額  
ヲ以テ拘留ノ刑ニ換ヘタル者ト定メンカ途ニ被告人ヲシテ刑ヲ撰ハシムルノ都合ヲ生スルニ至ラ  
ン故ニ言渡確定後十日ヲ經過スルモ所在不明ナルトキハ保證金ヲ沒收シ拘留ノ刑ハ相當ノ規則ニ  
從ヒ之ヲ執行ス可キ者トス

第十二條

(理由)拘留ノ言渡ヲ受ケタル者前條ノ保證金ヲ差出スコト能ハサル場合ニ於テ其儘差置クトキハ住所  
等分明ナラザル被告人ナルヲ以テ逃走シテ刑ノ執行ヲ遑ル、ニ至ラン故ニ其刑期ニ相當スル時間之  
ヲ留置スルハ己ムコトヲ得サル處分ナリ

第十三條

(理由)第十條第十二條ノ場合ニ於テ若シ正式ノ裁判ヲ請求シタルトキハ其留置ヲ解カサレハ實際違警  
罪裁判所ノ召喚ニ應ズル能ハサルノ不都合アルノミナラス違警罪裁判所ニ於テ正式裁判ノ請求ヲ受  
理シタルトキハ即決ノ言渡ハ當然其効力ヲ失フ可キ者ナルニ付其呼出狀ノ送達アリタルトキハ直ニ  
留置ヲ解カサル可ラザル者トス

第十四條

(理由)第十條第十二條ニ依リ留置セラレタル後即決ノ言渡又ハ正式ノ裁判言渡確定シタルトキ更ニ其  
言渡ヲ執行セントスルトキハ違警罪ヲ犯シタル者ヲ未決中ニ拘留スルノ結果ヲ生シ過酷ニ失スルヲ

以テ拘留ニ處ス可キトキハ其留置日數ヲ刑期ニ算入シ科料ニ處ス可キトキハ留置日數一日ヲ金一圓ニ折算シテ科料ノ金額ニ算入ス可キ者ト定メサル可カラズ然レモ正式ノ裁判ニ於テ免訴無罪ノ宣告ヲ受ケタル場合ニ於テ留置ノ日時ヲ償フ能ハサルヲ以テ裁判確定前ニ之ヲ留置スルハ穩當ナラサルカ如クナレハ此弊ハ到底免ル可ラサル者ナリ若シ官吏ノ過失ニテ被告人ニ損失ヲ被ラシメタルハ總テ之ヲ賠償セサル可カラサル者ト定メシテ警察官等或ハ無罪者ヲ誤テ罪ニ入レンコトヲ恐レ容易ニ手ヲ下タスコトナク遂ニ有罪者ヲシテ法網ヲ脱セシムルノ弊ヲ生シ安寧ヲ保持スル能ハサルニ至ラン是レ治罪法第十七條ノ明文アル所以ナリ由是考フレハ留置後無罪免訴ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テハ被告人ノ損失ト爲シ之ヲ償ハサルモ不當ノコトナカル可シ

參事院議案十八年三月三日

別紙司法省上申途審罪即決例制定ノ件審査スル處左ノ如シ

今般輕罪ノ控訴差許サレ候ニ付テハ違審罪ノ上訴モ亦差許サルヘキ筋ナリト雖モ治罪法ノ規則ニ從フ時ハ手數ヲ煩ハシ費用ヲ要スルコト少カラス官民ノ不便頗ル大ナル者アリ今此即決例ハ其手續極メテ簡易ニシテ許多ノ費用ト手數ヲ要セシテ施行スルコトヲ得ヘク大ニ便宜ノ方法ニ付御裁可相成可然ト認定ス但原案中穩當ナラサル條件ハ修正ヲ加ヘ候間修正案ノ通御布告相成可然ト思考ス右ニ由リ御布告案左ノ通ニテ可然裁上申候也

被告入責付手續決定ム

十六年十一月司法省達丙第八號ヲ參照ス可シ

刑事裁判所ニ於テ被告人ヲ責付スルニハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨布告候事

第一條 被告人ヲ責付スルニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷セシムヘキノ證書ヲ其裁判所書記局ニ差出サシムヘシ

第二條 責付中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其通知ヲ爲スヘシ

第三條 被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ヲ取消スヘシ

司法省申奏十四年六月二十四日

治罪法第二百九條ニ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルコトヲ得トアルノミニシテ其手續ヲ記載スル規則無キヲ以テ責付規則ノ御布告ヲ要スル儀ト思考候ニ付別紙御布告案相副及申奏候也

司法省達丙十六年十一月五日

保釋責任中ノ被告人取締方心得

保釋責任中ノ被告人取締方心得ノ儀ニ付左ノ通各裁判所へ相達候條此旨爲心得相達候事

丁第三十一號

裁判所

保釋責任ヲ得タル被告人ハ左ノ取締條件ニ服從セシム可キ儀ニ付キ保釋責任ヲ爲スノ際其旨ヲ被告人ニ豫知セシム可シ但其言渡書ノ紙尾ニ記載印刷スルモ妨ケナシ

第一條 治罪法第二十一條ニ從ヒ假住所ヲ定メ居置ク可キコトハ言ヲ待タス其裁判所ノ管轄地外ニ旅行スルコトヲ得ス若シ已ムヲ得サル事由アルキハ其旨ヲ檢事ニ申立テ許可ヲ受ク可シ

第二條 裁判所ノ管轄地内ト雖モ住所外ニ於テ一泊以上滞在スルキハ滞在ノ場所ヲ其家族又ハ同居人ニ通知シ置ク可シ

若シ同居人アラサルキハ其住所ノ地ノ戸長ニ居置ク可シ

第三條 代言人辯護人又ハ代人トシテ法廷ニ出頭シ其他議會集會等公然ノ場所ニ參會スルコトヲ得ス

第四條 治罪法第二百一十一條ニ適當スル者及ヒ前數條ノ規則ニ背キタル者ハ治罪法第二百十六條第二項ニ從ヒ保釋ヲ取消ス可シ其責付ヲ受ケタル者モ亦同シ

右相達候事

司法卿大木喬任

明治十六年十一月五日

布告 第十四号十月六日(丙) 第五十四號

刑法治罪法實施ノ儀布告候ニ付テハ當分ノ内輕罪ニシテ檢察官ニ於テ豫審ヲ要セスト見込ムモノニ限リ始審裁判所々在ノ地ヲ除クノ外治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開キ其裁判ヲ爲スコトヲ得ヘシ此旨布告候事

但本文ノ場合ニ於テ訟廷内治罪ノ手續ハ便宜可取計且其手續上ニ付テハ上訴ヲ許サス

司法省達丁十四年十二月九日

治罪門 刑事諸則

輕罪ノ豫審ヲ要セサル者ハ始審處所在地ヲ除クノ外治安裁判所ニ於テ裁判スルヲ許ス

十四年十二月司法省丁第二十七號同月第七十一號布告第七十七號布告ヲ參照ス可シ

治安廳ニ於テ輕罪ヲ裁判スル時ハ輕罪裁判所

本年五十四號公布ニ依リ治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開クトキハ其管轄輕罪裁判所ノ名稱ヲ用ヒ其印ヲ捺シ某治安裁判所ニ於テスルコトヲ附記スヘシ  
左ニ雛形相添ヘ此旨相達候事  
書式雛形

於八王子治安裁判所  
橫濱輕罪裁判所  
印章雛形

橫濱輕罪  
裁判所

小笠原島ノ輕罪ハ當分同地東京府出張所ニ於テ裁判シ治罪手續便宜取扱ハシム  
伊豆七島遠路輕罪ハ當分島吏ニ委任シ治罪手續便宜取扱ハシム  
布告 第十四年十月七日(第百四十四號)  
小笠原島裁判事務當分東京府出張所ニテ治安裁判所(即テ違警)始審裁判所(即テ輕罪)ノ權限ヲ以テ裁判セシメ民刑事控訴及ヒ重罪裁判ハ東京控訴裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨  
但該島ニ於テ治罪ノ手續ハ適宜ニ取扱フヘシ

伊豆七島遠路輕罪ハ當分島吏ニ委任シ治罪手續便宜取扱ハシム  
布告 第十四年十月七日(第百四十四號)  
伊豆七島裁判事務當分該島吏ヘ民事ハ百圓以下及勸解并ニ刑事ハ違警罪ノ裁判ヲ委任シ民事百圓以上刑事輕罪以上ハ東京始審裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨  
但該島ニ於テ裁判治罪ノ手續ハ適宜取扱フ可シ

治安廳ニ輕罪裁判所ヲ開クトキハ當分其地ノ警部ヲシテ檢事ノ職務ヲ代理セシム

當分相川其他十二箇ノ治安廳ニ於テハ總テノ輕罪ヲ裁判セシム

北海邊并ニ沖繩縣ノ裁判事務ハ其官廳ニ於テ取扱フ治罪手續便宜取扱ハシム  
五十三號公布官廳門官制ニ載ス  
十五年二月第十四號公布ヲ以テ司法裁判所ヲ設キ以テ拓地ノ裁判事務ヲ管理セシム官廳門官制ニ載ス  
十五年七月第三十三號公布ヲ參照ス可シ

樺戶集治監ノ輕罪ハ司獄官ニ於テ裁判シ治罪手續便宜取扱ハシム  
十五年十二月司法省達兩第三十四號十六年十一月第三十八號公布ヲ參照ス可シ

札幌根柢始審廳ハ當分治罪手續便宜取扱ハシムハ兩館始審裁判所ノ批可ヲ得テ宜告セシム

布告 第十四年十二月二十八日(第百四十四號)

治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開ク時ハ當分ノ内其所在ノ地警部ヲシテ檢事ノ職務ヲ代理セシム

布告 第十四年十二月二十八日(第百四十四號)

本年十月第五十四號ヲ以テ輕罪ニシテ豫審ヲ要セサル者ニ限り治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開クヲ得ヘキ旨布告候處當分ノ内相川豐岡洲本田邊脇町高山西郷平戶福江嚴原天草大島大曲八戸ノ各治安裁判所ニ於テハ輕罪裁判所ヲ開キ總テノ輕罪ヲ裁判スルコトヲ得ヘシ  
但本文ノ場合ニ於テ認廷内治罪ノ手續等ハ本年第五十四號布告但書ノ通タルヘシ

布告 第十四年十二月二十八日(第百四十四號)

各裁判所ノ位置及ヒ管轄區畫ノ儀本年十月第五十三號ヲ以テ布告候處北海道(函館始審裁判所管內ヲ除ク)并ニ沖繩縣ノ儀ハ當分從前ノ通其所轄ノ官廳ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取扱フ爲スヘシ  
但控訴ノ儀北海道ハ函館控訴裁判所沖繩縣ハ長崎控訴裁判所ノ管轄ニ屬ス

布告 十五年三月三日(第百四十四號)

樺戶集治監ノ囚人 假出獄免曲 罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取扱フヘシ  
但重罪ハ函館重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス  
右奉 勅旨布告候事

布告 十五年六月二十日(第百四十四號)

札幌根柢ノ各始審裁判所ニ於テハ當分ノ内治罪ノ手續便宜取扱計且重罪犯ハ之ヲ審訊シ證憑擬律案ヲ具

十六年十一月布告第三十八號ヲ參照ス可シ

治罪門 刑事諸則

二百三十二

へ函館控訴裁判所ノ批可ヲ得テ後宣告スヘシ  
右奉 勅旨布告候事

布告 第三十三號  
沖繩縣管内ノ重罪犯ハ  
同縣ニ於テ審訊シ長崎  
控訴裁判所ノ批可ヲ得  
テ後宣告セシム

明治十四年十二月第七十八號ヲ以テ重罪裁判所管轄區畫布告候處沖繩縣管内重罪犯處分ノ儀ハ當分ノ  
内同縣ニ於テ審訊シ證憑擬律案ヲ具ヘ長崎控訴裁判所ノ批可ヲ得テ後宣告スヘシ治罪ノ手續ハ便宜ノ  
取計ヲ爲スコトヲ得

布告 第四十一號  
空知集治監ノ囚人  
刑罰ニ於テ審訊シ治  
罪手續便宜取計ハシム

空知集治監ノ囚人 假出獄免職罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計  
フヘシ

但重罪ハ函館裁判所ノ管轄ニ屬ス  
右奉 勅旨布告候事

司法省達 丙第三十四號  
大審院裁許所府縣  
樺戸及空知ノ集治監ニ拘禁中ノ囚人ニ對シ訊問ヲ要スル等ノ事アレハ本年第十六號同第四十一號公布  
ノ趣モ有之ニ付該監司獄官ヘ囑託スルヲ得ヘキ儀ト心得ヘシ此旨相達候事

布告 第三十八號  
樺戸空知兩集治監ノ囚人 假出獄免職罪ヲ犯シ重罪ニ該ル者ハ當分ノ内札幌始審裁判所ニ於テ明治十五  
年六月第三十號布告ニ準シ處分スヘシ

右奉 勅旨布告候事

樺戸空知兩集治監ノ囚人 假出獄免職罪ヲ犯シ重罪ニ該ル者ハ當分ノ内札幌始審裁判所ニ於テ明治十五  
年六月第三十號布告ニ準シ處分スヘシ

司法省何十六年七月二十六日

北海道樺戸空知集治監ニ在ル囚人刑期限内重罪ヲ犯シタル者ハ明治十五年第十六  
號同第四十一號公布ニ據リ該司獄官ニ對シ直ニ之ヲ處分シ其重罪事件ハ該犯人ヲシテ遠ク函館重罪  
裁判所ヘ移送セシム處分スヘキ儀ニ有之候處右集治監ハ函館ヲ距ル七十有餘里殊ニ一歳ノ間寒天其半  
ニ過キ降雪ノ季ハ行路常ニ閉塞シ斯ル長途ヲ跋涉シテ重罪犯ヲ移送セシムルカ如キハ尤危險加游宿奸  
老賊ノ輩ハ或ハ此機ヲ視ヒ押解中途ニ在テ逃走ヲ謀リ故ラニ重罪ヲ犯スノ弊ナキヲ保シ難ク又審判上  
出廷セシムヘキ證人ノ如キモ旅費其他ノ費用ニ疲レ頗ル愆然ノ實況ニ有之趣ニ相聞候條右樺戸空知ノ  
地方ハ目下札幌始審裁判所ノ管内ニ屬スルヲ以テ重罪犯ノ儀モ集治監ヨリ同裁判所ニ交付シ明治十五  
年第三十號公布ノ手續ニ從ヒ之ヲ審訊シ證憑擬律案ヲ付シ函館控訴裁判所ノ審批ヲ取リ決行スルヲ得  
ヘキ様被相定度因テ別紙御布告案ヲ付シ至急ノ仰御裁定候也

參事院議案十六年九月二十一日

別紙司法省申奏樺戸空知集治監ノ囚人刑期限内重罪ヲ犯シタル者處分ノ件審査スル處左ノ如シ  
申奏ノ要ハ樺戸空知ノ兩集治監ニ在ル囚人刑期限内重罪ヲ犯ス者ハ函館重罪裁判所ニテ裁判スル成  
規ノ處右ニテハ道路懸隔等實際不便ニ依テ札幌始審裁判所ニ於テ之ヲ審訊シ函館控訴裁判所ノ批  
可ヲ取リ處分スルコトニ定メ度ト云フニ在リ右ハ明治十五年第三十號布告ノ通札根室兩縣下ノ重  
罪犯處分ノ例モ有之況ンヤ身既ニ囚徒ニシテ再ヒ罪ヲ犯ス者ノ處分ニ於テ適宜ノ簡便法ナルニ依リ  
上奏ノ通允裁相成可然モノト視認ス  
右ニ由リ布告案左ノ通ニテ可然裁上申候也

布告 第三十三號  
札幌根室ノ兩縣管内ニ  
重罪裁判所ヲ開キ治罪  
ノ手續ハ便宜取計ハシム

自今札幌根室始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク但治罪ノ手續ハ當分ノ内便宜取計フヘシ

布告 第四十二號  
釧路集治監ノ囚人 假出獄免職罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取  
計フヘシ

但重罪ハ根室重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

右奉 勅旨布告候事

治罪門 刑事諸則

二百三十三



控訴上告及ヒ職人呼出費用ヲ豫納セシム

十五年三月布告第十九號  
十四年十二月布告第七十四號ヲ參照ス可シ

公訴私訴ニ係ル控訴上告及ヒ職人呼出費用等ノ儀當分左ノ通相定候條此旨布告候事  
刑事裁判所ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ控訴又ハ上告ヲ爲ス者アル時ハ原裁判所ニ於テ其訴訟費用ノ金額ヲ算定シテ之ヲ豫納セシムヘシ  
豫審又ハ公判ニ付證人ヲ呼出サント請フ者アル時ハ裁判所ニ於テ其旅費日當等ノ金額ヲ算定シテ之ヲ豫納セシムヘシ

若シ被告人旅費日當ヲ豫納スルノ資力ナキ時ハ治罪法第七十條ノ制限ニ從ヒ裁判所ニ於テ其費用ヲ立替置クヘシ

布告 第十四号 十月二十八日 大政大臣 三條實美 署司法卿 大木喬任 副署

治罪法中刑事ノ控訴ハ當分實額セズ  
十八年一月第二號布告ヲ以テ廢ス

治罪法中刑事ノ控訴ニ關スル條件ハ當分ノ内實施セズ  
右奉 勅旨布告候事

司法省申奏十四年十一月二十九日

治罪法中陪審ノ設アルハ重罪ニ控訴ヲ許サ、ルハ當然ナレド制定治罪法中陪審ノ法文ナシ而シテ輕罪ニハ控訴ノ方法ヲ掲ケラレタリ重罪ニ陪審ナキ以上ハ輕罪ト同シク控訴ヲ許スヘキニ之ヲ許サ、ルハ其權衡穩妥ナラサルヲ以テ輕罪控訴ノ條條ハ廢除セラレ不當ニ非サルカ如シ然リト雖モ輕罪控訴ノ明文存在スルニ因リ之カ備ヲナスニ於テハ其費用實ニ貴ラレシメテ控訴ノ風ヲ開クトキハ官民其弊ニ堪ヘス是カタメニ本年第四十五號及於第四十四號ノ布告ヲ以テ稍其制限ヲ立ラレタリ然レド檢察官ノ控訴スルニハ制限ナキニ因リ微罪輕刑ト雖モ荷モ審判ノ不當ト認ムルハ控訴ヲナサ、ルヘカラス果シテ然レハ控訴ニ付テハ被告人及ヒ證據人等ノ出廷ヲ要スルヲ以テ東北諸縣及ヒ西南地方ノ如キ數十里ノ險路惡道ヲ跋渉セサルヘカラス加之沍寒霜雪ノ候ニハ道路梗塞スルノ地アリ強テ通行スルトキハ一人ノ行旅ニ二三ノ人ノ擁護ヲ須サレハ忽チ生命ヲ失ヒ或ハ凍餓スルノ虞アルノミナラス罪人ハ多ク貧乏ニシテ公訴ノ費用ヲ擔當スルコト能ハサレハ官ノ失費モ亦隨テ夥多ニシテ各裁判所定額金ノ能ク辨スル所ニアラス然リ而シテ被告人ハ其審判ニ甘服スルモ檢察官ノ控訴スルノ場合ニ於テハ止ムコトヲ得ス險ヲ冒シ遠ヲ歷テ出廷シ且ツ其間ニ時日ヲ曠過スル本刑期ニ幾倍スルヲ知ワス此ノ如キハ人民ヲ保護スルノ法律却テ人民ノ困難ヲ招クノ理ナリ因テ現今ノ人情ニ就テ控訴ノ得失利弊ヲ考究スレハ未ダ適度ニ至ラサルヘシ設ク之ヲ廢スレハ洗冤伸枉ノ道ヲ杜クトモセンカ已ニ上告ノ方法アルニ

ヨリ人民冤枉ニ陥ルノ患ハアラサルナリ故ニ治罪法外ニ於テ違審罪ハ總テ控訴ヲ許サス又訴訟關係人ノ控訴ニハ入費ヲ豫納セシムルノ期限アリテ檢察官ニノミ控訴ノ制裁ナクシテ各自不同ナランヨリハ寧ロ輕罪モ違審罪ト一般ニ當分控訴ノ實施ヲ止メラル、ルハ官ノ耗費ヲ省キ人民遠路經過ノ勞ナク兩ナカラ便宜ニ可有之ト考量候ニ付別紙御布告案相副此段及申奏候也

別紙司法省申奏刑事ノ控訴見合ノ件審查スル處左ノ如シ  
始審ノ裁判ニ對シ控訴ヲ許スハ事實ヲ覆審シテ誤謬ヲ駁明シ其言渡ヲ受ケタル者ヲ以テ帳ナガラシムルニ在リ然レトモ上告ノ法アレハ控訴ヲ許サ、ルモ法理ノ明允ニ害ナカルヘシ況ニヤ刑事ニ在テハ從來控訴ノ途ナク是ヲ許スニ於テハ其費用實ニ貴ラレサルニ於テオヤ  
右ニ因リ布告案左ノ通ニテ可然裁上申候也

布告 第十五号 三月二十九日 大政大臣 三條實美 署司法卿 大木喬任 副署

明治十四年 第九號 第四十五號布告廢止ス

右奉 勅旨布告候事

司法省申奏十四年十二月十五日

本年九月第四十五號ヲ以テ證人呼出費用等ノ儀御布告第三項被告人豫納ノ資力ナキハ裁判所ニ於テ其費用ヲ立替ヘ置クヘシト有之其被告人辨償ノ資力ナキ時ハ終ニ官ノ損失ニ歸ス然ルニ刑事ノ件數凡ソ一箇年十四五萬件ヨリ二十萬件ニ至ルヲ以テ其證人治罪法ノ制限ニ依レハ一件ニ付輕罪ハ五名重罪ハ十名ナルヲ以テ十餘萬ノ件數中幾萬人ニ至ルモ知ルヘカラス或ハ無資力者多數ナレハ其官ノ損失ニ歸スル者亦多數ニ至リ當省定額ニ影響ヲ及ボス鮮少ナラス且本年一月二十七日附ヲ以テ證人旅費日當支給方ノ儀ハ從前ノ通り其管轄地方應ヨリ支給スル裁相伺候處伺ノ通ト御指令モ有之ニ付其見込ヲ以テ裁判所構成改正ノ積算致シ有之ニ付此上該御布告第三項ニ付テ費用增加候テハ困難不少將又掛リ官吏ニテ必需ト見込證人ヲハ職權ヲ以テ之ヲ呼出スル得ルニ付被告人ノ請求ハ其費用ヲ豫納スル能ハサルニ於テハ之ヲ呼出サ、ルモ實際支障無之儀ト存候ニ付本年九月四十五號御布告第三項削除ノ儀更ニ御布告相成候樣致度此段及申奏候也  
司法省再申十五年一月四日

明治十四年十二月十五日第六七七四號ヲ以テ同年第四十五號布告第三項御取消ノ儀及申奏候處刑事控訴當分實施無之事ニ相成候上ハ上告ノ訴訟費用ヲ豫納爲致候テハ不都合ノ次第モ有之候就テハ右四十五號布告全体御取消相成度此段更ニ及申奏候也  
參事院談案十五年三月十日

別紙司法省申奏明治十四年第四十五號布告第三項削除及同布告全体取消ノ件審查スル處左ノ如シ

控訴上告及ヒ職人呼出費用ヲ豫納セシム  
十八年一月布告第二號ヲ以テ輕罪ニ係ル控訴ノ規則ヲ定ム  
十九年六月勅令第四十六號ヲ以テ罰金及追徵ニ係ル上告人ノ豫納金ヲ定ム

九年布告第六十三號ヲ以テ控訴人并無罪釋放者ノ旅費支給方ヲ定ム裁判費用ノ額ニ關スル十四年一月廿九日法律制定亦同部ニ載ス

輕罪ニ係ル控訴規則ヲ定ム

十八年四月内務省達第百三十三號ヲ參照ス可シ監獄囚徒及ノ部ニ載ス

本案明治十四年第四十五號ノ布告ハ事實及ヒ他ノ成規ニ照シ不都合ノ廢不少即該布告ノ冒頭ニ公訴私訴ニ係ル控訴上告云々トアリ而シテ其一項ニ控訴上告スル者ハ其訟訴費用ヲ豫納セシムヘシト有之所謂私訴トハ刑事ニ附帶セルモノト雖モ亦民事ノ訴ナリ他ノ單一ノ民事ヲ上訴スルニ其費用ヲ豫納セシムルノ法ナシ而シテ今等シク民事ノ訴即私訴ニ付テハ其費用ヲ豫納セサルハ上訴ヲ得セシメサルハ理ニ於テ穩當ナラストス且刑事ノ控訴ハ既ニ當分實施セサルノ布告アリタルニ付テハ其上告ハ從前仍ホ豫納等ノ法ナキニ新法御テ此法アリハ事實不都合ナリ又同布告第三項ニ被告人證人ノ旅費日當ヲ豫納スルノ資力ナキ時ハ裁判所ヨリ立替置ヘシトアリ而シテ先是朱書參照ノ通明治九年第六十三號布告第三項及昨十四年一月司法卿制定ノ趣モ有之共ニ地方廳ヨリ支出スルノ慣例ニ矛盾セリ且又同布告第二項ニ證人ノ呼出ヲ請フ者ハ旅費日當等ノ金額ヲ豫納セシムヘシト有之候處已ニ前件ノ理由ニ依リ第三項ヲ削除スル上ハ隨テ其資力ナキ者ハ必要ナル證人ヲモ或ハ呼出スコトヲ得サルノ不幸ナキヲ保セス依テ該布告ハ申奏ノ通全体取消ス可トス

右ニ依リ布告案左ノ通ニテ可然裁上申候也

明治十四年十二月十七日太政大臣公署三條實美 司法卿伯山田顯義副署

第一條 控訴ハ治罪法中本案ノ裁判言渡前ニ許シタルモノト雖モ總テ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二條 控訴ノ期限内ハ控訴ヲ爲サスシテ直ナニ上告ヲ爲スコトヲ得但對手人控訴ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラス

第三條 被告ノ公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴ヲ爲サントスルトキハ裁判費用ノ保證トシテ金十圓ヲ豫納スヘシ

第四條 被告人ニ於テ證人鑑定人ノ呼出ヲ請求スルトキ前條保證金ニテ不足ト認ムル場合ニ於テハ別段其費用ヲ豫納セシムヘシ

第五條 治安裁判所ニ於テ爲シタル輕罪ノ裁判言渡ニ對スル控訴ハ管轄輕罪裁判所ニ之ヲ爲スヘシ其控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ治罪法中輕罪ノ控訴ニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判スヘシ

右奉 勅旨布告候事

司法省上申十七年七月十七日

明治十四年第七十四號布告ヲ以テ治罪法中刑事ノ控訴ニ關スル條件ハ當分ノ内實施セサル旨相定メテ候處元來刑事裁判ハ鄭重ノ法式ヲ履行シ諸般ノ證據ニ據リ罪ノ有無輕重ヲ判定スル者ナリト雖モ其判定ノ錯誤ナキヲ保スコカラス而シテ控訴實施セラレタルハ他ナシ濫訴ノ弊アランコトヲ恐ルハト莫大ノ經費ヲ要スルトコトヲ止ムコトヲ得ス此ニ至リタル者ナル可シ然レモ條理上ニ就テ考フルニ財產ニ關スル者即チ民事ノ訴訟ヨリモ身體ニ關スルモノ即チ刑事ノ訴訟ハ之ヲ鄭重ニセサル可カラス然ルニ刑事ノ訴訟ニ對シテハ控訴ヲ許サレズ民事ノ訴訟ノミ控訴ヲ許サルハ允當ナラサルカ如シ又實際ニ就テ考フルニ上告ハ單ニ法律ノ點ニ止マリ事實ニ及ホスヲ得サルヲ以テ控訴ノ道ヲ開カサルハ或ハ無罪者冤枉ニ陥リ有罪者法網ヲ脱スル等ノ弊ナキヲ保スコカラス今也條約改正ニ際シ刑事ノ控訴ヲ許サレタル如キハ頗ル我法律ノ瑕瑾タルヲ免カレズ然レモ治罪法ノ規則ヲ總テ實施セラレハニ於テハ今日ノ民情復々濫訴ノ弊ヲ生スルノ恐ヲ免レズ從テ多額ノ經費ヲ要スルヲ以テ今其中庸ノ方法ヲ設ケサルヲ得ス因テ明治十四年第七十四號布告ヲ廢止セラレ當分ノ内別紙ノ通控訴ノ制限規則御制定相成候様致度御布告案并ニ說明書相添此段上申仕候也

參事院議案十七年十二月二十二日

司法省上申輕罪ノ控訴實施ノ件審査スル處左ノ如シ

輕罪ノ控訴實施ニ付處ルヘキハ費用ト濫訴トニ在リ今呈案ノ如ク被告人ヲシテ訴訟費用ヲ豫納セシムルハ費用ヲ補ヒ濫訴ヲ防クコトヲ得ヘク且濫訴費用等官ノ支出ニ屬スル者ト雖モ實際ニ就テ概算スルニ許多ノ金額ヲ要セシテ實施ヲ爲スコトヲ得ヘク極メテ便宜ノ儀ニ付行文上文字ノ穩當ナラサル者ハ多少修正ヲ加ヘ上申ノ通御裁可相成可然ト認定ス

右ニ由リ布告案左ノ通ニテ可然裁上申候也

勅令 十九年六月九日內閣總理大臣伯伊藤博文司法大臣伯山田顯義副署

罰金及追徴ニ係ル上告豫納金ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
朕罰金及追徴ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲サントスルトキハ其罰金及追徴金ノ十分ノ一ニ當ル金額ヲ上告趣意書ニ添へ原裁判所書記局ニ預置ク可シ否ヲサレハ上告ヲ爲スコトヲ得ス若シ上告不當ナルトキハ大審院ニ於テ其全部又ハ幾分ヲ没入スルノ言渡ヲ爲スヘシ

罰金及追徴ニ係ル上告豫納金ノ件

司法省稟請十九年二月二十五日  
 近來刑事上告ノ件數日一日ニ多キヲ加ヘ殆ント底止スル所ヲ知ラス就中諸規則ノ違犯者其過半ヲ占ム  
 是レ體刑ノ言渡ヲ受ケタル者ニハ刑法第五十一條ニ依リ其上告不當ナルハ後判宣告ノ日ヨリ刑期ヲ  
 起算スルカ故ニ自カラ濫訴ヲ牽制シ且ツ上告者ヲシテ敗訴ノ責ニ任セシムルノ制裁アリト雖モ特  
 金刑ノ言渡ヲ受ケタル者ニ至テハ則チ何等ノ制裁無キカ故ニ原裁判ノ當ルト當ラサルト問ハス唯  
 濫ニ上告ヲ試ミ以テ其判決アルマテ罰金又ハ追徴金ニ充ツヘキ金額ヲ濫用スルノ目的ヲ以テ故  
 弊ヲ防止スルコト今日ノ急務ナリトスル所以ナリ夫レ民事ノ上告ニ豫納金ノ制アリ輕罪ノ控訴ニ裁  
 費用ノ保證金豫納ノ制アリ又佛國ノ如キハ上告敗訴者ニ罰金ヲ科スルノ制ヲ定メタリ惟フニ是皆濫  
 訴ヲ防止スルノ道ナリ金刑ノ言渡ヲ受ケタル者ニ至テモ其執行ヲ停止セシムル身代限マテノ徵收手續ヲ爲シ換刑處分ヲ  
 追徴ノ言渡ヲ受ケタル者ニ至テモ其執行ヲ停止セシムル身代限マテノ徵收手續ヲ爲シ換刑處分ヲ  
 行スル場合即チ體刑ヲ施スヘキトキニ至テモ其執行ヲ停止セシムル身代限マテノ徵收手續ヲ爲シ換刑處分ヲ  
 ト爲リタルモシテ何レハ金刑ノ言渡アリタル上ハ政府之レカ債主ト爲リ受刑者之レカ債主ト爲  
 ナリ而シテ濫訴防止ノ目的ハ此方法ニ依テ始テ之ヲ達スルコトヲ得ヘシト考査候問左ニ法案ヲ草  
 段上奏候也

法制局議案十九年五月十一日

別紙司法省請願罰金及追徴ノ言渡ヲ受ケタル者上告制限ノ儀ヲ審案スルニ金刑ノ言渡ヲ受ケタル者近  
 來濫リニ上告ヲ試ミ其判決ノ罰金又ハ追徴金ニ充ツヘキ金額ヲ濫用スルノ目的ヲ以テ故ラニ完  
 納期限ヲ遷延スルカ如キハ其弊害實ニ容易ナラサルヲ以テ速ニ法律ヲ設ケ之ヲ防止セシムルハカ  
 ス然レトモ同省呈案ノ如ク裁判未タ確定ニ至ラサルニ先ツ其刑ヲ執行スルハ抑々治罪法ノ原則ニ背  
 スルモノニシテ宜ク行フヘカラサルモノト呈案ハ金刑ノ言渡アリタル上ハ政府之レカ債主トナリ受刑  
 者之レカ債主トナリタルモノニ因リ民事ノ上告ニ於テ原裁判ノ執行停止セサルト同一一般ナリ受刑  
 原則ニ悖ラスト謂フト雖抑々刑事トハ其性質全ク相異ナリ私法上ノ契約ニ成レル貸借ヲ以テ公  
 法上ノ主權ニ屬スル處罰ニ比スヘカラス且彼レニ在テハ其一切ハ傷害シタル榮譽ハ復タ之ヲ回復ス  
 ルトキモ復容易ニ回復シ得ヘシト雖此レニ在テハ其一切ハ傷害シタル榮譽ハ復タ之ヲ回復スヘカラス  
 況ンヤ裁判執行ニ因テ其實力ナキ者ハ罪ノ有無未タ確實セサルニ先ツ身代限處分ヲ受ケサルヘカ  
 ルニ於テオヤ豈ニ酷ト謂ハサルヲ得ンヤ是ノ故ニ今民事上告豫納金ノ制ニ倣ヒ且佛國ノ法ヲ折衷シ上  
 告セントキハ之ヲ罰金又ハ追徴金ニ充テタル罰金又ハ追徴金ノ十分ノ一ニ當ル金額ヲ豫納セシメ上  
 ト爲スヲ可トス蓋シ原裁判ヲ受ケタル日ヨリ上告判決ニ至ルマテノ間平均凡ソ二箇月ト視做ストキ  
 ハ該十分ノ一ニ當ル金額ハ恰モ一箇年六割ニ當ル割合ナルヲ以テ復タ罰金又ハ追徴金ヲ濫用スル

三年ヲ經テ仍ホ事主ノ  
 知レサル贓物ハ没ス  
 十五年五月司法省達丙第  
 二十號ヲ參照ス可シ

司法省達 丙十四年四月二十三日  
 事主ノ有無ニ因テ贓物ヲ區處スル儀ニ付舊兵庫縣大書記官原保太郎ヨリ甲號ノ通伺出候ニ付乙號ノ通  
 太政官ヘ相伺候處丙號ノ通御裁令相成候條爲心得此旨相達候事

甲號

兵庫縣ヨリ司法省ヘ伺十三年十一月二日  
 爰ニ盜犯甲某捕拿所持物品出所ヲ問尋スルニ事主乙某方ニ於テ盜ミシ贓金ヲ以テ購求セシ品ナリト明  
 供レ該犯拘置中逃走百方搜索スルモ踪跡ヲ不得然ルキハ贓金ニテ購求セシ物品事主乙某ヘ賠償ノ爲メ  
 警察官ニ於テ下テ渡可然乎若シ本件事主分明ナラサルトキハ官沒ス可キ哉右差掛タル儀有之ニ付伺出  
 候條至急何分ノ御指揮有之度候也

乙號

司法省伺十四年一月十四日  
 兵庫縣大書記官原保太郎ヨリ別紙ノ通盜犯其竊取シタル金ヲ以テ購求セシ物品ハ事主アレハ警察官限  
 リ下渡置キ事主不明ナルトキハ官沒スヘキヤノ儀伺出候右ハ盜金ヲ以テ購求セシ物品ハ即チ正賊現  
 在ト同視ス可キ者ニ付事主アレハ事主ニ還給セサルヲ得ス若シ盜犯逃亡スレハ其贓品ノミ裁判所ヘ送  
 付スルニ及ハサルニ付警察官限り假ニ下渡置キ追テ盜犯捕ニ就ク際其品物代價ヲ詳記シ盜犯始末書ト  
 共ニ該裁判所ヘ送付シ若シ事主不明ナルトキハ一年間其品物ヲ領置シ仍ホ事主知レサレバ官沒シテ  
 可然哉右ハ法律上成文無之ニ付此段相伺候條早々御指揮有之度候也

丙號

指令十四年四月十八日  
 伺ノ趣ハ三年ヲ經テ仍ホ事主知レサレハ官沒スヘシ  
 但罪證ニ必要ナラサル物件及久シキニ難堪モノハ時限ニ拘ハラス公賣シ其代金ヲ領置スルヲ得  
 司法省議案十四年四月九日  
 別紙司法省伺贓金ヲ以テ購求セシ物品處分ノ儀勸考候處其要旨ハ該物品事主アレハ假ニ之ヲ下渡シ置  
 キ事主不明ナレハ一年間領置シタル後官沒スヘキニ在リ其前段假渡シノ儀ハ異議ナシト雖モ官沒ハ  
 輒ク爲スヘキモノニ非ス去リ連限ナク領置スルハ實際不都合アリ宜ク適度ノ期限ナカルヘカラス伺  
 面一年トアルハ或ハ短期ニ失セン平別紙參照ハ適例ニハアラスト雖モ漂流物取扱規則及ヒ佛國民法第

二千二百七十九條ニ依レハ其ニ真正ノ所有主ハ三ヶ年以後ニ至ラハ其取戻ノ權ナシ蓋シ三年ノ久シキ其主ナキハ法律上自カラ所有權ヲ拋棄シタルモノト看做セシモノナルヘシ此理ニ依リ贓物處分モ三年ヲ以テ没否區別シ穩當ナランカ依テ左ノ通御指令相成可然哉法制部合議ノ上仰高裁候也別紙

司法省達 十四年十二月五日 大審院、裁判所  
治罪法第四百六十二條第二項罰金科料裁判費用及沒收物品ノ徵收ハ書記局ニ於テ之ヲ擔當シ會計主任ヘ引渡ス儀ト可心得此旨相達候事

司法省達 十五年五月十一日 大審院、裁判所  
犯罪ノ用ニ供シタル物件及ヒ犯罪ニ因テ得タル物件ハ本案ノ裁判ヲ言渡ス迄ニ所有主ヲ發見セサル時ハ刑法第四十三條第四十四條ニ從ヒ其本案ノ裁判ト共ニ沒收ノ言渡ヲ爲スヘシト雖モ右ノ物件ハ之ヲ其裁判所々在ノ地及ヒ犯罪ノ地ニ公告シ一年間ヨリ起算スニ所有主ヲ發見シタル時ハ檢察官ヨリ直ニ之ヲ還付スヘシ此旨爲心得相達候事  
但檢察官ニ於テ保存ス可カラサル物件又ハ保存スルニ付費用ヲ要スヘキ者ト思料スル時ハ公賣ノ處分ヲ爲シタル上其代金ヲ保存シ置クヘシ

司法省達 十五年六月二十六日 大審院、裁判所  
犯罪ノ用ニ供シ又ハ犯罪ニ因リ得タル物件ハ轉讓シテ他人ノ手ニ在リ及ヒ沒收スヘキモノ若クハ證據ノ爲メ官ニ保存シ置クニ必要トスルモノヲ除クノ外ハ裁判官檢察官司法警察官ニ於テ實際ノ便宜ニ因リ裁判言渡アルマテ其所有主ヘ假ニ之ヲ下渡シ置クコトヲ得ヘシ此旨爲心得相達候事

司法省告示 十八年四月二十二日 東京控訴裁判所  
元刑部省及司法省裁判所ニ於テ刑事ニ關シ領置シタルモノニシテ現今東京控訴裁判所ニ保管中ノ物件

罰金科料裁判費用及沒收物品ノ徵收ハ書記局ノ擔當トス

所有主分明ナラサル贓物ハ一年間公告セシム

所有主分明ナル贓物ハ假ニ下渡サシム

現ニ東京控訴裁判所ニ保管中ノ物件下渡シ置ク者ハ事由ヲ證明シテ同裁判所ニ出テシム

數種有之候條右下渡ヲ請フ者ハ事由ヲ證明シ來ル七月三十一日迄ニ同裁判所ヘ申出スヘシ  
右告示候事

司法省達 十八年七月二十八日 大審院、裁判所  
沒收物件處分ノ儀ニ付左ノ通太政官ヘ相伺候處朱書ノ通御裁令相成候條自今處分方心得ノ爲メ此旨相達候事

司法省伺 十八年六月九日  
刑事裁判上沒收ニ係ル物件ハ破壊廢毀(燒燬)ノ後若クハ原形ノ儘總テ公賣ニ付シ其代金ハ雜收入トシテ國庫ニ納付ス可キノ成規ニ有之候處今般警視總監大迫貞清ヨリ別紙之通上申相成候因テ審案スルニ犯罪ノ用ニ供シタル器具ニシテ異種ニ屬スルモノ、如キハ警察官ニ於テ豫テ其製造法及用方等ニ注意シ置クキハ犯罪捜査上便利ヲ得ルコト甚カラス犯罪ニ因テ使用ノ器具如何ヲ推知シ隨テ犯人ノ難タルコトヲ發見スルノ場合亦之レナシトセサレハナリ且右異種ニ屬スル器具ノ如キハ其他人ノ私物ニシムルキハ其危險測ル可カラサルヲ以テ必ス先ツ破壞スルニ非サレハ公賣ス可カラサルモノトス已ニ之ヲ破壞センカ餘ス所ハ唯其原質物ノミ之ヲ公賣スルモ管ニ手數ヲ煩ハスノミニシテ巨額ノ收入ヲ得難キヤ明瞭ナリ就テハ自今檢察官ニ於テ犯罪ノ用ニ供シタル物件ノ異種ニ屬スル者其他警察上注意ヲ要スルモノト認メタルキハ之ヲ警視廳若クハ警察署ニ交付シ保存セシメ候様致度右ハ雜收入ニモ關係候儀ニ付一應相伺候條至急何分ノ御指令相成度候也  
指令 十八年七月六日

警視廳ヨリ司法省ヘ伺 十七年十二月十五日  
犯罪ノ用ニ供シタル器具ノ種類如何ヲ詳知スルハ犯罪鑑定等警察上最モ必要ノ事ニ付キ爾後其異種ニ屬スルモノハ之ヲ蒐集シテ當廳ニ保存致度就テハ當地方各裁判所ニ於テ沒收物品ノ内右等ノモノ有之節ハ其都度當廳ヘ差廻候様御達置相成度此段上申候也

內務省達 十八年九月十八日 府廳  
犯則ニ由リ官沒シタル物件ヲ裁判所ノ囑托ニ依リ戸長ニ於テ公賣取扱タル節右公賣ニ關スル費用(看守者ノ手當并藏敷料)ハ其裁判所ノ費用ニ相立ヘキモノニ付戸長役場費ヨリ支辨セサル儀ト心得ヘシ此旨  
筆墨紙薪炭油雜費)

沒收物件公賣費用支辨方

保存ス可キ沒收物件取扱方

相達候事

司法警察事務上時宜ニ依リ巡査ヲシテ警部ノ代理ヲ爲サシムル儀モ可有之此旨布達候事  
十六年二月司法省丁第九號ヲ參照ス可シ

司法省布達 第十四号十月十日  
新法實施ノ後ハ司法警察事務上時宜ニ依リ巡査ヲシテ警部ノ代理ヲ爲サシムル儀モ可有之此旨布達候事  
司法省達 丙十四年十月十日  
新法實施ノ後ハ司法警察事務上時宜ニ依リ不得止場合ニ於テハ巡査ヲシテ警部ノ代理ヲ爲サシメ不苦候條此旨相達候事  
但代理ヲ命スヘキ巡査ノ姓名ハ豫シメ其地方輕罪并違警罪裁判所へ通牒致シ置候儀ト心得ヘシ  
司法省達 丁十四年十月十日  
司法警察事務上時宜ニ依リ巡査ヲシテ警部ノ代理ヲ爲サシメ候儀本年當省丙第十三號ヲ以テ相達候條此旨可相心得事

司法省達 丙十五年三月二十二日  
治罪法第二百八十五條ニ從ヒ調書ヲ作りタル司法警察官ヲ證人トスルキハ書記局ヨリ報知書ヲ以テ出廷セシメ宣誓セシムルニ及ハス書記ノ次席ニ著テ陳述セシムヘシ此旨相達候事

司法省達 丙十五年六月二十二日  
治罪法第九十六條ニ從ヒ告發シタル官吏ヲ證人トシテ公廷へ呼出ス時ハ本年本省丙第十號達ニ準シ處分スル儀ト心得可シ此旨相達候事  
但シ巡査及ヒ等外吏ハ此限ニアラス

司法省達 丙十五年十一月二十四日  
本年丙第二十二號達但書左ノ通改正候條此旨相達候事  
但巡査及ヒ等外吏ノ著席ハ此限ニアラス

調書ヲ作りタル司法警察官ヲ證人トスルキハ宣誓セシムルニ及ハス  
十五年六月司法省達丙第二十二號同年十月同省達丙第二十二號十一月同省達丙第二十二號十二月同省達丙第二十二號  
同省達丁第九號ヲ參照ス可シ  
告發シタル官吏ヲ證人トスルキハ宣誓セシムルニ及ハス  
十五年十月司法省達丙第三十一號ヲ以テ但書ヲ改正ス

前條達但書ヲ改正ス  
十六年二月司法省達丁第九號ヲ參照ス可シ

司法省達 丙十五年十一月二十八日  
總テ官吏ヲシテ職務ニ關スル事件ニ付證明セシムル爲メ其呼出ヲ要スルキハ本年當省丙第十號達ニ準シ取扱フ可シ此旨相達候事  
但巡査及ヒ等外吏ノ著席ハ此限ニアラス

司法省達 丙十六年二月二十四日  
明治十四年十月當省甲第五號布達ニ據リ巡査ニ於テ警部代理ノ資格ヲ以テ取扱事件ニ付テハ裁判上渾テ警部同様ノ取扱ヲ爲スヘシ此旨相達候事  
但從前ノ指令内訓本文ニ牴觸スル條件ハ取消候事

司法省布達 甲十四年十二月二日  
治罪法第三百十五條裁判言渡ノ謄本又ハ其拔書ヲ求ムル者ハ其用紙一枚金三錢ノ費用ヲ上納スル儀ト可心得此旨布達候事

司法省何十四年四月十二日  
治罪法第三百十五條訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁判言渡書ノ謄本又ハ其拔書ヲ求ムルコトヲ得ルト有之依テハ豫メ其費用ノ額ヲ定メ布達不致候テハ實施ノ際支障可有之ニ付右用紙ハ各裁判所公用界紙ヲ用ヒ一枚金三錢ツ、ノ費用收入致シ度然ルニ無力ニシテ其費用ヲ出ス能ハサル者之ヲ得ル能ハスシテ上訴ノ支障トナルニ於テハ自然控訴上告ノ途ヲ塞キ候ニ付無力者ハ其費用ヲ徴收セス之ヲ下附スル様致シ度此段及申奏候尤右兩條御裁可ノ上ハ費用ノ儀ハ別紙ノ通布達致シ無力者ノ儀ハ顯然布達候トキハ有力者モ亦大口實トナスノ弊ヲ生ス可キヲ以テ此旨各裁判所へ相達置キ不得已者ノニ據リ處分爲致候見込ニ有之候條至急仰御裁可候也

指令十四年九月二十四日  
申奏ノ通  
司法部議案十四年九月十二日  
別紙司法部申奏裁判官渡ノ贖本ヲ請求スル代價ノ儀右ハ申奏ノ通御裁可相成可然哉法制部合議仰高裁  
候也

司法省達 十四年三月十一日  
本年甲第七號布達

裁判官渡ノ贖本又ハ拔書ヲ求ムル者代價ノ儀無資力ニシテ上納スル能ハサル者ニ限り無代價ニテ下渡  
スモ不苦儀ト可心得此旨相達候事

司法省達 十五年一月二十日  
十四年甲第七號布達裁判官渡ノ贖本ヲ求ムル者上納金并ニ同年丁第二十六號使丁規則第十五條ノ違約  
金徴收ノ上ハ雜收入ニ組入月々本省へ納付候儀ト可心得此旨相達候事

司法省達 十五年二月十三日  
檢察官ニ於テ裁判所ノ命令及ヒ言渡ノ執行ヲ指揮スルニ當リ其命令書若クハ言渡書ノ贖本ヲ要スル時  
ハ該書記局ニ於テ速ニ其贖本又ハ拔書ヲ作り交付ス可キ儀ト心得可シ此旨相達候事

司法省達 十五年三月六日  
處刑宣告ノ後犯人ヲ司獄官へ護送セシムル際ニ於テハ監獄則ニ從ヒ檢察官ヨリ右宣告書ノ贖本ヲ司獄  
官へ送達スル儀ト心得ヘシ此旨相達候事

司法省達 十五年三月二十七日  
裁判官渡ノ贖本料ハ當

無資力ニシテ贖本料ヲ  
上納スル能ハサル者ニ  
限り無代價ニテ下渡サ  
シム

贖本ノ上納金使丁ノ違  
約金等ハ雜收入ニ組入  
司法省ニ納付セシム

使丁規則ノ部ヲ參照スヘ  
シ

檢察官ニ於テ命令書及  
言渡書ヲ要スル時トキ  
ハ書記局ヨリ其贖本ヲ  
交付ス

處刑宣告ノ後犯人ヲ司  
獄官ニ護送スル時ハ宣  
告書ノ贖本ヲ送達セシ  
ム

分送警罪ニ限り徴收セ  
ス  
十八年十二月司法省達丙  
第十號ヲ以テ改ム

十五年五六兩月間ノ豫  
審終結言渡并公判言渡  
ノ贖本ヲ司法省ニ郵送  
セシム

已決囚ノ犯罪ヲ裁判所  
ニ於テ處刑等言渡ノ場  
合ハ宣告ノ贖本ヲ司獄  
官ニ送達セシム

違警罪裁判ノ正式ニ係  
ル者ハ其言渡書ノ贖本  
ヲ下附ス可キ費用ヲ徴  
收ス

明治十四年十二月  
當省甲第七號布達裁判官渡ノ贖本又ハ其拔書ヲ下付スル費用ハ當分違警罪ニ限り徴收  
セサル様取計ヘシ此旨相達候事

司法省達 十五年十月十二日  
本年五六兩月間ノ處分ニ係ル豫審終結言渡并公判言渡書ノ贖本ヲ製シ本月三十一日限り其地差立當省  
へ郵送スヘシ此旨相達候事  
但治安裁判所ノ分ハ所轄始審裁判所ニテ取纏メ一同可差出候事

司法省達 十七年六月二十三日  
已決囚ノ犯罪ニ付キ之ヲ裁判所ニ呼出シ審理ノ未刑ノ言渡ヲ爲ス場合ニ於テハ明治十五年當省丙第八  
號達ニ依リ檢察官ヨリ其宣告書ノ贖本ヲ司獄官ニ送達スルハ勿論自今已決囚ニ對スル其他ノ宣告ニ付  
テモ其豫審ニ係ルト公判ニ係ルトナ問ハス書記ヨリ宣告書ノ贖本ヲ司獄官ニ送致シ又證人トシテ出廷  
セシメタル已決囚用濟ニ至リタル時ハ亦書記ヨリ其旨ヲ司獄官ニ報知ス可キ儀ト心得ヘシ此旨相達候事

司法省達 十八年十二月九日  
明治十五年三月當省丙第十二號ヲ以テ違警罪裁判官言渡書ノ贖本又ハ其拔書ヲ下付ス可キ費用ハ當分徴收  
ス可カラサル旨相達置候處本年九月第三十一號ヲ以テ違警罪即決例公布相成候付テハ自今該裁判ノ正式  
ニ係ルモノハ該費用ヲ徴收シ其即決ニ係ルモノハ從前ノ通取計ヲ可シ此旨相達候事

司法省達 十八年十二月九日  
裁判官言渡書ノ贖本又ハ其拔書ヲ下付ス可キ費用ハ違警罪ニ限り當分徴收不致旨去十五年三月當省丙第  
十二號ヲ以テ相達該時其旨及上申置候然ルニ本年九月第三十一號公布ヲ以テ違警罪即決例御制定相成  
候ニ付テハ自今該裁判ノ正式ニ係ルモノハ該費用ヲ徴收シ其即決ニ係ルモノハ從前ノ通徴收セサル  
旨今般内務卿協議ノ上別紙寫書ノ通相達候條此段及上申候也

外國勳章佩用者犯罪ノ  
節處分方  
十五年十一月司法省達  
第五十六號ヲ送付ス可シ  
十二年四月二十三日勳  
章等區分ノ達ハ同年四月  
司法省達第十四號ニ就  
テ看ル可シ官廳士族犯  
罪取扱ノ部ニ載ス

賞勳局ヨリ司法省へ回答 十四年十一月七日  
警視總監樺山資紀ヨリ外國勳章佩用者犯罪ノ節處分ノ儀伺出候ニ付御照會ノ趣致承知候外國勳章ヲ受  
領シ佩用ノ免許狀ヲ得タル者ニ勅奏判任官ニ准スル區別ハ無之候へ共其犯罪ノ次第ニヨリテハ曾テ授  
與スル處ノ佩用免許狀ヲ褫奪可相成ニ付明治十二年四月二十三日勳章褫奪區分ノ達ニ照據シ其罪目ニ  
該ル者ハ其都度當局へ御申牒可然尤外國勳章及勳記ハ褫奪スル限リニアラサル儀ト思考致候  
右閣裁ヲ經テ及回答候也

追テ本件ハ御前職ヨリ照會有之候處於當局評議ノ上經閣裁候等時日ヲ要シ終ニ今日ニ遷延候儀ニ候  
條此段併テ申進候也

賞勳局何十四年十月十九日

別紙司法卿照會審案候處外國勳章佩用者ト雖モ固ヨリ賞勳局簿冊中ニ記名候者ニシテ其佩用スルハ經  
允裁候上免許候儀ニ付免許狀ヲ其儘ニ付シ置キ一般人民ト見做シ處分候ハ不都合ニ可有之因テ外國ノ  
類例等ヲ勘査候ニ魯國ニテハ犯罪アレハ其佩用ノ權ヲ止ムルコト本國勳章ヲ褫奪スルニ同シ佛國ニテ  
ハ右様ノ節ハ曾テ政府ヨリ授與シタル免許狀ノミヲ褫奪スル例ニ有之其之ヲ所有シ或ハ政權ノ及ハサ  
ル地ニ於テ佩用スルハ敢テ問サル趣ニ相見候條左案ノ通回答可仕哉法制部合議ノ上仰允裁候也

司法省ヨリ賞勳局へ照會十四年七月二日

警視總監樺山資紀ヨリ外國ノ勳章ヲ佩用スル者犯罪ノ節處分ノ儀ニ付別紙ノ通伺出候右ハ外國勳章ヲ  
受領佩用セシ者ニ付別ニ准勅奏判等ノ區別無之ニヨリ一般人民ト同シ各本籍ヲ以テ取扱フヘキモノ  
ト存候ニ付別紙太政官御達ニ照據シ具中スルノ限ニ在ラサル儀ト思考候條此段一應及御照會候也

警視廳ヨリ司法省へ何十四年五月二十七日

勳章者犯罪等ノ節取扱方ノ儀ニ付テハ夫々御達ノ趣モ有之候處外國勳章ヲ受領佩用セシモノ、儀ニ付  
テハ未タ何等ノ御達無之右等犯罪ノ節ハ一般人民ト看做シ可取扱ハ勿論ノ儀トハ存候へ共前規無之相  
伺候條至急仰御指令候也

陸軍省海軍省司法省へ達 十五年三月一日

帶勳者罪ヲ犯シ公權ヲ剝奪又ハ停止セラル、其ハ其罪狀并刑名宣告文寫相添速ニ賞勳局へ申報スヘシ  
此旨相達候事

帶勳者犯罪及刑ノ後賞  
勳局へ申報方  
十六年九月達第三十九號  
ヲ送付ス可シ

但剝奪公權ノ者ハ勳記勳章并ニ年金票共收奪ノ上同局へ可差出事

賞勳局何十五年二月二日

從前文官及非役ニシテ勳位ヲ有スル者國事犯又ハ罪破廉耻甚ニ當ルルハ司法卿其罪狀及刑名ヲ當  
局ニ具申シ其軍人軍屬ニ係ルルハ陸海軍卿ヨリ同シ具申シ勳位褫奪ノ後刑名宣告スルノ例ニ有之候  
處本年一月一日ヨリ三刑法實施セラレ候ニ付從前ノ例規ハ自然消滅ニ歸シ候新刑法ニヨリハ勳章并  
ニ有之ニ付自今帶勳者ニシテ罪ヲ犯シ禁錮以上ノ刑ニ處セラレ實際勳位ヲ剝奪シ又ハ停止セラル、モ  
ノ之レアリト雖モ當局ニ於テハ些モ之ヲ開知スル能ハス其勳章ヲ引揚ケ又ハ年金票方ヲ廢止スル等ノ  
定規無之ヲ以テ當局管理上忽チ差支ヲ生シ候ニ付左案ノ通陸海軍司法ノ三省へ御達相成度此段上申仰  
允裁候也

第二局議案十五年二月十日

別紙賞勳局上申ノ趣ヲ案スルニ從前帶勳者國事犯又ハ罪破廉耻甚キニ當ルルハ文官及非役帶勳者ハ司  
法卿ヨリ又軍人軍屬ハ海陸軍卿ヨリ其罪狀刑名ヲ該局へ具申シ勳位褫奪ノ後刑名宣告スルノ例ニ有之  
候處本年一月一日ヨリ三刑法實施セラレ候付テ勳章并年金票ヲ有スル權ノ剝奪ハ新刑法中附加刑處分剝奪  
公權ノ一部分ニ有之ヲ以テ自今ノ姿ニテハ該局ニ於テハ時々其宣告ヲ知ルニ由ナク從テ其管理上差支  
不致ニ付帶勳者公權剝奪又ハ停止セラレハ其時々罪狀刑名宣告文寫ヲ添ヘ該局へ報告致候條陸海  
軍司法ノ三省へ御達相成度趣ニ有之事情尤ノ次第ト存候間御允可相成可然哉左案取調仰高裁候也

司法省達 十五年三月六日  
帶勳者罪ヲ犯シ公權ヲ剝奪又ハ停止スルノ言渡アリタルルハ其罪狀并刑名宣告文ノ寫ヲ以テ當省へ可  
届出此旨相達候事

但剝奪公權ノ者ハ勳記勳章并ニ年金票共收奪ノ上當省へ差出スヘク候事

司法省達 十五年三月二十七日  
今般太政官ヨリ別紙ノ通御達相成候條此旨相達候事

司法省へ達 十五年三月二十二日

勳任官禁錮ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シ及ヒ奏任官華族帶勳有位ノ者禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シタ

勳任官華族帶勳有位者  
犯罪ノ節取扱方  
十六年五月司法省達丙第  
二號ヲ送付ス可シ  
十六年九月達第三十九號  
ヲ以テ勳章并年金票及停  
止取扱手續ヲ定ム

ル時ハ當該檢察官ヨリ司法卿ニ具狀シ司法卿其事由テ奏聞シテ處分スヘシ但現行犯罪ニ係ル者ハ處分シテ後ニ奏聞スルコトヲ得此旨相達候事

勅任官華族及勳位ヲ有スル者罪ヲ犯セハ事由ヲ奏聞シテ旨ヲ請ヒ處分スルノ例規ニ有之候處新法實施ノ日ニ至レハ右ノ例規ハ當然廢止ニ屬ス可キ儀ニ付之ニ代ルヘキ規則ヲ御制定無之テハ尋常人民ト一般ニ取扱フ爲スニ至リ休裁宜シカラス因テ右處分方ニ付一定ノ規則御制定相成度御達案相添此段及申奏候也  
參事院議案十五年二月二十三日  
別紙司法省中奏勅任官華族及勳位ヲ有スル者犯罪處分ノ件審查スル所左ノ如シ  
右ハ別紙參照ノ通り勅任官華族ノ輩ハ從前ノ法ニ於テ特別ニ以テ取扱ヒ來候得ハ尋常人民ト自ラ區別ナカルヘカラス司法省ノ申奏ヲ至當ト爲ス  
右ニ由リ申奏ヘ附箋ノ通司法省ヘ御達相成可然哉上申候也

司法省達 十五年十一月十五日 大審院第... 內國ノ勳章ヲ賜リタル外國人并外國ノ勳章ヲ佩ヒタル外國人身分取扱方

內國ノ勳章ヲ賜リタル外國人并外國ノ勳章ヲ佩ヒタル外國人身分取扱ノ儀ニ付別紙ノ通太政官ヘ相伺候處朱書ノ通御指令相成候條爲心得此旨相達候事

司法省同 十五年五月二十六日

外國ノ勳章ヲ賜リタル外國人ヘ內國人ノ帶勳者ト取扱フ同ス可キハ固ヨリ言フ餘ナク亦內國人ニシテ外國ノ勳章ヲ帶ル者ニ於テモ勳章ハ外國ノ勳章ナレバ其佩用ヲ許容スル等ハ我カ政府ノ處置ニ係ルノミナラス其外國ノ勳章ヲ受ケタル者ハ該勳章ニ相當スルノ榮譽ヲ有スレハ之ニ相當スルノ取扱ヲ爲サハル可カラズ因テ內國帶勳者ト同一ノ取扱ヲ爲スヘキ者ト存候得共右ハ身分取扱上ニ關係スルコトニシテ別ニ可據法例ナキヲ以テ相伺候處果シテ其取扱ヲ內國帶勳者ト等クス可キ義ニ候ハ、外國ノ何々勳章ハ內國ノ何々勳章ニ相當スル者ナルヤ此段合テ至急何分ノ御指揮有之度候也  
指令十五年十一月九日

何之趣第一項同之通第二項外國ノ勳章ヲ受クル內國人ヘ其受佩ヲ許否スルニ止ルモノニシテ身上特別ノ取扱ヲ要セザル儀ト心得ヘシ

賞勳局ヨリ第二局ヘ回答十五年十月十六日  
司法省同内外勳章受領者身分取扱ノ義ニ付御照會ノ趣審查候處其第一項內國ノ勳章ヲ受領セル外國人ヘ內國人帶勳者ト其取扱ヲ同フスヘキハ勿論ナリ其第二項外國ノ勳章ヲ受領セル內國人ニハ身分取扱

上特殊ヲ要セス唯其受佩ノ許否ハ政府ニアリ受領者犯罪アレハ其情況ニ因リ免許狀ヲ收没スト雖モ身分ノ取扱ハ關係之レナキ儀ト存候此段及回答候也  
第二局議案十五年十月十八日

別紙司法省同外國人勳章受領者身分取扱ノ件ヲ案スルニ內國ノ勳章ヲ受クル者ハ內國人ヲ問ハス身上取扱上同一ニスヘキハ論ヲ論サレトモ內國人ニシテ外國ノ勳章ヲ受クル者ハ我カ政府ニ於テ唯其受佩ヲ許否スルノミニシテ若シ受領者ニ於テ犯罪アルトキハ其情狀ニ依リ免狀ヲ收没スルニ止マルヘシ例ヘハ英人ニシテ佛國ノ勳章ヲ受ケ或ハ佛人ニシテ英國ノ勳章ヲ受クルモ各自國ニ於テハ未タ身上取扱ヲ特殊ニスルアルヲ聞カス故ニ內國人ニ於テモ特別ノ身分取扱ヲ要セザル方可然且別紙賞勳局回答ノ趣モ有之義ニ付左案ノ通御指令相成可然哉仰高裁候也

勅任官華族并ニ有位帶勳者犯罪取扱方ノ儀ニ付別紙ノ通太政官ヘ相伺候處朱書ノ通御指令相成候條爲心得此旨相達候事

但御指令文中十五年三月二十二日附御達ハ同年當省丙第十一號達ト可相心得事  
司法省同 十六年三月三十一日

勅任官禁錮ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シ及ヒ奏任官華族帶勳有位ノ者禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ犯罪取扱方ノ儀ニ付テハ明治十五年三月二十二日附テ以テ御達有之候處其罰金ニ處スヘキモノト雖モ或ハ本人ヲ出廷セシムル場合モ有之且又拘留ノ刑ニ處シ及ヒ罰金科料ヲ納完セサル節ハ則換刑シテ輕禁錮又ハ拘留ニ處スヘキ儀モ有之候條右本人ヲ出廷セシムル場合及ヒ換刑シテ輕禁錮又ハ拘留ノ刑ニ處スヘキ時ハ矢張其時々奏聞可致儀ト相心得可然哉此段相伺候也  
指令 十六年五月八日

但十五年三月二十二日附其省ヘ達中帶勳有位者トアルハ勳六等以上從六位以上ヲ指シタル儀ト可相心得事

參事院議案十六年四月二十一日  
別紙司法省同勅任官華族等犯罪取扱ノ件審查スル處左ノ如シ  
右特例ノ取扱ヲ達セラレタル精神ハ尋常人民ト區別セシモノナリ因テ該例ノ如キ場合ハ無論其時々



奏聞ス可キモノトス尤モ十五年三月二十二日付同省へ達中帶勳有位者ノ儀ハ勳六等以上從六位以上ヲ指示シタルモノトセサレハ他ノ該者取扱ヒ成規ニ觸ル、ノ庶不尠不都合ニ付其旨此際併テ御指令右ニ由リ御指令案左ノ通ニテ可然哉上申候也

達 十六年九月十三日(宣統二年)第三十九號官省院縣府縣

本年六月二十二號布告ノ旨ニ依リ勳章年金褫奪及停止取扱手續左ノ通相定候條此旨相達候事

勳章年金褫奪及停止取扱手續

第一條 勳章ヲ有スル者左ノ項目ニ觸ル、トキハ榮譽ヲ汚辱シタル者トス

第一項 重罪輕罪ノ刑ニ該ル者

但輕禁錮以下ノ刑ニ該ル者ハ其所犯ノ情狀ニヨル

第二項 懲戒例及免罰條例ニヨリ免官シタル者

第三項 素行修マラス帶勳者タルノ面目ヲ汚ス者

第二條 勳章ヲ有スル者ニハ先ツ其勳章勳記年金票佩用免許狀ヲ褫奪シタル後處刑言渡ヲ爲スモノトス

第三條 第一條第一項ニ觸ル、者アルトキハ裁判管轄長官ヨリ司法卿又ハ陸海軍卿ヲ經由シテ其罪狀及刑名ヲ賞勳局總裁へ具申スヘシ

第四條 第一條第二項第三項ニ觸ル、者アルトキハ所轄長官又ハ地方官ヨリ其情狀ヲ賞勳局總裁へ具申スヘシ

第五條 賞勳局總裁ハ其具狀ヲ審查シ重禁錮以上ノ刑ニ該ル者ハ直ニ上奏シ其輕禁錮以下ノ刑又ハ第一條第二項第三項ニ觸ル、者ハ議定官ノ會議ニ依テ其褫奪ノ當否ヲ論定シ褫奪スヘキ者ハ奏請ス

第六條 褫奪ノ裁可アリタルトキハ賞勳局總裁ハ褫奪狀ヲ作り褫奪ノ具申ヲ爲シタル長官ヲ經由シテ本人へ傳達セシム

勳章年金褫奪及停止取扱手續ヲ定ム  
十六年六月二十二號布告ノ旨ニ依リ勳章年金褫奪及停止取扱手續左ノ通相定候條此旨相達候事  
勳章及年金褫奪ノ手續ハ勳章及年金票佩用免許狀ヲ褫奪シタル後處刑言渡ヲ爲スモノトス  
勳章及年金褫奪ノ手續ハ勳章及年金票佩用免許狀ヲ褫奪シタル後處刑言渡ヲ爲スモノトス  
勳章及年金褫奪ノ手續ハ勳章及年金票佩用免許狀ヲ褫奪シタル後處刑言渡ヲ爲スモノトス  
勳章及年金褫奪ノ手續ハ勳章及年金票佩用免許狀ヲ褫奪シタル後處刑言渡ヲ爲スモノトス

勳章年金褫奪及停止取扱手續

褫奪ニ及ハサルトキハ賞勳局總裁ヨリ褫奪ノ具申ヲ爲シタル長官へ通知スヘシ  
第七條 勳位進級セシ者ナルトキハ前級ノ勳章勳記ヲモ褫奪スヘシ年金票モ亦同シ  
第八條 褫奪シタル勳章勳記年金票佩用免許狀ハ褫奪ヲ行ヒタル官廳ヨリ賞勳局へ還納スヘシ  
第九條 勳章ヲ有スル者重罪輕罪ノ訴ヲ受ケ拘留セラレタルトキハ其年月日及ヒ事由ヲ裁判管轄長官ヨリ司法卿又ハ陸海軍卿ヲ經由シテ賞勳局總裁へ具申スヘシ  
但公訴權消滅スルカ若クハ放免ノ言渡ヲ爲シタルトキハ亦之ヲ申告スヘシ

司法省達 十七年一月十二日(宣統二年)第一號大審院裁判所  
勳章年金褫奪及停止取扱手續ノ儀ニ付太政官ヨリ左ノ通被達候條此旨相達候事  
司法省へ達 十六年二月二十八日

別紙陸軍省勳章年金褫奪及停止取扱手續ノ儀朱書ノ通及指令候條此旨相達候事

陸軍省同 十六年十一月十五日

先般勳章年金褫奪及停止取扱手續御達相成候處其以前即チ本年第二十二號御布告後第三十九號御達迄之間ニ於テ右ニ適該スル者アルモ勿論該手續ニ準據ス可カラサル儀ト相心得可然哉之旨伺出候處右ハ本年第二十二號布告發布後ハ第三十九號達ニ據リ處分スル儀ト相心得旨御指令之趣敬承仕候然ルニ該手續第二條ニ據レハ勳章褫奪シタル後處刑言渡ヲ爲スモノト有之候處右第二十二號御布告後第三十九號御達迄之間ニ於テ已ニ輕重禁錮ノ處分ヲ受ケ又ハ已ニ其刑滿期後ノ者ト有之右等ハ如何ノ手續キヲ以テ褫奪方取扱可然哉至急何分ノ御指揮相成度此段更ニ相伺候也  
指令 十六年十二月二十八日

伺ノ趣本年第二十二號布告後第三十九號達發表以前ニアツテ既ニ刑ノ言渡ヲナシ未タ勳章褫奪ノ手續ヲナサ、ルモノハ該達第三條ノ手續ニヨリ更ニ其罪狀及刑名ヲ賞勳局總裁へ具申スヘキ儀ト相心得事

司法省へ通牒 二十年四月十一日  
國幣中社吉備津神社宮司坂東直記犯罪處分ノ件上奏相成候處右ハ本年閣令第四號ヲ以テ神官ノ制被改候ニ付神職ノ犯罪ニ係ル者從六位勳六等ハ以後上奏ニ及ハス候依テ別紙正副及御返却候也

神職ノ犯罪ニ係ル者ノ上奏ニ及ハス

司法省上奏二十年四月六日

岡山縣備前岡山區花畑  
居住士族  
國幣中社吉備津神社宮司  
從七位 坂東直記  
右ノ者禁錮ノ刑ニ該ル可キ罪ヲ犯シタル者ト思料シ岡山縣備前岡山區花畑居住士族國幣中社吉備津神社宮司從七位坂東直記相當ノ處分爲致度明治十五年三月二十二日太政官達ニ依リ此段上奏候也  
拾一ノ七七五號

右ノ者富儀與行類似ノ所爲有之所轄司法警察官ニ於テ現行犯處分ノ手續ヲ盡シ送致ヲ受ケ候ニ付捜査スルニ其犯跡明瞭ト認ムルニ依リ公訴可及見込ニ候條此段具狀仕候也  
岡山縣備前岡山區花畑  
居住士族  
國幣中社吉備津神社宮司  
從七位 坂東直記  
明治二十年三月十八日  
司法大臣伯耆山田顯義殿  
內閣書記官議案二十年四月九日

明治二十年三月十八日

司法大臣伯耆山田顯義殿

岡山縣備前岡山區花畑  
居住士族  
國幣中社吉備津神社宮司  
從七位 坂東直記  
檢事 高野 董

國幣中社吉備津神社宮司從七位坂東直記犯罪處分ノ儀十五年三月太政官ノ達ニ據別紙ノ通司法大臣ヨリ上奏有之候處右ハ本人犯罪ノ當時ハ其身分奏任官ナルモ其後閣令第四號ヲ以テ官國幣社ノ神官ヲ廢シ更ニ宮司以下ノ神職ヲ置カレ內務省ニ於テ補任シ奏任ノ待遇ヲ受ケル迄ノコトニ定メラレタルニ付テハ以後從六位勳六等以上ヲ帶スル者ノ外ハ上奏ノ手續ヲ爲スニハ及ハサル義ニ可有之依テ本議ハ其旨ヲ以テ司法省ヘ返却シ可然哉

司法省達 十四年七月十六日

後備軍編入ノ者郷里ニ在テ罪ヲ犯シタルキハ檢事ヨリ裁判官ニ求刑スル前ニ於テ一應本人所轄ノ鎮臺

或ハ營所ニ照會致スヘシ此旨相達候事

司法省達 十四年八月二十九日

刑部裁判ノ實告ヲ犯人本質ニ通知セシム

後備軍編入ノ者犯罪ノ  
節ハ本人所轄ノ鎮臺或  
ハ營所ニ照會セシム  
十六年十月司法省達丁第  
二十七號ヲ以テ取消

刑事裁判ノ宣告犯人本質ニ通知ノ儀裁判所ヘ別紙丁第三十三號ノ通相達候條此旨爲心得相達候事

別紙丁第三十三號ハ既決  
犯罪ナリ番表様式ノ部ニ  
載ス

養章收ノ節届出方

十五年三月丙第九號ハ帶  
動者犯罪處分ノ節取扱方  
ノ件ナリ前ニ載ス

司法省達 十五年四月十七日

養章條例第四條ニ依リ養章ヲ沒收スヘキ場合ニ於テハ本年二月當省丙第九號達ニ照準シ處分スヘシ此旨相達候事

(參照)

養章條例

第四條 養章ハ本人ニ限り終身之ヲ佩用シ及ヒ徽號トナスヲ得然レトモ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ之ヲ沒收シ其未マ授與セサル前同上ノ刑ニ處セラレタル者ニハ之ヲ授與セス

司法省達 十五年八月二十一日

本年八月第三十九號公布ニ依リ今般內務卿ヨリ照會ノ趣モ有之候ニ付テハ自今醫師タル者醫業ニ關スル犯罪有之處斷致シ候節ハ其都度該宣告文謄本相添內務省ヘ通知候様可致此旨相達候事

司法省達 十六年四月二十七日

明治八年第四百四十八號公達海軍退隱令并ニ明治九年第九十九號公達陸軍恩給令ニ據リ恩給ヲ有スル元軍人及其扶助料ヲ有スル寡婦孤兒罪ヲ犯シ公權剝奪若クハ停止ノ處分ヲ受ケ并ニ該恩給ヲ有スル軍人ニシテ治罪法第二百七十三條ニ據リ公權停止ノ處分ヲ受ケタル者アルキハ其都度直ニ大藏省ヘ通知可致此旨相達候事

但新法實施以後是迄本文ノ處分ヲ受ケタル者有之候ハ、其旨直ニ大藏省ヘ通知可致事

司法省達 十六年七月五日

明治十四年十二月 第七十五號公布西洋形船船長運轉手機關手免狀規則ニ據リ免狀ヲ有スル者罪ヲ犯シ輕罪以上ノ刑ニ處シタル節ハ刑名并ニ宣告ノ月日ヲ詳記シ其都度直ニ農商務省ヘ通牒スヘシ此旨相達候

船長運轉手機關手ノ免  
狀ヲ有スル者輕罪以上  
ノ刑ニ處シタル時ハ農  
商務省ニ通知セシム

第七十五號公布運輸門  
第七十五號公布運輸門

恩給ヲ有スル者等犯罪  
處分ノ節ハ司法省ヨリ  
内務省へ通知取扱方  
十七年十二月十八日司法  
省へ送テ發付ス可シ

十八年二月司法省達丁第  
六號ヲ以テ廢ス

後備軍編入ノ者犯罪ノ  
節所轄警察署所ニ照會  
スルヲ廢ス

華族ヲ犯罪シ拘留シ  
ル時及ヒ刑ノ執行ヲ爲  
シタル時ハ官内省へ通  
報セシム

事

司法省へ達 十六年八月三日  
陸軍恩給令ニ依リ恩給ヲ有スル者及扶助料ヲ受クル寡婦孤兒罪ヲ犯シ公權剝奪ノ處分ヲ爲ス時ハ其裁  
判宣告ノ際恩給登錄寫帖ヲ收奪シ宣告文ノ寫相添其省ヨリ内務省へ交付可致此旨相達候事

陸軍恩給令ニ依リ恩給ヲ有スル者及扶助料ヲ受クル寡婦孤兒罪ヲ犯シ公權剝奪ノ處分ヲ受ケタルト  
キハ直ニ恩給登錄寫帖収奪不致候テハ弊害ヲ醸生ヒンモ難計儀ニ付勳章年金票同様裁判宣告ノ際裁判  
官ニ於テ収奪ノ上當省へ送付シ當省ヨリ還納方可取計儀致度御允可ノ上ハ此旨司法省へ御達相成度此  
旨及上申候也  
指令十六年八月三日

上申ノ趣開届司法省へ別紙ノ通相達候事  
參事院議案十六年七月十七日  
別紙内務省上申恩給受領者罪ヲ犯シ公權剝奪ノ者登錄寫帖収奪ノ件審査スル處左ノ如シ  
上申ノ趣ハ至當ノ事ニ付上申ノ通御開届可然儀ト認定ス  
右ニ由リ指令案并ニ司法省へ送案左ノ通ニテ可然哉上申候也

司法省達 十六年九月二十六日  
陸軍恩給令ニ據リ恩給ヲ有スル者及扶助料ヲ受クル寡婦孤兒罪ヲ犯シ公權剝奪ノ處分ヲ爲ストキハ恩  
給登錄寫帖ヲ收奪シ宣告文ノ寫相添其都度速ニ當省へ差出ス可シ此旨相達候事

司法省達 十六年十月十三日  
明治十四年當省丁第八號ヲ以テ後備軍編入ノ者郷里ニ在テ罪ヲ犯シタルキハ所轄鎮臺營所へ照會致ス  
可キ旨相達置候處今般陸軍卿ヨリ照會ノ趣有之候ニ付右達ハ取消候條此旨相達候事

司法省達 十六年十一月八日  
華族ノ張位記ノ有無且戸主懸 罪ヲ犯シ拘留シタル時ハ自今其院裁判所ヨリ直ニ官内省へ通牒シ猶刑ノ  
居子弟ニ拘ハラヌ 罪ヲ犯シ拘留シタル時ハ自今其院裁判所ヨリ直ニ官内省へ通牒シ猶刑ノ

言渡ヲ爲シタル時ハ其宣告書ノ謄本ヲ添へ是亦同様速ニ可致通牒此旨相達候事

司法省達 十六年十二月十八日  
本年第三十五號布告ヲ以テ明治十五年第三十九號布告被廢候ニ付同年當省丁第四十二號達ハ自然消滅  
ノ處今般内務卿ヨリ更ニ照會ノ趣モ有之候條同省へ通牒方從前ノ通り可取計此旨相達候事

司法省へ達 十七年十二月十八日  
陸軍恩給令ニ依リ恩給ヲ有スル者等公權剝奪ノ處分ヲナス時其取扱方十六年八月三日相達候次第モ有  
之候處自今官吏及陸海軍恩給令ニ據リ恩給ヲ有スル者罪ヲ犯シ公權剝奪若クハ停止ノ處分ヲ爲ス時又  
扶助料ヲ受クル者罪ヲ犯シ禁錮以上ノ刑ニ處スル時ハ直ニ宣告文寫ヲ添へ其旨恩給局へ通牒スヘシ此  
旨更ニ相達候事

内務省上申 十七年十一月十一日  
陸軍恩給令ニ據リ恩給ヲ有スル者及其扶助料ヲ有スル寡婦孤兒罪ヲ犯シ公權剝奪ノ處分ヲ受ケタルキ  
裁判官ニ於テ恩給登錄寫帖収奪ノ上當省へ送付シ當省ヨリ還納可取計旨客年六月十四日附上申同八月  
三日附御指令ノ趣モ有之候處客年第三十八號ヲ以テ海軍恩給令制定相成候ニ付テハ同令ニヨリ恩給扶  
助料ヲ有スル者モ同様處分相成候條致度御允裁ノ上ハ是亦司法省へ御達相成度此段上申候也

恩給局議案 十七年十二月三日  
別紙内務省上申恩給及扶助料ヲ受領セシ者罪ヲ犯シ登錄寫帖収奪處分ノ義ヲ案スルニ内務省ニ於テハ  
官吏恩給令及陸海軍改正恩給令發布前ノ順序ニ依リ司法省ヨリ處分ノ上通知ヲ要スル旨意ナリト雖モ  
改正陸軍恩給令第四十六條同海軍恩給令第四十七條ニ於テ恩給若クハ扶助料ヲ受ル者權利消絶ニ屬ス  
ル時ハ地方廳其恩給登錄寫帖ヲ收メテ内務省ニ出ス云々ト有之亦官吏恩給令第二十二條ニ於テ恩給若  
クハ扶助料ヲ支給ヲ止ムルキハ恩給局ヨリ所管地方廳ニ達シ二週日以内ニ其給與ノ證書ヲ收メシムト  
有之則チ内務省ノ伺ニヨリテ十六年八月三日司法省へ御達相成候文中其裁判宣告ノ際恩給登錄寫帖ヲ  
收奪シ云々トアルハ現行各恩給令ニ矛盾スル義ニ有之尤司法省ヨリ其處刑ノ通牒ハ必ス之ヲ爲サシメ  
サル可カラスト雖モ當恩給局設立ノ上ハ勿論本局へ通牒セシメ而ル後本局ヨリ各關係官廳へ通達候儀  
至當ニ有之候條左案ノ通司法省へ御達相成可然哉仰高裁候也 内務省大藏陸海

大條ニ依テ但書消滅ス

八年太政官第四十八號達  
及ヒ第四百四十八號達兵制  
門内條ニ據ス

陸軍總給テ有スル者犯  
罪處斷ノ節届出テ廢ス

警察官ノ犯罪ニ付勳章  
ヲ褫奪シタル時ハ其旨  
本籍ヘ通知セシム

警察官ノ犯罪處斷ノ節其  
都度農商務省ヘ通知セ  
シム  
第二十八號布告衛生門醫  
事ニ據ス

司法省達 十八年一月六日 大審院裁判所  
自今官吏及ヒ陸海軍恩給令ニ據リ恩給ヲ有スル者罪ヲ犯シ公權剝奪若クハ停止ノ處分ヲ爲シ又ハ扶助  
料ヲ受クル者罪ヲ犯シ禁錮以上ノ刑ニ處シタル時ハ直ニ其宣告文寫書ヲ添當省ヘ可届出此旨相達候事  
但本文中明治十六年當省丁第二十五號達ニ據テ可届出事件ニ係ル時ハ其旨ヲ明記シ宣告文寫書ハ二  
通可差出儀ト心得可シ

司法省達 十八年五月二十日 大審院裁判所  
官吏及ヒ陸海軍恩給令ニ據リ恩給ヲ有スル者罪ヲ犯シ公權剝奪若クハ停止ノ處分ヲ爲シ又ハ扶助料ヲ  
受クル者罪ヲ犯シ禁錮以上ノ刑ニ處シタル時其届出方ノ儀本年丁第一號ヲ以テ相達置候處明治八年太  
政官第四十八號達陸軍武官傷痍扶助及死亡者祭筵家族扶助概則并ニ同年太政官第四百四十八號達海軍退  
隱令ニ據リ扶助料又ハ退隱料ヲ受クル者モ右達ニ準シ當省ヘ可届出此旨相達候事

司法省達 十八年二月二十一日 大審院裁判所  
明治十六年九月當省丁第二十五號達自今廢止候條此旨相達候事  
但該達廢止ニ付テハ本年一月當省丁第一號達中但書ハ消滅セシ儀ト心得可シ

司法省令 十九年四月三十日 大審院裁判所  
刑事裁判言渡ヲ犯人本籍ヘ通知方ノ儀明治十四年當省丁第二十三號ヲ以テ相達置タル處自今帶動者ノ  
犯罪ニ付勳章ヲ褫奪シタル時ハ其旨併セテ通知ス可シ

司法省令 二十年二月二十三日 大審院裁判所  
十八年八月第二十八號布告及十九年九月第十一號農商務省令ニ依リ今般農商務省ヨリ照會ノ趣モ有之  
候ニ付テハ自今獸醫免許規則第十四條并獸類傳染病豫防規則第十九條ノ犯罪其他刑法ニ正條アル獸醫

農商務省令第十一號民業  
門ニ據ス

使丁規則ヲ定ム  
十五年六月司法省丁第三  
十四號ヲ以テ第九條第十  
一條ヲ改正ス  
十六年二月司法省達丁第  
五號同月東京府達丙第二  
十七號ヲ參照ス可シ

ノ犯罪處斷致候節ハ其都度裁判宣告文謄本相添ヘ農商務省ヘ通知スヘシ

司法省達 十四年十二月五日 大審院裁判所  
使丁規則別冊之通相定候條明治十五年一月一日ヨリ施行致スヘク此旨相達候事

使丁規則

- 第一條 各裁判所書記局ハ刑事民事ニ關スル召喚狀其他書類ヲ送達セシムル爲メ其請負人ヲ定メ之ヲ使丁取締トス
  - 第二條 使丁取締ハ一人トス但場所ニ因リ二人以上ヲ命スルコトアル可シ
  - 第三條 使丁取締ハ使丁取締之ヲ選ビ其氏名ヲ書記局ニ届出鑑札ヲ受ルモノトス
  - 第四條 使丁取締ハ使丁取締適宜之ヲ定メ書記局ノ許可ヲ受ク可シ
  - 第五條 使丁取締ハ使丁取締ノ事ニ付總テ其責ニ任スルモノトス
  - 第六條 使丁取締ハ使丁取締ノ事ニ付總テ其責ニ任スルモノトス
  - 第七條 使丁取締ハ使丁取締ノ事ニ付總テ其責ニ任スルモノトス
  - 第八條 使丁取締ハ使丁取締ノ事ニ付總テ其責ニ任スルモノトス
  - 第九條 送達賃錢ハ書類ノ大小ニ拘ハラヌ一週ニ付一里五錢以下トス
  - 第十條 賃錢ノ定限ハ使丁取締之ヲ申立書記局之ヲ決シ且送達書ニ其賃錢高ヲ附記ス可シ
  - 第十一條 刑事ニ付テハ送達賃錢ハ其取扱所ニ貼示シ三日以上新聞紙ニ掲載シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ公告ス可シ
- 但左ノ場合ニ於テハ書記局ヨリ之ヲ拂置ク可シ

十五年一月司法省達丁第九號ヲ以テ第十五條ノ條約金徴收ノ上ハ雜收入ニ組入月々司法省ニ納附セシム後ニ載ス

- 一 檢察官又ハ裁判官ヨリ呼出ス證人鑑定人通事ノ呼出狀
  - 二 檢察官ノ控訴申立テ被告人ヘノ通知及ヒ呼出狀
  - 三 檢察官ヨリ被告人ヘ送達スル上告申立書及ヒ趣意書
- 第十二條 刑事附帶ノ私訴及ヒ民事ニ付テノ送達賃錢ハ總テ其送達ヲ請求スル者ヨリ之ヲ拂フ可シ
- 第十三條 送達賃錢ニ付テノ訴訟ハ其書類ヲ發シタル裁判所ニ之ヲ爲ス可シ
- 第十四條 使丁取締ハ書類送達ヲ正實ニ取扱フ可キ旨ノ書面ヲ書記局ニ差出ス可シ
- 第十五條 使丁取締及ヒ使丁此規則ニ違背シタル時裁判所書記局ハ使丁取締ニ左ノ條件中ニテ相當ノ言渡ヲ爲スヘシ
- 一 二十圓以下ノ違約金ヲ納メシムル事
  - 二 解職セシムル事
  - 三 事情重キ者ハ違約金ヲ納メ解職セシムル事
- 第十六條 使丁取締タルニハ其裁判所々在地ニ家屋ヲ有シ滿二十一歳以上ノ者ニシテ書記局ノ試験ヲ經ルコトヲ要ス
- 使丁取締タルニハ身元保證トシテ金五十圓以上ノ價格アル公債證書地券又ハ銀行其他官許アル株券證書ヲ書記局ニ納ム可シ
- 但此保證金ハ解職ノ時下戻ス可シ
- 第十七條 試験ハ書記二名以上ニテ之ヲ爲ス可シ
- 但書記不足ナルトキハ雇ヲ以テ之ニ充ツヘシ
- 試験ノ科目ハ左ノ如シ
- 一 使丁規則
  - 二 請負郡村ノ地名又ハ里數
  - 三 普通書簡ノ書讀

大審院上等裁判所使丁取締採用ニ付東京府ニ於テ試験科目ヲ示ス

使丁規則第九條第十一條ヲ改正ス

- 第十八條 實決ノ刑ニ處セラレタル者及ヒ身代限ノ處分ヲ受ケ未タ辨償ヲ終ラサル者ハ使丁取締又ハ使丁タルコトヲ許サス
- 東京府布達 十四年十二月十五日  
大審院并東京上等裁判所ニ於テ明治十五年一月一日ヨリ刑事民事ニ關スル召喚狀其他書類ヲ送達セシムル爲メ其請負人ヲ定メ之ヲ使丁取締トシテ採用相成候條志願ノ者ハ左ノ通相心得來ル十七日迄ニ東京上等裁判所書記局ヘ願書差出スヘシ此旨布達候事
- 試験ノ科目
- 一 使丁規則
  - 一 請負郡村ノ地名又里數
  - 一 普通書簡ノ書讀
- 右志願ノ者ハ當府下ニ家屋ヲ有シ滿二十一歳以上ノ者ニテ採用相成タル上ハ身元保證トシテ金五十圓以上ノ價格アル公債證書地券又ハ銀行其他官許アル株券證書ヲ兩廳書記局ヘ各別ニ納ムル儀ト可心得事
- 實決ノ刑ニ處セラレタル者及身代限リノ處分ヲ受ケ未タ辨償ヲ終ラサル者ハ採用不致候事
- 司法省達 十五年六月二十六日  
丁第三十四號大審院裁判所
- 明治十四年丁第二十六號ヲ以テ相違置候使丁規則第九條并ニ第十一條左ノ通改正候條此旨相違候事
- 第九條 送達賃錢ハ地方ノ便否ニ從ヒ書記局ニ於テ適宜其定限ヲ立ツヘシ
- 但シ送達書ニ賃錢ノ高ヲ附記ス可シ
- 第十一條 刑事ニ付テノ送達賃錢ハ其送達ヲ受ル者ヨリ之ヲ拂フ可シ

使丁賃錢線替方

司法省達 丁第六年二月一日 大審院裁判所  
刑事ニ付戸長ヲ經テ本人ヘ書類ヲ送達スヘキ際ニ迄戸長ニ於テ使丁賃錢線替渡シヲ爲シ候儀モ有之候處自今右線替渡ヲ要スル節ハ一時裁判所ニ於テ線替置追テ本人ヨリ償却セシムヘキ儀ト心得ヘシ此旨相達候事

但從前ノ指令内訓本文ニ抵觸スル條件ハ消取候事

東京府達 丁第六年二月十九日 郡區役所戸長役場

刑事ニ付戸長ヲ經テ本人ヘ書類送達ノ節戸長役場費ヲ以使丁ヘ送達賃操替相渡候儀自今不相成候條此旨相達候事

使丁規則第十二條ニ但書ヲ追加ス

司法省達 丁十七年八月十三日 大審院裁判所  
明治十四年丁第二十六號達使丁規則第十二條ヘ左ノ但書追加候條此旨相達候事  
但請求者ナキ場合ニ於テハ原告人ヨリ之ヲ拂フヘシ

送達書呼出狀召喚狀勾引狀等ノ書式ヲ定ム

治罪法中ニ掲ケタル送達書呼出狀召喚狀勾引狀留狀收監狀及宣誓書式別紙ノ通相定候條右ニ照準ス可シ此旨相達候事

用紙美濃ノ類

輪郭寸法凡 堅七寸五分 横五寸四分

「内及印章ハ朱

十八年八月司法省達丁第二十六號ヲ以テ半紙換用ヲ許ス

送達書

「送達スヘキ書名」 「登録」  
「同」 「登通」  
受取人ノ署名捺印若シ能ハサル時ハ其事由

割印

右使丁ヲ以テ何府縣下何町又ハ何國何郡何村何番地何某ヘ送達セシムル者也  
明治 年 月 何裁判所之印  
「何裁判所 書記「氏名」印

送達シタル月日時	送達シタル場所	親屬雇人若クハ戸長ヘ書類ヲ渡シタル時	ハ其事由

右致送達候也  
使丁「氏名」印

是ヲ中斷シテ一葉ヲ受取人ヘ渡シ一葉ヲ書記局ヘ還納ス可シ

送達書

「送達スヘキ書名」 「登録」  
「同」 「登通」  
右使丁ヲ以テ何府縣下何町又ハ何國何郡何村何番地何某ヘ送達セシムル者也  
明治 年 月 何裁判所之印  
「何裁判所 書記「氏名」印

受取人ノ署名捺印若シ能ハサル時ハ其事由	送達シタル月日時	送達シタル場所	親屬雇人若クハ戸長ヘ書類ヲ渡シタル時	ハ其事由

右致送達候也  
使丁「氏名」印

呼出狀

此呼出狀ハ出頭ノ節  
書記局ニ差出ス可シ

〔内及印字ハ朱書〕

〔住所身分職業〕  
氏名

右云々ノ事件ニ付證人トシテ相  
尋ル儀有之來ル何月日時何所ニ  
出頭可致者也  
但同日時出頭セサルニ於テハ  
罰金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ發ス  
ルコトアル可シ

明治 年 月 何裁判  
所之日 所之印

〔何裁判所〕  
豫審判事〔氏名印〕  
書記〔氏名印〕

是ヲ中斷シテ一葉ヲ受取人へ渡シ  
一葉ヲ書記局へ還納スヘシ

右之通取扱候也

明治 年 月 日  
使丁〔氏名印〕

受取人ノ署名  
捺印若シ能ハ  
ナル時ハ其事  
送達シタル  
月日時  
送達シタル  
場所  
親屬雇人若ク  
ハ戸長ニ書類  
ヲ渡シタル時  
ハ其事由

割印

呼出狀

〔住所身分職業〕  
氏名

右云々ノ事件ニ付證人トシテ相  
尋ル儀有之來ル何月日時何所ニ  
出頭可致者也  
但同日時出頭セサルニ於テハ  
罰金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ發ス  
ルコトアル可シ

何裁判  
所之日 所之印

〔何裁判所〕  
豫審判事〔氏名印〕  
書記〔氏名印〕

是ヲ中斷シテ一葉ヲ受取人へ渡シ  
一葉ヲ書記局へ還納スヘシ

此呼出狀ハ出頭ノ節  
書記局ニ差出ス可シ

受取人ノ署名  
捺印若シ能ハ  
ナル時ハ其事  
送達シタル  
月日時  
送達シタル  
場所  
親屬雇人若ク  
ハ戸長ニ書類  
ヲ渡シタル時  
ハ其事由

召喚狀

右之通取扱候也

明治 年 月 日  
使丁〔氏名印〕

〔内及印字ハ朱書〕

〔住所身分職業〕  
氏名

右云々ノ事件ニ付訊問ノ筋有之  
何月日時當裁判所ニ出頭可致者  
也

明治 年 月 何裁判  
所之日 所之印

〔何裁判所〕  
豫審判事〔氏名印〕  
書記〔氏名印〕

是ヲ中斷シテ一葉ヲ受取人へ渡シ  
一葉ヲ書記局へ還納スヘシ

右之通取扱候也

明治 年 月 日  
使丁〔氏名印〕

受取人ノ署名  
捺印若シ能ハ  
ナル時ハ其事  
送達シタル  
月日時  
送達シタル  
場所  
親屬雇人若ク  
ハ戸長ニ書類  
ヲ渡シタル時  
ハ其事由

割印

召喚狀

右云々ノ事件ニ付訊問ノ筋有之  
何月日時當裁判所ニ出頭可致者也

明治 年 月 何裁判 所之日時印

〔何裁判所 豫審判事「氏名印」 書記「氏名印」〕

送達シタル月日時  
送達シタル場所  
親屬雇人若クハ戸長ハ書類ヲ渡シタル時  
右之通取扱候也  
明治 年 月 日  
使丁「氏名印」

檢事官印 勾引狀

右云々ノ事件ニ付訊問ノ筋有之  
當裁判所ヘ勾引ス可キ者也  
但本人潜匿シタル時ハ家宅ヲ搜索ス可シ

明治 年 月 何裁判 所之日時印

〔何裁判所 豫審判事「氏名印」 書記「氏名印」〕

右之通取扱候也  
明治 年 月 日  
「巡查又ハ憲兵氏名印」

是ヲ中斷シテ一葉ヲ受取人ヘ渡シ

檢事官印 勾引狀

右云々ノ事件ニ付訊問ノ筋有之  
當裁判所ヘ勾引ス可キ者也  
但本人潜匿シタル時ハ家宅ヲ搜索ス可シ

明治 年 月 何裁判 所之日時印

〔何裁判所 豫審判事「氏名印」 書記「氏名印」〕

右之通取扱候也  
明治 年 月 日  
「巡查又ハ憲兵氏名印」

一葉ヲ書記局ヘ送納スヘシ

檢事官印 勾引狀

右云々ノ事件ニ付治罪法第百二十六條ノ規則ニ從ヒ何所監倉ヘ留ス可キ者也  
但本人潜匿シタル時ハ家宅ヲ搜索ス可シ

明治 年 月 何裁判 所之日時印

〔何裁判所 豫審判事「氏名印」 書記「氏名印」〕

右之通取扱候也  
明治 年 月 日  
「巡查又ハ憲兵氏名印」

檢事官印 勾引狀



「何裁判所  
豫審判事」氏名印  
書記「氏名印」

右之通取扱候也

明治年月日時

「巡查又ハ憲兵氏名印」

割印

是ヲ中斷シテ一葉ヲ受取人へ渡シ  
一葉ヲ書記局へ還納スヘシ

檢事官印

勾留狀

「住所身分職業」  
氏名

右云々ノ事件ニ付治罪法第百二  
十六條ノ規則ニ從ヒ何所監倉へ  
勾留ス可キ者也  
但本人潜匿シタル時ハ家宅ヲ  
搜索ス可シ

明治年月  
「何裁判所  
豫審判事」氏名印  
書記「氏名印」

何裁判  
日時  
所之印

右之通取扱候也

明治年月日時

「巡查又ハ憲兵氏名印」

檢事官印

収監狀

「住所身分職業」  
氏名

右云々ノ事件ニ付取調ヲ爲シタ  
ル處本罪刑法第何條ニ該ル可キ  
者ト思料ス依テ檢事ノ意見ヲ聽  
キ何所監倉ニ收監ス可キ者也  
但本人潜匿シタル時ハ家宅ヲ  
搜索ス可シ

明治年月  
「何裁判所  
豫審判事」氏名印  
書記「氏名印」

内及印章ハ朱書

明治年月

「何裁判所  
豫審判事」氏名印  
書記「氏名印」

何裁判  
日時  
所之印

右之通取扱候也

明治年月日時

「巡查又ハ憲兵氏名印」

割印

是ヲ中斷シテ一葉ヲ受取人へ渡シ  
一葉ヲ書記局へ還納スヘシ

檢事官印

収監狀

「住所身分職業」  
氏名

右云々ノ事件ニ付取調ヲ爲シタ  
ル處本罪刑法第何條ニ該ル可キ  
者ト思料ス依テ檢事ノ意見ヲ聽  
キ何所監倉ニ收監ス可キ者也  
但本人潜匿シタル時ハ家宅ヲ  
搜索ス可シ

明治年月

「何裁判所  
豫審判事」氏名印  
書記「氏名印」

何裁判  
日時  
所之印

右之通取扱候也

收監シタル月  
日執行シタル月  
執行ノ手續  
「被告人ニ正本ヲ示シ原本ヲ下付ス」  
其由ハサレハ  
其由ハサレハ

豫審判事 氏名印  
書記 氏名印

明治年月日時

「巡查又ハ憲兵氏名印」

「内及印章ハ朱書」

宣誓書

「何々」ノ事件ニ付愛憎

畏懼ノ心ナク總テ正

實ニ「陳通」定述「斯」可キユト

ナ誓フ

明年年月日

「証人」氏名印

司法省達 第十四号 二月十九日 觀廳府 縣 署  
治罪法令狀様式別紙丁第二十八號ノ通大審院裁判所へ相達候條其旨可相心得且司法警察官ニ於テ令狀  
ヲ發スル時ハ右ニ照準シテ取計フ可シ此旨相達候事

司法省達 第十五号 二月六日 觀廳府 縣 署  
治罪法ニ定メタル勾引狀ノ期限ニハ總テ休暇ノ日ヲ算入ス可カラズ但平常休暇ナキ官署ニ付テハ此例  
ヲ用井サル儀ト可心得此旨相達候事

司法省達 第十八号 八月十三日 大審院 裁判所  
明治十四年當省丁第二十八號送達書呼出狀召喚狀勾引狀留狀收監狀宣誓書式第一葉及ヒ明治十七  
年當省丁第八號達民事呼出狀并送達書々式第一號ニ用紙美濃紙ノ類ト記載有之候處右ハ半紙ヲ以テ換  
用スルモ苦シカラス此旨相達候事

司法省達 第十四号 二月二十八日 觀廳府 縣 署  
新法實施後ハ既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ發スル刑法第六十二條ノ令狀ハ總テ其刑ノ執行ヲ爲ス地ノ  
始審裁判所檢事ヨリ發スル儀ト可心得此旨相達候事

司法省達 第十五号 二月十四日 觀廳府 縣 署  
始審裁判所檢事ヨリ既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ逮捕狀ヲ發スル手續ハ左之通心得可シ此旨相達候事  
第一條 逮捕狀ニハ典獄ノ報知書ニ依リ第二號書式ニ準シ逃走シタル囚徒ノ本籍身分氏名人相等ヲ詳  
記ス可シ

但管轄地ノ内外ニ拘ハラヌ急遽ノ際巡查ヲ令狀ヲ帶行セシムル時ハ人相ヲ記載セサルモ妨ナ  
シ

勾引狀ノ期限ニハ總テ  
休暇日ヲ算入セス

送達書呼出狀等半紙ヲ  
用ユルヲ許ス

既決囚ノ逃走シタル者  
ニ對シ令狀ハ刑ノ執  
行ヲ爲ス地ノ裁判所檢  
事ヨリ發ス

十五年四月司法省達丙第  
十四號ヲ發ス可シ

逮捕狀ヲ發スル手續并  
ニ八相書式ヲ定ム

十五年二月司法省達丁第  
十四號三月同省達丁第  
十七號ヲ發ス可シ  
同年四月同省達丁第二十  
四號ヲ以テ人相書ヲ發ス  
ル場合ヲ示ス

第二條 管轄地内ハ令狀ヲ警察署又ハ警察分署ニ送致シテ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ  
 第三條 管轄地外ハ第一號書式ニ準シ人相書ヲ作り之ヲ始審裁判所檢事ニ送致シテ逮捕ノ處分ヲ囑託スルコトヲ得  
 囑託ヲ受ケタル檢事ハ該人相書ニ依リ自己ノ氏名ヲ以テ更ニ逮捕狀ヲ作り之ヲ管轄地内ノ警察署又ハ警察分署ニ配附シテ逮捕ノ處分ヲ爲サシムルコトヲ得  
 第四條 司法警察官ニ於テ逮捕シタル囚徒ヲ受取タル時ハ之ヲ管轄檢事ニ送致シ檢事ハ其旨ヲ囑託ヲ爲シタル檢事ニ照會シ別段ノ事由アルニ非サレハ逮捕ノ地ニ於テ刑ノ執行ヲ爲ス可シ

〔第壹號〕

〔内及印章ハ朱書〕

人相書										
〔本籍身分〕 〔氏名〕										
文	顔	色	頭髮	眼	眉	鼻	口	耳	齒	音聲

痘痕	疵所	鬚髯ノ有無	其他特徴	長所	父母妻子	逃走ノ際着用衣服	同上ノ際持去物品	罪名	刑名及其期限

右者〔何方〕ニ於テ處刑中明治〔何年〕〔何月〕〔何日〕第〔何〕時〔何〕分逃走候ニ付逮捕ノ御處分有之度候也

明治 年 月 日 何裁判所之印

〔何裁判所〕 檢事〔氏名〕殿

〔何裁判所〕 檢事〔氏名〕印

第二號

〔内及印章ハ朱書〕

逮捕狀	
〔本籍身分〕 〔罪名并ニ刑名及其期限〕 〔氏名〕	執行シタル月日時 執行シタル場所

右「何方」ニ於テ處刑中明治何年何月何日第何時何分逃走シ管内ニ發スル逮捕シタル時ハ其事由勾引スルコト能ハサル時ハ其事由

「何」裁判所  
 檢事「氏名」

明治年月日  
 所之印

右之通取扱候也  
 明治年月日  
 「巡查又ハ憲兵氏名」

人相書

丈	
顔	
色	
頭髪	
眼	
眉	
鼻	
口	
耳	
齒	
音聲	

痘痕	
疵所	
鬚髭ノ有無	
其他特徴	
長所	
父母妻子	
逃走ノ際着用品	
同上ノ際持去物品	

司法省達 十五年二月二十日 刑部 刑所  
 治罪法第百二十五條ニ從ヒ豫審判事ヨリ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ若クハ其檢事長ヨリ管轄地内ノ檢事ニ搜查及ヒ逮捕ノ處分ヲ命スル時ハ本年本省丙第六號達第一號書式ニ照依シテ人相書ヲ作り其命ヲ受ケタル檢事ハ第二號書式ニ照依シテ逮捕狀ヲ作ルヘシ此旨相達候事

司法省達 十五年三月二十日 陸海軍衛 刑所  
 軍人軍屬ノ犯罪未決中逃走シタルニ付陸海軍衛ヨリ捕縛方依頼有之節ハ本年本省丁第十四號達ニ依リ捕縛方取計ヲ可シ此旨相達候事

司法省達 十五年三月二十日 陸海軍衛 刑所  
 軍人軍屬ノ犯罪既決後逃走シタルニ付陸海軍衛ヨリ捕縛方依頼有之候節ハ本年本省丙第六號達ニ依リ捕縛方取計ヲ可シ此旨相達候事

檢事長ヨリ捜査及ヒ逮捕シタルノ命ヲ受ケタル檢事ハ人相書式ニ依リ逮捕狀ヲ作ル

十五年三月司法省達丁第十七號達ニ依リ同省同達丁第二十四號ヲ以テ人相書ヲ送スル場合ヲ示ス

陸海軍衛ノ依頼ニ依リ軍人軍屬ノ未決逃走囚捕縛取計方

陸海軍衛ノ依頼ニ依リ軍人軍屬ノ既決逃走囚捕縛取計方

巡査ヲシテ令狀ヲ他管ニ帶行セシムル場合及ヒ人相書ヲ發スル場合ヲ示ス

司法省達 十五年四月十二日 刑部所  
左之通豫審判事ニ及内訓候條爲心得此段相達候事

輕罪裁判所

豫審判事

治罪法第三百三十四條ノ場合ニ於テ豫審判事ヨリ巡査ヲシテ令狀ヲ他管ニ帶行セシムルハ被告事件殊ニ急速ヲ要スル時ニ限リ輒ク其處分ヲ爲ス可キ者ニアラス又第三百三十五條ノ場合ニ於テ豫審判事ヨリ人相書ヲ發シ搜查及ヒ逮捕ヲ爲ス可キコトヲ請求スル者ハ專ラ重大ノ罪ヲ犯シタル被告人ニ對シテ發スル者ニ有之被告人所在ノ地ヲ覺知スルコト能ハサル時ハ罪ノ輕重ヲ問ハス悉ク人相書ヲ發スル者ニアラサルナリ此等ハ兼テ注意アル可キ事ナレバ猶ホ誤解無之様爲念此段及内訓候也  
明治十五年四月十二日  
司法卿 大木喬任

司法省達 十五年四月十七日 刑部所  
既決囚ノ逃走シタル者ニ對シテ發スル令狀ノ儀ニ付テハ昨明治十四年丙第二十號ヲ以テ相達置候處始審裁判所所在ノ地ヲ除クノ外ハ現ニ其刑ノ執行ヲ爲ス地ノ警部ニ於テ令狀ヲ發スル儀ト可心得此旨更ニ相達候事

司法省達 十六年七月十四日 刑部所  
監倉若クハ獄舎ニ在ル被告人へ送達スヘキ渾テノ書類ハ裁判所ヨリ監獄署へ送達ノ手續ヲ囑託シ該署ニ於テハ規則ニ從ヒ本人ニ送達シ令狀ハ其正本其他ハ送達書ノ一本ヲ裁判所へ返還スヘキ様取計ヘシ此旨相達候事  
但從前ノ指令内訓本文ニ抵觸スル條件ハ渾テ取消候事

兵卒ノ犯罪ハ兵部省ニ於テ處分ス

刑部省へ達 二年十二月十四日

刑律ノ儀ハ其省御委任勿論之事ニ候得共新律御確定マテ兵卒罪狀之儀ハ於兵部省取計候様相達候尤餘人連累等有之兵隊限ニ無之罪狀ハ其節之次第ニ寄於其省可取計候事

刑律御改正ニ付當分之處兵卒罪狀之儀ハ於其省取計可申事  
但餘人ニ連累等有之節ハ其次第二ヨリ於刑部省取計候事

刑部省伺 二年十二月十三日  
兵部省附第四大隊統卒夏三郎芳吉八十吉三名之者一昨十一日於深川殺人逃去候權三郎連累ニ付連部司巡邏之者召捕來兵部省へ及通達候處別紙之通懸合申越候右ハ彼省中ニ而犯罪者軍律ニ處候儀ハ勿論ニ候得共市中ニおゐて惡行および候節ハ當省ニ而所置いたし候儀至當ニ奉存候兵部省申立之通いたし候而ハ右省中之者ハ天下律外之者ニ可相當候間兩省處分之差別御確定有之度此段奉伺候也

新律綱領節錄 三年十二月二十日 刑部省  
軍人犯罪

凡軍人罪ヲ犯スニ出出征行軍ノ際ニ非ルヨリハ兵部權斷シテ擅ニ法ヲ用ルコトヲ得ス。宿衛巡邏ノ時ト雖モ事若シ常人ニ關涉シ及ヒ互ニ鬪毆殺傷スル等モ亦常律ニ照シテ論ス。

布告 五年二月十二日 刑部省  
軍人犯罪ノ者ハ此迄新律名例ノ通出征行軍ノ外ハ常律ニ依リ處斷セシメ候處今般陸海軍律相定メラレ候ニ付見役ノ軍人軍屬犯罪ノ者ハ地方官之ヲ捕緝スト雖本營本隊ニ付シ其處斷ニ任ス可シ尤モ軍律ノ關セサル所ニシテ常憲ノ容サ、ル者ハ商議ノ上地方刑官ニ於テ至當ノ處置可致事  
但常人共犯ニ係ル者ハ發覺ノ官衙ニ於テ一應鞫問ノ上假口書ヲ添へ互ニ引渡シ可申事

布告 六年四月十三日 刑部省  
軍人軍屬犯罪者取扱  
テ改正ス

軍人軍屬ノ犯罪ハ本營本隊ニ付シテ處斷セシムル  
六年四月第百三十二號ヲ以テ改正ス

軍人ノ犯罪出出征行軍ノ外ハ常律ニ依テ處斷ス  
五年二月第百四十三號布告ヲ以テ改正ス

十五年一月司法省達第二號ヲ參照ス可シ  
六年六月改定律例ヲ頒布シ此律文ヲ該律例中ニ載入ス刑罰門刑律ニ載ス

十五年一月司法省達第二號ヲ參照ス可シ  
六年六月改定律例ヲ頒布シ此律文ヲ該律例中ニ載入ス刑罰門刑律ニ載ス

陸海軍律被相定候ニ付壬申第四十三號ヲ以テ犯罪者取扱振及布告置候處更ニ別紙律例ノ通改正候條此旨相達候事  
改正軍人犯罪律 明治六年四月十三日頒  
凡軍人軍屬罪ヲ犯スニ出征行軍ノ際ニ非スト雖モ陸軍海軍并ニ其律ヲ以テ處斷スルコトヲ得ヘシ若シ事常人ニ關涉シ及ヒ共犯ニ係ル者軍官逮捕スレハ軍衛ニ於テ糾問シ常人ハ鞫狀ヲ併セテ法司ニ交付シ法司逮捕スレハ法衛ニ於テ糾問シ軍人軍屬ハ鞫狀ヲ併セテ軍官ニ交付シ軍人軍屬ハ軍律ニ處シ常人ハ常律ニ處ス其大獄疑讞ニ係ル者ハ軍官法司會同商議シテ各自ニ區處ス  
凡後備兵等其名氏軍籍ニ在リト雖モ現ニ軍役ニ服セサル者ハ仍ホ常人ト同ク法司處分シ訖テ本屬ノ軍官ニ移告ス

司法省達 十二年十二月十日  
軍人軍屬常軍兩律ノ犯罪並發スルトキ處分方之儀ニ付千葉縣ヘ左ノ通り及指令候條爲心得相達候事  
千葉縣ヨリ司法省ヘ伺十二年十一月十八日

軍人軍屬罪ヲ犯シ事常軍兩律ニ觸レ軍律第十九條ノ例ニ依ルヘキ場合ニ於テハ其常律ニ觸ル、廉ハ鞫狀ヲ併セ先其書類ノミヲ軍衛ヘ送付シ其回報ヲ待テ本犯常律ニ觸ル者ハ求刑ニ可及ノ處軍衛ヨリ該犯ノ如キハ法衛ニ付シ擬律刑名ヲ定メテ報告スヘキ旨ノ照會モ有之然ルニ求刑以前法衛ニ付シ擬律刑名ヲ定ムル等ノ成規モ無之ニ付取扱兼候條一般ノ定規至急御指揮有之度此段相伺候也  
司法省指令十二年十二月十日  
伺之趣軍人軍屬常軍兩律ノ犯罪並發スルトキハ法衛ニ付シ其罪ヲ擬定セシメ然ル後軍衛ヘ報告シ其報ノ來ルヲ待ツテ更ニ法衛ヘ求刑或ハ軍衛ヘ送付スル儀ト心得ヘシ

司法省達 十五年一月十二日  
陸海軍治罪法御制定以前舊慣ニ依リ治罪手續執行ノ儀陸海軍兩省ヨリ太政官ヘ別紙ノ通相伺朱書ノ通御指令相成候條爲心得此旨相達候事  
(別紙)

陸海軍治罪法制定マテ舊慣ニ依リ治罪手續ヲ執行ス

軍人軍屬兩律ノ犯罪并發スルトキ處分方

陸軍治罪法御頒布相成迄軍人軍屬犯罪ニ係ル治罪ハ舊慣ニ依リ可然哉ノ伺  
陸軍新刑法之儀ハ不日御頒布普通法律ト共ニ來十五年一月一日ヨリ實施ノ御沙汰可相成就テハ治罪法ノ儀モ草案取調過日上申ニ及候處右ハ現今御詮議中ニテ年内餘日モ無之或ハ刑法ト共ニ實施ノ運ニ相成間布哉ト竊ニ忍察仕候果シテ然ル時ハ軍人軍屬ノ犯罪ニ係ル總テ治罪之手續キハ追テ治罪法御頒布相成迄一切舊慣ニ依リ處分致シ可然哉尤モ別紙記載之箇條ハ慣例ニモ據リ難ク候間至急御詮議之上何分之御指揮有之度此段相伺候也  
明治十四年十二月十日  
陸軍卿大 山 巖

太政大臣三條實美殿

一軍人軍屬ノ重罪輕罪ハ總テ軍衛ニ於テ處分致シ可然哉  
但重罪輕罪ト俱ニ發スル違警罪ハ如何可相心得哉  
一軍民共犯ニ係ル時ハ軍人軍屬ハ軍衛ニ於テ處分致シ常人ハ司法法衛ニ付シ可然哉將又軍民ノ正從犯ニ係リ軍人正犯ナル時ハ軍衛ニ於テ從犯ヲ併セテ審判致シ軍民共ニ正犯ナル時ハ先キニ告訴告發ヲ受ケタル法衛ニ於テ審判致シ可然哉  
一軍人軍屬任官若クハ就役ノ前罪ヲ犯シ在官現役中發覺スル者ハ軍衛ニ於テ審判致シ其在官現役中罪ヲ犯シ免官若クハ免役ノ後發覺スル者ハ之ヲ司法法衛ニ付シ可然哉  
一歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者召集中罪ヲ犯シ若クハ舊罪發覺スル者ハ軍衛ニ於テ審判致シ犯罪解散ノ後發覺スル時ハ司法法衛ニ付シ可然哉  
一歸休兵及ヒ豫備後備兵召集ノ期ニ後ル、者ハ司法法衛ノ審判ニ付シ可然哉  
一新陸軍刑法第二十七條ニ掲クル所ノ理事ハ評事若クハ主理ヲ以テ之ニ充テ裁判長ハ各鎮臺營所ニ於テハ軍法會議ノ議長ヲ以テ之ニ充テ可然哉  
一新陸軍刑法ニ掲クル所ノ流刑及ヒ禁獄輕禁錮拘留ニ處スル者ハ總テ現今禁錮ノ取扱ヒニ徒刑懲役ニ處スル者ハ現今徒刑ノ取扱ニ重禁錮ニ處スル者ハ現今戒役ノ取扱ニ致シ可然哉

一 軍人軍屬ヲ監視ニ付シタル時其執行處分ノ儀ハ其地方警察署ニ付シ可然哉  
陸軍治罪法施行ノ日マテ舊慣ニ依リ治罪手續ヲ執行候儀ハ伺之通

第一條 伺之通

但書數罪俱發ノ例ニ從フ可シ

第二條 軍人軍屬ハ軍衛ニ於テ處分シ常人ハ司法法衛ニ付スヘシ

第三條 軍人軍屬任官若クハ就役ノ前罪ヲ犯シ在官現役中發覺スル者ハ軍衛ニ於テ處分シ其在官現役  
中罪ヲ犯シ免官若クハ免役ノ後發覺スル時ハ陸軍刑法ヲ犯シタル者ハ軍衛ニ於テ處分シ普通刑法ヲ  
犯シタル者ハ司法法衛ニ付スヘシ

第四條 伺之通

第五條 歸休兵及ヒ豫備後備兵召集ノ期ニ後ル、者ハ軍衛ニ於テ處分スヘシ

第六條 第七條第八條 伺之通

明治十四年十二月二十七日

海軍治罪法御制定迄假手續ニ因リ取扱度儀ニ付伺

海軍治罪法御制定之儀本月七日付往出第一五七二號ヲ以上請仕置候處右御審查御發令相成候ニハ暫ク  
日數ヲ要候趣ニ承及候就テハ新刑法ノ儀ハ常律共ニ實施不相成ハ不都合ニ有之候間右刑法實施之日迄  
治罪法御制定不相成トキハ當分別紙數項ノ手續ヲ以裁判事務取扱其他ハ都テ從來ノ慣例ニ依リ施行致  
候ハ、差支無之見込ニ候條御允許有之度此段伺出候也

明治十四年十二月七日

太政大臣三條實美殿

裁判事務取扱手續

一 海軍々人屬ノ海軍刑法及ヒ普通刑法ノ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ海軍法衛ニ於テ審判スヘシ

一 常人ノ海軍刑法ヲ犯シタル者前同斷

海軍卿川村純義

一 海軍々人屬ノ海軍刑法ノ違警罪ヲ犯シタル者重罪輕罪ト共ニ發シタル時前同斷

一 海軍々人屬ト常人ト共ニ普通刑法ヲ犯シ軍人屬正犯ニシテ常人從犯ナル時モ前同斷

一 海軍々人屬ト共ニ普通刑法ヲ犯シ俱ニ正犯ナル時海軍法衛ニ於テ最初其取調ニ著手シタル時ハ前同  
斷

一 海軍々人屬在官在役中罪ヲ犯シ免官免役後發覺シタル時ハ前同斷

一 一流刑禁獄輕禁錮ノ刑ニ該ル者ハ海軍獄舎ニ錮シ從來ノ禁錮ノ如ク取扱ヒ徒刑懲役ニ該ル者ハ從來ノ  
徒刑ノ如ク取扱ヒ重禁錮ニ該ル者ハ從來ノ戒役ノ如ク取扱フヘシ

一 附加刑中禁治産監視ノ處分地方警察官ニ托スヘシ

海軍治罪法施行ノ日マテ舊慣ニ依リ治罪手續ヲ執行候儀ハ伺之通

第一條 伺之通

第二條 常人ト雖モ海軍刑法ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者ハ軍衛ニ於テ審判ス可シ

第三條 數罪俱發ノ例ニ從フ可シ

第四條 第五條軍人軍屬ト常人ト共ニ普通刑法ヲ犯シタル時軍人軍屬ハ軍衛ニ於テ處分シ常人ハ司法  
法衛ニ付スヘシ

第六條 在官在役中罪ヲ犯シ免官免役後發覺シタル時海軍刑法ヲ犯シタル者ハ軍衛ニ於テ處分シ普通  
刑法ヲ犯シタル者ハ司法法衛ニ付スヘシ

第七條 伺之通

第八條 監視ノ執行ハ其地方警察署ニ付スヘシ

明治十四年十二月二十七日

司法省達

丁第六年九月二十一日

刑部

刑部

刑部

刑部

刑部

刑部

刑部

刑部

刑部

刑部

刑部

刑部

刑部

刑部

刑部

刑部

刑部

刑部

裁判所ニ依リ軍衛ヲ  
脱シタル者軍衛罪ヲ犯  
シタルトキハ地方官轉  
裁判所ニ送致セシム

十六年八月二十四日  
陸軍治罪法制定  
制門軍律ニ載ス

陸軍治罪法制定迄常人  
ニテ陸軍刑罰ヲ犯スモ  
ノ司法衙門ニ於テ審判  
セシム

十六年八月二十四日  
陸軍治罪法制定迄常人  
ニテ陸軍刑罰ヲ犯スモ  
ノ司法衙門ニ於テ審判  
セシム

陸軍省ヨリ司法省ヘ照會十六年九月十三日  
已決重罪囚其他裁判宣告ニ依リ軍籍ヲ脱シタル者ト雖モ犯罪之レ有ル時ハ舊慣ニ據リ軍衙ニ於テ審判  
致來候處今般陸軍治罪法御頒布ニ付テハ特例アルモノヲ除ク外ハ軍衙ニ於テ審判ニ得ヘカラサル者ニ  
有之候間右已決囚ニシテ重罪ヲ犯ス者等有之候時ハ地方管轄裁判所ニ送付セシメ候間豫メ御達置相  
成度此段及御照會候也  
追テ自今本文ノ如キ罪囚ハ悉ク地方監獄ニ交付ノ見込ニ有之候此段申添候也

司法省同十五年八月九日

軍人軍屬治罪手續ノ儀ニ付テハ昨年十二月陸海軍省同ヘ御裁令ノ趣モ之アリ總テ舊慣ニ仍リ處分スヘ  
キ處軍人軍屬普通裁判所公廷内ノ輕罪違警罪ハ治罪法第二百七十三條ニ其身分ノ如何ニ拘ハラヌ云々  
ノ明文之アルニ付無論該條ニ依リ普通裁判所ニ於テ裁判スヘキ儀ニ之アルヘク將又常人ニテ陸軍刑法  
ヲ犯スモノアルキハ右海軍省同第二條ノ旨意ヲ推考スレハ無論陸軍裁判所ニテ裁判スヘキ儀ト相考ヘ  
候ヘトモ爲念一應相伺候也  
指令十五年九月二十一日

伺ノ趣左ノ通可相心得事  
前段伺ノ通

後段陸軍治罪法制定迄常人ハ司法衙門ニ於テ審判ス可キモノトス

司法省再申十五年八月二十五日

軍人軍屬裁判管轄ノ儀ニ付本月八日附ヲ以テ伺置候處未タ御指令不相成然ルニ裁判所等ヨリ續々當省  
ヘ伺出取調方大ニ差支候ニ付至急御指令有之度此段及再申候也

參事院議案十九年九月二日

別紙司法省同軍人軍屬治罪法手續客年陸海軍ヘ指令ノ件審査スル處左ノ如シ  
普通裁判所公廷内犯罪處分ノ儀ハ同省同之通ヲ以テ允當トス常人陸軍刑法ヲ犯ス者裁判管轄之儀ハ  
過般海軍卿ヘ御指令相成候第二條ノ旨意トハ固ヨリ異ナリ陸軍ニ於テハ客年十二月中伺定ノ通治罪  
法制定ノ日迄常人ハ舊慣ニ依リ總テ司法衙門ニ付ス可キ精神ニ付陸軍裁判所ノ管轄スヘキモノニ非  
ラサル儀ト思考ス  
右ニ依リ指令案左ノ通ニテ可然裁上申候也

司法省同十八年一月二十一日

別紙前橋始審裁判所檢察太田義顯ノ申出ニ依リ埼玉地方兇徒嘯集事件ニ付キ兵卒細井文八ナル者相加

於テ審理セシム  
十八年五月第十二號布告  
ヲ以テ軍人常人共犯ノ時  
軍人ハ軍法會議ノ判決ニ  
常人ハ普通裁判所ノ公判  
ニ附ス

伺ノ趣ハ今度限り通常裁判所ニ於テ審理セシム可キ儀ト可相心得候事

參事院議案十八年二月十四日  
別紙司法省同軍人ト常人ト共犯ニ係ル裁判管轄ノ件審査スル處左ノ如シ  
軍人ト常人ト共犯ニ係ル裁判管轄ノ儀ハ陸軍治罪法第二十條ノ明文モ有之候得共本件ノ如キ數百名  
犯罪者中僅々一名ノ軍人相加リタルカタク軍法會議ニ於テ審理セシメントスルハ不便勢カラサルノ  
ミナラス已ニ裁判官渡ヲ爲シタル者モ有之趣ニ付陸軍省ヘ御下問相成候處別紙追申書ノ通りニ有之  
旁特別ヲ以テ今度限り通常裁判所ニ於テ審理セシム然ルヘモノト認定ス(別紙追申)

司法省同十八年一月二十一日  
別紙名古屋輕罪裁判所檢察澄川抽三及長野輕罪裁判所檢察石川重玄ヨリ軍人常人ノ共犯ニ係ル國事  
犯罪管轄ノ儀ニ付申出ノ趣モ有之候處陸軍治罪法第二十條ニ軍人ト常人ト共ニ重罪輕罪ヲ  
犯シタルトキハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ストアルハ通常裁判所ニ於テ管轄ス可キ者ト高等法院ニ於テ  
管轄ス可キ者ト問ハス軍人ト常人ト共犯ニ係ルトキハ總テ軍法會議ニ於テ之ヲ管轄スヘキ旨ヲ定  
メラレタルカカ然レモ高等法院ヲ設ケラレタルハ普通刑法第二編第一章第二章ニ記載シタル罪ハ其  
事ノ重大ナルカ爲メ又皇族若クハ勅任官ノ犯罪ノ如キハ其身分ノ高貴ナルカ爲メ通常ノ管轄ニ屬スル  
トキハ裁判ノ公平及ヒ公衆ノ信譽ヲ失スルノ弊アルニ依ル故ニ高等法院ノ裁判官ハ特ニ上裁ヲ以テ元  
老院議官大審院判事等ヨリ之ヲ撰任スルノ制ナリトス然ルニ軍法會議ニ在テハ通常ノ判士ハ勿論假令  
將校ヲ以テ判士ニ充ルモ其弊ナシト定ムルノ理ナキカ如シ又國事犯罪ノ如キハ共犯員數非常ニ夥多ナ  
ル場合ナキニテ強テ軍法會議ノ管轄ニ屬スルモ實際甚タ困難ヲ免カレサル可シ由是考フレハ陸軍  
治罪法第二十條ハ通常事件ニ限ルノ精神ニシテ高等法院ノ管轄ニ屬ス可キ者ハ包含セサル可キ者ニ  
人ト常人ト共犯ヲ軍法會議ノ管轄ニ屬スルモ仍ホ穩當ナラス況ンヤ高等法院ノ管轄ニ屬ス可キ者ニ  
於テオヤ試ニ歐米各國ノ法律ニ徵スルニ通常事件ト雖モ臨戰合圍等ノ場合ヲ除クノ外軍人ト常人トノ  
共犯ハ概テ普通裁判所ニ於テ併セテ之ヲ管轄ス可キ者トナセリ若シ一旦條約ヲ改正シ外國人ヲシテ我  
邦ノ法律ニ服從セシムルニ至ラハ軍人ト外人トノ共犯モ仍ホ軍法會議ノ審判ヲ受ケシムヘキ乎何故  
ニ常人ハ共犯中軍人アルカ爲メ通常ノ辯護權上訴權ヲ失ヒ且過嚴ナル裁判手續ニ依ラサルヲ得サル  
カヲ知ラサルナリ畢竟常人ト軍人ト問ハス成ルヘク通常法ノ下ニ接息セシメ單ニ已ムヲ得サル事件



ニ付テノミ特別法ニ服從セシムルハ法理ノ視易キモノトス陸軍治罪法第二十條ハ頗ル困難ナル箇條ニシテ到底條理ニ實シ實際ニ徵スルモ之ヲ削除セザレハ充分ノ結果ヲ得ルニ至ラス通常事件ニ付テモ猶然リ況ンヤ高等法院ノ管轄ニ屬ス可キ者ニ於テハ本條ノ包含スル所ニ非スト爲スモ不當ノ解釋ニ非ザルナリ今般愛知縣其他ニ於テ國事犯罪ノ豫備ヲ爲シタル者發覺シ其共犯中僅ニ陸軍看護卒ニシテ軍籍ニアル者アルカ爲メ其管轄ヲ換ヘサル可カラサルカ若シ通常裁判所ニ於テ管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲シ其言渡ニ對シ被告等ヨリ上告ヲ爲スニ至ラハ大審院ニ於テモ至當ノ判決ヲ下サ、ル可カラス裁判管轄ヲ定ムル大審院ノ權限ニ付テハ既ニ一昨年何番差出置候ヘハ未タ何分ノ御指令無之判決ノ基礎相立サル内本文ノ事件發覺セリ唯此事件ノミニ付テハ如何様御指揮相成候トモ將來ニ於テ一定ノ法制無之テハ裁判構成ノ大則ニ戻リ不都合少カラス候條至急御詮議相成度此段相伺候也

指令十八年二月二十三日

伺ノ趣本件犯罪者ノ儀ハ軍人ト雖モ今度ニ限り普通治罪法ニヨリテ審理セシム可キ儀ト可相心得候事

參事院議案十八年二月十四日  
別紙司法省國事犯罪裁判管轄ノ件審査スルコト左ノ如シ  
國事犯罪ハ治罪法第八十三條ニヨリ高等法院ニ於テ審理ス可キ手續ナルモ陸軍治罪法第二十條ニヨルトキハ軍人ト常人ト共犯ナレハ軍法會議ニ於テ管轄スルモノ、如ク相見ヘ彼是支梧ナキ能ハス是等ハ早晚御改正有之儀ト存候得共差懸リ本件ノ如キハ數十名ノ犯罪中僅ニ軍人ノ和加リタルカタメ之ヲ軍法會議ニ交付セントスルハ巨多ノ手数ヲ要スル儀ニ付陸軍省ヘ御下問相成候處別紙追申書ノ通上答有之候ニ付今般ノ儀ハ軍人ト雖モ普通治罪法ニヨリ處分セシメ可然儀ト認定ス

右ニ由リ指令案左ノ通ニテ可然裁上申候也

普通治罪法陸軍治罪法海軍治罪法  
法交渉ノ件處分法

布告十八年五月二十九日太政大臣三條實美陸軍卿大山海軍卿川村純義司法卿福岡幸弟副署

普通治罪法陸軍治罪法海軍治罪法交渉ノ件處分法左ノ通制定ス但從前ノ成規中本則ニ抵觸スルモノハ當分施行セス

第一條 常人ニシテ陸軍刑法若クハ海軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者ハ普通裁判所ニ於テ之ヲ審判ス但刑ノ執行ハ普通ノ規則ニ從フ

第二條 軍人常人共ニ重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ軍人ハ軍法會議ノ判決ニ付シ常人ハ普通裁判所ノ公判ニ付ス軍衛ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルトキハ常人ハ審問ノ上證憑書類ト共ニ之ヲ管轄ノ普通裁判

所檢事ニ送致シ普通裁判所ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルトキハ軍人ハ審問ノ上證憑書類ト共ニ之ヲ被告人所屬長若クハ陸海軍檢察官ニ送致スヘシ

第三條 敵前軍中臨戰合圍ノ地若クハ海軍諸用ニ供スル船舶ニ在テ重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ常人ト雖モ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スルコトヲ得但戒嚴令第十一條第十二條ニ掲クルモノハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スヘシ

第四條 軍法會議ト普通裁判所トノ管轄違ニ付テハ軍法會議又ハ普通裁判所ノ言渡ニ對シ普通治罪法ニ定メタル手續ニ從ヒ大審院ニ上告スルコトヲ得但軍法會議ノ言渡ニ對シ上告スルハ被告人ニ限ルヘシ

第五條 多衆ノ軍人常人鬪毆殺傷其他疑讞ニ係ル罪ヲ犯シタルトキハ軍官法司會同審問スルコトヲ得

第六條 軍法會議ト普通裁判所トノ間ハ斯レ既ニ確定シタル裁判ノ効力ハ互ニ之ヲ侵スコトヲ得ス

勅旨布告候事

參事院上申十八年四月四日  
普通治罪法陸軍治罪法海軍治罪法交渉ノ件内閣ノ命ニ依リ布告案別紙ノ通起草致候ニ付説明書相添此段上申候也

本案説明書  
陸海軍ノ治罪法タルヤ軍紀風紀ヲ維持シ嚴整靜肅ヲ保ツノ主眼ナルヲ以テ勉メテ軍法會議ノ權限ヲ廣フス故ニ軍人若クハ常人ニシテ陸海軍刑法ノ罪ヲ犯ス者軍人ニシテ普通刑法ノ罪ヲ犯ス者軍人ト軍人ニ非ル者ノ共犯罪及海軍及海軍諸用ニ供スル船舶ノ乘員等ハ盡ク軍法會議ノ權限ニ屬セシメ普通裁判所一切之ニ關與スヘカラサルノ法ナリ陸軍治罪法ト海軍治罪法ト相伯仲スト雖モ普通治罪法ト陸海軍治罪法トハ對峙シテ相倚ラス然ルニ實地履行ノ際ニ到テ困難ト不便トヲ免カレズ終ニ政府ノ特許ヲ得テ其罪ヲ治ムル者往々之レアルニ至ルハ必竟法ノ不整不備ナルニ由ル此レ本案ノ起草アル所以ナリ尙本案條條ノ説明ヲ爲スコト如左

第一條ノ説明 普通治罪法ト陸海軍治罪法交渉ノ件ハ普通裁判所ト軍法會議ニ於テ各其人ヲ分ケ常人ニシテ普通刑法及陸海軍刑法ノ罪ヲ犯ス者ハ普通裁判所ノ審判ニ付シ軍人ニシテ同斷ノ者ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判セザレハ其錯雜紛紛ヲ免カレズ且平時常人ヲ遇スルニ上告ヲ許サス辯護人ヲ許サス及傍聽ヲ禁スル軍法會議ノ處分ニ付セル聊苛酷ニ過ルノ慮ナキニ非ス此本條ヲ設ケル所以ナリ

第二條ノ説明 軍人ト軍人ニ非ル者トノ共犯ハ陸軍治罪法第二十條海軍治罪法第十九條ノ如ク總テ軍

治罪門 刑事諸則

二百八十三

法會議ニ於テ審判スヘキノ法ナリ然ルニ先般埼玉縣暴動ノトキ其暴徒ハ盡ク軍人ニ非ル者ノ所爲トシ普通ノ法律ニ從ヒ其罪ヲ治メ其刑ヲ擬セシムルニ際シ陸軍兵卒ノ逃亡セシ者加ツテ其黨ニ在ルヲ偵知ス之ヲ法律ニ照セハ即チ陸軍治罪法第二十條ニ適當スルヲ以テ右暴徒ハ盡ク軍法會議ニ於テ審判セサルヘカラス然ト雖モ千五百ノ中只一兵卒之ニ加フルヲ以テ普通ノ法ヲ止メ盡ク軍法會議ニ於テ審判セサル者得ル者ニ非ス故ニ第一條ノ如ク常人ハ普通裁判所ニ軍人ハ軍法會議ニ公判判決ニ付シ後來其煩ヲ絶タンコトヲ欲スルナリ

第三條ノ說明 軍人ト共犯ニ係ル常人ト陸海軍刑法ノ罪ヲ犯スノ常人ハ前兩條ノ如ク普通裁判所ノ審判ニ付セシムト雖モ時ト所ニ由テハ前兩條ノ場合ニ限ラス常人ニシテ普通刑法ノ罪ヲ犯スモノアルトキ軍法會議ニ於テ之ヲ審判セサルハ軍機ヲ誤ルノ虞ナキヲ保キ難キ場合アリ即チ前軍中監戰合團ノ地海軍諸用ニ供スル船舶等ニ在テ罪ヲ犯ス者ハ如キ是ナリ因テ本條ハ前兩條ノ範圍外トシテ臨時軍法會議ハ權限ヲ擴充スル爲メニ設クルモノナリ然リト雖モ戒嚴令ニ明文アルモノハ軍法會議ニ於テ必ス審判ヲ要スルヲ以テ但書ヲ付シ其權限ヲ明ニス

第四條ノ說明 陸海軍治罪法ハ上告ヲ許サス故ニ軍法會議ニ於テ管轄違ノ言渡ヲ受クルモ被告人ニ於テ之ヲ訴フルノ道ナシ又大審院ニ於テ裁判管轄ヲ定ムト雖モ軍法會議ニ於テ其定メテ履行スルノ法ナシ故ニ屢其管轄定ノ件ニ付紛雜ヲ生シ司法陸軍兩省ヨリ上裁ヲ請フノ實境アリ此本條ヲ設ケ法ノ具備ヲ望ムナリ

第五條ノ說明 軍人常人共犯罪ノ公判ハ第二條ノ規則ニ從フト雖モ若シ常人ト軍人ト多衆相集リ互ニ闘毆ヲ爲シ其他疑難ニ係ル事件ニ在テハ會同審問セサルハ判明ナラサルコトアリ即チ大坂ニ於テ巡査ト兵卒ノ闘爭事件ノ如キ其適例ナリ此本條ヲ設ケ治罪法ノ足ラサルヲ補フ所以ナリ

第六條ノ說明 普通裁判所若クハ軍法會議ニ於テ管轄違ノ裁判ヲ爲シ其裁判既ニ確定スルニ際シ其効力ヲ消滅セシメ真正ノ裁判ヲ望ムモノアリ蓋日海軍ノ軍屬普通裁判所ニ於テ欠席裁判ヲ爲シ其裁判確定ノ後海軍主理ヨリ其取消ヲ求ムルノ實例アリ然リト雖モ裁判ハ請求ニ由テ左右スヘキ者ニアラス故ニ本條ヲ設ケ其備ハラサルヲ輔クルナリ

參事院議案十八年五月八日

別紙元老院上奏普通治罪法陸軍治罪法海軍治罪法交涉布告案ノ義審查候處該案ノ通ニテ不都合無之ニ付御裁可相成可然哉上申候也

通常裁判所ト海軍軍法會議ト管轄抵觸ニ付區分

司法省何十七年八月十三日

通常裁判所ト海軍軍法會議トノ管轄抵觸之儀ニ付別紙ノ通甲府經罪裁判所檢察長谷川秀實ヨリ伺出候處右ノ通常裁判所ニ於テ被告人ノ身分軍屬ナルコトヲ知ラス關席裁判ヲ爲シ已ニ其言渡ヲ確定シタルモノニシテ法律上之ヲ取消スノ方法ナシ依テ軍法會議ニ於テ其儘執行ヲ爲シ可キ儀ト考量候得共其事通常法衙及ヒ軍衙ノ權限ニ關シ且例規モ無之ヲ以テ一應相伺候際至急何分ノ御指令有之度候也(別紙甲府經罪)

指令 十八年六月二十日 伺ノ通

海軍省へ達十八年六月二十日

別紙司法省何通常裁判所ト海軍軍法會議トノ管轄抵觸ノ件朱書之通及指令候條此旨相達候事

參事院議案十八年六月十日

別紙司法省何通常裁判所ト海軍軍法會議トノ管轄抵觸ノ件審查スル處左ノ如シ

伺ノ要領ハ通常裁判所ニ於テ被告人ノ身分軍屬ナルコトヲ知ラス關席裁判ヲ爲シ其言渡既ニ確定シタル者アリ法律上之ヲ取消スヘキノ方法ナシ依テ軍法會議ニ於テ其儘執行ヲ爲スヘキヤト云ニ在リ右ハ伺ノ如ク法律上此場合ニ於ル何等ノ明文アルコトナシ蓋シ其犯罪ハ普通刑法ニ係リ且本犯其言渡ヲ領知シタルモ故障ノ申立モ爲サス已ニ確定セシ裁判ナルノミナラス更ニ軍法會議ニ付シ之ヲ改審スルモ到底普通刑法ニ依ラサル可カラサルモノニ付伺ノ通處置シ可然モノト評定ス

右ニ由リ指令案海軍省へ達案左ノ通ニテ可然哉上申候也

司法省達 五年十月三日

新律中贓物ノ價錢ヲ估計スルハ皆犯處當時中等ノ物價ニ據テ罪名ヲ定ムト有之候處右ハ商賈ヲ召シテ估計セシム之ヲ評價人ト稱ス依テハ右評價ノミナリ以テ商賈ヲ役使スル者ハ一日五十錢半日二十五錢ト但入札法ヲ以テ商賈ヲ召シ估却スルハ此限ニアラス

司法省何五年十月三日

新律中贓物ノ價錢ヲ估計スルハ皆犯處當時中等ノ物價ニ據テ罪名ヲ定ムト有之候處右ハ官吏自ラ其價ヲ定ムルコト能ハス商賈ヲ召シテ估計セシム之ヲ評價人ト稱ス依テハ右評價ノミナリ以テ商賈ヲ役使スル者ハ一日五十錢半日二十五錢ト定メ雇錢相渡申度尤入札法ヲ以テ商賈ヲ召シ估却スルハ此限ニアラス候此段相伺候也

指令五年十月七日

伺ノ通

(參照)

木更津裁判所ヨリ司法省へ伺六年三月二十四日

先般第二十九號ヲ以テ御達相成候給沒贓物律條例ノ旨趣ニテハ雇評價人ヲ呼出サザルヲ得ナル儀ニテ

評價人ノ雇錢ヲ定ム  
十五年一月利法附則第四條  
ニ依テ海軍軍法會議則第四條  
第四十八條ヲ參照ス可シ

現ニ其職業ノ妨礙ニ相成候ニ付估計セシムル毎ニ相當ノ手数料ヲ給與スル儀ニ可有之其手数料償却ノ道ハ如何カ相心得可然哉相伺申候右ハ差掛リ候儀ニ付至急御指令被下度候以上

評價人手數料ハ官費ニ相立可然事

司法省ヨリ大藏省ヘ回答六年五月七日

小倉縣同職物估計評價人雇錢ノ儀ハ職物估拂代金ノ内ヨリ其費用ニ宛テ可然旨御見込ヲ以テ御掛合有之候處右評價人ノ賃錢ヲ盜賊ノ内ニ就テ相渡候ヘハ盜害ニ罹リ候事主ハ重複損失ヲ被リ候様可相成依之評價人雇錢ハ總テ官費ニ相立候條此段御答ニ及候也

布告 七年七月二十日

刑事諸人ニ旅費日當ヲ支給ス

凡罪囚推糺ノ爲裁判官 裁判所無之ニ於テ其證人タルヘキト思量スル者呼出候節其旅費一日五十錢滯留日當三十錢ノ割合ヲ以官費給與可致ニ付問糺中ノ日數并ニ往復里程ヲ詳記シ其裁判官 裁判所無之ノ證印ヲ請ケ本質廳ヨリ該金受取ヘク此旨布告候事

但寄留人ハ其寄留地ノ管轄廳ヨリ受取ヘキ事

達 七年七月二十日

證人トシテ呼出シタルトキノ旅費日當ハ旅費定則ニ依リ支給セシム

今般第七十八號ノ通布告候ニ付裁判官 裁判所無之ヨリ證人呼出ノ儀通達致シ候節ハ速ニ本人ヘ相達旅費日當ノ儀ハ旅費定則第二章第十一章等ニ照準シ給與可致此旨相達候事

司法省同七年三月十五日

罪囚推糺ノ節其證人取シカ爲メニ府下及近在ノ者共一時裁判所ヘ呼出候節從前手當金等不遺仕例ニ候處右ハ遠地ノ者ハ申迄モ無之府下近在ノ者連モ往來夫レカ爲メ產業ヲ妨害シ他日ノ困難ヲ醸シ成シ平素海産微力ノ徒ニ至テハ殊ニ惘然ノ至ニ候依テハ今後右等呼出ノ節ハ士農工賈ヲ不問一般日數ニヨリ相當ノ手當金御支給相成候様致度此段相伺候也

指合七年四月十日

伺之趣聞届候條支給方相當ノ處至急取調更ニ可伺出事

左院議案七年四月五日

別紙司法省同罪囚推糺ニ付證人手當金ノ儀遂審議候處上陳ノ趣事理允當ナルニ付訴訟入費償却假規則證人并ニ引合人手當ニ準據シ日數ニ應シ御支給可相成候ナレモ一應同省ヘ御下命右相當ノ支給方爲取

關再伺ノ上御布告相成可然因テ御指令案相添仰高判候也

司法省同七年五月十九日

罪囚推糺ニ付呼出候證人手當金支給方ノ儀ニ付本年三月十五日相伺候處四月十日ヲ以伺ノ趣御聞届可相成候間支給方取調更ニ可伺出旨御指令ニ付規則別紙ノ通取調致上申候間至急御決議ノ上一般御布告相成候様致度此段更ニ相伺候也

指合七年七月二十二日

伺之趣第七十八號布告及第九十一號ノ通使府縣ヘ相達候事

別紙

罪囚推糺ニ付證人手當金規則

- 第一條 凡罪囚推糺ノ節其證人アルコト明白ナル者ハ其證人ヲ呼出シ之ヲ證セシムル爲メ臨時ニ呼出スコトハ裁判官ノ權内ニ在リト雖モ其未タ明白ナラサル者ニシテ證人タラント思量スル者ヲ呼出ス時ハ其事詳細書取ヲ以テ司法省ニ伺出許可ヲ得テ呼出スヘシ
  - 第二條 證人ヲ呼出ス時ハ呼出タル日ヨリ歸郷ノ日迄ヲ算シ手當金トシテ一日ニ五十錢ヲ支給スヘシ但一日ニ付八里詰ノ割合タルヘシ別段旅費止宿料ハ賜ラス
  - 第三條 八里以内ト雖モ之ヲ呼出ス時ハ一日ノ手當金ヲ支給スヘシ
  - 第四條 右手當金支給ハ地方官ニ於テ取計フヘシ
  - 第五條 證人問糺ニ付滯留日數ト其事濟ノ日トヲ記シ裁判所ヨリ地方官ニ報知ス可シ
- 左院議案七年六月二十五日
- 別紙司法省上陳罪囚推糺ニ付證人手當金ノ儀遂審議候處第一條其證明白ナルト否トヲ以テ兩様ノ呼出ニ相成候テハ不都合ニ有之且一ノ證人タルヘキ者ヲ呼出ニ遠隔ノ地ノ裁判官ニ於テ必ス同省ノ許可ヲ要シ候テハ事理迂緩ニ相成實際上多少ノ扞格相生シ可申其他數條頗ル冗贅ニ屬シ分條シテ規則相立候ニモ及フ間敷左ノ通御布告相成可然因テ諸案取調仰高裁候也

布告 七年十一月二十七日

人違又ハ人名誤寫等ニテ呼出シタル者ニ往返旅費ヲ給ス

探索上ニテ捕ニ就キ及ヒ裁判官ノ呼出ヲ受テ無罪ニ歸スル者并ニ人違又ハ官吏ノ其人名ヲ誤寫スル等ニテ呼出サレタル者往返旅費ハ本年七月第七十八號布告ニ準シ官費給與候條此旨布告候事

司法省同七年九月十五日

凡探索上ニ於テ捕ニ就ク者裁判所ノ呼出ヲ受ケテ出頭スル者等人違又ハ官吏ノ其人名ヲ誤寫スル等ニ出ルモノハ正條有之等無罪ニ歸スル者ノ往返旅費ハ全ク當人ノ損失トハ難相成モノニ候處佛國ニ於テハ刑事ノ原告人有之被告無罪ニ歸スルキハ其費用ハ原告人ヨリ差出ス方法ノ由又官吏ノ摘發ニ

係ルモノハ官費ニナス旨法律ニモ記載有之尤本年第七十八號ヲ以テ御布告相成候證人呼出ノ節官費給與ノ方法ニ準シ向後一般施行イタシ候儀ト相心得可然候哉差向地方ヨリ伺ノ向有之指令ニ差支候間至急御指揮相成度此段相伺候也

指令七年十一月二十八日

伺ノ趣第百二十七號布告ノ通可相心得事

財務課議案七年十月三日

別紙司法省伺捕縛及ヒ呼出ノ無罪人旅費ノ儀審議致候處即證人呼出ノ節官員給與ノ儀ト同様ニ候條上申ノ通御許可相成可然存候仍テ諸案調査仰高裁候也

達 第七年十一月二十七日  
第七年十一月二十八日  
第九十一號達書ニ照準シ給與可致此旨相達候事

今般第百二十七號ノ通布告候ニ付本年七月第九十一號達書ニ照準シ給與可致此旨相達候事

布告 第八年五月七日  
第七年四月十四日

各裁判所無之地ヨリ呼出テ受テ無罪ニ歸スル者旅費ノ儀明治七年十一月第百二十七號ヲ以テ布告候處本年六月一日ヨリ渾テ其呼出シタル裁判所無之地ヨリ支給候條此旨布告候事

大藏省へ達 八年五月十日

別紙司法省伺無罪放放ノ者へ旅費支給方ノ儀朱書ノ通及指令候條金額渡方可取計此旨相達候事

司法省伺八年三月二十二日

各裁判所ニ於テ各府縣管下ノ者不審筋ヲ以呼出又ハ捕縛推究ノ上無罪ニ歸シ候證旅費支給方客年第一百二十七號公布ノ趣モ有之然處各地方應出張被廢候付テハ自今當省ニ於テ立替其管轄縣ヨリ返償可致候へ共到底當省經費手詰リノ金額加之本年第十六號府縣往復規程御發行等ニテハ多少ノ費用ヲ酌シ所詮此上額内ヲ以前文旅費等立替併供ノ目計無之依之別紙圖書ノ通先以一月金四千三百餘圓ノ割ヲ以テ兼テ當省常額へ繰込御渡有之度然ルニ於テハ各府縣往復等ノ手數ヲ省ク而已ナラス計算上彼是へ不差跨猶一層ノ便捷ト存候條厚御考量ノ上速御指揮被下度候也

指令八年五月十日

伺ノ趣開屆一ヶ月金四千三百圓ツ、其省常額へ増加相渡候條大藏省ヨリ受取月月勘定帳元拂ニ可相立事

入獄等ニテ呼出シタル者ノ旅費モ旅費定則ニ據リ支給ス

九年五月第六十三號布告ヲ以テ廢ス

各裁判所ヨリ呼出テ受テ無罪ニ歸シタル者ノ旅費ハ裁判所ヨリ支給ス

九年五月第六十三號布告ヲ以テ廢ス

無罪放放者ニ給ス可キ旅費金額ヲ司法省ニ交付ス

但無罪放放ノ者旅費支給ノ儀ハ第七十四號ヲ以布告候事

(別紙)

不審筋有之呼出或ハ捕縛推究ノ末無罪ニ歸シ候者へ地方官ニテ支給スヘキ旅費日當一時立替金概算東京ヨリ各府縣へノ里數合計九千二百里未滿之ヲ二府五十八縣及ヒ函館共合シ六十一廳ニ割合片道百五拾里ヲ以テ遠近ノ中トシ金員左ノ如シ

遠往片道三百七十六里餘	旅費	金四十一圓八十錢
中片道三百五十里	旅費	金九圓
近片道二百一里以外三十里迄	旅費	金十六圓五十錢
近往片道六日路	旅費	金九圓
滯留	旅費	金三圓三十錢
滯留	旅費	金九圓
合計		金百二十六圓四十錢
東京		金六百九十三圓五十錢
二府		金千四百三十七圓六十錢
四縣		金千三百五十九圓
各縣裁判所		金七百五十一圓五十錢
各所支廳		
十五ヶ所		
總合金四千三百六十八圓		
大藏省答議八年四月五日		

財務課議案 八年四月十五日  
司法省無罪釋放之者へ旅費支給方之儀大藏省上答之趣トモ併ヒテ審議候處右費用一時立替追テ府縣ヨリ辨償爲致候テハ却テ手數モ相掛候間凡積一箇月金四千三百圓ツ、常額金へ増加御渡相成可然因テ公布案及御指令共左ニ上陳候也

布告 第九年五月四日 第六十三號

明治七年七月第七十八號同年十一月第一百二十七號同八年五月第七十四號布告及同七年七月第九十一號同年十一月第一百五十八號達テ廢シ證人并無罪解放ノ者等ノ旅費支給方ノ儀今般更ニ左ノ通相定當五月十六日ヨリ施行候條此旨布告候事

一 罪囚ノ證人タルヘキト思量シ裁判官ニ於テ呼出ス者探索上ニテ捕ニ就キ及裁判官ノ呼出テ受テ無罪ニ歸スル者人違又ハ官吏ノ其人各ヲ誤寫スル等ニテ呼出シタル者各官廳ヨリ呼出有罪ト認メ呼出サル、者へ附添テ命スル者往復并滯留中左ノ通支給スヘシ  
但推糺ノ爲メ手鎖繩付等ニテ護送及檻倉入圈中等官費ヲ以仕賄ノ時日ハ別ニ給セス  
金五十錢  
旅費日當  
金三十錢  
滯留日當

一 該廳ヨリ片道二里以上十里迄ハ旅費日當一日分ヲ給シ爾餘一日十里詰ヲ以テ往返共之ヲ給シ滯留中ハ其日數ニ應シ滯留日當ヲ給スヘシ十里以上ノ端里數一里ニ滿テサルハ切捨  
但二里未滿ノ地ヨリ呼出セシ者ハ辨當料金二錢五厘ヲ給ス

一 各裁判所 裁判所無之地ヨリ呼出テ受テ無罪ニ歸スルモノハ其旅費ハ其呼出タル裁判所方ヘ其縣廳ヨリ之ヲ給ス其他ハ總テ本管廳寄留地ノ管轄廳ヨリ給スルニ付證人及附添テ命スル者等ノ如キハ問糺中ノ日數并ニ往復里程ヲ詳記シ其裁判官ノ證印ヲ請ケ旅費受取方ヲ申請スヘシ  
司法省同八年十二月九日

證人タルヘキト思量スル者呼出シ及呼出テ受テ無罪ニ歸スル者并ニ人違又ハ官吏ノ其人各ヲ誤寫スル等ニテ呼出サレタル者昨七年第七十八號同百二十七號本年第七十四號公布及昨七年第九十一號公達等ニ

証人并無罪解放者ノ旅費支給方ヲ定ム

十五年一月治罪法及刑法附則實施ニ依テ豫審公判ニ係ル證人及無罪解放者ニ支給スル旅費ノ件前記ス刑罰法附則第四章下ニ條給アリ

九年十一月內務省達乙第百二十七號十五年七月五日大藏省御指令及同十六年六月八日司法省御指令ヲ參照ス可シ  
九年十月第百三十二號布告ヲ以テ第一項ヲ改正ス

九年八月第百七號布告ヲ以テ第二項但書ヲ改正ス  
九年十二月第百五十一號布告ヲ以テ第三項ヲ增補ス

テ旅費日當給與方々御制定相成則本年六月一日以來各所一般支給致來候處右等ノ者呼出ノ節官ヨリ附添テ命スル者顯然名義ハ無之ヲ其實囚人護送者ニ類似致シ候ニ付定則ノ旅費給與妥當ト被考候ヘトモ前數號公布公達ニ名文無之候間證人并ニ呼出テ受テ無罪ニ歸スル者ノ外旅費給與不致當ニ情實憫然ノミナラス不公平ト被存候就テハ自今官ヨリ命スル附添人ノ者本人犯罪ノ有無ヲ不論證人同一旅費給與御施行相成度尤別紙大審院具狀ノ如ク各廳ヨリモ追進申出候向有之候ニ付御裁可ノ上速ニ御布告相成候様致度因テ左案并ニ別紙相添此段相伺候也 大藏省 狀 大藏省 狀

指令 第九年五月四日 第六十三號ヲ以布告候事

大藏省答議 九年三月二十四日

司法省伺裁判官ヨリ附添テ命スル者旅費支給方ノ儀ニ付御下問ノ趣敬承仕候右ハ同省伺ノ通公布相成可然候ヘトモ證人及無罪解放ノ者旅費等ノ儀ハ追々公布相成居候間逐次増補イマシ候ヨリ今回前文并其他右ニ關涉ノ條款ヲ合セ左案ノ如ク公布相成度因テハ其支給方法ニ至リテモ官吏ト同視シ難キ場合モ有之ニ付一般ノ定規トハ全ク之ヲ別異ニ爾來該廳ヨリ片道二里以上十里迄ハ日當一箇ヲ給シ爾餘十里詰ヲ以テ日當一箇ツ、ヲ支給ス尤二里未滿ノ地ヨリ呼出セシ者ハ既ニ證人辨當料支給方法同視候旨趣ニ基キ總テ同一ノ額即金貳錢五厘ヲ辨當料トシテ給ス將又官吏ノ其人各ヲ誤寫スル等云々ノ條ハ從來裁判上關涉ノ事件ニテ呼出セシ者ノヨリニ支給シ來候處往々各廳諸課ヨリ呼出候者ニテ同様誤寫等ニテ呼出サレ候向モ有之其名狀ハ異ナルモ歸スル處ハ全ク同一ノ額ニテ既ニ甲ニ官費ヲ以テ給シ乙ニ自辨セシムル條理ハ無之ト被存候ニ付是亦同様支給致シ可然ト存候因テ別紙返進御布告案添上答旁此段相伺候也

指令 第九年五月四日 第六十三號ヲ以布告候事

法制局議案 九年四月十一日

司法省伺裁判官ヨリ附添テ命スル者旅費支給方ノ儀并大藏省上答旁伺ノ趣共併テ審議候處證人及無罪解放ノ者旅費等ノ儀追々公布相成居候間逐次増補候ヨリ今回前文并其他右ニ關涉ノ條款ヲ合セ公布相成度旨遂調査候處不都合ノ疎不相見候間大藏省伺ノ通公布相成可然御指令案等左ニ相伺候也  
司法省ヨリ太政官書記官へ照會 十年八月八日  
明治九年五月第六十三號布告第三項各裁判所及ヒ警察官吏ヨリ呼出シテ受テ無罪ニ歸スルモノハ旅費ハ其呼出シタル廳ヨリ之ヲ給ス其他ハ總テ本官廳ヨリ給スルニ付云々ト有之依是觀之各裁判所及警察官吏ヨリ呼出シ無罪ニ歸スルモノハ只旅費而已ヲ給シ滯留日當ハ其他ハ總テ本官廳ヨリ云々ト有之依是觀之各裁判所及警察官吏ヨリ給スル様相見候ヘ共右旅費ヲ給ス云々ハ旅費日當滯留日當ヲ給スルノ意味ニ可有之ト存候左スレハ本條其他云々ハ則各裁判所警察官吏ヲ除ノ外各官廳ヨリ呼出セシモノハ儀ニ可有之ト存候ヘ共地方裁判ヨリ夫是疑問モ有之及御照會候條迅速御答示有之度候也

太政官書記官回答十年八月十一日  
明治九年五月第六十三號布告第三項無罪ニ歸スル者旅費支出方ノ儀ニ付云々御問合ノ趣承知致候右ハ  
各裁判所及ヒ警察官吏ヨリ呼出シテ受ケ無罪ニ歸スルモノ往返旅費及ヒ滞留日當共其呼出タル應  
リ支給スル筋ニテ其他ハ總テト有之ハ御申越ノ通り他ノ官廳ヲ指シタル儀ニ有之候此段及御回答候也  
(參照)  
旅費規則附例十年四月  
內國ノ部  
第一號

檢 査 局

九年第六十三號布告第三項  
一 地方警察官ニテ捕縛又ハ呼出ノ上檢事ニ送付セシモノ檢事ニ於テ無罪ト認メ或ハ裁判官糾彈ノ末無  
罪判決ノ者旅費ハ各地方廳其他ハ警視廳ヨリ之ヲ支給ス可シ  
但檢事ヨリ地方警察吏ニ移牒シテ呼出サシムル者モ亦同シ  
一 裁判官ノ見込ヲ以テ直ニ呼出シ或ハ檢事及ヒ地方警察官吏ヘ通達シテ裁判所ヘ呼出シ糾彈ノ末無罪  
ニ歸スルモノ、旅費ハ裁判所ヨリ之ヲ支給ス  
一 無罪放免ノ者ト雖モ減等無科或ハ連累等ニシテ其身糾彈ヲ免レサルモノハ旅費日當支給セサル可シ

布告 第九年七月三日  
第九年七月三日

本年五月第六十三號布告證人等旅費支給方規則第二項但書左ノ通増補候條此旨布告候事  
一該廳ヨリ片道云々  
但片道二里以上滿五里迄ノ地ヲ一日間ニ往來スルモ日當ハ一日分ノ外給セス尤二里未滿ノ地ヨリ  
呼出セシモノハ辨當料金二錢五釐ヲ給ス

大藏省 第九年七月十五日

本年五月第六十三號ヲ以テ御布告相成候證人等ノ旅費支給方規則第二項中往返共之ヲ給スルノ文ニ據候  
得ハ片道二里以上三四里ノ地ヲ一日間ニ往來スルモノハ二日分ノ日當ヲ支給スヘキ様相成右等ノ儀  
問合申出候向往々有之且各廳ノ内ニハ右ノ心得ヲ以テ支給取計居候モノモ可有之乍去右様支給候ハ妥  
當不相成儀ニ付更ニ別紙ノ通御布告相成候様仕度此段相伺候也  
指令九年八月三日  
同ノ趣第百七號ヲ以テ布告候事  
第五科議案九年七月十九日

別紙大藏省御證人等ノ旅費支給方規則第二項但書増補ノ儀審案候處右ハ該省草案ヘ貼紙ノ通公布相成  
可然ト存候因テ御指令案等左ニ相伺候也

布告 第九年十月二十三日  
第九年十月二十三日

本年五月第六十三號布告第一項及第三項中左ノ通改正候條此旨布告候事  
第一項思量シ裁判官ノ下ニ(又ハ警察官吏ノ六字ヲ加ヘ捕ニ就キ及ノ下(裁判官ノ)ノ四字ヲ除ク  
第三項各裁判所ノ下割注ヲ除キ(及ヒ警察官吏ノ六字ヲ加ヘ其呼出タルノ下(裁判所ノ)三字及割注共刪  
除シ(廳)ノ一字ヲ加フ

內務大藏兩省 第九年八月十八日

本年第六十三號ヲ以テ罪囚證人及ヒ無罪解放ノ者旅費支給方更正御布告有之候處警察官於テ探索ノ上  
捕縛拘引ノ末人違等ニテ解放ノ者及ヒ警察上證人呼出旅費支拂方ノ明文無之ニ付他ヨリ推問ノ趣モ  
有之候ニ付テハ別紙ノ通右御布告但書追加相成候様仕度御布告案添付相成候條至急御裁可有之度候也  
指令九年十月二十三日  
同ノ趣第百三十二號ヲ以テ布告候事  
第五科議案九年十月十一日

內務大藏兩省 第九年十月十一日

內務大藏兩省御罪囚證人及ヒ無罪解放ノ者旅費支給方ノ儀審案候處右ハ本年第六十三號御布告相成候處  
警察官於テ探索上捕縛ニ就キ或ハ證人トシテ呼出ノ者旅費支給方ノ明文無之ニ付右御布告中ヘ但書追  
加ノ儀該省ヘ照會ノ上左ニ御布告御指令案取調相伺候也

內務省達 第九年十一月八日  
第九年十一月八日

罪囚證人及ヒ無罪解放ノ者旅費支給方ニ付本年第六十三號及ヒ第百三十二號ヲ以テ公布ノ趣有之候處  
警察官吏ノ處分ニ依リ旅費滞留日當支給スヘキ分ハ渾テ警察費ヨリ可仕拂此旨相達候事

布告 第九年十二月九日  
第九年十二月九日

本年五月第六十三號布告第三項中各裁判所及ヒ警察吏ヨリ呼出テ受ケ無罪ニ歸スルモノ、下ニ(人違又  
ハ官吏ノ其人名ヲ誤寫スル等ニテ呼出タルモノ)ノ二十四字ヲ増補候條此旨布告候事

治罪門 刑事諸則

二百九十三

證人等旅費支給方規則  
第一項第二項中改正  
十五年一月刑注附則ニ依  
テ消滅ス

警察官吏ノ處分ニ係ル  
證人及ヒ無罪解放者ノ  
旅費支拂方  
十六年八月二十五日內務  
司法兩省御問合同年十一  
月司法省達內第九號ヲ參  
照ス可シ同指令ハ刑事諸  
則ノ部ニ載ス  
證人等旅費支給方規則  
第三項中ヲ増補ス  
十五年一月刑注附則規則  
ニ依テ消滅ス

大藏省同九年十一月二十四日  
 本年五月第六十三號ヲ以テ證人并無罪解放ノ者旅費支給ノ規則御布告相成候處第一條中人違又ハ官吏ノ其人名ヲ誤寫スル等ニテ呼出シタル者云々左ノ通支給スヘシト掲ケ第三條ニ至リ右名稱ヲ脱シ無罪ニ歸スルモノ旅費ハ其呼出シタル應ヨリ之ヲ給シ其他ハ總テ本管應ヨリ給スルニ付云々ト記載有之ニ付前件人違又ハ官吏ノ其人名ヲ誤寫スル等ニテ呼出シタル者ハ旅費支給ノ區分判然不致無罪ニ歸スルモノ同様ニモ難見做人違又ハ誤寫等ニテ呼出シタルハ無論其應ヨリ支給當然ノ儀ト存候ヘ共文意明瞭ナラサルヲ以テ規則中其他ハ總テ本管應ヨリ給スルニ付云々ノ數語ニ合蓄スルモノト誤認シ往々疑問照會等有之既ニ目今支給方差支候趣ヲ以テ問合ノ向モ有之夫カ爲メ各應區々ノ處分相成候テハ不都合ノミニ非ス公布ニ反對齟齬等相生シ候テハ處分方差支候間第三條行文文中無罪ニ歸スルモノト下ハ人違又ハ官吏ノ其人名ヲ誤寫スル等ニテ呼出シタルノ二十二字ヲ追加候旨至急御頒布相成度御布告案相添此段相伺候也

指令九年十二月九日  
 何ノ趣第五百一十一號ヲ以テ布告候事  
 大史議案九年十一月二十八日

別紙大藏省同本年第六十三號御布告證人并無罪解放之者旅費支給方第三項中へ増補之儀ハ伺之通御布告相成可然因テ御指令取調相伺候也

無罪解放者旅費日常支給方  
 十五年一月利法附則ニ依テ削減ス

司法省達 四年八月十一日  
 無罪解放ノ者旅費日常支給方ノ儀ニ付三重縣ヨリ甲號ノ通り伺出候ニ付乙號ノ通り及指令候條爲心得此旨相達候事

但シ該指令ニ抵觸スル從前ノ指令等ハ凡テ取消シ候儀ト心得ヘシ

甲號  
 三重縣ヨリ司法省へ同四年四月十二日  
 裁判官及警察官吏ニ於テ呼出テ受ケ無罪ニ歸スル者旅費日常支給方ノ儀明治九年太政官第六十三號及第三百三十二號ヲ以テ御布告相成候處左ノ條々明文無之目下取扱方決シ兼候ニ付至急御指令被下度此段相伺候也

第一條 告訴又ハ告發ニヨリ被告人ヲ呼出シタルニ其人名告訴告發人ノ誤稱ニ係リ全ク人違ニ歸スルモノ有之右ハ本條明文無之候得共畢竟告訴告發人ノ誤稱スルヨリ被告人多少ノ權利ヲ妨ラル者ニシテ告訴告發人其責免レ難ク相當ノ旅費日常辨償スヘキ道理ニ可有之候得共成規無之亦官ヨ

乙號  
 司法省指令年月日  
 第一條 告訴或ハ告發ヲ爲セシ者ハ假令其告ケル所錯誤アリト雖モ要償ノ訴ヲ受クルコト勿ル可シ尤官費支給スルニ不及儀ト心得ヘシ  
 第二條 其人ヲ陷害スルノ意ヨリ告訴告發或ハ吟味願等申出テ被告人無罪ニ歸スル時ハ告者ハ法律ニ照シ相當ノ所刑ノ申渡ヲ受ケヘシ此場合ニ於テハ昨明治九年太政官第六十三號及第三百三十二號布告ニ依リ被告人ニ官費ヲ以テ支給スヘシ  
 第三條 其人ヲ陷害スルノ意ニ非スシテ歸スル所全ク民事ノ詞訟タルニ不過ルモノハ無罪ノ申渡ヲ受タル被告人ヨリ告者ニ對シ償ヲ求ムルヲ得ルハ一般民事ノ手續ト同様タル可シ

リ支給候筋無之然レハ被告人ノ損失ニ可有之哉  
 第二條 吟味願ニ依リ被告人ヲ呼出シ再三推問ノ後却テ原告人願フ所實ナラスシテ即チ刑事ニ涉リ被告人無罪ニ歸スル者ハ太政官第六十三號及第三百三十二號御布告ニ照シ官費支給シテ可然哉  
 第三條 同上ニ付其曲直到底原告人由者ニ歸スルト雖モ原告人有心故造ニ係ルモノニ非スシテ官吏ノ説明或ハ被告人ノ答辨ニ依テ始テ其理ヲ曉リ復タ吟味願ハスト訴狀却下ヲ乞ヒ其情狀未タ刑事ニ付スルニ及ハサルモノ、如キモ亦第一條ノ如ク被告人ノ損失ト相心得可然哉

裁判所ヨリ官外人ヲ召喚シ其錯誤ナルヲ覺リ審判止メテ歸家セシムル節旅費支給方

司法省達 十年十月二十日  
 別紙内務省同錯誤ニテ呼出シタル者へ旅費日常給與方ノ儀朱書ノ通及指令候條此旨相達候事

内務省同十年九月十日  
 警察官吏ヲ取扱フ者甲區裁判所ニ求刑スヘキ犯人留テ過テ乙區裁判所ニ求刑シ同裁判所ニ於テモ亦其管外ナルヲ覺ラス之ヲ喚問シ始テ其錯誤タルヲ知リ其審判ヲ止メテ本人ヲ歸家セシム其犯者ニ於テハ爲メニ多少ノ時日ト資財トヲ徒費スルニ至ル是偏ニ當該官吏ノ錯誤ヨリ生スルヲ以テ其旅費日常給與セサルヲ得サル儀ト被存候ヘ共成規モ無之依テ昨九年第六十三號公布證人并無罪解放ノ者等旅費支給方官吏ノ其人名ヲ誤寫スル等ニテ呼出シタル者トアルニ比擬シ旅費日常支給シ可然哉且此場合最初求刑ノ手續ハ警察官吏ノ失誤ニ出ツルト雖モ其失誤ヲ因襲シ現ニ本人ヲ呼出シタルハ乙區裁判官ニ付其旅費日常ハ便宜ニ依リ該裁判所ヨリ支給シ可然哉併テ相伺候右ハ此節伺出ノ向モ有之候條至急何分ノ御指令ヲ仰キ候也

指令十年十月二十日

刑事上戸長呼出等ノ旅費ハ裁判費ヨリ支辨ス  
十三三月二十七日内務省令  
省令適合ヲ査看ス可シ

司法省達 丙三年三月二十二日  
刑事上裁判所ヨリ戸長呼出旅費等支出方之儀ニ付内務省へ左ノ通御指令相成候旨太政官書記官ヨリ通牒有之候條爲心得此旨相達候事

内務省令 丙三年一月十三日  
刑事上裁判所ヨリ戸長呼出旅費及糶賣金其他費類等送費支出方ノ儀從來民費ヲ以テ支辨候向モ有之地方稅改正施行後ニ至リ未タ一定ノ規則無之然ルニ各府縣ヨリ積々伺出候ニ付審案致候右條件ハ固ヨリ戸長職務概目ノ事項ニ非サルヲ以テ地方稅ヨリ支辨スヘキ筋ニ無之專ラ刑事裁判ノ入費ニ係レハ自今戸長ノ旅費ヲ始メ諸送費等一切裁判入費ヨリ支辨致シ可然ト存候就テハ該規則御制定無之ヲハ目下差支可申ニ付右之趣司法省へ御達相成候様致度此段相伺候至急仰御裁定候也  
指令 丙三年三月十日

刑事上裁判所ヨリ戸長呼出旅費及糶賣金其他費類等送費支出方ノ儀從來民費ヲ以テ支辨候向モ有之地方稅改正施行後ニ至リ未タ一定ノ規則無之然ルニ各府縣ヨリ積々伺出候ニ付審案致候右條件ハ固ヨリ戸長職務概目ノ事項ニ非サルヲ以テ地方稅ヨリ支辨スヘキ筋ニ無之專ラ刑事裁判ノ入費ニ係レハ自今戸長ノ旅費ヲ始メ諸送費等一切裁判入費ヨリ支辨致シ可然ト存候云々上申致シ候旨内務卿ヨリ通牒有之右御裁定可相成ニ付テハ當省へ急影響ヲ兼テ毫釐ノ餘地無之經費上必至困難ヲ生スルハ自然ノ儀ニ付尙ホ詳細ノ儀ハ取調上申可致候ヘシ差向候儀ニ付不取敢此段上申致置候也  
司法省ヨリ内務省へ照會 丙三年二月十日

名古屋裁判所ヨリ別紙三重縣布達ノ儀ニ付伺出候處右ハ刑事ニ就テノ費出ハ該布達ニ官費即チ裁應ヲ云フト朱記シ有之ナレハ是等ハ裁判所ヨリ支辨ヲ要スヘキ者ニアラス乃チ區戸長旅費ノ如キハ元ト職務上ニ就テノ費用ニ付區村若クハ行政官ノ内ヨリ支辨シ又書類送達費ノ如キハ本犯資力又ハ贓物等ヨリ償却シ若シ資力等償フヘキ者ナレハ區村若クハ行政官ヨリ支辨シテ可然ト見込候ヘシ御省ノ御意見致承知度因テ同所書寫并同縣布達相添此段及御照會候也  
名古屋裁判所ヨリ司法省へ伺 丙三年一月十八日  
民刑事身代限處分ニ係ル區戸長旅費支出方ノ儀ニ付別紙三重縣應ノ管下ニ布達セシ者ニヨレハ從前裁衙一般ノ取扱ニ相反シ不都合ニ候條同縣へ直チニ可掛合ト存候ヘシ制規ニ係ル儀ニ付爲念心得方相伺置候  
右布達中送達費ノ一部ハ民事ハ其糶賣金刑事ハ其贓物又ハ資力ノ内ヨリ償却スルハ勿論ノ事ニテ別ニ

抵觸スル所ナシト雖モ其旅費ニ至ツテハ甚然ラサル者アリ如何トナラハ區戸長ノ本件ニ關シ往返スルハ元職務上ニ係ルヲ以テ其費用ハ區村若クハ行政官ノ支辨スヘキ者ナレハナリ然ルチハ糶賣金ヨリ一ハ裁判所ヨリ費出スヘシトハ抑モ何等ノ理由ニ出ツルカ其旨意ノ在ル所ヲ辨知シ難シ若シ該送達費ヲ適正ノモノトモトモハ豈當ニ彼ノ區戸長ノミニ止ランヤ推シテ他ノ警察其他ノ官吏ヲ煩ハスノ場合亦悉ク裁應ノ出費ヲ要セスハ可ラサルノ不都合ヲ來タスヘシ右ハ孰レニ相心得可然哉至急御指揮相成度候也  
三重縣達 地甲第一區戸長  
民事上身代限刑事上資力限ノ者本人財產等取調ノ爲メ戸長派出ノ旅費及送達費等民費仕拂候向モ有之候處自今左ノ通可相心得此旨相達候事  
一民事上身代限ニ係ル者ノ財產等取調トシテ本人所在ノ地へ派出ノ節并同事件ニ付糶賣金等持參裁判所へ出頭ノ旅費  
一右同斷ノ節財產等取調該書類并糶賣金裁判所へ送達費  
右二項ノ費用ハ其糶賣金ヨリ取立若シ其糶賣金僅少ニシテ不足スルキハ詞訟原告ヨリ取立曲者ヨリ直者則チ詞訟原告ニ對シ負債ト相心得ヘシ  
一前二項ノ事件刑事上ニ係ルモノハ當官費トハ裁應ヲ云フ官費ト心得ヘシ  
内務省同答 丙三年三月十九日

客月十日付ヲ以テ刑事身代限處分ニ就キ區戸長旅費ノ儀ハ元ト職務上ニ就テノ費用ニ付區村若クハ行政官ノ内ヨリ支辨シ又書類送達費ノ如キハ本犯資力又ハ贓物等ヨリ償却シ若シ資力等償フヘキ者ナレハ區村若クハ行政官ヨリ支辨シテ可然云々三重縣布達并ニ名古屋裁判所長ヨリ貴省へ同書相添御照會ノ趣致了承候然ルニ區戸長ノ職務上ニ就テ本ト行政官ノ内ヨリ支辨シテ可然ト見込候ヘシ御省ノ御意見致承知度因テ同所書寫并同縣布達相添此段及御照會候也  
兵ニ附添區戸長等ノ旅費ハ同省ヨリ支出スルモノニ有之故ニ其旅費日當等ヲ支出スルモ其執ル所ノ事ニ從ヒ宜シク相同シカラサルヘシ民事ニ就テハ之ヲ詞訟者ニ償ハシム蓋シ其事人民ノ私ニ屬スレハナリ刑事ニ就キ區戸長ノ往返等ヲ要スルハ處刑執行ノ一部ニシテ其事司法ノ公事ニ屬ス故ニ其費用ハ裁判費用ヲ以テ償フ方至當ニ可有之レヲ一地方ノ行政費ヲ以テ償フハ其當ヲ不得且書類送達費ノ如キモ本犯資力又ハ贓物等ヨリ償却シ若シ資力等償フヘキモノ無キ時ハ裁判費用ヲ以テ支辨シ候方穩當ト見込候依テ此段及御答議候也  
司法省ヨリ内務省へ通牒 丙三年六月五日  
名古屋裁判所ヨリ區戸長旅費支出及書類送達方ノ儀ニ付伺出ニヨリ區戸長旅費ノ如キハ元ト職務上ニ就テノ費用ニ付區村若クハ行政官ヨリ支辨シ又書類送達費ノ如キハ本犯資力又ハ贓物等ヨリ償却シ若シ資力等償フヘキモノナレハ區村若クハ行政官ヨリ支辨シテ可然見込ヲ以テ當ニ月中及御掛合候處刑事ニ付區戸長往返等ヲ要スルハ處刑執行ノ一部ニシテ其事司法ノ公事ニ屬ス故ニ其費用ハ裁判費用ヲ以テ



償方至當可有之且ツ得類選送費ノ如キモ本犯資力又ハ贓物等ヨリ償却シ若シ資力等償フヘキモノ無キ時ハ裁判費用ヲ以テ支辨可然御見込ノ旨御回答有之然ル處右ハ處刑執行ノ一部トハ可申候ヘトモ行政職務上ニ於テ取扱候者ニ付其費用ハ其取扱候廳ヨリ支出シ之當ニ可有之ト存候候廳ハ姑ク置キ裁判所ヨリ支出スル方實際便宜トナスモ當省ニ於テハ裁判所ノ支出定額アリ細算豫算ヲ以テ確定セシムル所ニ係レハ此上餘分ノ出費ヲ辨スルニハ更ニ上請シテ定額ヲ増サハルヲ得ス先般三重縣布達ノ趣ニ依リ及御掛合候處右布達ニ官費トアルハ裁判所ノ支出ヲ地方廳ヨリ命令スル譯ハ無之ニ付右達ハ裁判所ニ於テ關係無之儀ト存候先般御照會ノ末ニ付此段一應申進置候也

内務省ヨリ司法省ヘ照會十二年六月二十八日  
 名古屋裁判所ヨリ區戶長旅費支出及書類選送方ノ儀ニ付貴省ヘ伺出候趣ヲ以テ二月中御照會及御回答置候末向又六月五日付ヲ以テ御申越ノ趣致承知候然ルニ御書面中行政職務上ニ於テ取扱候者ニ付其費用ハ其取扱候廳ヨリ支出シ之當ニ可有之ト存候候廳ハ姑ク置キ裁判所ヨリ支出スル方實際便宜トナスモ當省ニ於テハ裁判所ノ支出定額アリ細算豫算ヲ以テ確定セシムル所ニ係レハ此上餘分ノ出費ヲ辨スルニハ更ニ上請シテ定額ヲ増サハルヲ得ス云々ト有之候ヘトモ右事務タルキ府縣廳ニ於テ取扱候儀ニ無之郡區役所戶長役場等ニテ取扱候儀ニ係レハ郡區役所戶長役場等ノ費用ハ總テ地方稅ヨリ發出シ則テ其府縣管下人民ヨリ徵收スル所ニテ豫算額モ亦府縣會ノ決議ニ因リ收出候者ニ係レハ其取扱候廳ヨリ支出候ハ甚タ不的當ニ有之總合理論ハ姑ク置キ云々御申越ニ候ヘトモ其旨趣タル從來行政部分司法部分ニ付費用ノ區分判然不相立モノ有之故到底其定額スル所ヲ定メ條理上至當ノ所ニ歸著爲致度見込ニ有之其際行政費ヲ損シ司法費ヲ増シ又司法費ヲ損シ行政費ヲ増ス等ノ場合モ有之候ヘハ貴省并ニ當省ヨリ太政官ヘ上請裁可ヲ乞フハ勿論ノ儀ニ有之筋ト存候就テハ三月中御回答ニ及ヒ置候通判事ニ係ル費用ハ處刑ノ一部ニ屬スルヲ以テ總テ裁判所ノ費用ニ屬シ候様相成度存候間此段再應及御照會候條御省議至急致承知度候也

司法省回答十二年七月十一日  
 名古屋裁判所ヨリ區戶長旅費支出及書類選送費ノ儀ニ付再應御照會ノ趣致承知候然ルニ最前モ及御照會候通判事ニ於テハ裁判所ノ支出豫算額アリテ何分豫算外ノ費用ニ應スル能ハス是故ニ夫夫順序相立當省ヨリ可差出モノト御確定相成候ヘ、格別三重縣一箇ノ布達ヲ以テ當省ノ定額ニ差響キ候様ノ儀ハ無之儀ト存候間最前及御照會候左様御承知有之度候也

内務省ヨリ司法省ヘ照會十二年九月十三日  
 名古屋裁判所ヨリ區戶長旅費支出及書類選送等ノ儀ニ付本年二月十日以來兩省書記官ノ間數次ノ往復照會全月二十日即答七月十九日即答六月五日即答ニ及ヒ尙熱議不相成候處處刑執行ノ一部ニ屬スル經費即刑事身代限處分ニ付郡長戶長旅費ノ類ハ司法ノ公事ニ屬スヘキヲ以テ其費用ハ裁判費用ヲ以テ償却シ行政上ニ關涉ス可ラサル筋ト見込候ヘ、尙貴官ニ於テモ御省書記官ヨリ被申越候旨趣ニ於テ御異見無之哉委曲前記詳類ニテ御承知何分ノ御意見御申越相成度此段御照會オヨヒ候也

司法省回答十二年九月二十二日  
 名古屋裁判所ヨリ刑事身代限ノ區戶長旅費及ヒ書類選送費支出ノ儀ニ付本年二月以來兩省書記官ヨリ往復ニ及ヒ候處熱議セサルヲ以テ尙又卑官ニ於テモ書記官見込ノ通異議無之哉ノ旨御照會ニ相成致承知候右ハ最前當省書記官ヨリ貴省書記官ヘ及照會候通當省ニ於テハ裁判所ノ支出定額アリ細算豫算ヲ以テ確定セシムル所ニ係レハ突然三重縣ノ布達ヲ以テ當省ノ定額ニ關シ豫算外ノ費用ヲ辨スル儀ハ無之等ノ儀ハ卑官ニ於テモ當省書記官ヨリ申向候通判事ノ意見ニ有之候尤該費ノ如キハ行政費ニ屬スヘキモノタルキ司法費ニ屬スヘキモノタルキ論ニ至リテハ司法費ニ屬シ候トモ卑官ニ於テ異論無之候乍去當省書記官ヨリ前達致候通判事ニ於テハ有限ノ定額アリテ又其定額中ヲ割テ各地方裁判ノ定額ヲ相定置候次第ニテ豫算外旅費モ餘裕無之ニ付タトヒ該費ノ如司法費ニ屬スヘキモノト決定相成候其右ニ應スル丈ノ費用增加不相成テハ當省ニ於テ甚差支候依テ其筋ニ於テ行政費ヲ損シ司法費ヲ増ス様ノ順序相立候ハ、卑官ニ於テ一向異存無之候此段及御回答候也

法制局議案十三年二月六日  
 別紙内務省上申刑事上裁判所ヨリ戶長呼出旅費等支出方ノ議看詳候處左ノ如シ  
 戶長呼出旅費及雜費金其他書類等選送費ハ明治十一年第十九號布告第三條ノ費目中戶長職務取扱諸費ニ包含スルモノナリ而今内務省上請ノ如ク戶長職務概目ニ載セサルノ廉ヲ以テ劇ニ其成規ヲ廢シ裁別費即チ官費ヲ以テ支辨セントスルハ頗ル其謂レナキノミナラス別紙司法省上陳ノ如ク定額金毫釐ノ餘剩無之際目下經費上困難ヲ生シ可申儀ニ付旁以テ左ノ通御指令相成可然哉仰高裁候也

内務省同十三年三月十六日  
 刑事上裁判所ヨリ戶長呼出旅費等支出方ノ儀ニ付本年一月十三日付ヲ以テ相伺已ニ御指揮ノ趣敬承仕候然ルニ地方稅中戶長職務取扱費ノ儀ハ則戶長職務概目ニ掲ケタル十三項目ノ費用ヲ指シタル儀ト相考候處今般御指令ノ旨モ有之右ハ職務概目中何レノ項ニ包含セシ儀ト相心得可然哉將來各縣ヨリ伺出候節指令ノ都合モ有之旁以テ此段豫テ相伺置候也

前條ノ指令ニ照シテ戶長職務取扱費ハ該職務ニ關スル一切ノ費用ヲ指ス

同ノ趣戶長職務取扱費ハ特リ戶長職務概目ニ掲ケタル十三項目ノ費用ノミニ限ラス其他職務取扱ニ係ル總テノ費用ヲ指ス儀ト可心得事

法制部議案十三年三月二十二日  
 別紙内務省同刑事上裁判所ヨリ戶長呼出旅費等支出ニツキ本年三月十日御指令ノ旨趣心得方ノ件番按候處地方稅中戶長職務取扱費ハ特リ戶長職務概目ニ掲ケタル十三項目ノ費用ノミヲ指スニ非ラス其他戶長職務取扱ニ係ル一切ノ費用ヲ包含スルモノニ有之候間左ノ通り御指令相成可然哉仰高裁候也

刑罰法第九十條ノ場  
合ニ於ケル被告人ノ旅費  
日當ハ府廳廳ヨリ支給  
セシム

刑罰法第九十條ノ場  
合ニ於ケル被告人ノ旅費  
日當ハ府廳廳ヨリ支給  
セシム

刑罰法第九十條ノ場  
合ニ於ケル被告人ノ旅費  
日當ハ府廳廳ヨリ支給  
セシム

刑罰法第九十條ノ場  
合ニ於ケル被告人ノ旅費  
日當ハ府廳廳ヨリ支給  
セシム

刑罰法第九十條ノ場  
合ニ於ケル被告人ノ旅費  
日當ハ府廳廳ヨリ支給  
セシム

何ノ通

刑罰法第九十條ノ場  
合ニ於ケル被告人ノ旅費  
日當ハ府廳廳ヨリ支給  
セシム

刑罰法第九十條ノ場  
合ニ於ケル被告人ノ旅費  
日當ハ府廳廳ヨリ支給  
セシム

何ノ通

刑罰法第九十條ノ場  
合ニ於ケル被告人ノ旅費  
日當ハ府廳廳ヨリ支給  
セシム

刑罰法第九十條ノ場  
合ニ於ケル被告人ノ旅費  
日當ハ府廳廳ヨリ支給  
セシム

刑罰法第九十條ノ場  
合ニ於ケル被告人ノ旅費  
日當ハ府廳廳ヨリ支給  
セシム

刑罰法第九十條ノ場  
合ニ於ケル被告人ノ旅費  
日當ハ府廳廳ヨリ支給  
セシム

裁候也

刑事裁判費用定ム

布告節錄 第十四号 二月十九日 大政大臣三條實美 署全文 刑法門 刑律ニ載ス

刑法附則第四章 刑事裁判費用

第四十八條 豫審公判ニ付キ呼出シタル證人醫師鑑定人通辯人翻譯人ニ給與ス可キ日當旅費止宿料及  
 第五十一條 第五十二條ニ記載シタル者ヲ以テ刑事ノ裁判費用ト爲ス  
 第四十九條 日當旅費及止宿料ノ金額左ノ如シ  
 日當五十錢  
 旅費一里十錢  
 止宿料一宿二十五錢

住居三里以外ノ地ニ在ル者ハ往復旅費ヲ給シ及ヒ呼出ノ地ニ滞在中ハ日當并ニ止宿料ヲ給ス其三里

未滿ノ地ニ在ル者ハ旅費止宿料ヲ給セス

第五十條 證人ノ日當旅費及止宿料ハ本人ノ請求アルニ非サレハ之ヲ給與セス

第五十一條 證人日稼ヲ以テ生業トスル者治罪法第九十條ニ從ヒ償金ヲ要求スル時ハ旅費日當ノ外

若干ノ償金ヲ給スルコトアル可シ

第五十二條 解剖舍密等ノ費用及ヒ數多ノ時間ヲ要スル翻譯料ノ類ハ日當ノ外別ニ之ヲ給與ス可シ

第五十三條 裁判費用ノ宣告ヲ受ケ未タ之ヲ納メサル前ニ於テ犯人身死スル時ハ其相續人ヨリ之ヲ徵

收ス

司法省達 十五年六月二十九日 丙 第二十五號 大審院裁判所 警視廳 府縣 支庁 地方

刑法治罪法實施以來刑事ニ付出庭セシメタル證人鑑定人等ノ旅費日當等一時官廳ニ於テ立換渡ヲ爲シ候儀モ有之候處該旅費日當等ハ則裁判費用ニシテ總テ被告人ノ擔當スヘキモノナルハ勿論ノ儀ニ付自

証人鑑定人等ノ旅費日當一時立換渡ヲ廢ス

十六年十一月第三十九號 布告ヲ以テ改正ス

今右立換渡ヲ爲スニ不及ル儀ト心得ヘシ此旨相達候事 但從前ノ指令及ヒ內訓本文ニ抵觸スル條件ハ都テ取消候事

內務省 何十五年四月二十八日

一 裁判官又ハ警察官吏ニ於テ喚出ス罪囚證人其他喚出ヲ受ケ無罪ニ歸スルモノ及人送又ハ官吏ノ人名ヲ誤寫スル等ニテ喚出サレタル者等ヘ支給スル旅費日當ハ明治九年第六十三號布告ノ定規有之候處

右喚出人ノ内豫審公判ニ屬スヘキモノハ刑法附則第四章ニ依リ支給スルハ無論ナリト雖其額彼是同シカラス均シク官廳ノ喚出ヲ受ル者ニシテ給與ニ厚薄アルハ實際不都合ヲ免カレヌ然レモ其豫審公判ニ屬セサルモノハ仍ホ該六十三號布告ノ定規ニ從フヘキ事

一 豫審公判ニ屬セサル檢視處分ニ付警察官吏ニ於テ喚出スモノ、内醫師其他技術人等ノ給料ハ明治九年第六十三號布告中ニ掲載無之且ツ此等ノ者ハ多クハ業務繁忙ヲ口實トシ出場ヲ厭フノ情態アリ實際差間アルヲ以テ各地方適宜相當ノ雇料ヲ給シ來リ候右ハ將來刑法附則第四章ノ金額ニ超過スルモノアルモ仍ホ適宜支給セシメ可ナラン事

一 豫審公判ニ屬スル檢視處分ニ付警察官吏ニ於テ喚出ス醫師其他技術人ト雖モ實際差支アル地方ニ於テハ前條ノ通適宜ノ雇料ヲ給シ而シテ其内ヨリ裁判費用トナル可キ金額ハ追テ豫審判事ノ償還ヲ要シ其餘額ハ警察費ヨリ辨償シ可然哉

右ハ目下差掛リ候事件有之及稟申候條速ニ何分ノ御指令ヲ仰キ候也

指令 十五年七月四日

伺ノ通

參事院議案 十五年六月十六日

別紙內務省上申證人醫師其他呼出人旅費ノ件審査スル處左ノ如シ 證人醫師鑑定人通事翻譯人ニ給與スヘキ旅費日當等金額支辨ノ方法ハ同省ノ見解ヲ至當ト認定ス 右ニ由リ指令案左ノ通ニテ可然哉上申候也

大藏省 何十五年四月二十五日

第一 治罪法第九十條第二百條第三百七條及刑法附則第四章ニ掲ケル裁判費用ハ其全部又ハ幾分ヲ犯人或ハ敗訴者擔當スト雖モ資力ナキトキ及ヒ免訴又ハ無罪ノ言渡アリテ官ニテ之ヲ擔當スヘキトキハ其裁判所ノ費用ニ和立所轄府縣ノ費途ニ關セサル儀ニ候哉

第二 九年第六十三號公布中證人旅費ノ儀刑法附則第四章中證人醫師鑑定人通辯人翻譯人ニ給與スヘキ日當旅費云々裁判費用ト爲スト有之付テハ右公布中證人ノ廉及ヒ附添人ノ廉ハ自然消滅ニ屬シ候儀ニ候哉

豫審公判ニ係リ證人ノ旅費日當支給方

証人鑑定人等ニ給與ス可キ旅費日當金額ハ地方ニ依リ適宜支給セシム

右費途支出方ノ儀ニ付伺出候向モ有之候ニ付至急仰御裁令度此段相伺候也  
指令十五年七月五日

第一條 伺ノ通

第二條 豫審公判ニ係ル證人ノ旅ノミ消滅シタル者ト心得ヘシ

參事院議案十五年六月十六日

別紙大藏省伺治罪法及ヒ刑法附則并九年六十三號公布裁判費用ノ件審査スル處左ノ如シ

第一條 裁判費用ヲ擔當スヘキ者無力ニシテ辨償スル能ハサルトキハ裁判所ノ費用ヲ以テ之ヲ支辨  
スルコト同省見解ノ通ニテ然ルヘシ

第二條 刑法附則第四章ノ日當旅費ハ専ラ豫審判事ニ屬スル者ヲ指シ九年第六十三號公布ノ證人旅  
費云々ハ豫審公判ニ係ルト否トヲ問ハス其指ス所廣汎タルカ故ニ刑法附則ヲ以テ六十三號公布ノ  
證人付添人ヲ全ク取消シタル者ト爲スヲ得ス  
右ニ由リ指令案左ノ通ニテ可然哉上申候也

司法省達 丙十五年七月七日

治罪法第三百七條第二項公訴裁判費用官ニ於テ擔當スヘキ場合該金額ハ裁判所ヨリ支出スル儀ト心得  
ヘシ此旨相達候事

但從前ノ指令内訓本文ニ抵觸スル件ハ取消候事

司法省ヘ達 十六年三月七日

明治十四年七月十四日付指令刑事證人旅費日當支給方ノ件取消候條右費用ハ裁判所ニ於テ支辨候儀ト  
可心得此旨相達候事

大藏省伺十五年十二月十三日

治罪法及ヒ刑法附則中ニ掲クル裁判費用官ニテ之ヲ擔當スヘキトキハ其裁判所ノ費用ニ相立所轄府縣  
ノ費途ニ關セザル旨本年七月五日伺定ノ儀ハ無論該法實施以降適用スヘキモノト思考致シ既ニ其精神  
ヲ以テ指令候向モ有之然ルニ司法省於テハ別紙寫ノ通客年七月中旬伺定ノ趣アルヲ以テ前當省ヘ  
御裁令以前ハ右ニ據リ施行可致旨照會有之就テハ該費途自然兩岐ニ涉リ處分上差支候條右實施以降ハ  
當省ヘ御裁令ノ通心得可然存候ヘ共爲念相伺候條至急御指揮有之度候也

證人ノ旅費日當府縣  
ヨリ支給スルノ儀

公訴裁判費用官ニ於テ  
擔當スヘキ場合該金額  
ハ裁判所ヨリ支出セシ

審理ノ末無罪免訴ノ旨  
渡テ受タル被告人ニ旅  
費日當ヲ支給セシ

證人鑑定人等ニ給スル  
旅費日當等ノ金額ヲ改  
定ス

十六年十一月司法省達  
第三十三號ヲ參照ス可シ

指令十六年三月七日

伺ノ趣開別紙ノ通司法省ニ相達候事

參事院議案十六年二月十九日

別紙大藏省伺裁判費用ノ件審査スル處左ノ如シ  
昨年七月大藏省ヘノ御指令ハ治罪法及ヒ刑法附則ノ精神ニ基キタル者ニシテ右法律施行以降適用ス  
ヘキハ勿論ニ付伺ノ通御裁令有之一昨年七月司法省ヘノ御指令ハ御取消相成可然儀ト思考ス  
右ニ由リ指令案達案左ノ通ニテ可然哉上申候也

司法省伺十六年五月十四日

刑事裁判上ニ於テ無罪免訴ノ旨渡テ受ケタル被告人ヘ旅費日當等ヲ支給スルノ儀ハ明治九年第六十三  
號公布ノ旨モ有之候處新刑法治罪法實施ノ後ハ刑法附則ヲ以テ裁判費用ノ科目ヲ定メラレ候ニ付則被  
告人無罪免訴ノ旨渡テ受ケタル時ハ治罪法第三百七條第二項ノ明文ニ從ヒ證人鑑定人等ノ請求セシ費  
用ハ官ヨリ之ヲ支辨スト雖モ新法ニ於テハ其被告人ニ支給スルノ明文無之ニ付右第六十三號公布中無  
罪免免ノ被告人ヘ旅費日當ヲ支給スルノ儀モ適用スヘカラサルモノト存候得共爲念此段相伺候也

指令十六年六月八日

伺ノ通

參事院議案十六年六月四日

別紙司法省伺無罪免訴ノ旨渡テ受ケタル被告人ヘ旅費日當支給ノ儀審査スル處左ノ如シ  
右無罪免訴ノ旨渡テ受ケタル被告人ヘ旅費日當支給ノ儀ハ治罪法及ヒ刑法附則中ニ記載アラサルノ  
ミナラス治罪法第十六條第十七條ノ規則ニ據ルモ官ニテ之ヲ擔當ス可キ者ニ非サルコト明ナリ故  
ニ明治九年第六十三號公布被告人ヘ旅費日當支給ノ儀ハ新法施行以後消滅シタル者ト思考ス  
右ニ由リ指令案左ノ通ニテ可然哉上申候也

布告節錄

十六年十一月十二日 司法省達 第三十三號 全文 刑法附則 刑律 二載ス

刑法附則

第四十九條 日當旅費及ヒ止宿料ハ左ノ制限ニ據リ各地方適宜其額ヲ定ム可シ

日當五十錢以下  
旅費一里十錢以下

止宿料一宿二十五錢以下  
住居三里以外ノ地ニ在ル者ハ往復旅費ヲ給シ及ヒ呼出ノ地ニ滞在中ハ日當并ニ止宿料ヲ給ス其三里未滿ノ地ニ在ル者ハ旅費止宿料ヲ給セス  
右奉 勅旨布告候事

司法省達 十六年十一月十三日

刑事ニ付キ警察官ノ處分ニ屬スル費用ハ起訴ノ前後ニ拘ハラヌ裁判費用ニ相立タル者トス然レモ豫審判事ノ囑託ヲ受ケ豫審處分ヲ爲シタル場合ハ此限ニ在ラス此旨爲心得相達候事  
但本文ニ抵觸スル指令内訓ハ取消候事

司法省達 十六年十一月十六日

本年第二十九號ヲ以テ刑法附則第四十九條改正ノ儀公布相成候ニ付テハ各管内ニ於テ專ラ實際消費スル費額ヲ量定シ豫メ金額ノ程限ヲ設ケ速ニ當省ヘ可伺出此旨相達候事

達 第五十七年六月十三日

官吏職務上ニ係リ刑事裁判ノ證人トシテ裁判所ニ出頭スル時ハ治罪法ニ依リ旅費日當ヲ請求スルコトヲ得ルト雖トモ被告事件無罪又ハ免訴トナリタル時ハ請求セサル儀ト心得可シ  
但旅費日當ヲ請求シタル時其金額ハ雜收入トシテ大藏省ヘ納付ス可シ  
右相達候事

司法省同 十六年十一月十九日

刑事裁判上官吏職務ニ關シ證人トシテ出廷セシムル節ノ旅費日當等ハ普通旅費定則ニ從ヒ其官吏所轄ノ官廳ヨリ相當ノ金額ヲ支給スヘキニ付總テ之ヲ裁判費用ト爲サ、ル儀ニ有之候處別紙寫ノ如ク農商務卿ノ伺ニ對シ御指令相成タル趣ニ候果シテ然ラハ官吏ノ職務上ニ付出廷セシムル場合ト雖モ原告人ノ請求ニ依リ召換セシ場合ハ通常人民ト同シク法ニ據リ旅費日當ノ金額ヲ被告人ニ對シ請求セシメ

刑事上警察官ノ處分ニ屬スル費用ハ起訴ノ前後ニ拘ハラヌ裁判費用ニ相立タル者トス然レモ豫審判事ノ囑託ヲ受ケ豫審處分ヲ爲シタル場合ハ此限ニ在ラス

旅費日當等實際ノ消費額ヲ量定シ豫メ金額ノ程限ヲ設ケ速ニ當省ヘ可伺出此旨相達候事

官吏職務上刑事裁判ノ證人トシテ出頭シ被告事件無罪又ハ免訴トナリタル時ハ請求セサル儀ト心得可シ

ラル、御趣意ト存候抑官吏ヲ證人トシテ出廷セシムルニ自ラ區別アリ第一其犯罪ヲ告訴發見セシメ付テノ場合第二裁判官ノ職權又ハ檢察官ノ請求ニ因ル場合第三民事原告人又ハ被告人ノ請求ニ出テタルカ如キ場合ニシテ之ヲ別紙御指令ノ旨趣ニ因テ區別セハ右第一第二ノ場合ハ普通旅費定則ニ照シテ之ヲ給シ其費用ハ別ノ請求セシメ第三ノ場合ニ在テモ旅費等ノ支給方ハ前同様ニシテ其費用ヲ請求スルハ普通證人ノ例ニ依リヘキ様相見ヘ候是蓋シ其費用ヲ負擔セシメサレハ被告人ニ於テ或ハ濫ニ呼出シテ請求スルノ弊ヲ防クノ點ヨリ斯ノ御詮議相成タルモノナラン歟然レトモ實際民事原告人及ヒ被告人等ヨリ其呼出ヲ請求スルモ裁判官ニ於テ裁量上必要ナリト認メサルニ於テハ之ヲ許サ、ルナリ故ニ其費用ヲ被告人ニ負擔セシメサルモ之レカ爲メ濫ニ其呼出ヲ請求スルカ如キ憂ハ之レアラサルナリ又之レニ反シ裁判官ニ於テ其請求裁量上必要ナリト認メタル時ハ到底之ヲ呼出サ、ルヲ得サルニ付名ハ被告人等ノ請求ニ因ルモ其實裁判官ノ職權又ハ檢察官ノ請求ニ出タル時ト取テ異ナルコトナシ然ルニ第三ノ場合ニ限リ特ニ其費用ヲ請求セシムルモノト爲ス時ハ是レ一證人ニシテ其費用ヲ二重ニ求得スルモノトナリ又被告事件無罪若クハ免訴ト爲リタル場合ハ該費用ハ官之ヲ擔當ス可キモノニ付則官ヨリ官ニ償還スルノ姿トナリ實際不都合ノ儀ト被存候依テ第三ノ場合ト雖トモ尙第一第二ノ場合ト同ク別ニ其費用ヲ請求セシメサルコトニ御詮議相成度目下當省ヘ伺出ノ向モ有之候間至急ノ仰御指令候也

農商務省同 十六年一月二十七日

一 郵便犯罪ノ件ニ付驛遞局及ヒ各郵便局ノ官吏證人トシテ裁判所ヘ出頭ノ節旅費日當ハ其官吏ノ官等ニ依リ定則ノ通支給シ法ニ據リ請求スル證人旅費日當ハ更ニ雜收入トシテ國庫ヘ納入取計可然哉  
一 同上官吏證人トシテ裁判所ヨリ召喚セラレ、キ業已ニ職務ヲ罷免セル者ナルハ假令奉職中ノ事件ニ係ル證人ナルモ既ニ官職ヲ離レタル以上ハ本人ヨリ其裁判所ヘ證人旅費日當ヲ請求スルニ止マリ驛遞局ヨリハ旅費日當支給スルノ限リニ無之候哉  
右至急何分ノ御指令有之度此段相伺候也  
指令 十六年五月三十日

何ノ趣當職罷免職ノ者ニ拘ラス職務上ニ係リ出頭スルモノハ總テ旅費定則ニ照シ旅費日當ヲ支給シ其原告人ノ請求ニ依リ召喚セラレシ場合ニ限リ法ニ依リ旅費日當ヲ請求シ該金額ハ雜收入トシテ大藏省ヘ納付スヘキ儀ト心得ヘシ

參事院議案 十七年五月三十一日

別紙司法省同刑事裁判上官吏ヲ證人トシテ出廷セシムル節旅費日當支拂方ノ件審査スル處左ノ如シ  
本件ハ農商務省ヨリ驛遞局及ヒ各郵便局ノ官吏證人トシテ出廷ノ節旅費日當支給方ニ對スル指令ヲ改正セラレシコトヲ稟議スルモノナリ案スルニ犯罪事件ニ付官吏證人トシテ出廷スルニ三個ノ區別アルハ前日ニ於テ院議ヲ盡シ其原告人ノ請求ニ出タルモノハ通常證人同一ノ例ヲ以テスル當然ナリト決ニ依リ指令セラレタルモノニ有之候得共司法省上京ノ通被告事件無罪又ハ免訴トナリタ

ルハ其日官ハ官ヨリ官ニ償還スル姿トナリ勢司法省ノ支出ヲ増サ、ルヲ得ス然レハ官吏ヲシテ總  
テ治罪法所定ノ日官ヲ請求スルヲ得サラシムルハ該法ノ精神ニ悖リ甚不穩當ノ儀ニ有之就テハ官吏  
證人トシテ出廷スルトキハ總テ法ニ依リ旅費日當ヲ請求スルヲ得セシメ唯被告事件無罪又ハ免訴ト  
ナリタル時ハ請求セサル様御達シ相成候方可然ト視認ス  
右ニ由リ達按左ノ通ニテ可然哉上申候也

大藏省伺 十七年八月七日

本年六月第五十七號御達官吏職務上ニ係リ刑事裁判ノ證人トシテ裁判所ニ出頭云々其請求シタル旅費  
日當ハ雜收入トシテ當省へ收入致ス儀ニ候處郡書記戸長巡查ノ如キ地方稅支辨ニ屬スル官吏同上ノ  
件ニ付裁判所へ出頭ノ節其請求シタル旅費日當ヲ國庫ニ收入候ハ甚タ不穩當ト被存候ニ付總テ地方稅  
支辨ニ屬スル官吏其職務上ニ係リ裁判所へ證人トシテ出頭ノ節其請求シタル旅費日當ハ地方稅へ雜收  
入トシテ編入取計可然哉此段相伺候也  
指令 十七年九月五日

伺ノ通

第一局議案 十七年八月二十七日  
別紙大藏省伺刑事裁判上證人旅費收入方ノ件ヲ案スルニ郡書記等ノ如キ地方稅支辨ニ屬スル官吏其職  
務上ニ係リ裁判所へ證人トシテ出頭ノ節其請求シタル旅費日當ヲ地方稅へ收入スルハ至當ノ儀ト認候  
間稟議ノ通御裁可相成可然哉左案ヲ具シ仰高裁候也

被告入控訴ヲ爲サント  
スル時ハ裁判費用ノ保  
證トシテ金十圓ヲ豫納  
ス

第三條 被告人公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴ヲ爲サントスルトキハ裁判費用ノ保證トシテ金十圓ヲ豫納  
スヘシ

第四條 被告人ニ於テ證人鑑定人ノ呼出ヲ請求スルトキ前條保證金ニテ不足ト認ムル場合ニ於テハ別  
段其費用ヲ豫納セシムヘシ

司法省達 丁十八年一月二十日

免訴無罪者ニ係ル證人醫師鑑定人通辯人翻譯人等旅費日當其他ノ費用官ノ擔當ニ歸スルモノハ豫審終  
結及公判言渡ノ即日其請求書ヲ以書記局ヨリ會計課へ報告シ渡シ方取計フ可シ此旨相達候事  
但從前本文ノ通報告ヲナサス會計年度經過セシモノハ其遷延シタル事由書ヲ添付シ速ニ報告致ス可  
シ

十八年一月丁第二號達  
中ヲ刪除挿入ス

支那人并條約未濟國人  
ノ犯罪ハ國律ヲ以テ處  
分ス

四年七月二十九日清國ト  
條約締結六年三月九日批  
准  
七年四月二十五日司法省  
達ヲ參照ス可シ

本年一月丁第二號達中(豫審終結及公判言渡)ノ九字ヲ刪除シ(裁判確定)ノ四字挿入候條此旨相達候事

井開神奈川縣權知事ヨリ刑部省へ伺 三年七月二十六日

支那人并條約未濟國ノモノ當地在留中盜其外惡事有之候節差押吟味仕置等取計方ノ儀ハ西洋千八百六  
十七年第十一月中舊政府ト外國公使トノ間ニ取結有之候居留地取締約書中第四條別紙ノ趣意ニ基キ  
右吟味ノ節各國岡士爲立會罪狀相糾御國律ニ見合死刑以上ニ見込候モノハ御仕置ノ儀御國人同様伺ノ  
上取計死刑以下ノ分モ御國人同様ノ律ヲ以テ手限ニテ御答等申付尤難決分ハ其時々相伺候積ニ有之右  
ニテ可然哉條約未濟國ノモノ御仕置等申付方兼テノ伺濟無之候間相伺候外國關係ノ儀ニ付外務省御合  
議ノ上至急御差圖有之候様致度此段奉伺候以上

刑部省指令 月 日 附

可爲伺之通事

但外務省へモ合議致候處異存無之候事  
千八百六十七年第十一月中英外三箇國公使ト舊幕府閣老ト取結候居留地約書寫  
第四條神奈川縣ノ知事ハ前條ニ言ヘル取締役ノ勸言補助并ニ又外國コンシユル等ヨリ得ヘキ勸言等ヲ以  
テ事ヲ執リツ、前ニ言ヘル居留地即チ神奈川ノ港内ニ居住ノ支那人其他條約未濟國ノ人民等ニ刑法民  
法ノニツテ施行スヘシ  
刑部省ヨリ外務省へ照會 三年七月二十八日  
支那人并條約未濟國之モノ神奈川港在留中盜其外惡事有之候節仕置等取計方ノ儀ニ付神奈川縣井開權  
知事ヨリ伺出候ニ付御省御見込ノ儀致承知度候間別冊二通御同申入候早速御回答有之度候也  
外務省回答 三年八月八日  
神奈川縣井開權知事ヨリ伺出候條約未濟國人惡事致候節取計處置振ノ儀當省見込御問合ノ處右ハ井  
開權知事伺ノ通ニテ可然様存候間別紙相添御回答及ヒ候也

内外國人交際ノ刑事取  
扱ハ仕來ノ通據置カレ

條約未濟國人犯罪處断  
後取扱方

米國商船セク支那人ハ  
米國ノ法ヲ以テ處断セ  
ル

司法省何四年九月十九日  
是迄御國人ト御條約濟各國人トノ間惡事相働候者吟味罰シ方ノ儀ハ於各國モ其所置聊相違モ有之候ハ  
共此節當省於テ裁判相成候ニ就テハ御條約面ニ從ヒ所斷可致ハ勿論ノ儀ト被存候然ル處是迄御獄中ニ  
各公使ノ内乞求ニヨツテ打合彼レ異論無之候ハ斷刑ニ及シ候分モ有之候處右ニテハ御條約面ニ相觸  
レ候哉ニモ被存且各國取計方區々ニテハ不都合ニ付以後ハ御獄處斷相濟候上彼レハ相違シ候手續ニ可  
取極哉或ハ仕來ノ通據置可申哉右兩條ノ内取計方御議定相成度奉存候

指令

仕來之通可据置事

神奈川裁判所ヨリ司法省へ同五年八月日附

條約未濟國人犯罪ノ者懲役ニ該候テハ御國人ト違ヒ取扱方不都合モ有之候間右様ノ分ハ禁獄ニ換ヘ處  
斷致シ尤モ禁獄日數滿限ニ不至本船出帆致シ候儀ノ儀有之節ハ現日數贈罪ニ換ヘ本人ハ船主等ヘ引渡  
シ不苦段此程伺濟ニ相成然ル處當港ノ儀ハ條約未濟國人并支那人多人數共ノ内酒與ノ上見世先ニ有之  
食等持去リ或ハ小盜イタシ賊計登兩ニモ不充多數有之右様ノ分竊盜律ヲ以テ懲役五十日ノ日數禁獄  
ニ換ヘ候テハ苛酷ニ過キ可申哉ト存候ニ付御英人ヒルヘ彼國處刑振問合候處都テ小盜致シ候者ハ  
ノ日數入獄又ハ罰金取立候趣ト申候間當裁判ニ於テモ小盜ニテ金高壹兩以下ノ分ハ五十日禁獄日數  
ヲ以テ贈罪ニ換ヘ處斷致シ且壹兩以上ノ盜ニ候テモ全ク酒與ノ上風ト仕成候儀ニテ情實憫涼ノモノハ  
禁獄日數ノ内時宜ニヨリ實決贈罪ト日數割合或ハ全ク贈罪申付候様致シ度至急御決議相成候様致シ度  
奉伺候也同ノ通決定但シ相檢印

司法省何六年六月二十九日

函館在留米國人雇支那人ケンガハ一犯罪處断ノ儀ニ付開拓使ヨリ別紙ノ通掛合有之候處右支那人ハ條  
約未濟國ノ例ヲ以テ御國法ニテ處断可致モノニ有之候處米法ヲ以テ處断爲致候ハ甚以不都合ニ有之候  
ニ付其段開拓使ヘモ申遣置候ヘトモ右ハ向後裁判上ニ於テ差支候間右取扱ノ官員相當ノ御處分相成且  
支那人處刑ハ是迄ノ通御國法ヲ以テ改正相成度此段相伺候也

指令 七年一月二十九日

何ノ通支那人ケンガハ一内地在留人ニ無之米國商船セクネット號雇水夫ニ有之候ハ御國法ヲ以テ處  
断スル筋ニ無之其雇主タル某國ノ國法ヲ以テ處断スルハ允當ニ候事

開拓使ヨリ司法省へ照會七年六月十二日

函館在留米國人雇支那人ケンガハ一去月十三日夜同所蓬萊町貸座敷渡世中野セキ方ニ於テ醉狂亂暴ニ  
及ヒ候折運卒差向候處既ニ逃去候ニ付其旨米國領事官ヘ掛合候處裁判ノ上本人ヨリ罰金十圓爲差出五  
圓金ハ米政府ヘ收入殘五圓ハ我政府ヘ差送候ニ付右中野セキ方ニテ破損ノ器品代價ニ積リ金三十一錢  
二釐五毛同人ヘ下渡其餘金ハ函館支廳ノ費用ニ相充申候尤モ犯罪贖金等ハ本使限收入御許容ニ候  
ヘトモ外國人引合ノ儀ニモ有之後來ノ的例ニモ相成候條此段爲念及御懸合候也

外務省ヨリ内史へ上申六年十月九日

司法省函館在留米國人雇支那人ケンガハ一犯罪處断ノ儀先般御照會ニ付取調候處右不明瞭ノ條有之ニ  
付開拓使ヘ同合候處別紙甲號ノ如ク回答申來候因テ乙號ノ通省議候ニ付爲御參考申進候也

開拓使ヨリ外務省へ回答六年九月八日

甲號  
米國風帆船セクネット號水夫支那人ケンガハ一儀蓬萊町ニテ醉狂亂暴及候件米國領事ヘ往復ノ書簡等  
御廻シ可申旨承知致シ候右ケンガハ一儀昨年十月月中モ當所豐川町ニ於テ醉狂亂暴ノ所業有之候ニ付選  
卒取押其節ハ英國屬カンカイ號乘組ニ付船主ヘ引渡シ候處英領事ニテ入獄ノ處分ニ及ヒ事濟然ルニ當  
五月十三日夜蓬萊町貸座敷渡世宮城聖吉之助方ヘ無謂石ヲ打込其後中野セキ方ヘモ同様ノ所業ニ及ヒ  
障子一枚神燈一ツ打毀テ尙同所ニテ芝居興行ノ妨ヲ爲シ候ニ付選卒可取押ノ處途中逃去行術不  
相知候ニ付尋方英領事ヘ申入候處米國船セクネット號乘組ノ由ニ付其段米領事ヘ官員口上ヲ以テ掛合  
候處取組ノ上挨拶可致旨ニテ其儘引取候處其後別紙ノ通省簡差越候間證人ト可相成選卒一人官員附添  
相越候處ケンガハ一突合一應取調候未破壞品迄償旁五圓ノ罰金申付候旨ニテ右金子差越候間任其意置  
右金處分方其筋ヘ問合及ヒ候事ニ候此儀ニ付別段關係ノ書類等無之候此段及御回答候也

外務省議案

乙號  
此件ハ司法省ヨリ來書類ニハ函館在留米國人雇人トアレトモ今度開拓使ヨリ出シ書類ニハ米國風  
帆船セクネット號水夫支那人トアリ公法上ニ於テ商船ニテモ乘組人タル間ハ其人ノ生國屬國ニ關セカ  
其船ノ本國ヲ以テ乘組人ト本國ト認ルカ故ニ支那人ト云トモ已ニ米船ノ乘組人タルトキハ公法上ニテ  
ハ米人ト見做サ、ルヲ得ス又他國ノ海港ニ泊スル時商船乘組人數ノ中ニテ起リタル罪過ハ右船所屬  
ノ國法ニ依テ處分スルヲ以テ相當トシ又乘組人ト他人トノ間ニ起リタル罪過ハ其土地ノ法ニ依リ  
テ裁斷スルヲ至當トス此事件ハ陸上ニ於テ御國人ニ對シテ起シタル事ナレハ無論御國法ヲ以テ處分ス  
ヘキ管ナレトモ已ニ其支那人ハ米船ノ乘組タルニ依テ米人ト認メタル事ナレハ無論御國法ヲ以テ處分ス  
過トシ彼カ國法ニ依テ處斷スルヲ以テ正トシタルヲ得ス故ニ其處分ニ付テ之ヲ取扱タル官員ヲ責ムル  
テ内地居留米人ノ雇人ナラハ司法省ノ來意ヲ以テ正トスヘシ

少選卒富澤利安ヨリ開拓使へ届六年五月十四日

支那人一名右ハ昨十三日夜蓬萊町貸座敷渡世宮城楚吉之助ハ無謂石ヲ打掛其後中野セキ宅ハモ同様ノ所業ニテ障子一枚神燈一ツ打コハシ逃去候旨注進有之同所芝居興行中物ヲ打投吹物ヲ致シ興行物ノ妨ヲナシ候ニ付本營ヘ引付可申ト連レ卷リ候處大町ニテ駈外シ候ニ付退駈候處旭橋際ヨリ川ヘ飛落候ニ付揚ル處ヲ待居取押候處棒ヲ打掛候ニ付直ニ引組共ニ海中ニ落南京人ハ船ヘ游キ揚リ申候右南京人ハ昨年十月中豐川町ニテモ兩度暴行ノ所業有之稅關ヘ引渡候カンカイ丸ノ者ニテ面體モ覺居且冠物モ取落候ニ付夫切ニ致シ候ヘトモ昨年以來酒醉ト申條暴行ノ所業度々有之候ニ付其筋ヘ可然様御掛合相成候様仕度依之支那人冠物相添御届申上候也

合衆國領事館セエケ、ハクスヨリ來書  
箱館一千八百七十三年第五月十二日外務長官貴下揚屋某方ニ於テ硝子ヲ破壊シ其他損害ヲ爲シタルセクネット船ノ支那人明午前第十一時ニ吟味ヲ遂ケ可申候間同時雇人ト共ニ貴下御立合有之候様致シ度此段得御意度如是御座候拜具謹言

開拓使ヨリ司法省ヘ同答六年十一月二十九日  
十一月二日附ヲ以テ御問合有之候支那人ケンガハ一儀米國商船セクネット號雇水夫ニ有之候此段及同答候也

法制課議案七年一月二十五日  
別紙司法省上申函館在留米國人雇支那人ケンガハ一犯罪處斷ノ儀審査仕候處不明瞭ノ儀有之ニ付外務司法兩省ヘ及照會候處就レモ米國商船セクネット號雇水夫ニ有之趣ニ候ハ別紙乙印外務ノ省議至當ノ儀ト存候由テ御指令案相添ヘ供高裁候也

司法省達

七年四月二十五日

無號神奈川大阪兵庫長崎西館開市場裁判所判事

清國人處分之儀ニ付伺出候向有之正院へ上申ニ及候處別紙朱書之通御指令相成候條爲御心得此段御達ニ及置候也

司法省同七年四月十三日

昨明治六年清國ト御條約書中第九條ニ兩國ノ開港場ニ若シ未タ理事官ヲ置カサル時ハ其人民云々若シ罪科ヲ犯サハ本人ヲ捕テ吟味ヲ遂ケ其事情ヲ最寄開港場ノ理事官ヘ掛合律ヲ照シテ裁斷スヘシト有之候處未タ何レノ開港場ヘモ同國理事官差置無之ニ就テハ若シ同國人犯罪等有之候節ハ右理事官差置候迄ハ從前之通御國法ヲ以處分致シ可然裁裁判上目下差支候儀有之候間至急何分ノ御指令有之度此段相伺候也

指令七年四月二十四日

伺ノ趣理事官ヲ差置候迄ハ御國法ヲ以テ處分致シ候儀ト可相心得事

左院議案七年四月十八日

別紙司法省同清國人處分ノ儀審議仕候處同國政府未タ理事官ヲ差置カサル迄ハ修好條規第九條ニ由リ我國律ヲ以テ犯罪人ヲ科斷スル相當ノ儀ニ有之且ツ今般籍牌規則御達相成候上ハ旁左ノ通御指令相成可然存候由テ御指令案相添供高裁候也

達 七年七月二十五日

外務省上申

去五月六日府下麴町英國公使館へ巡查數人立入同國護卒一人ヲ猥リニ捕押強テ拘引シ屯所ニ引留候一件ニ付久木村治休外六人免職ノ上現今罪狀判然ニ歸シ夫々律ニ照シ司法省日誌第百二十六號申渡書ノ通リ審判相成尙英國公使へ右粗暴ノ舉動ニ對シ深ク慚謝候段申入候程ノ儀ニテ元來公使館ノ儀ハ各國政府ノ名代人居住ノ館舍ニシテ公法ニ於テハ在留國ノ權理推及シ難キハ勿論右ヘ對シ我官員公法ニ背戻スル舉動有之候テハ皇國ノ威信ヲ失ヒ候儀ニ付急度御沙汰ニ可被及候間各國公使并ニ其館舍附屬官員ニ對シ別テ敬重ヲ加ヘ不作法ノ所業無之様屹度注意可致此旨相達候事

外務省上申 七年五月九日

去六日午後第七時麴町半藏門外英國公使館門外オイト同館へ立入候大工職第二區十二小區麻布日ケ窪町二十二番地彌七弟太刀川長吉儀右下水へ小便致シ候ヲ巡查中山本之助見咎メ候處公使館護衛ノ英人二名立出本之助ト彼是舉動ノ末小警部久木村治休ヲ始メ巡查六名諸共右公使館内へ立入り右英人ノ其一名ナルマブウウウヲ拘引第三大區三小區屯所へ抑留イタシ候一件同國公使ヨリ書記官サトウ井本人ウイト之口相添申出候依テ速ニ川路大警視ヘ照會シ事故爲取調候處大要ハ致符合候ヘ其細目亂語ノ廉不少候然ルニ公使館へ押入同館附屬ヲ拘引候ハ英國政府ヘ對シ失禮ノ尤甚敷儀ニ付其起原之由直ハノ權力不及場所ヘ押テ立入交際官附屬ヲ拘引候ハ英國政府ヘ對シ失禮ノ尤甚敷儀ニ付其起原之由直ハ暫クシ置巡査失錯ノ廉ハ我政府ヨリ十分謝辭不申入候テハ不相濟儀ニ有之然ル處外國公使并外國人ヘ對シ非常ノ事有之時巡査心得方ノ儀ハ警視廳ヨリ常々何程ノ布告ニ相成居候儀兼テ布告ノ條ヲ巡査ノ不取用ヨリシテ此一件ニ立至リ候儀ニ候ハ、巡查ノ罪ニ有之或ハ同應ヨリ十分ノ布告不行届ニ候ハ、其責任所歸ヲ以我政府ヨリ彼ヘ謝セサルヲ得サル事ニ候依テ此一件至急司法省於テ審判致シ候様御下命有之度候且久木村小警部ヲ初メ巡查六名右ウイトヲ拘引ノ間多少粗暴ノ舉動有之トノ廉ハ彌彼ヨリ申立候通ニ相違無之候ハ、是又相當ノ御處分有之度候依テ別紙目錄ノ書類相添此段申上候也(録名々々)

司法省へ達 七年五月十日  
英國公使館へ立入候大工職長吉達式之儀ニ付同館附屬ノ英人一名巡查屯所へ拘引致候一件別紙ノ通外

各國公使及ヒ其館舍附屬官員ニ對シ刑事取扱上敬重ヲ加ヘシム

清國理事官ナキ地ノ同國犯罪人ハ我國法ヲ以テ處分ス



務卿申出候條於其省審判可致候此旨相違候事

但外務内務兩省へ可打合事

外務内務兩省へ達七年五月十日

英國公使館へ立入候大工職長吉遊式ノ儀ニ付同館附屬ノ英人巡查屯所へ拘留致候一件審判ノ儀別紙ノ通司法省へ相違候條此旨可相心得事

庶務課議案七年五月九日

外務省上申警部巡查等英國公使館附屬ノ者共ニ對シ混雜ヲ生シ候一件裁判ノ儀左ノ通司法省へ御達相成可然哉仍テ御指令案共取調相伺候也

庶務課議案七年七月十二日

去ル五月中越町英國公使館へ立入強テ同國人ヲ拘引致候巡查其外處分ノ儀司法省於テ審判處斷相濟候上ハ將來各地心得ノ爲メ左ノ通御達相成可然哉仍テ御達案相伺候也

司法省達 八年五月七日

内國人ヨリ外國人へ係ル民事刑事ノ訴訟手續左之通相定候條此旨布達候事

内國人原告ニテ外國人ニ係ル民事刑事ノ訴訟ハ原告人其事由テ各開港開市場ノ府縣廳ニ申出其應ノ添狀ヲ得テ被告人管轄ノ各國領事へ申訴スヘシ

司法省伺 九年五月二十五日

從來刑事上代官人ヲ用ヒサルハ必シモ禁令アルニ非ス自然ノ習慣ニ有之候處或ハ外國人關係ノ刑事ニテ彼レハ代官ヲ用ヒ我レハ代官ヲ用ユルヲ得スレカ爲メ遂ニ幾分ノ權利ヲ失ヒ候様立至リ殊ニ國民保護ノ道ニ非ス候今般既ニ糾問判事ノ設ケアリ且招承ニ服セサル者處斷ノ儀ニ付過ル四月二十六日相伺候儀モ有之右等自然御施行ノ運ニ至候ハ追々刑事控訴并刑事代官等不被許候テハ相成間敷付テハ尙其邊取調可伺出候へ共差向別紙申立事件ノ如キハ刑事代官被差許可然方ト存候至急何分ノ御評議有之候様致度此段相伺候也

指令 九年六月七日

伺ノ趣聞屆候條尙刑事控訴并ニ代官ノ方法取調可伺出事

司法省ヨリ史官へ掛合 九年五月二十七日  
去ル二十五日司法卿ヨリ被相伺候刑事代官云々ノ儀ニ付及御催促候差掛リ候事件ハ本月一日築地居留

内國人ヨリ外人ニ係ル民事訴訟手續ヲ定ム  
九年九月司法省達甲第十  
二號ヲ以テ改ム  
外國人關係ノ刑事ハ代官人ヲ用ユルヲ許ス

地在留米人旅店渡世ヲルモント女氏同所青物渡世白井傳藏ヨリ野菜類購求ノ未代價ヲ不渡ニ付及催促處同氏怒氣ヲ發シ他ノ外國人共々及毆打折節傳藏妻サキモ來掛リ候處同様被毆打傳藏ハ滿身ニ數箇ノ打傷ヲ受ケサキハ肋骨并腕骨ヲ被折病院入療候程ノ儀ニ付此方ヨリ可及訴訟存候處却テヲルモント氏ヨリ東京裁判所へ被訴出吟除ニ取掛リ候未傳藏ハ少敷快方ニ候へ共サキハ死生ノ程モ決シ兼候體ノ處ヲルモント氏ヨリハ類リニ吟味ヲ促シ候ニ付テハ其事柄雙方突合吟味ヲ爲サ、ルヲ得ス且御國人ニハ十分ノ條理アリト見込モ婦女子又ハ訥辯等ノ爲メ直者ヲシテ却テ曲者ト爲ラ、ムルノ憂モ有之此際代官人ヲ用ヒスシテハ吟味ヲ爲スコトヲ得サルノミナラス大ニ國民ノ權利ヲ失フニ至ルモ難計釋ニ有之候間前件伺出ノ趣ハ至急何分ノ御指揮相成候様御取計有之度此段及御掛合候也

法制局議案 九年五月三十日

別紙司法省伺刑事代官等ノ儀審案候處外國人關係ノ分ハ差掛リ候事ニ付伺ノ通被差許尙刑事控訴并ニ代官ノ方法ヲ取調伺出候様御指令有之可然哉仰高裁候也

司法省伺 九年六月二十九日

和國商業社ヨリ去明治六年二月中三谷三九郎へ水油抵當トシテ金十萬圓貸渡候未償却方不相調右ハ東京商社第一銀行并社員三井次郎右衛門外三人局騙ノ所爲有之旨ヲ以テ今般東京裁判所へ刑事ノ訴出ニ及ヒ候處右一件ノ儀ハ既ニ民事共一且裁判相濟候モノニハ候へ共猶詐僞ノ事實一應檢事ニ於テ糾治致シ果シテ裁判ニ可相成モノニ候ハ被告人ニ於テ代官人差出候儀願出候モ難計候就テハ刑事代官人ノ儀既ニ過日伺濟ノ上規則即今取調中ニモ有之候間右願出候節ハ允許致シ度此段相伺候也

指令 九年七月七日

伺之趣聞屆候事  
法制局議案 九年七月一日  
別紙司法省伺外國人關係刑事代官人ノ儀審案候處別記參照ノ通六月六日外國人關係ノ分ハ刑事代官被差許候ニ付左案ノ如ク御指令相成可然哉仰高裁候也

司法省達 九年九月二十八日

明治八年當省甲第三號ヲ以テ布達候内國人ヨリ外國人ニ係ル民事刑事ノ訴訟手續中今般左ノ通相定候條此旨布達候事

第一條

内國人原告ニテ外國人ニ係ル刑事并ニ民刑附帶ノ訴訟ハ檢事其他ノ警察官他ノ府縣ハ地方官ニ於テ之ヲ承ケ直ニ被告人管轄ノ外國領事ニ照會シ裁判ヲ求ムヘシ

内國人ヨリ外人ニ係ル民事訴訟手續ヲ改ム

第二條

前條ノ場合ニ於テ犯罪ノ爲メ損害ヲ受タル者其償ヲ求ル民事ノ訴ハ總テ本人ノ望ニ任スヘシ

司法省上申九年十月二十五日

昨八年五月何定之上内國人原告ニテ外國人ニ係民事刑事ノ訴訟ハ原告人其事由ヲ各港開市場ノ府縣處ニ申出其處ノ添狀ヲ得テ被告人管轄ノ各國領事へ申訴スヘキ旨當省ニ於テ甲第三號ヲ以テ布達ニ及置候處追テ同年八月外務省及警視廳へ右等ノ事件ハ同願ヨリ直チニ外國領事へ照會スヘキ旨更ニ御達相成爾後同願ニ於テ外國人暴行等之儀ニ付各國領事へ照會ニ及ト雖モ既ニ右當省布達有之ヨリ領事申或ハ右ニ引據シ同願ノ請求ヲ拒ミ候向有之不都合ニ候段同願ヨリ申立事情尤ニ相聞ヘ且前條御達有之候末ニ付別紙甲第十二號ヲ以テ更ニ布達ニ及候右ハ從前手續ヲ以テ布達ノ節前以上申ヲ可經處一時行違ヒ御届迄ニ及候次第ニ付改メテ別紙同書差出置候間尙又宜布御聞置相成度此段申進候也

上申之趣聞置候事

司法省同九年十月二十五日

内國人原告ニテ外國人ニ係民事刑事ノ訴訟手續昨八年五月何定ノ上當省甲第三號ヲ以テ布達ニ及置候處追テ同年八月外務省及警視廳へ御達ノ旨有之爾來警視廳ニ於テ各國領事へ照會之際領事申中右當省布達ニ據リ同願ノ請求ヲ拒ミ候向有之實際不都合不少段同願ヨリ申立候ニ付更ニ別紙之通リ布達致シ度此段相伺候也

法制局議案九年十一月一日

別紙司法省上申内國人ヨリ外國人へ係民事訴訟手續之儀審案候處請求之趣ハ事實不得止儀ニ付左案之通御指令相成可然哉仰高裁候也

司法省ヨリ法制局へ照會十三年十月九日

中警視石井邦猷ヨリ外國人ニシテ國法ニ禁スル處ノ金銀米穀等ノ相場會所ヲ開設スルニ日本人ニシテ履ハレ其業ニ使役セラル、者及ヒ株主仲買等ニ加入スル者若クハ賣買ヲ爲ス者等處分ノ儀ニ付別紙ノ通伺出候右ハ外國人ヲ履テ受ルト否トニ拘ハラズ總テ國禁ニ違背スルヲ以テ論シ可然哉及御質問候也  
警視本署同十三年九月二十七日  
爰ニ甲外國人アリ國法ニ禁スル處ノ金銀米穀其他之レニ類似スル相場會所ヲ開設ス此商業ノ爲メ日本入ヲ履ヒ乙日本人ハ丙丁ノ日本人誘導ヲ爲メニ該會所ノ株主仲買等ニ加入ス戊庚ノ日本人客トナリ該會所ニ於テ賣買ヲナス乃丙丁戊庚ノ四名ハ禁令違背ノ犯罪トシ又乙ハ甲ヲ履ハントスルモ固ヨリ國法ノ禁スル處ノ商業ナレハ之レヲ遮斷スヘキヲ却テ之レニ甘從スル而已ナラス人ヲ誘導シ法網ニ陷ラシムルカ如キハ情理ニ於テ應ニ爲スヲ得ヘカラサルノ犯罪ト認メ可然哉目今差掛リノ件有之候條至急御指揮相成度此段相伺候也

外國人ニシテ國法ニ禁スル所ノ相場會所開設ノ節其株主仲買等ニ加入シタル日本人ハ國法ヲ以テ論ス  
十三年十月九日付質問國法ニ禁シタル金銀米穀等ノ相場會所ヲ開設シタル外國人ニ使役セラル、者等處分ノ儀ハ其見解ノ通  
右開裁ヲ經テ及回答候也  
法制部同十三年十月十三日  
別紙司法省質問外國人ニシテ國法ニ禁スル金銀米穀等ノ相場會所ヲ開設スル儀ヲ案スルニ外國人ト雖モ我國ノ禁令ヲ使ストキハ其國領事ニ談判ヲ遂ケ之ヲ廢業セシムヘキハ勿論ノ儀ト存候就テハ之カ爲メ履役セラル、我國民并株主仲買其他該會所ニ於テ取引ヲナス我國民ハ同省見解ノ通國禁ニ違背スルヲ以テ處分シ至當ト存候間左案ノ通回答相成可然哉右ハ例規無之儀ニ付仰聞裁候也

法制局回答十三年十一月十六日

本年十月九日付質問國法ニ禁シタル金銀米穀等ノ相場會所ヲ開設シタル外國人ニ使役セラル、者等處分ノ儀ハ其見解ノ通  
右開裁ヲ經テ及回答候也  
法制部同十三年十月十三日

別紙司法省質問外國人ニシテ國法ニ禁スル金銀米穀等ノ相場會所ヲ開設スル儀ヲ案スルニ外國人ト雖モ我國ノ禁令ヲ使ストキハ其國領事ニ談判ヲ遂ケ之ヲ廢業セシムヘキハ勿論ノ儀ト存候就テハ之カ爲メ履役セラル、我國民并株主仲買其他該會所ニ於テ取引ヲナス我國民ハ同省見解ノ通國禁ニ違背スルヲ以テ處分シ至當ト存候間左案ノ通回答相成可然哉右ハ例規無之儀ニ付仰聞裁候也

司法省達 丙十六年三月十二日

刑事裁判上在本邦外國公使館ニ備ハレタル内國人ニ對シ發スヘキ令狀ハ明治七年第二百二十八號公達ニ據リ公使館ニテ唯諾ノ上執行セシムヘキハ勿論ニシテ其唯諾ヲ經ルノ手續ハ明治十四年第五十三號公達ノ旨モ有之ニ付大審院并裁判所ハ其事柄ヲ明記シ當省へ申出指令ノ上其令狀ヲ發シ又警視廳府縣ニ於テハ其長官ヨリ外務省へ申出右唯諾ヲ經ルノ手續キナリ了シ令狀ヲ執行セシムヘキ儀ト心得ヘシ爲念此旨相達候事

但本文令狀執行者ハ專ラ明治七年第二百二十八號公達ノ旨趣ニ據リ聊不都合ノ取計無之様厚ク注意セシムヘシ

(參照)

達 第十四年六月十六日  
第五十三號省院見解府縣  
各應ヨリ我國在留各國公使ニ對スル公務ノ照會ハ外務卿へ通牒シ外務卿ヨリ各公使へ照會候儀ト可相心得此旨相達候事

勅令 十九年十月六日内閣總理大臣伯爵伊藤博文外務大臣伯爵井上馨司法大臣伯爵山田顯義副要

朕帝國ト亞米利加合衆國トノ間ニ締結シタル兩國犯罪人引渡條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セシム  
日本國亞米利加合衆國犯罪人引渡條約譯文

外國公使館ニ備ハレタル内國人ニ對シ令狀ヲ發スルノ手續  
七年第二百二十八號公達等  
警視廳府縣ノ部ニ載ス  
參照ス可シ

日米兩國犯罪人引渡條約

二十年八月三日勅令第四十二號ヲ以テ逃亡人犯罪引渡條約ヲ定ム

日本皇帝陛下及ヒ亞米利加合衆國大統領ハ兩國内并ニ其管轄内ニ於テ司法事務ヲ益周到ナラシメ及ヒ犯罪ヲ防止センカ爲メ下ニ掲クル犯罪ニ付有罪ノ宣告若クハ告訴告發ヲ受ケ未タ處分ヲ經スシテ逃亡スル者ハ其情狀ニ據リ互ニ之ヲ引渡スノ便宜ナルヲ認メ之レカ爲メ條約ヲ締結スルコトニ決シ日本皇帝陛下ハ外務大臣伯爵井上馨ヲ亞米利加合衆國大統領ハ日本駐劄特命全權公使リチャード、ビー、ハッパードヲ各其全權委員ニ命セリ因テ雙方全權委員ハ互ニ其委任狀ヲ示シ誠實適式ナルヲ認メ左ノ條々ヲ議定ス

第一條 締約國一方ノ管轄内ニ於テ第二條ニ掲クル犯罪ニ付有罪ノ宣告若クハ告訴告發ヲ受ケタル者他ノ一方ノ管轄内ニ於テ發見セラレタルトキハ締約兩國政府ハ本條約ニ開列スル情狀及ヒ制限ニ遵ヒ互ニ之ヲ引渡スヘシ

第二條

- 一 謀殺謀殺未遂犯、其他殺人罪
- 二 貨幣ノ偽造若クハ變造、偽造若クハ變造貨幣ノ發行或ハ行使、公債證書、其利札、銀行紙幣、其他公衆ノ信用ヲ受クヘキ證書類ノ偽造并ニ其發行若クハ行使
- 三 文書ノ偽造若クハ變造并ニ其行使
- 四 監守盜即チ官吏又ハ監守人締約國一方ノ管轄内ニ於テ公金ヲ私用スル罪并ニ傭主ノ損害トナルヘキ被傭人ノ監守盜
- 五 強盜若クハ五十弗以上ノ竊盜
- 六 重刑ニ當ル罪ヲ犯ス目的ヲ以テ夜間若クハ晝間他人ノ家宅ヲ破壞シ之ニ侵入スル罪
- 七 重刑ニ當ル罪ヲ犯ス目的ヲ以テ官衙、國立銀行、私立銀行、貯蓄銀行、財産管理會社、及保險會社并ニ其他會社ノ家屋ヲ破壞シ若クハ破壞セシテ之ニ侵入スル罪
- 八 偽證及偽證教唆
- 九 強姦

十 放火

十一 國際法ニ於テ海賊ト認ムル罪

十二 引渡ヲ請求スル國ノ旗章ヲ掲ケタル船舶大洋航行中其船内ニ於テ犯シタル謀殺、謀殺未遂犯及ヒ其他殺人罪

十三 惡意ヲ以テ鐵道、馬車鐵路、船舶、橋梁、家屋及ヒ公用建物并ニ其他ノ建物ヲ破壞シ若クハ破壞セント謀リ其所爲人命ニ危害ヲ生スヘキモノ

十四 銀行營業者、受託人、銀行若クハ、財産管理會社ノ頭取役員ノ詐僞ニシテ現行法律ニ據リ罪トナルヘキモノ

第三條 請求ニ係ル人引渡ノ請求ヲ受ケタル國ニ於テ審判中ナルトキハ之ヲ引渡スト引續キ之ヲ審判スルトハ該國ノ隨意タルヘシ但其審判該逃亡人ノ引渡ヲ請求スル罪ノ爲メニアラサルトキハ一時其引渡ヲ遲滞スルコトアルモ終ニ之ヲ拒クコトヲ得ス

第四條 若シ請求ニ係ル人ヲ政事上ノ犯罪ニ付審判シ若クハ處刑セントスルノ目的ヲ以テ引渡ヲ請求シタリト認ムルトキハ其引渡ヲ爲サ、ルヘシ又引渡サレタル人ハ其引渡前ニ犯シタル政事上ノ犯罪ニ付審判若クハ處刑セラル、コト無ルヘシ

第五條 引渡ノ請求ハ締約國相互ノ外交官ヲ經テ之ヲ爲スヘシ若シ外交官其國內又ハ其政府所在ノ地ニ駐留セサルトキハ高等領事官之ヲ爲スヘシ

已ニ有罪ノ宣告ヲ受ケタル逃亡人ノ引渡ヲ請求スルニハ其宣告ヲ爲シタル裁判所ノ證印アル宣告文寫其裁判官ノ職權ニ付相當行政官ノ證明書及ヒ其行政官ノ職權ニ付日本又ハ合衆國ノ公使若クハ領事ノ證明書ヲ添フヘシ若シ逃亡人告訴告發ヲ受ケタルノミナルトキハ請求國ニ於テ發シタル逮捕狀ノ公寫及其逮捕狀ヲ發スルノ根據トナリタル證據書類ノ公寫ヲ添フヘシ  
逃亡人ノ引渡ハ之ヲ發見シタル國ニ於テ本罪ヲ犯シタルモノトセハ該國ノ法律ニ遵ヒ之ヲ逮捕シ及ヒ審判ニ付スヘキ刑事上ノ證據充分ナル場合ニ限ルモノトス

第六條 本條約第二條ニ掲クル犯罪ニ付告訴發テ受ケタル逃亡人逮捕ノ爲メ相當官吏ヨリ逮捕狀ヲ發シタル旨外交官ヲ經由シ電報ヲ以テ通知アリ且該逃亡人引渡ノ請求ハ追テ本條約ノ條款ニ從ヒ之ヲ爲スヘキ旨該外交官ヨリ保證シタルトキハ締約國政府ハ假ニ之ヲ逮捕シ相當ノ期限内即チ二月ヲ超過セサル間之ヲ監禁シ其引渡請求ノ根據ト爲ルヘキ書類ノ提出ヲ待ツヘシ

第七條 締約國ハ本條約ノ條款ニ因リ互ニ其臣民ヲ引渡スノ義務ナキモトス但其引渡ヲ至當ト認ムルトキハ之ヲ引渡スコトヲ得ヘシ

第八條 被告人ノ逮捕監禁訊問及ヒ送致ノ費用ハ其引渡ヲ請求シタル政府ニ於テ之ヲ支辨スヘシ

第九條 本條約ハ其批准交換後六十日ヲ經テ効力ヲ有スヘシ而シテ締約國ノ一方ニ於テ之ヲ廢止スルコトヲ得ヘシト雖モ其廢止ノ通知ヲ爲シタル後六月間ハ仍ホ其効力ヲ存スヘシ

本條約ハ可成速ニ批准シ華聖頓府ニ於テ其批准ヲ交換スヘシ

右確證トシテ雙方ノ全權委員ハ各本條約ニ通ニ署名調印スルモノナリ

明治十九年四月二十九日即チ西曆一千八百八十六年四月二十九日東京ニ於テ書ス

井 上 馨

リナヤード、ビー、ハッバード

亞米利加合衆國政府ハ前條約ニ左ノ修正ヲ爲サンコトヲ請求セリ

第二條第一項「謀殺、謀殺未遂犯、其他殺人罪」トアルヲ「謀殺及ヒ其未遂犯」ト改ム

同條第四項「私用スル罪」ノ下「并ニ傭主云々」ノ十九字ヲ削除ス

同條第五項「強盜」ノ下「若クハ五十弗以上ノ竊盜」ノ十一字ヲ削除ス

同條第十四項全文ヲ削除ス

第四條中「其引渡前ニ犯シタル政事上ノ犯罪」ノ下「若クハ其引渡ヲ許シタル犯罪ノ外」ノ十五字ヲ追加ス

第六條中「相當官吏ヨリ」ノ下「妥當ノ證據アルニ依リ適法」ノ十三字并ニ「電報」ノ下「又ハ其他書面」ノ

六字及ヒ「締約國政府」ノ下「法律ノ範圍内ニ於テ」ノ九字ヲ追加ス

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル日本國皇帝此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス

帝國及亞米利加合衆國兩全權委員ノ締結記名調印シタル兩國犯罪人引渡條約及ヒ亞米利加合衆國政府ノ發議ニ係ル該條約ノ修正事項ヲ朕親シク閱覽點檢セシニ能ク朕カ意ニ適シ間然スル所ナキヲ以テ總テ之ヲ嘉納批准シ日本帝國ニ於テ該修正ヲ加ヘタル兩國犯罪人引渡條約ヲ履行遵奉セシムルコトヲ茲ニ約ス

神武天皇即位紀元二千五百四十六年明治十九年九月二十五日東京帝宮ニ於テ親カラ名ヲ署シ璽ヲ鈐セ

シム

御名 御璽

外務大臣 伯爵 井上 馨

西曆千八百八十六年四月二十九日東京ニ於テ日本帝國及ヒ亞米利加合衆國ノ兩全權委員カ調印シ

タル犯罪人引渡條約ニ華聖頓府ニ於テ其批准ヲ交換スヘキノ明文アリト雖モ兩締約國ハ其批准ヲ

東京ニ於テ交換スルコトニ議定シ又條約ノ末文ニ西曆一千八百八十六年四月二十九日東京ニ於テ書スト解ス

テ書スト明文アリト雖モ兩締約國ハ之ヲ西曆千八百八十六年四月二十九日東京ニ於テ書スト解ス

ルコトニ議定シタリ因テ今下ニ連署シタル兩名ハ本件ニ關シ各其政府ヨリ委任テ受ケ右條約批准

交換ノ爲メ互ニ相會同シ雙方ノ批准ヲ精密ニ比照セシニ孰レモ能ク符合スルヲ以テ定式ニ隨ヒ本

日之ヲ交換セリ

右證トシテ下ニ連署シタル兩名ハ此交換證書ニ其名ヲ記シ印ヲ鈐ス

西曆千八百八十六年九月二十七日東京ニ於テ

井 上 馨

リナヤード、ビー、ハッバード

日本國亞米利加合衆國犯罪人引渡條約(譯文)  
千八百八十六年(明治十九年)四月二十九日東京ニ於テ調印同年九月二十七日東京ニ於テ批准交換  
本書ハ英文ナリ

日本皇帝陛下及ヒ亞米利加合衆國大統領ハ兩國内并ニ其管轄内ニ於テ司法事務ヲ益周到ナラシメ  
及ヒ犯罪ヲ防止センカ爲メ下ニ掲クル犯罪ニ付有罪ノ宣告若クハ告訴發シ受ケ未タ處分ヲ經ス  
シテ逃亡スル者ハ其情狀ニ據リ互ニ之ヲ引渡スノ便宜ナルヲ認メ之レカ爲メ條約ヲ締結スルコト  
ニ決シ日本皇帝陛下ハ外務大臣伯爵井上馨ヲ亞米利加合衆國大統領ハ日本駐劄特命全權公使リチ  
ヤード、ビー、ハッパードヲ各其全權委員ニ命セリ因テ双方全權委員ハ互ニ其委任狀ヲ示シ誠實適  
式ナルヲ認メ左ノ條ヲ議定ス

第一條

締約國一方ノ管轄内ニ於テ第二條ニ掲クル犯罪ニ付有罪ノ宣告若クハ告訴發シ受ケタル者他ノ  
一方ノ管轄内ニ於テ發見セラレタルトキハ締約兩國政府ハ本條約ニ開列スル情狀及ヒ制限ニ遵ヒ  
互ニ之ヲ引渡スヘシ

第二條

- 一、謀殺、謀殺未遂犯、其他殺人罪
- 二、貨幣ノ偽造若クハ變造、偽造若クハ變造貨幣ノ發行或ハ行使、公債證書、其利札、銀行紙幣、其他  
公衆ノ信用ヲ受ケヘキ證書類ノ偽造并ニ其發行若クハ公使
- 三、文章ノ偽造若クハ變造并ニ其公使
- 四、監守盜即チ官吏又ハ監守人締約國一方ノ管轄内ニ於テ公金ヲ私用スル罪并ニ備主ノ損害ト  
ナルヘキ被備人ノ監守盜
- 五、強盜若クハ五十弗以上ノ竊盜
- 六、重刑ニ當ル罪ヲ犯ス目的ヲ以テ夜間若クハ晝間他人ノ家宅ヲ破壊シ之ニ侵入スル罪
- 七、重刑ニ當ル罪ヲ犯ス目的ヲ以テ官衙、國立銀行、私立銀行、貯蓄銀行、財産管理會社及ヒ保險會

社并ニ其他會社ノ家屋ヲ破壊シ若クハ破壊セスシテ之ニ侵入スル罪  
八、偽證及ヒ偽證教唆

九、強姦

十、放火

十一、國際法ニ於テ海賊ト認ムル罪

十二、引渡ヲ請求スル國ノ旗章ヲ掲ケタル船舶大洋航行中其船内ニ於テ犯シタル謀殺、謀殺未遂犯、及  
ヒ其他ノ殺人罪

十三、惡意ヲ以テ鐵道、馬車鐵路、船舶、橋梁、家屋及ヒ公用建物并ニ其他ノ建物ヲ破壊シ若クハ破壊セ  
ント謀リ其所爲人命ニ危害ヲ生スヘキモノ

十四、銀行營業者受託人、銀行若クハ財産管理會社ノ頭取役員ノ詐僞ニシテ現行法律ニ據リ罪トナル  
ヘキモノ

第三條

請求ニ係ル人引渡ノ請求ヲ受ケタル國ニ於テ審判中ナルトキハ之ヲ引渡スト引續キ之ヲ審判スルトハ  
該國ノ隨意タルヘシ但其審判該逃亡人ノ引渡ヲ請求スル罪ノ爲ニアラサルトキハ一時其引渡ヲ遲滯ス  
ルコトアルモ終ニ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第四條

若シ請求ニ係ル人ヲ政事上ノ犯罪ニ付審判シ若クハ處刑セントスルノ目的ヲ以テ引渡ヲ請求シタリト  
認ムルトキハ其引渡ヲ爲サルヘシ又引渡サレタル人ハ其引渡前ニ犯シタル政事上ノ犯罪ニ付審判若  
クハ處刑セラル、コト無ルヘシ

第五條

引渡ノ請求ハ締約國相互ノ外交官ヲ經テ之ヲ爲スヘシ若シ外交官其國內又ハ其政府所在ノ地ニ駐留セ  
サルトキハ高等領事官之ヲ爲スヘシ  
已ニ有罪ノ宣告ヲ受ケタル逃亡人ノ引渡ヲ請求スルニハ其宣告ヲ爲シタル裁判所ノ證印アル宣告文寫

其裁判官ノ職權ニ付相當行政官ノ證明書及ヒ其行政官ノ職權ニ付日本又ハ合衆國ノ公使若クハ領事ノ證明書ヲ添フ可シ若シ逃亡人告訴發受ケタルノミナルトキハ請求國ニ於テ發シタル逮捕狀ノ公寫及ヒ其逮捕狀ヲ發スルノ根據トナリタル證據書類ノ公寫ヲ添フヘシ  
逃亡人ノ引渡ハ之ヲ發見シタル國ニ於テ本罪ヲ犯シタルモノトセハ該國ノ法律ニ遵ヒ之ヲ逮捕シ及ヒ審判ニ付スヘキ刑事上ノ證據充分ナル場合ニ限ルモノトス

第六條

本條約第二條ニ掲クル犯罪ニ付告訴發受ケタル逃亡人逮捕ノ爲メ相當官吏ヨリ逮捕狀ヲ發シタル旨外交官ヲ經由シ電報ヲ以テ通知アリ且該逃亡人引渡ノ請求ハ追テ本條約ノ條款ニ從ヒ之ヲ爲スヘキ旨該外交官ヨリ保證シタルトキハ締約國政府ハ假ニ之ヲ逮捕シ相當ノ期限内即チ二月ヲ超過セサル間之ヲ監禁シ其引渡請求ノ根據ト爲ルヘキ書類ノ提出ヲ待ツヘシ

第七條

締約國ハ本條約ノ條款ニ因リ互ニ其臣民ヲ引渡スノ義務ナキモノトス但シ其引渡ヲ至當ト認ムルトキハ之ヲ引渡スコトヲ得ヘシ

第八條

被告人ノ逮捕監禁訊問及ヒ送致ノ費用ハ其引渡ヲ請求シタル政府ニ於テ之ヲ支辨スヘシ

第九條

本條約ハ其批准交換後六十日ヲ經テ効力ヲ有スヘシ而シテ締約國ノ一方ニ於テ之ヲ廢止スルコトヲ得ヘント雖モ其廢止ノ通知ヲ爲シタル後六月間ハ仍ホ其効力ヲ存スヘシ

本條約ハ可成速ニ批准シ華聖頓府ニ於テ其批准ヲ交換スヘシ  
右確證トシテ雙方ノ全權委員ハ各本條約ニ通ニ署名調印スルモノナリ

明治十九年四月二十九日即チ西曆一千八百八十六年四月二十九日東京ニ於テ書

井 上 馨 (印)

(印)

本條約ハ批准前合衆國ヨリ下ノ修正ヲ發議シ日本ニ於テ之ヲ採納シタリ

第二條第一項謀殺謀殺未遂犯其他殺人罪トアルヲ「謀殺及ヒ其未遂犯」ト改ム

同條第四項私用スル罪ノ下并ニ傭主云々ノ十九字ヲ削除ス

同條第五項強盜ノ下若クハ五十弗以上ノ竊盜ノ十一字ヲ削除ス

同條第十四項全文ヲ削除ス

第四條中其引渡前ニ犯シタル政事上ノ犯罪ノ下若クハ其引渡ヲ許シタル犯罪ノ外ノ十五字ヲ追加ス

第六條中相當官吏ヨリノ下「妥當ノ證據アルニ依リ適法」ノ十三字并ニ「電報」ノ下「又ハ其他書面」ノ

六字及ヒ「締約國政府」ノ下「法律ノ範圍内ニ於テ」ノ九字ヲ追加ス

第六條

本條約第二條ニ掲クル犯罪ニ付告訴發受ケタル逃亡人逮捕ノ爲メ相當官吏ヨリ妥當ノ證據アルニ依リ適法ノ逮捕狀ヲ發シタル旨外交官ヲ經由シ電報又ハ其他書面ノ通知アリ且該逃亡人引渡ノ請求ハ追テ本條約ノ條款ニ從ヒ之ヲ爲スヘキ旨該外交官ヨリ保證シタルトキハ締約國政府ハ法律ノ範圍内ニ於テ假ニ之ヲ逮捕シ相當ノ期限内即チ二月ヲ超過セサル間之ヲ監禁シ其引渡請求ノ根據ト爲ルヘキ書類ノ提出ヲ待ヘシ

批准交換證書

西曆千八百八十六年四月二十九日東京ニ於テ日本帝國及ヒ亞米利加合衆國ノ兩全權委員カ調印シタル犯罪人引渡條約ニ華聖頓府ニ於テ其批准ヲ交換スヘキノ明文アリト雖モ兩締約國ハ其批准ヲ東京ニ於テ交換スルコトニ議定シ又條約ノ末文ニ西曆一千八百八十六年四月二十九日東京ニ於テ書スト明文アリト雖モ兩締約國ハ之ヲ西曆千八百八十六年四月二十九日東京ニ於テ書スト解スルコトニ議定シタリ因テ今下ニ連署シタル兩名ハ本件ニ關シ各其政府ヨリ委任ヲ受ケ右條約批准交換ノ爲メ互ニ相會同シ雙方ノ批准ヲ精密ニ比照セシニ孰レモ能ク符合スルヲ以テ定式ニ隨ヒ本日之ヲ交換セリ  
右證トシテ下ニ連署シタル兩名ハ此交換證書ニ其名ヲ記シ印ヲ鈐ス

The treaty shall be ratified and the ratifications shall be exchanged at Washington as soon as possible.

In witness whereof the respective Plenipotentiaries have signed the present Treaty in duplicate and have thereunto affixed their seals.

Done at the city of Tokio, the Twenty-ninth day of the Fourth month, of the Nineteenth year of Meiji, corresponding to the Twenty-ninth day of April in the Eighteen hundred and eighty-sixth year of the Christian Era.

(Signed:) Inouye Kaoru. [L.S.]

(Signed:) Richard B. Hubbard. [L.S.]

*The following Amendments to the Treaty were proposed by the United States and accepted by Japan, prior to ratification:*

Insert in paragraph 1 of Article II, after the word, "Murder" where it first occurs, the word, *and*, and strike out the words [and manslaughter.]

Strike out all after the word, "depositories" in paragraph 4 of Article II.

Strike out in paragraph 5 of Article II, the following words: [Larceny, of the value of fifty dollars and upwards, and] so that said paragraph as amended shall read:

5—Robbery.

Strike out all of paragraph 14 in Article II.

Add at the end of Article IV, the words, *or for any offence other than that in respect of which the extradition is granted.*

Amend Article VI as follows:

Insert after the word, "telegraph," the words, *or other written communication*; insert after the word, "a," where it first occurs, the word, *lawful*, and after the word, "authority" the words, *upon probable cause*; and after the word, "procure" the words, *so far as it lawfully may*, so that said article shall read:

ARTICLE VI.

On being informed by telegraph, or other written communication, through the diplomatic channel that a lawful warrant has been issued by competent authority upon probable cause, for the arrest of a fugitive criminal charged with any of the crimes enumerated in Article II of this Treaty, and, on being assured from the same source that a request for the surrender of such criminal is about to be made in accordance with the provisions of this Treaty, each Government will endeavor to procure so far as it lawfully may, the provisional arrest of such criminal, and keep him in safe custody for a reasonable time not exceeding two months, to await the production of the documents upon which the claim for extradition is founded.

CERTIFICATE OF THE EXCHANGE  
OF RATIFICATIONS.

Whereas, the Treaty signed at Tokio, on the 29th day of April, 1886, by the Plenipotentiaries of the Empire of Japan and of the United States of America, concerning the Extradition of Criminals, recites that the ratifications thereof shall be exchanged at Washington;

And whereas, it has been agreed between the High Contracting Parties that the ratifications thereof shall be exchanged at Tokio;

And whereas, the said Treaty in concluding reads as follows:

"Done at the City of Tokio, the twenty-ninth day of April in the eight-hundred and eighty-sixth year of the Christian Era."

And whereas, it is understood by the High Contracting Parties that the same is intended to read as follows:

"Done at the City of Tokio, the "twenty-ninth day of April, in the year "1886 of the Christian Era."

Now, the undersigned, having met together for the purpose of exchanging the ratifications of the said Treaty, and the said ratifications thereof having been carefully compared and found exactly conformable to each other, the exchange took place this day in the usual form.

In witness whereof, they have signed the present certificate of exchange and have affixed thereto their seals.

within the jurisdiction of either party, by public officers or depositaries, and embezzlement by any person hired, salaried or employed, to the detriment of the employer or principal.

5.—Larceny, of the value of fifty dollars and upwards, and robbery.

6.—Burglary, defined to be the breaking and entering by night-time into the house of another person with the intent to commit a felony therein; and the act of breaking and entering the house of another, whether in the day or night-time, with the intent to commit a felony therein.

7.—The act of entering, or of breaking and entering, the offices of the Government and public authorities, or the offices of banks, banking-houses, savings banks, trust companies, insurance or other companies with the intent to commit a felony therein.

8.—Perjury, or the subornation of perjury.

9.—Rape.

10.—Arson.

11.—Piracy by the law of nations.

12.—Murder, assault with intent to kill, and manslaughter, committed on the high seas, on board a ship bearing the flag of the demanding country.

13.—Malicious destruction of, or attempt to destroy, railways, trams, vessels bridges, dwellings, public edifices, or other buildings, when the act endangers human life.

14.—Fraud by a banker, or a trustee, or by an officer or a director of a bank or trust company, made criminal by any law for the time being in force.

#### ARTICLE III.

If the person demanded be held for trial in the country on which the demand is made, it shall be optional with the latter to grant extradition or to proceed with the trial, provided that unless the trial shall be for the crime for which the fugitive is claimed, the delay shall not prevent ultimate extradition.

#### ARTICLE IV.

If it be made to appear that extradition is sought with a view to try or punish the person demanded for an offence of a political character, surrender shall not take place; nor shall any person surrendered be tried or punished for any political offence committed previously to his extradition.

#### ARTICLE V.

The requisition for extradition shall be made through the diplomatic agents of the contracting parties, or, in the event of the absence of these from the country or its seat of government, by superior consular officers.

If the person whose extradition is requested shall have been convicted of a crime, a copy of the sentence of the court in which he was convicted, authenticated under its seal, and an attestation of the official character of the judge by the proper executive authority, and of the latter by the Minister or Consul of Japan or of the United States, as the case may be, shall accompany the requisition. When the fugitive is merely charged with crime, a duly authenticated copy of the warrant of arrest in the country making the demand and of the depositions on which such warrant may have been issued, must accompany the requisition.

The fugitive shall be surrendered only on such evidence of criminality as according to the laws of the place where the fugitive or person so charged shall be found, would justify his apprehension and commitment for trial if the crime had been there committed.

#### ARTICLE VI.

On being informed by telegraph, through the diplomatic channel, that a warrant has been issued by competent authority for the arrest of a fugitive criminal charged with any of the crimes enumerated in Article II of this Treaty, and, on being assured from the same source that a request for the surrender of such criminal is about to be made in accordance with the provisions of this Treaty, each Government will endeavor to procure the provisional arrest of such criminal, and keep him in safe custody for a reasonable time, not exceeding two months, to await the production of the documents upon which the claim for extradition is founded.

#### ARTICLE VII.

Neither of the contracting parties shall be bound to deliver up its own subjects or citizens under the stipulations of this Convention, but they shall have the power to deliver them up, if in their discretion, it be deemed proper to do so.

#### ARTICLE VIII.

The expenses of the arrest, detention, examination and transportation of the accused shall be paid by the Government which has requested the extradition.

#### ARTICLE IX.

The present Treaty shall come into force sixty days after the exchange of the ratifications thereof. It may be terminated by either of them, but shall remain in force for six months after notice has been given of its termination.



TREATY OF EXTRADITION BETWEEN JAPAN AND THE UNITED STATES OF AMERICA.\*

Signed at Tokio, April 29th, 1886. (19th year of Meiji) Ratifications exchanged at Tokio, September 27th 1886. (19th year of Meiji)

His Majesty the Emperor of Japan and the President of the United States of America, having judged it expedient, with a view to the better administration of justice, and to the prevention of crime within the two countries and their jurisdictions, that persons charged with or convicted of the crimes or offences hereinafter named, and being fugitives from justice, should, under certain circumstances, be reciprocally delivered up, they have named as their Plenipotentiaries to conclude a Treaty for this purpose, that is to say:

His Majesty the Emperor of Japan, Count Inouye Kaoru, Jusammi, His Imperial Majesty's Minister of State for Foreign Affairs, First Class of the Order of the Rising Sun, &c., &c., &c., and the president of the United States of America, Richard B. Hubbard, their Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary near His Imperial Majesty the Emperor of Japan, who, after having communicated to each other their respective full powers, found in good and due form, have agreed upon and concluded the followng Articles:

ARTICLE I.

The High Contracting Parties engage to deliver up to each other, under the circumstances and conditions stated in the present Treaty, all persons, who being accused or convicted of one of the crimes or offences named below in Article II, and committed within the jurisdiction of the one Party, shall be found within the jurisdiction of the other Party.

ARTICLE II.

- 1.—Murder, assault with intent to commit murder, and manslaughter.
2.—Counterfeiting or altering money, or uttering or bringing into circulation counterfeit or altered money, counterfeiting certificates or coupons of public indebtedness, bank notes, or other instruments of public credit of either of the parties, and the utterance or circulation of the same.
3.—Forgery or altering and uttering what is forged or altered.
4.—Embezzlement or criminal malversation of the public funds, committed

\* The Treaty was Amended after signature. For Amendments see Page 88.

外務省上申十九年四月二十九日
我國ト亞米利加合衆國トノ間ニ取結ヘキ犯罪人引渡條約之儀記名調印相濟候件ニ關シ別紙之通上奏候
間可然御取計相成度候也
外務省上申十九年四月二十九日
兼而御委任相成候我國ト亞米利加合衆國トノ間ニ締結スヘキ犯罪人引渡條約之儀本日記名調印相濟候
此段謹テ上奏ス
外務省上申十九年五月十一日
帝國ト亞米利加合衆國トノ間ニ於テ互相犯罪人引渡之件ニ付彼國全權委員本邦駐劄同國特命全權公使
ハツバルト氏ト會同商議之末別紙英文之通條約記名調印相濟候ニ付右原文ヘ譯文相添附覽ニ供候間御
批准相成度仍御批准案相添附テ上奏ス
外務省上申十九年九月二十四日
本年四月二十九日帝國ト亞米利加合衆國トノ間ニ締結シタル兩國犯罪人引渡條約ノ御批准書取消及亞
米利加合衆國ノ發議ニ係ル修正事項御批准ノ儀ニ付別紙ノ通及上奏候間可然御取計相成度候也
外務省上申十九年九月二十四日
本年四月二十九日日本大臣ト帝國駐劄亞米利加合衆國特命全權公使リチャード・ハツバルト氏トノ
間ニ締結記名調印シタル日本大臣ト帝國駐劄亞米利加合衆國特命全權公使リチャード・ハツバルト氏トノ
發ニ合衆國駐劄特命全權公使九鬼隆一ヘ御委任相成候處其後合衆國政府ハ別紙譯文ノ通該條約ニ修正
ヲ加ヘ度旨發議セリ依是本大臣ハ該條約ニ修正ヲ加ヘ度旨發議セリ依是本大臣ハ該條約ニ修正
熟閱審查致候處右ハ孰レモ帝國政府ニ於テ均シク必要ノ事項ニ有之モ帝國政府ノ損害ヲ醸生スヘモノニ
無之候間其趣ト奏聖慮相伺候處即右修正ノ各項御允認相成候就テハ合衆國政府ノ發議ニ係ル該修正事
項モ亦御批准相成度將又今般兩國政府ノ協議ニ依リ批准交換ノ儀於東京スヘキ事ニ決定致候ニ付九鬼
公使ヘノ御委任御取消ノ上更ニ本條約批准交換ノ儀本大臣ヘ御委任相成度此段別紙御批准案及御委任
狀案相添附テ上奏ス
外務省上申十九年九月二十九日
發ニ帝國及ヒ亞米利加合衆國間ニ締結シタル兩國犯罪人引渡條約ノ批准交換結了及ヒ同條約公布ノ儀
ニ付別紙之通リ上奏候間速ニ可然御取計有之度候也
外務省上申十九年九月二十九日
本年四月二十九日ヲ以テ本大臣ト本邦駐劄亞米利加合衆國特命全權公使トノ間ニ締結シタル兩國犯罪
人引渡條約御批准交換ノ儀裝ニ本大臣ヘ御委任相成候處一昨二十七日同公使ト外務省ニ會同シ御批准
交換致結了候就テハ右條約譯御公布相成度別紙勅令案并ニ合衆國大統領ノ批准御覽ニ供シ候此段謹テ
上奏ス

勅令 二十年八月三日内閣總理大臣伯爵伊藤博文外務大臣伯爵井上馨司法大臣伯爵山田顯義副署  
第四十二號  
朕逃亡犯罪人引渡條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

逃亡犯罪人引渡條例

第一條 本條例ニ於テ締約國ト稱スルハ既ニ帝國ト犯罪人引渡條約ヲ締結シ若クハ今後締結スル外國  
ヲ謂フ

引渡犯罪人ト稱スルハ外國ト締結シタル犯罪人引渡條約ニ掲クル犯罪人ヲ謂フ

逃亡犯罪人ト稱スルハ締約國ノ管轄内ニ於テ犯シタル引渡犯罪ニ付告訴發テ受ケ若クハ有罪ノ宣  
告ヲ受ケタル帝國臣民外ノ人ニシテ帝國ノ管轄内ニ逃避シタル者又ハ逃避シタルノ嫌疑若クハ逃避  
セントスルノ嫌疑アル者ヲ謂フ但左ノ場合ニ於テハ帝國臣民ヲ包含ス

一 帝國ト請求國トノ犯罪人引渡條約ニ交互其臣民ノ引渡ヲ爲スヘキ條款アルトキ

二 犯罪人引渡條約ニ交互ノ任意ヲ以テ其臣民ノ引渡請求ニ應スルコトアルヘキ旨ノ條款アリ且請  
求國ニ於テ同様ノ場合ニハ自國ノ臣民ヲ引渡スヘキ旨ヲ申出テタルトキ

第二條 締約國ヨリ逃亡犯罪人ノ引渡請求アリ之カ引渡ノ目的ヲ以テ其手續ヲ爲ストキハ本條例ニ定  
ムル所ノ條款ニ據ルヘキモノトス

第三條 左ノ場合ニ於テハ逃亡犯罪人ヲ引渡スコトヲ得ス

一 引渡ノ請求ニ係ル者ノ所犯政事上ノ犯罪ナルトキ

二 引渡ノ請求ハ實際政事上ノ犯罪ニ付審問シ若クハ處刑セントスルノ目的ニ出テタル旨ヲ本人ニ  
於テ證明シタルトキ

第四條 逃亡犯罪人其引渡請求ニ係ル犯罪外ノ事件ニ付帝國内ニ於テ告訴發テ受ケ又ハ處刑中ナル  
トキハ無罪又ハ刑期滿限若クハ其他ノ事由ニ因リ釋放セラレタル後ニアラサレハ之ヲ引渡スコトヲ  
得ス

第五條 帝國ト外國ト犯罪人引渡條約ヲ締結シタルトキハ逃亡犯罪人ノ犯時其締約以前ニ係ルト雖モ

該締約國ノ請求ニ應シ其引渡ヲ爲スコトアルヘシ

第六條 引渡犯罪ニ付帝國裁判所ニ於テ締約國裁判所ト均シク裁判權ヲ有スト雖モ若シ司法大臣ノ意  
見ニ於テ其審判ヲ便ナラシメンカ爲メ逃亡犯罪人ノ引渡ヲ可トスルトキハ之ヲ引渡スコトアルヘシ

第七條 本條例ニ據リ發シタル總テノ逮捕狀ハ帝國内何レノ地ニ於テモ効力アルモノトス

第八條 一逃亡犯罪人ヲ二國以上ノ締約國ヨリ各其國ニ於テ犯シタル罪ノ爲メ引渡請求ヲ爲シタルト  
キハ最初請求ヲ爲シタル國ニ之ヲ引渡スヘシ但其請求ヲ爲シタル締約國間ニ特別ノ約束若クハ協議  
アル場合ハ此限ニ在ラス

第九條 司法大臣ハ外務大臣ノ請求ニ依リ一名若クハ二名以上ノ上席檢事ニ命シ逃亡犯罪人ヲ假ニ逮  
捕スル爲メ附錄第一號書式ニ依リ假逮捕狀ヲ發セシムルコトヲ得

外務大臣ハ締約國ヨリ相當ノ順序ヲ經由シ書面又ハ電信ヲ以テ逃亡犯罪人ヲ逮捕スル爲メ既ニ逮捕  
狀ヲ發シタルコトノ通知ト其引渡ハ正式ニ依リ請求スヘキ旨ノ保證トニ接シタル後ニ限り本條ノ請  
求ヲ爲スヘシ

第十條 假逮捕狀ニ據リ逃亡犯罪人ヲ逮捕シタル場合ニ於テ二月ヲ過キサル相當ノ期限内ニ其引渡ノ  
請求ヲキトキハ之ヲ釋放スヘシ但此場合ニ於テ逮捕シタル者ヲ釋放スルモ再ヒ之ヲ逮捕シ及引渡ス  
コトヲ妨ケサルモノトス

假逮捕狀ニ據リ逮捕シタル者ノ引渡請求アリタルトキハ更ニ附錄第二號書式ノ逮捕狀ヲ發シ假逮捕  
狀ト交換スヘシ

第十一條 第九條ニ定メタル例外ノ場合ヲ除ク外ハ引渡請求ヲ爲シタル國トノ條約ニ定メタル相當  
ノ順序ヲ經由シ左ノ書類ヲ添ヘ引渡ノ請求アリタル後ニアラサレハ何人ヲモ引渡ノ目的ヲ以テ逮捕  
スルコトヲ得ス

一 告訴發テ受ケタル者ノ場合ニ於テハ其所犯ニ付訴アリタル國ノ相當官吏ニ於テ發シタリト認

ノ得ヘキ逮捕狀ノ公寫及該逮捕狀ヲ發スルノ根據ト爲リタル口供書若クハ陳述書ノ公寫

二 有罪ノ宣告ヲ受ケタル者ノ場合ニ於テハ其宣告ヲ爲シタル裁判所ノ證印アル宣告書ノ寫

第十二條 外務大臣引渡請求書ニ接シ犯罪人引渡條約ノ條款ニ適合シタリト思量スルトキハ該請求書ニ其關係書類ヲ添ヘ之ヲ司法大臣ニ送付スヘシ

司法大臣本條ノ請求ニ接シ妥當ノ事由アル請求ト思量スルトキハ逃亡犯罪人ノ所在又ハ其到着スヘシト認ムル地ノ上席檢事ニ命シ逮捕狀ヲ發セシムヘシ

第十三條 上席檢事前條ニ掲ケタル司法大臣ノ命令ニ接シタルトキハ附錄第二號書式ニ依リ逮捕狀ヲ發スヘシ

第十四條 請求ニ係ル逃亡犯罪人ヲ逮捕シ若クハ假逮捕シタルトキハ其逮捕狀ヲ發シタル上席檢事又ハ之ヲ逮捕シタル地ノ上席檢事ニ引渡スヘシ

上席檢事ハ逃亡犯罪人逮捕ノ願末ヲ直ニ司法大臣ニ具申スヘシ

司法大臣上席檢事ノ具申ニ接シタルトキ引渡請求書アレハ其寫及附屬書類ヲ速ニ該檢事ニ送付スヘシ但被告人ヲ釋放スヘキ命令ヲ發スルトキハ此手續ヲ爲スニ及ハス

第十五條 告訴發テ受ケタル者ノ場合ニ於テハ上席檢事ハ速ニ之ヲ訊問シ其人違ナキコト及引渡請求書ニ附屬セル書類ノ確實公正ナルコトヲ認定スヘシ但上席檢事該書類ノミニテハ證據不充分ナリト認ムルトキハ仍ホ被告人ノ犯罪ニ對スル證據ヲ取ルコトヲ得

有罪ノ宣告ヲ受ケタル者ノ場合ニ於テハ上席檢事ハ速ニ之ヲ訊問シ其人違ナキコト及其引渡ヲ請求シタル締約國ノ相當裁判所ニ於テ宣告ヲ爲シタルノ確實ナルコトヲ認定スヘシ

第十六條 上席檢事被告人ノ訊問ヲ結了シタルトキハ訊問書ニ其處分方ニ關スル意見書ヲ添ヘ之ヲ司法大臣ニ具申スヘシ但上席檢事ハ之ト共ニ引渡請求書寫及附屬書類ヲ返却スヘシ

司法大臣該檢事ノ具申ニ接シタルトキハ附錄第三號書式ニ依リ引渡狀ヲ發スルカ又ハ逮捕シタル者ヲ釋放スヘシ

第十七條 逃亡犯罪人ハ逮捕狀ニ據リ逮捕セラレタル後二月以上留置セララル、コトナカルヘシ

第十八條 司法大臣ハ左ノ場合ニ限り引渡狀ヲ發スルコトヲ得

一 引渡犯罪ニ付告訴發テ受ケタル者ノ場合ニ於テハ若シ其告訴發テ受ケタル罪ヲ帝國内ニ於テ犯シタルモノトセハ帝國ノ法律ニ據リ被告人ヲ審判ニ付スルニ充分ナル犯罪ノ證據アリト認メタルトキ

二 有罪ノ宣告ヲ受ケタル者ノ場合ニ於テハ相當裁判所ニ於テ其宣告ヲ爲シタルニトヲ認メタルトキ

第十九條 關席裁判ニ由リ有罪ノ宣告ヲ受ケタル者ハ其引渡ヲ請求シタル締約國トノ間ニ特別ノ約款アルニ非サレハ本條例ニ於テハ之ヲ告訴發テ受ケタル者ト爲シ有罪ノ宣告ヲ受ケタル者ト認メス

第二十條 逮捕シタル者ヲ釋放シ又ハ其引渡ノ爲メ引渡狀ヲ發シタルトキハ司法大臣ハ引渡請求書及附屬書類ニ其執行シタル手續及其理由ノ略記ヲ添ヘ之ヲ外務大臣ニ返付スヘシ

第二十一條 引渡狀ヲ發シタル後何人ヲモ一月以上留置スルコトヲ得ス但此期限内ニ之ヲ帝國外ニ引取ラサルトキハ請求國相當官吏ニ於テ正當ノ事由ヲ示スニアラサレハ釋放スヘシ

第二十二條 逃亡犯罪人ヲ引渡ストキハ其逮捕ノ際差押ヘタル本人ノ携帶品ハ正當ノ理由アルニアラサレハ其引渡ノ節本人ト共ニ悉ク之ヲ交付スヘシ

第二十三條 司法大臣ハ外務大臣ノ請求ニ依リ一外國ヨリ他ノ外國ニ引渡シタル者ノ帝國内海陸ノ通行ヲ認可スルコトヲ得

本條ノ請求ハ引渡ヲ受クヘキ國ノ政府ヨリ引渡狀ノ公寫ヲ添ヘ相當ノ順序ヲ經由シタル照會書ヲ外務大臣ニ於テ受領シタルトキニ限ル但帝國トノ間ニ特別ノ約款ナキトキハ該照會書ノ外仍ホ請求國ノ政府ニ於テ之ト同一ノ場合即チ第三國ヨリ帝國ニ逃亡犯罪人ヲ引渡シタル場合ニ該請求國内海陸ノ通行ヲ均シク認可スヘキノ保證ヲ爲シタルトキニ限ル



逃亡處分スル爲メ逮捕スヘキコトヲ命スルモノ也

明 治 年 月 日 印	檢事局 上席檢事署名捺印 裁判所書記署名捺印	手 續 家宅ヲ搜索シタル トキハ其事實ヲ記 スヘシ	右ノ通執行候也
明 治 年 月 日 印	明 治 年 月 日 印	明 治 年 月 日 印	明 治 年 月 日 印

式 書 號 三 第

引渡狀 引渡サルヘキ者ノ氏名 年齢本貫住所	逃亡犯罪人引渡條例ニ據リ此引渡狀ヲ發シ 明治、年、月、日附ノ(假逮捕狀)ニ據 リ、國ニ於テ、ノ犯罪ニ付(有罪ノ宣告) ヲ受タル逃亡犯罪人トシテ明治、年、月、 日、日逮捕シタル右、ヲ受取コトヲ相 當ニ命セラレタル、ニ之ヲ引渡スヘキコ トヲ命ス因テ該受取人、ニ於テ右、ヲ 監禁シ、國ノ管轄内ニ送致シ相當官吏ニ 交付スルコトヲ命スルモノ也	明 治 年 月 日 印	
執行ノ 年月日時	執行シタル 場所	受取人ノ 署名	右ノ通執行候也
明 治 年 月 日 印	明 治 年 月 日 印	明 治 年 月 日 印	明 治 年 月 日 印

割印 (此狀ヲ送達シ一葉ヲ受取人ニ渡スヘシ)

(英譯文ヲ此狀ノ裏面ニ記スヘシ)

引渡狀 引渡サルヘキ者ノ氏名 年齢本貫住所	執行ノ 年月日時
明 治 年 月 日 印	明 治 年 月 日 印

逃亡犯罪人引渡條例ニ據リ此引渡狀ヲ發シ 明治、年、月、日附ノ(假逮捕狀)ニ據 リ、國ニ於テ、ノ犯罪ニ付(有罪ノ宣告) ヲ受タル逃亡犯罪人トシテ明治、年、月、 日、日逮捕シタル右、ヲ受取コトヲ相 當ニ命セラレタル、ニ之ヲ引渡スヘキコ トヲ命ス因テ該受取人、ニ於テ右、ヲ 監禁シ、國ノ管轄内ニ送致シ相當官吏ニ 交付スルコトヲ命スルモノ也	執行シタル 場所	受取人ノ 署名	右ノ通執行候也
明 治 年 月 日 印	明 治 年 月 日 印	明 治 年 月 日 印	明 治 年 月 日 印

外務省再申二十年四月七日  
客歲十月十六日付送第六五二號ヲ以テ當省大臣ヨリ閣議ニ呈出相成候逃亡犯罪人引渡條例案ハ茲ニ内閣法制局ニ於テ修正ヲ加ヘラレ候處其後當省大臣ニ於テ該案中再考ヲ要スル廉有之今般別冊ノ通修正相成既ニ司法大臣トノ協議済ニ付客歲中當省大臣ヨリ呈出ノ逃亡犯罪人引渡條例案別冊修正案ト御引換相成候様致度此段及御依頼候也  
法制局議案二十年六月八日  
外務大臣請願犯罪人引渡條例ヲ案スルニ客年米合衆國ト犯罪人引渡ノ條約御批准相成候ニ付彼國政府ノ請求ニ應シ我國内ニ逃避セル逃亡人ヲ逮捕シ之ヲ引渡ニ付テハ其規程ノ必要ナルハ勿論今後他ノ締盟各國政府ト同様ノ條約ヲ締結相成候節モ亦同一ノ規程ヲ要シ候ニ付此際該條例ヲ制定スルハ尤モ必要トス但呈案中文字ノ妥當ナラサルモノ有之ニ付左ノ通修正ノ上公布相成可然ト認定ス

長崎縣へ達 五年正月二十三日

支那上海表へ領事官被差置候ニ付外務省伺別紙寫シノ通被聞届候條此旨相達候也

外務省伺 五年正月十九日

支那上海表へ領事官被差置候ニ付テハ以後御國民同國各港ニ於テ惡事有之御國地開港場ノ内へ護送差添送歸シ候節長崎港ノ俄ハ同所ヨリ程近便宜ノ場所ニモ有之候間何地ノ者ヲ不論都テ同所迄送届其上ノ處置ハ同縣ニテ取計尤送届候迄ノ入費ハ辛未二月二十九日御布告面ニ基キ一時其開港場ニテ立替上海表へ償却及追テ其者管轄ノ府縣ヨリ開港場へ償戻候様致度右ノ趣大藏省へ及打合候處存寄無之旨換撥

支那ニテ犯罪ノ者ハ長崎ニ護送ス  
五年二月十九日委任狀ヲ以テ杖罪以下ノ領事ノ處斷ニ委ス

有之候間其段長崎縣へ御沙汰相成候様仕度此段相伺候也  
指令五年正月二十三日  
伺ノ通相達候事

上海在留領事官ニ委任狀 五年二月十九日

一 杖罪以下及徒罪ノ贖罪ニ換へキ者ハ處斷可致徒以上ノ可實決者ハ犯人ニ假口書相添へ本朝へ可差送事

外務省へ達 五年二月十九日

其省中領事官被置候ニ付テ於外國犯罪ノ者取扱ノ儀左ノ通被定候事

杖罪以下及徒罪ノ贖罪ニ可換者ハ處斷可致徒以上ノ可實決者ハ犯人ニ假口書相添へ可差送事  
但贖罪金ハ追テ相達候迄預リ置へキ事

外務省伺 五年正月二十九日

支那上海へ領事官取設同所ニ領事差置御國民取締方致シ候ニ付テハ支那人及ヒ各國居留商人トノ際ニ起ル訴訟筋裁判又ハ我不逞ノ徒處刑ノ儀輕罪ノモノ迄一々伺ヲ歷候様ニテハ遠隔ノ地往復ニ時日ヲ費シ夫カ爲メ御國民ノ難澁ヲ釀シ各國ニ對シ御軀裁モ不宜候間以後新律綱領ニ照シ所置イタシ度依テ何刑以下ハ領事ノ權ヲ以テ裁判シ何刑以上ハ連累ノ徒迄其件一同伺ノ上可處分尤斬絞流徒ヲ除ク以下ハ御委任相成可然哉ト存候夫是御參考御評議有之度候此段相伺候也  
指令

杖罪以下及徒流罪ノ贖罪ニ可換者ハ處斷可致徒以上ノ可實決者ハ犯人ニ假口書相添へ本朝へ可差送事  
但贖罪金ハ追テ相達候迄預リ置へキ事  
司法省回答 五年二月九日

別紙外務省伺書ヲ以御打合ノ趣致承知候右ハ杖罪以下及徒流罪ノ贖罪ニ可換者ハ都テ御委任相成徒以上ノ可實決者ハ犯人ニ假口書相添本國へ差廻シ候方可然且贖罪金ノ儀モ取繼歲末毎ニ當省へ差出候様致度候此段御回答及ヒ候也  
外務省上申 五年二月十七日

支那上海へ領事官被差置御國民取締方イタシ候ニ付テハ犯罪ノ徒輕重處分ノ儀御委任相伺候處未書ヲ以御沙汰ノ趣致承知候右ハ刑法ニ關シ領事官職掌上ノ輕儀ニ付御沙汰ノ趣御委任狀ニ直シ御下渡有之度此段申進候也

上海在留ノ者贖罪ノ贖金取附ニ換フ

十年一月清國領事朝鮮國管理官ニ民刑裁判ヲ委任ス

伺之通

外務省伺 八年十月十日

上海在留我國犯罪人處罰ノ儀ニ付總領事品川忠道ヨリ別紙ノ通及具狀候ニ付熟考候處初條輕罪者ニ至リテハ都テ贖罪收附ニ換へ候儀ハ現場ノ事情ニ於テ可然相見候條御裁可有之候様致度此段申上候也  
指令 九年二月五日

海駐上品川領事ヨリ外務省へ伺 八年十月十日

一本港渡來御國人犯罪處斷ノ儀ニ付テハ未タ懲役場ハ勿論數人入獄セシムルニ至當ノ設無之ニ付總テ贖金ニ換へ取計候様從前屢次申上置候ヨリ明治七年中ニ懲役場ナキ間ハ入獄或ハ答杖ノ實決ニ換へ候様更ニ御達有之候處固ヨリ海外ノ事故各國船ニ乘組居候御國人等犯罪ノ片入獄セシムルニ當テハ其船本港出船ノ際會ニ後レ其爲メ獄内ニ殘居候様ニテハ決果貯金等所持不致者共而已ニ付一時官金ヲ以テ立換へ長崎縣等へ一々送還致候様ノ煩事ニ及ヒ到底御費用相嵩リ御不都合ニモ可有之依之犯罪可惡ノ處爲或ハ贖罪出來難キ者ニ限リ糞ニ御達面ノ通入獄或ハ答杖ニ處シ其輕罪ノ者ニ到テハ總テ贖罪收附ヲ以テ駐清領事ノ任ニ限リ辦法致候様仕度候

一 今度歸朝ニ付テハ明治五六年間處斷仕候決案罰表并贖金共相添へ此後ノ都合モ可有之ニ付一同呈具候間伺司法省へ御回シ被下書類御取調ノ上不分明ノ處モ有之候モハ逸々同省へ出頭明陳可相辨候一 當方諸縣令參事等へ判事兼任ノ御示令モ相見候處領事へハ更ニ至急ノ名義御示指ニハ不及哉依テ右三條特ニ御問合被下度此段俛テ奉伺候也  
司法省答 九年一月二十三日

清國在留內國人民犯罪處分ノ儀外務省ヨリ伺書添御下問ノ趣承知致候右ハ懲役其外方法御設立迄當分ノ内ハ品川領事見込ノ通リ御裁下有之候テモ當省ニ於テハ異存無之候此段致上申候也  
法制局議案 九年一月三十一日  
別紙外務省伺上海在留犯罪人處分ノ儀ハ止ヲ得サル事情ニ有之司法省ニ於テモ異議無之候ニ付伺ノ通御裁可相成可然哉仰高裁候也

委任狀 十年一月

某國某港在勤領事官

某國某港在勤中日本人民ノ詞訟及彼我人民交涉ノ訴訟并日本人民犯罪處斷ノ儀左ノ通り可心得事  
一 某國某港ニ於テ我國民犯罪ノ者懲役百日已下ハ直ニ本律ニ依リ處分シ百日以上ノ者ハ犯人ニ假口書相添長崎上等裁判所へ送致スヘシ

清國駐在領事并朝鮮國在勤管理官へ民刑裁判ヲ委任ス  
十三年四月七日元山金山領事官裁判規則ヲ定メ十五年六月八日改正ス

十年二月七日第二項ヲ改正ス下ニ載ス

但贖罪金ハ司法省へ送致スヘシ  
一懲役百日以下ノ罪囚ト雖モ若懲役場未設ノ間ハ其地最寄ノ我懲役場又ハ長崎縣懲役場へ托シ懲役セシムルハ其便ニ從フヘシ  
一我國民原告ニテ某國民ニ對スル刑事并民刑附帶ノ訴訟ハ之ヲ受ケ直ニ其被告地方ノ長官へ照會シ裁判ヲ求ムヘシ

十年二月九日第六七項ヲ改正シ同八月二十八日第六項ヲ再改ス下ニ載ス

一前條ノ場合ニ於テ原告ノ損害ヲ受ケタルキハ其償ヲ求ル爲民事ノ訴ハ總テ本人ノ望ニ任スヘシ  
一我國民原告ニテ某國民ニ對スル民事ノ訴訟ニ付原告人其事由ヲ申出ル時ハ別ニ照會文ヲ作り原告人訴狀ト共ニ其被告地方ノ長官ニ移文スヘシ  
一彼我人民交渉ノ民事ヲ除ク外我國民相互ノ詞訟金額百圓以下ハ直ニ之ヲ裁判シ百圓以上ハ長崎裁判所ニ送致スヘシ  
一民事ニ於テ控訴スル者ハ明治八年第九十三號布告ニ照シ直ニ長崎上等裁判所ニ出サシムヘシ  
一民事刑事ニ於テテ上告スル者ハ明治八年第九十三號布告ニ照シ直ニ大審院ニ出サシムヘシ  
一凡民事ニ係ル者ハ金額ノ多少事ノ輕重ニ拘ラス詞訟人ノ情願ニ任セ之ヲ勸解スヘシ  
一勸解ヲ乞フ者ハ訴狀ヲ作ルニ不及直ニ該廳ニ願出其事由ヲ陳述スルヲ得セシムヘシ  
一勸解ハ雙方共必ス本人自ラ出頭セシムヘシ  
但疾病事故等ニテ不得止場合ニ於テハ親族或定メタル雇人ヲシテ代人トナシ出頭セシムルヲ得ヘシ

一凡勸解ハ必シモ定規ニ拘ラサル者トス

明治九年月日

外務卿寺島宗則

外務省同九年十一月二十四日  
今般朝鮮國釜山草藥館へ日本人管理官被差遣候ニ付テハ御國人民訴訟裁判并罪犯處分ノ儀從前清國各港駐留領事へ委任候條例ニ參照シ管理官へ委任可致處兼テ御達ノ旨趣ニ基キ領事へ委任シタルハ唯罪犯處分ノ件ノミニテ自ラ民事ニ關涉ノ意味ヲ附帶シ有之候ヘトモ今般更ニ民事ノ條款ヲ明晰シ別紙ノ通委任致シ猶又清國各港駐留領事へモ從前ノ委任ヲ改正シ管理官同様委任致シ度此段相伺候條至急

委任狀第一項ヲ改正ス

外務省へ達 十年二月七日  
先般朝鮮國在勤管理官并清國各港駐留領事へ委任狀ノ儀伺書第二項ニ某地裁判所ノ懲役場トアルハ其地最寄ノ我懲役場又ハ長崎縣懲役場ト改正可致此旨更ニ相達候事

司法省同十年一月二十三日  
外務省同朝鮮國在勤管理官并清國駐留領事へ委任狀ノ儀ニ付過ル八日付ヲ以御達ノ趣致承知候然ルニ右委任狀第二條中ニ某地裁判所ノ懲役場へ托シ懲役セシムルハ其便ニ從フ可シト有之候處懲役場ノ儀ハ總テ地方官ノ所轄ニシテ裁判所ノ管スル所ニ無之右ハ如何相心得可然哉至急何分ノ仰御指揮候也  
指令十年二月七日  
伺ノ趣別紙ノ通外務省へ相達候條此旨可相心得事  
法制局議案十年二月一日  
別紙司法省同朝鮮國在勤管理官并清國各港駐留領事へ委任狀ノ儀ニ付正誤ノ儀左ノ通御指令相成可然哉諸案取調仰高裁候也

委任狀第六七項ヲ改正ス

外務省へ達 十年二月九日  
朝鮮國在勤管理官并清國各港駐留領事へ委任狀ノ儀伺へ本年一月八日及指令置候處右伺書中第六項

法制局議案十年二月六日  
先般外務省同朝鮮國在勤管理官云々ノ儀ニ付御指令相成候處猶熟考仕候ニ付右伺書中第六項ニ百圓以上ハ上等裁判所ニ送致スヘシト有之候ヘ右ハ民事ノ詞訟ニシテ初審ヨリ上等裁判所へ差出スルハ控訴ノ道ニ差支候ニ付長崎裁判所ト改正イタシ可然且第七項ニ直ニ上等裁判所ニ出サシムヘシト有之候

十年八月二十八日第六項ヲ改正ス

委任狀第六項改正ス

委任狀第六項改正 十年八月二十八日

一 某國民原告ニテ我國民ニ對スル民事ノ訴訟及ヒ我國民相互民事ノ訴訟ハ金額ノ多少ニ拘ハラズ直ニ之ヲ裁判ス可シ

外務省 十年八月一日

清國各港駐留領事并朝鮮國釜山駐留管理官へ御國人民訴訟裁判并罪犯處分ノ權限委任狀ノ儀昨九年甲第四百四十六號ヲ以何出本年一月八日御指令ノ通り及委任置候處右條款中我國民相互ノ訴訟金額百圓以下ハ直ニ之ヲ裁判シ百圓已上ハ上等裁判所ニ送致スヘシト有之候處右様金額ノ程度相與リ訴訟受理不受理ノ別有之候テハ海外遠距ノ地裁判ノ際差支不少趣領事ヨリ申出候向有之就テハ別紙ノ通改正委任及ヒ度此段相候條至急御指令有之度尤御允裁ノ上ハ其旨司法省へ御達有之度候也

指令十年八月二十八日

同之趣開屆候條付箋朱書ノ通改正可致事

司法省 十年八月十四日

別紙外務省 同清國駐留領事并朝鮮國駐留管理官へ裁判權限委任ノ儀ニ付意見可申出御照會ノ旨拜承仕候右改正案ニ彼我人民交渉ノ民事云々直ニ裁判スト之レアルハ彼國民原告トナル時ノ事ヲ指スモノナラン然レハ別段異議無之候此段上答候也

法制局 議案十年八月

別紙外務省 同清國駐留領事并朝鮮國駐留管理官へ裁判權限ヲ付與スルノ儀審案候處勢ヒ不得止儀ニ付成案付箋ノ通修正相加へ御開屆相成可然哉司法省へ御達案共取調仰高裁候也

在朝鮮國領事館民刑裁判取扱規則 十三年四月七日

在朝鮮國元山津

領事館

在朝鮮國釜山浦

領事館

朝鮮國元山津 在勤中日本人民ノ詞訟及彼我人民交渉ノ訴訟并日本人民犯罪處斷ノ儀左ノ通可心得事  
一 朝鮮國釜山浦ニ於テ我國民犯罪ノ者懲役百日以下ハ直ニ本律ニ依リ處分シ百日已上ノ者ハ犯囚ニ假

在朝鮮國領事館民刑裁判取扱規則

十五年六月八日改正ス

口書相添長崎上等裁判所へ送致スヘシ

但贖罪金ハ司法省へ送致スヘシ

一 懲役百日以下ノ罪囚ト雖モ若シ懲役場未設ノ間ハ其地最寄ノ我懲役場又ハ長崎縣懲役場ニ托シ懲役セシメ或ハ其地相應ノ驅役ニ處スルハ時宜ニ從フヘシ

一 我國民原告ニテ朝鮮國民ニ對スル刑事并民刑附帶ノ訴訟ハ之ヲ受ケ直ニ其被告地方ノ長官へ照會スヘシ

一 前條ノ場合ニ於テ原告ノ損害ヲ受タルハ其償ヲ求ル爲メ民事ノ訴ハ總テ本人ノ望ニ任スヘシ

一 我國民原告ニテ朝鮮國民ニ對スル民事ノ訴訟ニ付原告人其事由ヲ申出ル時ハ照會文ヲ添ヘテ原告人訴狀ヲ其被告地方ノ長官ニ差回スヘシ

一 朝鮮國民原告ニテ我國民ニ對スル民事ノ訴訟及我國民相互民事ノ訴訟ハ金額ノ多少ニ拘ハラズ直ニ之ヲ裁判スヘシ

一 民事ニ於テ控訴スル者ハ明治八年第九十三號布告ニ照シ直ニ長崎上等裁判所ニ出サシムヘシ

一 民事刑事ニ於テ上告スル者ハ明治八年第九十三號布告ニ照シ直ニ大審院ニ出サシムヘシ

一 凡民事ニ係ル者ハ金額ノ多少事ノ輕重ニ拘ラス詞訟人ノ情願ニ任セ之ヲ勸解スヘシ

一 勸解ヲ乞フ者ハ訴狀ヲ作ルニ不及直ニ該廳ニ願出其事由ヲ陳述スルヲ得セシムヘシ

一 勸解ハ雙方トモ必ス本人自ラ出頭セシムヘシ

但疾病事故等ニテ不得止場合ニ於テハ親族或ハ定メタル雇人ヲシテ代人トナシ出頭セシムルヲ得ヘシ

一 凡勸解ハ必シモ定規ニ拘ラサル者トス

明治十三年四月七日

外務卿 井上馨

外務省 上申十三年五月五日

朝鮮國在留我國民人民ニ關スル民刑裁判取扱ノ規則ハ管理官創設以來追々被違候條目モ有之其後何ヲ經テ改正増補モ不少依テ現行ノ條目ヲ集輯シ更ニ領事館へ別紙ノ通相達置候條此段上申候也



指令十三年六月二日

上申ノ趣聞屆候條附箋ノ通改正可致事

外務部議案十三年五月十日

別紙外務省上申朝鮮國在留領事官ハ民刑裁判取扱規則違方ノ儀右ハ明治十年中該國管理官并清國各港領事等へ御委任相成候規程ニ照準シ抵觸ノ廉モ不相見候條第二項附箋ノ通修正相加へ御聽許相成可然哉法制部協議ノ上左案取調仰高裁候也

外務省ヨリ在支那朝鮮國領事へ達 十五年六月八日

清國及朝鮮國在留領事兼判事裁判管轄權限等訓示ノ儀此程漸ク別紙ノ通り經伺議訂候間即チ差進候條其旨相心得其地裁判事務可被取扱候  
右申進候也  
(別紙)

清國及朝鮮國各港駐在領事兼判事

新定刑法治罪法御施行ニ付其地裁判事務左ノ通相心得取扱フヘシ

第一條 清國并朝鮮國各港ニ在留スル日本國人相互ノ民事ノ訴訟及ヒ清國并朝鮮國其他外國人ヨリ日本人ニ對スル民事ノ訴訟及ヒ日本國人ノ輕罪違警罪ニ係ル公訴及ヒ日本國人ノ總テノ犯罪ニ係ル私訴ハ當分ノ内其港領事館ニ於テ治安裁判所違警罪裁判所始審裁判所輕罪裁判所ノ權限ヲ以テ之レヲ裁判スヘシ

但治罪ノ手續ハ便宜取計ヒ治安裁判所ノ權限ニ屬スル訴件ニ付テハ終審ノ裁判ヲ爲スヘシ  
第二條 民事ノ訴訟及ヒ私訴ニ對スル控訴ハ長崎控訴裁判所重罪ニ係ル公訴ハ長崎重罪裁判所ノ管轄スル所ト爲ス

第三條 我國人相互ノ民事及ヒ清國并朝鮮國其他外國人ヨリ我國人ニ對スル民事ノ訴訟及ヒ我國人犯罪ニ係ル私訴ハ領事館ニ於テ明治十四年第八十三號布告及ヒ治罪法ニ從ヒ之ヲ裁判スヘシ  
第四條 治罪及ヒ刑ノ執行ニ關スル手續方法ハ治罪法并ニ監獄則ニ從フヘシト雖モ實際準備ノ都合ニ因テハ便宜取計ヒ禁錮禁獄場未設ノ場所ハ其最近地ノ禁錮禁獄場亦ハ長崎縣所管ノ監獄ニ託シ之ヲ

清國領事兼判事ノ裁判事務取扱方

二十一年十月勅令第七十一號ヲ以テ清國并朝鮮國駐在領事裁判規則ヲ定ム

十八年八月外務省訓令ヲ以テ第二條ヲ更正ス

十四年第八十三號布告ハ治安及給養刑所ノ權限ナリ官廳門官制司法省ノ部ニ屬ス

執行セシムルコトヲ得

第五條 徵收ノ罰金料及ヒ沒收ノ物品ハ司法省ニ納完スヘシ

第六條 我國人ヨリ清國并朝鮮國其他外國人ニ對スル刑事ノ告訴告發ハ領事館ニ於テ之ヲ受ケ直ニ其被告人所在地ノ地方官若クハ其領事ニ照會シ審判ヲ求ムヘシ

第七條 我國人ヨリ清國并朝鮮國其他外國人ニ對スル民事ノ訴訟及ヒ私訴ハ領事館ニ於テ之ヲ受ケ照會文ヲ作り其訴狀ト共ニ其被告人所在地ノ地方官若クハ其領事ニ送付シ審判ヲ求ムヘシ

第八條 我國人ヨリ清國并朝鮮國其他外國人ニ對スル民事ノ訴訟及ヒ私訴ニ付裁判アリタルキハ領事館ヨリ速ニ原告人ニ送付スヘシ

第九條 民事ノ控訴上告ヲ爲ス者ハ明治十年第二十九號同十五年第二十一號布告ノ手續ニ從ハシメ刑事ノ上告及ヒ私訴ノ控訴上告ヲ爲ス者ハ治罪法ニ從ハシムヘシ

但内外國人ニ交渉スルモノハ必スシモ本人若クハ代理人ノ出廷ヲ要セス書面ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第十條 郵便ヲ以テ控訴若クハ上告狀ヲ差出シ控訴裁判所亦ハ大審院ニ於テ之ヲ受理セシトキハ領事館ニ移牒シテ被告人ノ答辯書ヲ差出サシメ其判決文モ亦領事館ヲ經由シテ原告人及ヒ被告人ニ下付スヘシ

第十一條 控訴裁判所又ハ大審院ニ於テ訴狀答書ノ外審問スルコトヲ要スルトキハ其旨ヲ領事館ニ照會スヘキニ付領事館ニ於テハ速ニ審問ノ上其書類ヲ送致シ時宜ニ因リ原告人被告人ヲ出廷セシムヘシ

第十二條 凡ソ民事ニ係ル事件ハ詞訟人ノ請願ニ因リ之ヲ勸解スヘシ

第十三條 勸解ヲ乞フ者ハ訴狀ヲ作ルニ及ハス直ニ其廳ニ願出テ其事由ヲ陳述スルヲ得セシムヘシ

第十四條 勸解ハ雙方共必ス本人自ラ出頭セシムヘシ

但疾病事故等ニテ不得止場合ニ於テハ親族或ハ雇人ヲシテ代人トナシ出頭スルヲ得セシムヘシ

外務卿 井 上 馨

十八年八月外務省訓令ヲ以テ第九條ヲ改正ス  
十年第十九號十五年第二十一號布告ハ控訴上告手續ヲリ訴訟門ニ屬ス

明治十五年六月八日

司法卿大木喬任

外務司法兩省上申十五年四月二十四日  
 清國并朝鮮國各港ニ在留シテ裁判事務ヲ執行スル我領事ハ判事若クハ判事補ヲ兼任セシメ且裁判訓令改正等ノ儀ニ付客年十二月二十七日附ヲ以上申候處本年一月二十八日御開屆ノ旨御裁令相成依テ其權限等取調候處從前刑事ハ懲役百日以下ヲ專決シ民事ハ一切ノ詞訟ヲ審判セシメ其刑事懲役百日以上并民事ノ控訴ハ長崎上等裁判所管轄ニ屬シ候然ルニ今般新定刑法治罪法實施ニ付テハ始審并輕罪裁判所及ヒ治安并違警罪裁判所ノ權限ヲ以テ裁判セシメ其民事ノ控訴并重罪ノ裁判ハ長崎控訴裁判所ノ管轄トナシ而シテ右各國ニ於テハ或ハ公廷及監獄ノ如キ未タ準備行届カサル向モ有之ニ付治罪ノ手續ニ於テ適宜取扱ハシメ亦彼國人ニ在テハ未タ我國ノ訴訟規程等ヲ詳知セサルノミナラス其國ノ舊習ニ依テ容易ニ外國へ出ツル能ハサル實況モ有之趣相聞候ニ付當分ノ内彼國人ニ交渉スル民事ノ控訴上告ハ該訴狀ヲ郵便ニ付シ遞送スルコトヲ許シ控訴裁判所大審院ニ於テ其訴狀ヲ受理セシトキハ領事廳ニ移文シテ被告人ノ答辯書ヲ出サシメ其判文モ亦領事廳ヲ經由シテ原告人ニ下付スルノ便ヲ得セシメ候様被相定度然ル上ハ別紙箇條ニ照據シ裁判事務上相當ノ訓令ヲ付與可致ト存候此段相伺候間至急御裁令ヲ仰キ候也  
 指令十五年五月二十四日

一 清國并朝鮮國各港ニ在留スル日本國人相互ノ民事ノ訴訟及ヒ清國并朝鮮國人ヨリ日本國人ニ對スル民事ノ訴訟及ヒ日本國人ノ輕罪違警罪ニ係ル公訴及ヒ日本國人ノ總テノ犯罪ニ係ル私訴ハ當分ノ内其港領事館ニ於テ治安裁判所送警罪裁判所始審裁判所輕罪裁判所ノ權限ヲ以テ之ヲ裁判ス  
 一 但治罪ノ手續ハ便宜取計ヒ治安裁判所ノ權限ニ屬スル事件ニ付テハ終審ノ裁判ヲ爲ス  
 一 日本國人ヨリ清國并朝鮮國人ニ對スル民事ノ訴訟及ヒ私訴ハ領事館ニ申立テ處分ヲ求ムヘシト爲ス  
 一 民事ノ訴訟及ヒ私訴ニ對スル控訴ハ長崎控訴裁判所重罪ニ係ル公訴ハ長崎重罪裁判所ノ管轄スル所ト爲ス  
 一 民事ノ訴訟及ヒ私訴ニ對スル控訴及ヒ民事刑事ノ上告ハ各其本法ニ從フ  
 一 但内外國人ニ交渉スルモノハ必シモ本人若クハ代理人ノ出廷ヲ要セス書面ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得參事院上申十五年五月二十日  
 別紙外務司法兩省同清國及朝鮮國各港在留領事兼判事裁判管轄權限等ノ件審査スル處左ノ如シ  
 一 上申ノ要點ハ清國及朝鮮國在留我國人ニ關スル民事訴訟ノ始審及ヒ刑事輕罪以下該領事館ニ於テ裁判シ民事控訴并刑事重罪ハ長崎控訴裁判所ノ管轄ニ屬シ而シテ彼我人民交涉事件ノ控訴上告ハ郵便ヲ以テ之ヲ爲サシメントスルニ在リ右ハ從前ノ成規上已ニ民事ヲ始審シ刑事懲役百元以下裁判セシメタル儀ニ候得ハ畢竟今回輕罪以下ヲ委任スルト郵便ヲ以テ控訴上告スルノ便ヲ得セシムルノ取捨ニ過キスシテ別段不都合アルヲ見ス依テ允裁相成可然ト視認ス

右ニ由リ指令案左ノ通ニテ可然哉上申候也

外務省ヨリ在支那朝鮮國領事へ通牒 十五年九月二十日

其港司法警察官職權ノ儀ニ付長崎控訴裁判所檢察長代理ヨリ司法卿へ伺出候趣ニ對シ及内訓候別紙同卿ヨリ心得ノ爲差越候ニ付此段御心得迄申進候也

(別紙)  
 朝鮮國各港駐留領事兼判事ニ屬スル司法警察官監督ノ儀ニ付長崎控訴裁判所檢察長代理ヨリ別紙ノ通申出候ニ付朱書ノ如ク及内訓置候條御心得ノ爲メ此段及御通知置候也  
 明治十五年七月二十八日  
 外務卿井上馨殿  
 司法卿大木喬任

電報  
 朝鮮各港駐在ノ領事兼判事ニ屬スル司法警察官ハ當職ニ於テ監督ノ權アルハ勿論ト心得可キヤ電信ニテ内訓ヲ仰ク  
 長崎控訴裁判所檢察長  
 河野通倫代理  
 松山 檢事

七月二十四日  
 大木司法卿  
 長崎控訴裁判所檢察長代理  
 檢事 松山 彪

本月二十四日電信朝鮮國各港在留領事ニ屬スル司法警察官ヲ監督スルハ見込ノ通猶清國ノ儀モ同様心得ヘシ此旨内訓ニ及フ  
 明治十五年七月二十八日  
 司法卿大木喬任

外務省ヨリ在仁川副領事杉村濬へ通牒 十六年二月九日  
 貴官判事補兼任四等警部佐藤正吉檢事補兼任ノ示令書及其館雇石山登本省御用掛申付裁判所書記心得ノ示令等都合五通差進候間夫々御交付例規ノ受書御差越可有之候

清國領事裁判所ニ關スル司法警察官ハ長崎控訴裁判所檢察長之ヲ監督ス

仁川領事裁判所令  
 二十一年十月勅令第七十一號ヲ以テ清國并朝鮮國駐在領事裁判規則ヲ定ム

右ニ付裁判訓令一通御交付ニ及候御查收可被成候  
外務省訓令 十六年二月九日司法卿連署

清國及朝鮮國各港駐在領事兼判事

新定刑法治罪法御施行ニ付其地裁判事務左ノ通相心得取扱ヘシ

第一條 清國并朝鮮國各港ニ在留スル日本人相互ノ民事ノ訴訟及ヒ清國并朝鮮國人其他外國人ニ對スル民事ノ訴訟及ヒ日本人ノ輕罪違警罪ニ係ル公訴及ヒ日本人ノ總テノ犯罪ニ係ル私訴ハ當分ノ內其港領事館ニ於テ治安裁判所違警罪裁判所始審裁判所輕罪裁判所ノ權限ヲ以テ之レテ裁判スヘシ以下ノ文字ハ上ニ載スル十五年六月八日清國朝鮮國へ訓令同文ナレハ茲ニ略ス

漢城領事館訓令

二十一年十月勅令第七十一號ヲ以テ清國并朝鮮國駐在領事裁判規則ヲ定ム

外務省ヨリ漢城領事へ通牒 十七年十一月二十一日

今般其館設置相成併セテ裁判事務被爲取扱候ニ付別冊裁判訓令差進候條御領收可被成候

右申進候也

外務省裁判訓令 十七年十一月二十四日司法卿連署

清國及朝鮮各港各開市場駐在領事兼判事

新定刑法治罪法御施行ニ付其地裁判事務左ノ通相心得取扱ヘシ

第一條 清國并朝鮮國各港及各開市場ニ在留スル日本人相互ノ民事訴訟及ヒ清國并朝鮮國人其他外國人ニ對スル民事ノ訴訟及ヒ日本人ノ輕罪違警罪ニ係ル公訴及ヒ日本人ノ總テノ犯罪ニ係ル私訴ハ當分ノ內其地領事館ニ於テ治安裁判所違警罪裁判所始審裁判所輕罪裁判所ノ權限ヲ以テ之レテ裁判スヘシ 仁川領事館往信ニ附屬スル訓令書ト同文ナレハ茲ニ略ス

外務省訓令 十八年八月司法卿連署

在清國上海同天津在朝鮮國釜山同元山同仁川領事兼判事

本年一月第二號布告ニヨリ明治十五年六月(仁川ハ明治十六年二月)相達候裁判訓令左ノ通更正候條此旨相達候事

清國朝鮮國在留領事兼判事裁判規則中改正

十八年一月第二號布告ハ輕罪ニ係ル控訴ノ規則ナリ前ニ載ス  
二十一年十月勅令第七十一號ヲ以テ清國并朝鮮國駐在領事裁判規則ヲ定ム

第二條 民事ノ訴訟及ヒ公訴私訴ニ對スル控訴ハ長崎控訴裁判所重罪ニ係ル公訴ハ長崎重罪裁判所ノ管轄スル所ト爲ス

第九條 民事ノ控訴上告ヲ爲ス者ハ明治十年二月第十九號同十五年第二十一號布告ノ手續ニ從ハシメ公訴私訴ノ控訴上告ヲ爲ス者ハ治罪法及ヒ本年一月第二號布告ノ手續ニ從ハシムヘシ  
但内外國人ニ交渉スルモノハ必シモ本人若クハ代理人ノ出廷ヲ要セス書面ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

外務省ヨリ司法省へ照會

清國朝鮮國各口領事兼判事ニ附與セシ裁判訓令更正ノ儀別紙ノ通相達中度御異見無之候ハ、御關印ノ上御還付有之度此段及御照會候也

外務省訓令 十八年八月二十九日司法卿連署

清國廣州汕頭瓊州三口兼轄

領事兼判事

清國廣州汕頭瓊州ニ在留スル日本人民ノ詞訟及彼我人民交渉ノ訴訟并日本人民犯罪處斷ノ儀左ノ通可心得事

第一條 清國汕頭瓊州廣東ニ在留スル日本人相互ノ民事ノ訴訟及ヒ清國人其他外國人ヨリ日本人ニ對スル民事ノ訴訟及ヒ日本人ノ輕罪違警罪ニ係ル公訴及ヒ日本人ノ總テノ犯罪ニ係ル私訴ハ當分ノ內其領事館ニ於テ治安裁判所違警罪裁判所始審裁判所輕罪裁判所ノ權限ヲ以テ之ヲ裁判ス可シ但治罪ノ手續ハ便宜取計ヒ治安裁判所ノ權限ニ屬スル事件ニ付テハ終審ノ裁判ヲ爲スヘシ

第二條 民事ノ訴訟及ヒ公訴私訴ニ對スル控訴ハ長崎控訴裁判所重罪ニ係ル公訴ハ長崎重罪裁判所ノ管轄スル所ト爲ス

第三條 我國人相互ノ民事及ヒ清國人其他外國人ヨリ我國人ニ對スル民事ノ訴訟及ヒ我國人ノ犯罪ニ係ル私訴ハ領事館ニ於テ明治十四年第八十三號布告及ヒ治罪法ニ從ヒ之ヲ裁判ス可シ

第四條 治罪及刑ノ執行ニ關スル手續方法ハ治罪法并監獄則ニ從フ可シト雖實際準備ノ都合ニ因テハ

便宜取計ニ禁錮禁獄場未設ノ場所ハ其最近地ノ禁錮禁獄場或ハ長崎縣所管ノ監獄ニ託シ之ヲ執行セシムルコトヲ得

第五條 徵收ノ罰金科料及ヒ沒收ノ物品ハ司法省ニ完納ス可シ

第六條 我國人ヨリ清國人其他外國人ニ對スル刑事ノ告訴發ハ領事館ニ於テ之ヲ受ケ直チニ其被告人所在地ノ地方官若クハ其領事ニ照會シ審判ヲ求ムヘシ

第七條 我國人ヨリ清國人其他外國人ニ對スル民事ノ訴訟及ヒ私訴ハ領事館ニ於テ之ヲ受ケ照會文ヲ作リ其訴狀ト共ニ其被告人所在地ノ地方官若クハ其領事ニ送付シ審判ヲ求ムヘシ

第八條 我國人ヨリ清國人其他外國人ニ對スル民事ノ訴訟及ヒ私訴ニ付裁判アリタルトキハ領事館ヨリ速ニ原告人ニ送付スヘシ

第九條 民事ノ控訴上告ヲ爲ス者ハ明治十年二月第十九號同十五年第二十一號布告ノ手續ニ從ハシメ公訴私訴ノ控訴上告ヲ爲ス者ハ治罪法及ヒ本年一月第二號布告ニ從ハシムヘシ

但内外國人ニ交渉スルモノハ必スシモ本人若クハ代理人ノ出廷ヲ要セス書面ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第十條 郵便ヲ以テ控訴若クハ上告狀ヲ差出シ控訴裁判所亦ハ大審院ニ於テ之ヲ受理セシトキハ領事館ニ移牒シテ被告人ノ答辯書ヲ差出サシメ其判決文モ亦領事館ヲ經由シテ原告人及ヒ被告人ニ下付スヘシ

第十一條 控訴裁判所亦ハ大審院ニ於テ訴狀答書ノ外審問スルコトヲ要スルトキハ其旨ヲ領事館ニ照會スヘキニ付キ領事館ニ於テハ速ニ審問ノ上其書類ヲ送致シ時宜ニ因リ原告人被告人ヲシテ出廷セシムヘシ

第十二條 凡民事ニ係ル事件ハ詞訟人ノ請願ニ因リ之ヲ勸解スヘシ

第十三條 勸解ヲ乞フ者ハ訴狀ヲ作ルニ及ハス直ニ其願ニ願出テ其事由ヲ陳述スルヲ得セシムヘシ

第十四條 勸解ハ雙方共ニ必ス本人自ラ出頭セシムヘシ  
但疾病事故等ニテ不得已場合ニ於テハ親族或ハ雇人ヲシテ代人トナシ出頭スルヲ得セシムヘシ

外務省ヨリ司法省ヘ照會

清國廣州汕頭瓊州三口兼轄領事兼判事ニノ裁判訓令先規ニ依リ其内第二條第九條ニ刑事控訴ノ文ヲ挿入シ淨書差進候御調印之上御返附相成度此段及御照會候也

追而領事赴任期日切迫候間至急御返付有之度此段申添候也

司法省ヨリ外務省ヘ回答十八年八月二十二日

清國廣州汕頭瓊州三口兼轄領事兼判事ヘ附與ス可キ別冊裁判訓令書相添御照會ノ趣了承候因テ該書捺印ノ上差進候條可然御取計有之度此段及御回答候也

追テ本件ハ大審院以下裁判所ヘ達方ノ都合モ有之候ニ付本文訓令書發達ノ日限御報道相成度候也

外務省ヨリ司法省ヘ回答

本月二十二日付第四〇九九號ヲ以テ清國廣州汕頭瓊州三口兼轄領事兼判事ヘ附與ス可キ裁判訓令書御捺印ノ上御返附御成致落手候即右訓令書ハ本月二十九日付ヲ以テ相達可中此段及御回答候也

外務省訓令 十八年九月十五日司法卿連署

朝鮮國京城駐在領事兼判事

朝鮮國京城ニ在留スル日本人民ノ詞訟及彼我人民交渉ノ訴訟并日本人民犯罪處斷ノ儀左ノ通可心得事

第一條 朝鮮國京城ニ在留スル日本國人相互ノ民事ノ訴訟及ヒ朝鮮國人其他外國人ヨリ日本人ニ對スル民事ノ訴訟及ヒ日本國人ノ輕罪違警罪ニ係ル公訴及ヒ日本國人ノ總テノ犯罪ニ係ル私訴ハ當分ノ内其領事館ニ於テ治安裁判所違警罪裁判所始審裁判所輕罪裁判所ノ權限ヲ以テ之ヲ裁判ス可シ

但治罪ノ手續ハ便宜取計ニ治安裁判所ノ權限ニ屬スル訴件ニ付テハ終審ノ裁判ヲ爲スヘシ

第二條 民事ノ訴訟及ヒ公訴私訴ニ對スル控訴ハ長崎控訴裁判所重罪ニ係ル公訴ハ長崎重罪裁判所ノ管轄スル所ト爲ス

第三條 我國人相互ノ民事及ヒ朝鮮國人其他外國人ヨリ我國人ニ對スル民事ノ訴訟及ヒ我國人ノ犯罪ニ係ル私訴ハ領事館ニ於テ明治十四年第八十三號布告及ヒ治罪法ニ從ヒ之ヲ裁判ス可シ

第四條 治罪及刑ノ執行ニ關スル手續方法ハ治罪法并監獄則ニ從フ可シト雖實際準備ノ都合ニ因テハ便宜取計ニ禁錮禁獄場未設ノ場所ハ其最近地ノ禁錮禁獄場又ハ長崎縣所管ノ監獄ニ託シ之ヲ施行セ

二十一年十月勅令第七十一號ヲ以テ清國非朝鮮國駐在領事裁判規則ヲ定ム

シムルコトヲ得

第五條 徵收ノ罰金材料及ヒ沒收ノ物品ハ司法省ニ完納ス可シ

第六條 我國人ヨリ朝鮮國人其他外國人ニ對スル刑事ノ告訴告發ハ領事館ニ於テ之ヲ受ケ直チニ其被告  
人所在地ノ地方官若クハ其領事ニ照會シ審判ヲ求ムヘシ

第七條 我國人ヨリ朝鮮國人其他外國人ニ對スル民事ノ訴訟及ヒ私訴ハ領事館ニ於テ之ヲ受ケ照會文  
ヲ作リ其訴狀ト共ニ其被告人所在地ノ地方官若クハ其領事ニ送付シ審判ヲ求ムヘシ

第八條 我國人ヨリ朝鮮國人其他外國人ニ對スル民事ノ訴訟及ヒ私訴ニ付裁判アリタルキハ領事館ヨ  
リ速ニ其判決文ヲ原告人ニ送付スヘシ

第九條 民事ノ控訴上告ヲ爲ス者ハ明治十年二月十九號同十五年第二十一號布告ノ手續ニ從ハシメ公  
訴私訴ノ控訴上告ヲ爲ス者ハ治罪法及ヒ本年一月第二號布告ニ從ハシムヘシ

但内外國人ニ交渉スルモノハ必スシモ本人若クハ代理人ノ出廷ヲ要セス書面ヲ以テ之ヲ爲スコト  
ヲ得

第十條 郵便ヲ以テ控訴若クハ上告狀ヲ差出シ控訴裁判所又ハ大審院ニ於テ之ヲ受理セシキハ領事館  
ニ移牒シテ被告人ノ答辯書ヲ差出サシメ其判決文モ亦領事館ヲ經由シテ原告人及ヒ被告人ニ下付ス  
ヘシ

第十一條 控訴裁判所又ハ大審院ニ於テ訴狀答書ノ外審問スルコトヲ要スルキハ其旨ヲ領事館ニ照會  
スヘキニ付領事館ニ於テハ速ニ審問ノ上其書類ヲ送致シ時宜ニ因リ原告人被告人ヲシテ出廷セシム  
シヘ

第十二條 凡民事ニ係ル事件ハ詞訟人ノ請願ニ因リ之ヲ勸解スヘシ

第十三條 勸解ヲ乞フ者ハ訴狀ヲ作ルニ及ハス直ニ其廳ニ願出テ其事由ヲ陳述スルヲ得セシムヘシ

第十四條 勸解ハ雙方共必ス本人自ラ出頭セシムヘシ

但疾病事故等ニテ不得止場合ニ於テハ親族或ハ雇人ヲシテ代人トナシ出頭スルヲ得セシムヘシ

外務省ヨリ司法省へ照會十八年九月十四日

朝鮮國京城駐劄領事兼判事へ附與致候裁判訓令ノ儀ハ昨年同國紛擾ノ際紛失于今發見不致候旨今回同  
領事館事務代理兼判事補結城顯彦ヨリ申出候間今般更ニ附與致度前例ニ從ヒ別冊淨書差進候間御捺印  
ノ上御返附相成度此段申進候也

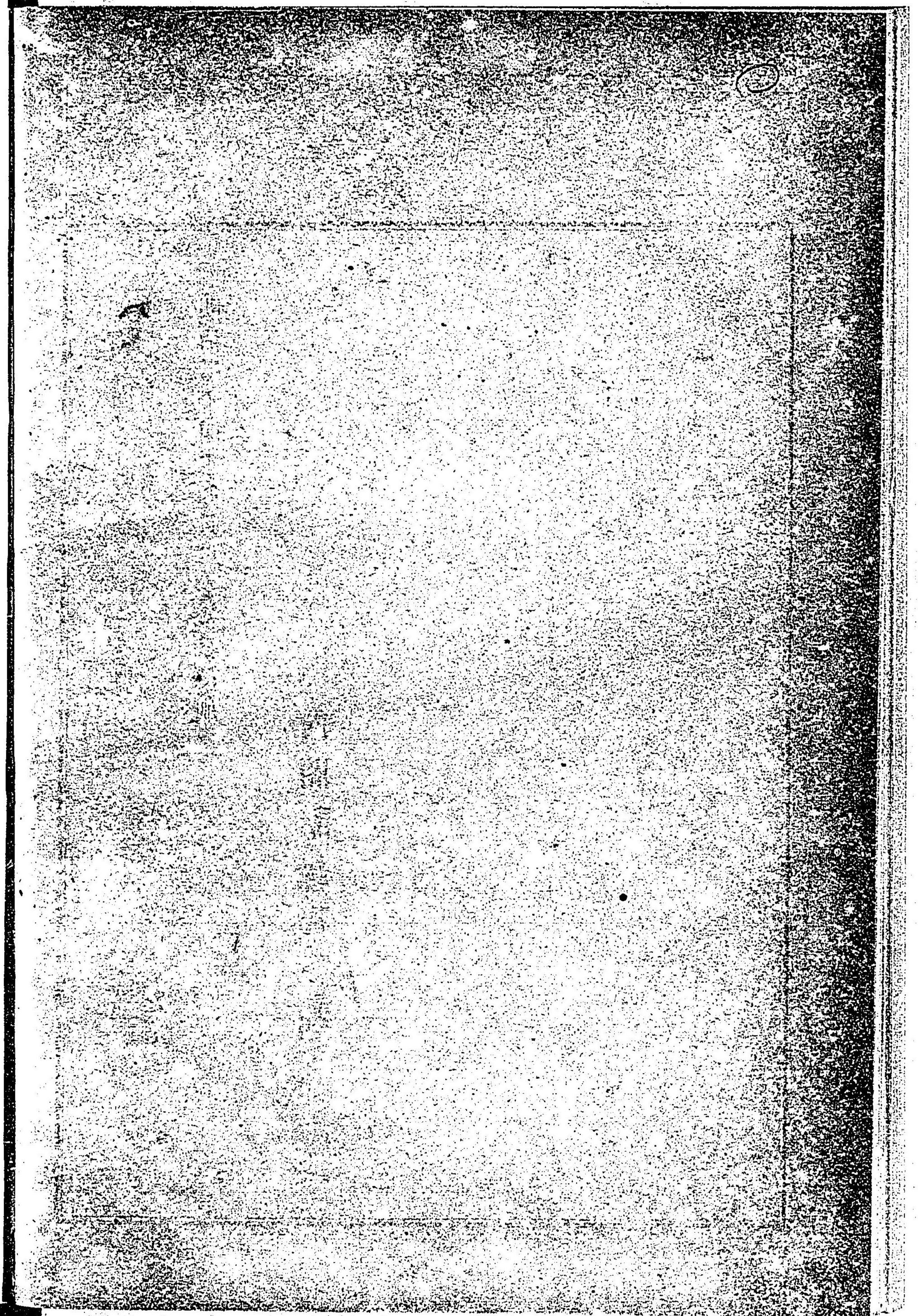
司法省ヨリ外務省へ回答十八年九月十五日

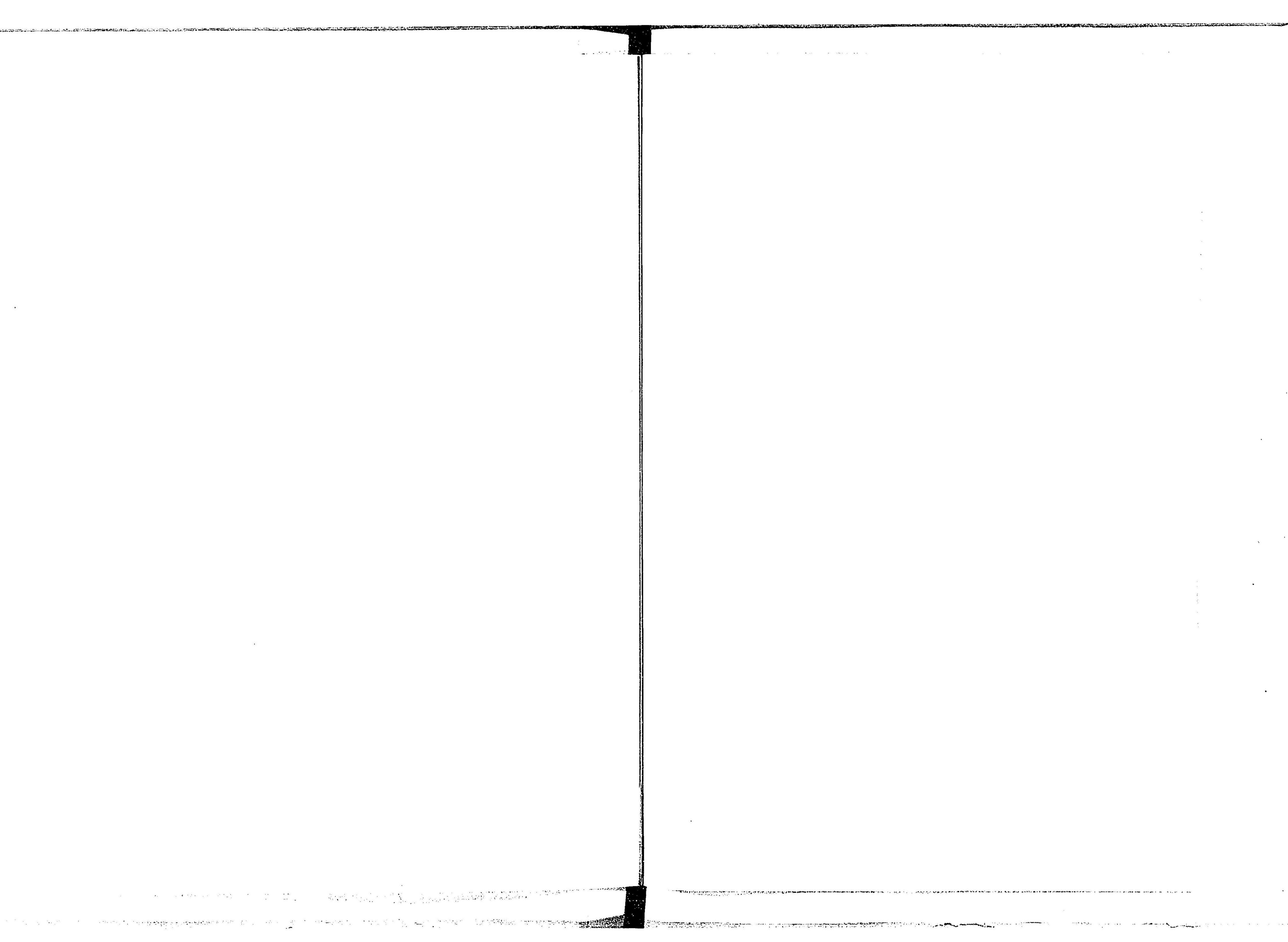
朝鮮國京城駐劄領事兼判事へ附與相成候裁判訓令書ハ昨年同國紛擾ノ際紛失于今發見セラルヲ以  
テ今般更ニ附與可相成訓令書相副本日御照會ノ趣了承候因テ別冊捺印ノ上差進候也

6/6/35

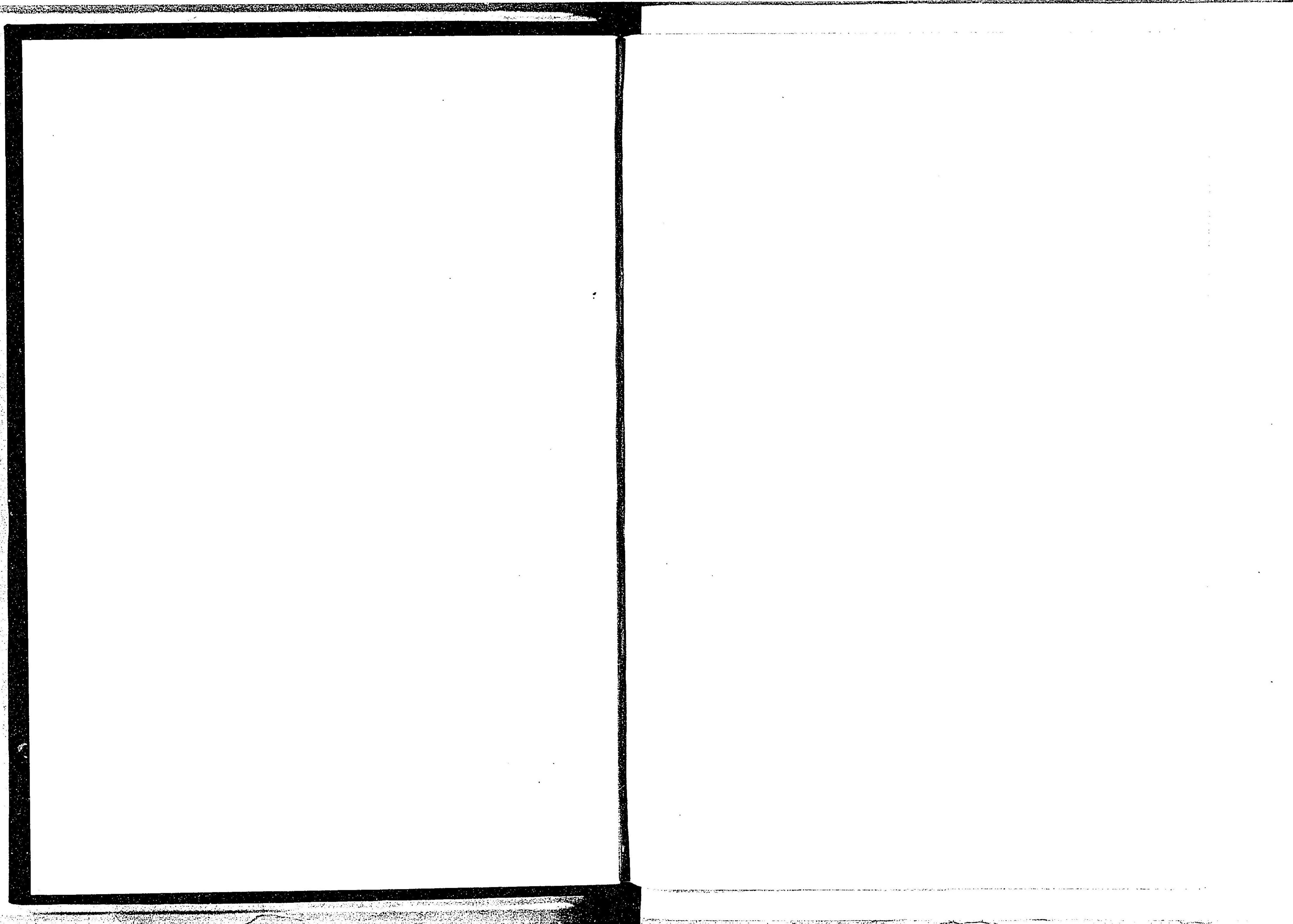
明治二十四年四月二十八日印刷

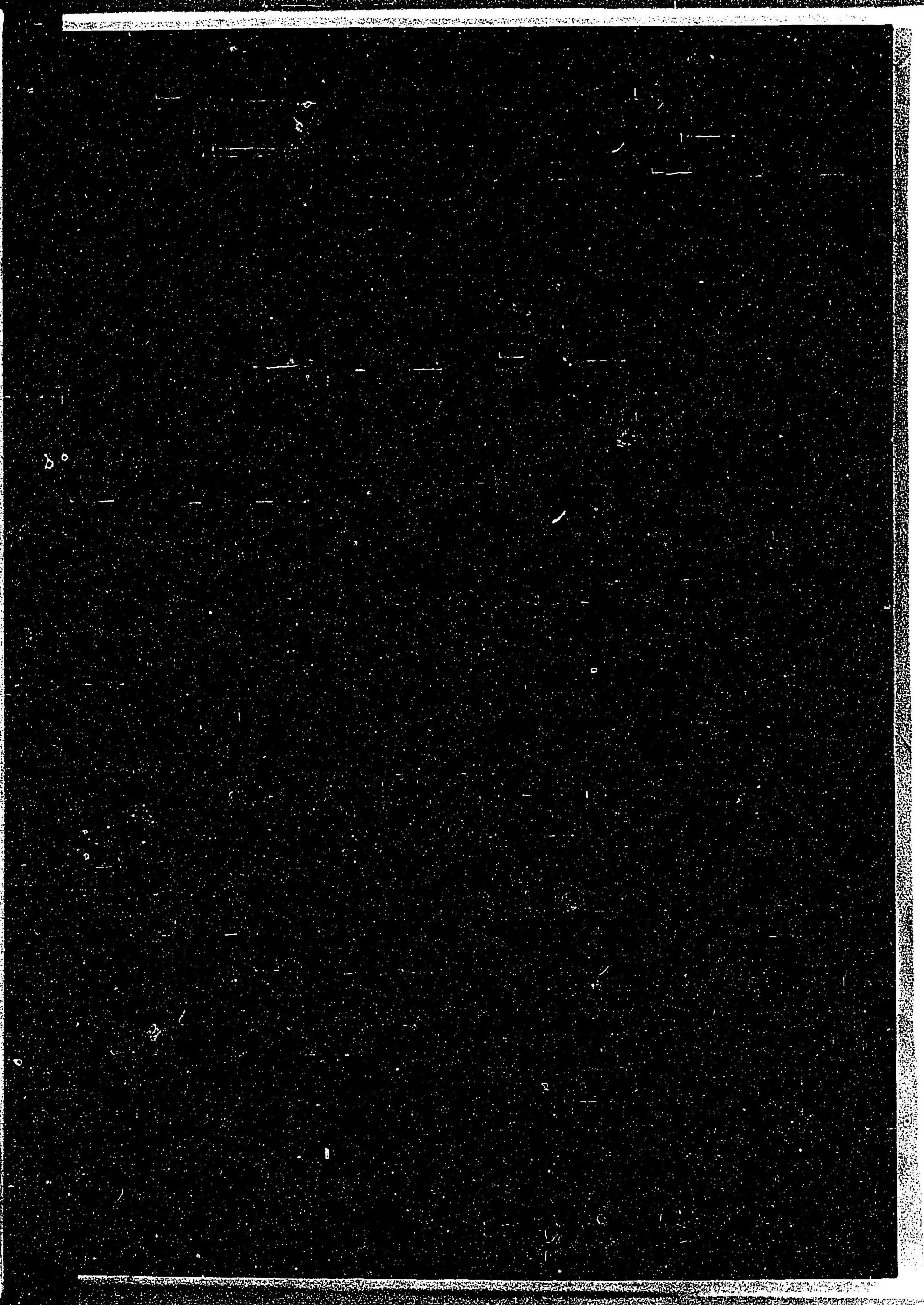
內閣記錄局編輯











14.7  
6

031114-028-9

CZ-3-12

法規分類大全

內閣記錄局

M22-24

BBC-0868



